
汀とあの娘のイチャコラ物語

grand病原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

汀とあの娘のイチヤコラ物語

【Nコード】

N3685Y

【作者名】

grand病原

【あらすじ】

- ・ 本作品は“ネギま”二次創作である。
- ・ 女の子オリ主がチートで安心である。
- ・ ガールズラブでイチヤコラである。
- ・ イチャコラで性行為を彷彿させる描写があるかもだけど、R15の範疇である。

- ・捏造、ブレイク、ドンと来いである。
 - ・何気に辛辣で残酷も含む作品である。
 - ・だらだらぐだぐだストーリーである。
 - ・こんな感じのハチャメチャ小説をお気軽に寛容にお楽しみください。
- ね、寛容にね。

第1話 プロローグはおまかせします（前書き）

皆さんはじめまして。

grand病原と申します。

初執筆の初投稿ですよー。

あとがきの方に、おしらせてかご注意がありますので、そちらご覧ください。

作者の執筆スタンスとかで長くなってるけど、トラブル回避の為に是非。

では“ネギま”世界を舞台に、女オリ主のだらだらぐだぐだ安心チート物語。

はーじまーるよー

ね、寛容にね。

第1話 プロローグはおまかせします

あ、プロローグ的なんやかんやってアレですよ？
脳内補完とかドンと来いですよね？

そんな訳で転生です。

ワタシこと《緒々嶋 汀》は転生ガールです。

ちなみに言つとくと《オオシマ トバリ》ですよ。

特にね、名前。

汀トバリ一ってのなかなか覚えてもらえないですから、そこんト
コお願いしますね。

普通はナギサですからねえ。

こう言ったらなんですけど、苗字は転生後の家族からいただいたもの
のなんであんまし気にしない。

でも汀って名前は前世から通して使ってますので、是非覚えて欲しい
ですね。

そんなこんなでこれから転生ガール汀の生活をご紹介しますよ
。。
寄ってけ見てけ聞いていけ。

まあアレです、だらだらぐだぐだ安心チート物語ですけどね。

あとGLイチャコラ。

がーるずらぶんイチャコラ。

で、相手次第で辛辣に。

…みんなついて来れるよね？

ソレは気だるい朝、クーラーが一晩中吐き出し続けた人工的な空気のなか、ワタシの寝ぼけ眼が写しているのは一人の美少女。

艶やかな髪、もちもち赤ちゃん肌、ちょっぴり小柄だけどバランスとメリハリに富んだ体軀。

今は寝ぼけてうにゅってるけど、普段の顔立ちは、そりやもう分かりやすいくらい的美少女。

おねむでショボショボしてる仕草だってむしろ愛らしい。

こうして毎日二人で同じベットで眠って、でもいつだってワタシが先に起きる。

彼女が完全に眼を覚ますまで、ワタシはいつもこの姿を堪能する。

あーホントに美少女。

アレだよ可愛い系美少女。ちよいロリ

特別な努力もせずにコレって最早選ばれた存在だよ。

美の神的な何かに選ばれт…

〈スパーン!!〉

「おはよう汀、相変わらず美少女だな。ん？満足したか？ナル娘め」

「……おはようございますキティ。youもとっても美少女ですよ
超好み」

寝室の鏡に写った朝一番ワタシに見惚れるナルシスワタシを、スリ
ッパでぶったたく愛しのキティ。

コレがワタシの、ワタシ達の毎朝。

緒々嶋汀とエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル毎朝。

「今日は早いねキティ、昨夜は足りませんでしたかな？」

「…………寝起きで突っ込む気にもならん」

「だよねー、ちゃんと気絶したもんね!!」

「……いい、とりあえずシャワー行くぞ。矯正はその後だ」

「いや矯正って…」

スタスタとだるそうにシャワーへ向かう全裸の金髪美少女キティち
ゃん。

さてよーおいてくなよー。

追う全裸の美少女汀ちゃん。

こうして今日もワタシ達の日常は始まります。

今日も夏真っ盛り。

やべーしゅくだいちよーだるい。

中学2年の夏休みはまだまだ始まったばかりです。

2人して3度目のちゅうがくせいだけどね!!

第1話 プロローグはおまかせします（後書き）

★初投稿なおしらせ★

ーその？ー

grand病原は初心者です。

行き当たりばったり、出たところ勝負ですががんばって行きます。

そんな本作品をご覧の皆さんより、感想等頂けましたなら、ソレを糧にしてより一層精進してゆくつもりです。

ただ：返信は期待しないでください。

てか無いものと思ってください。

ぶっちゃけMORPGとか、見知らぬ人とのやり取りにビビって敬遠しちゃってるくらいなのです。

だから感想に返信とか無理。

でもちゃんと読むからね？

キチンと読んで、今後の糧にしますから。

返信は無理でも最低限ソコはがんばりますから。

コレを予めご理解のうえでお願いします。

ね、寛容にね？

ーその？ー

grand病原は基本的に通勤時間を利用して執筆しております。
携帯でめるめるです。

ですので電車の混みっぷりと言うか、位置取りと言うか、その辺の事情が執筆速度にダイレクトアタックです。

ね、寛容にね。

—その？—

前書きは基本書きません。

面倒だし。

そんな時間は本編の執筆に使いますね。

おしらせはあとがきにて。

皆さんより質問等いただいた場合も、返事が出来たなら、あとがきを利用します。

……うん、きつと。

こんな感じのgrand病原です。

本編の内容と共に、執筆スタンスもどうぞご理解のうえにご利用ください。

ね、寛容にね

第2話 ひとり(?)たりない!? *

日本の夏、きんちょーの夏、麻帆良の夏。
真面目緊張中の汀です。

あ、覚えてくれました?
汀トバリーですよ?

緒々嶋汀、転生美少女です。
ナルシス自画自賛てへり☆

そんなワタシが先に申しました通り、マジ緊張の一瞬です。

マジカルフィジカル!!
身体 of 不思議!!

ボケてるよーもありません。
ボケたけど。

ワタシは!!
今!!

茶々丸ちゃんと千雨ちゃんの拵えた朝食を配膳中なのです!!

や、ほんきほんき。

まじでえびびってますう。

「「「いただきまーす」」」

いえーい、いきなり登場キャラ4人!!

「ふむ、今朝はどちらが作ったんだ？」

まずは我が愛しのキティちゃん。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

A・Kの部分はアタナシア・キティ。

彼女をキティと呼ぶのはワタシだけの権利です。

永遠美少女吸血鬼。

愛しの奥さんですね。

「はいマスター、今朝は千雨さんが」

キティちゃん直属従者の茶々丸ちゃん。

絡繰茶々丸ーカラクリ チャチャマルー。

ガイドノイド？だって。

つまり心は乙女、身体は鋼の美少女万能従者。

キティがマスターで、ワタシがロードですと。

まあ製作に調子乗っちゃった影響ですかね？

「いや、絡繰と合同だよ。一人じゃとてもこの時間じゃ無理だ」

で、ワタシの直属従者千雨ちゃん。

緒々嶋千雨一オオシマ チサメー。

まだまだ駆け出しの美少女従者ちゃん。

ファミリィネームがワタシと一緒になのはワケアリです。

詳しくはそのうちに。

当然血縁関係なし。

でももつと大切なモノで繋がってます。

「仲良きコトはふつくしひ、だね。うまうま」

それからワタシこと汀。

ご存知の緒々嶋汀。

キティの恋人で、千雨ちゃんの主で、茶々丸ちゃんのロード。

チートな転生美少女です。

この四人で麻帆良学園都市内、緒々嶋・マクダウエル宅よりお届けします。

もぐもぐ。

「あー言われたくねえ、従者ハブって朝風呂入るような番主様には言われたくねえ」

おや千雨ちゃんてば拗ねてんのかね？

「おや千雨ちゃんてば拗ねてんのかね？」

「マイロード、思考がだだもれですよ。あ、マスターお醤油使いすぎです」

おう、しつと!!

ダブル主がダブル注意されちゃったよ。

茶々丸ちゃんてばもう我が家のママさんだよね。

「「むう」」

ほら主コンビは返事もお揃いです。

「ちっ」

「ふふふ」

従者コンビはキャラ分けしつかりですな。

や、主コンビも全然似てないけど。

「午前中は麻帆良を巡回よてーだから、千雨ちゃん拗ねないでいいよ?」

まず間違いなくキティはお家でゲームでしょう。

8月はキティってばホントにヒッキーになるからね。

ゲームとか裁縫用品とか、ヒッキーアイテム買い込んでクーラーガンですもの。

「くっ：／／。き、きちんと埋め合わせしろよ、せっかくなら…」

うわ、うわー!!

照れりこ千雨ちゃんマジ可愛い!!

おみおつけ持ってなかったら抱き締めてたよ!!
ずずう…美味しい。

「なんだこの暑いなか買い物か？ほら窓の外見てみる陽炎見えるぞ」

「いえマスターよく見て下さい。風で立ち木がそいでいるだけです。こんな山間で陽炎は見えないでしょう」

うん我が家は森の中ですものね。

路面は土ですし。

まあ暑いのは夏だし仕方ない、風があるだけましかな？

若干照れたキティも可愛いから、ちよいちよいすり寄りつつ観測。

今朝も太陽元気です。

勘弁しろ。

「と、とにかく暑過ぎるのは明白だ！！私には行かないぞ！！土産はアイスでいい！！」

「アイスか、いいな。コレだけ暑いならどっかにキャンペーンでもやってる店くらいあるだろう」

キティの照れのおかげで千雨ちゃんがすっかり平常運行に。

てか、ワクワクしてますね？

一気にご機嫌さん。

ワタシもワクワク、だって千雨とデートだもの。

「では後片付けは私が。御二人は気温の上がりきる前に」

「ん、いいのか？準備だって…」

「はい。千雨さんはマイロードのお手伝いをお願いします」

おー従者な会話だね。

と、食器が空っぽになったので空いた手をキティと繋ぐ。
モチロン恋人繋ぎですよ。

今朝も美味しいご飯で幸せ。
隣にキティがいて幸せ。

「ごちそうさまー。美味しかったよ二人とも。ね、キティ？」

「うむ、ごちそうさま。茶々丸、千雨美味かったぞ」

2人で笑顔。

じゃないやキティのは…まあ満足顔？

2人きりのトキは彼女もとろけるような笑顔を見せてくれますが、
今はまあね。

あ、でも繋いだ手キュッてしたら、コッチ向いて微笑んでくれた！！
らぶー！！

「よし、じゃあ下げるだけやるから後頼む絡繰。エヴァはアイステ
イーでいいか？」

「む？ああ、いやいい。茶々丸にやらせろ。おまえは汀と着替えて
来い。」

「ん、わかった。ほらいつまでもイチャついてるなよ汀。服選ぶぞ。
」

ありゃ、ワタシがキティの肩にスリスリしてる間に役割が決まった
みたい。

んーキティ柔らかく。

って、ああ千雨ちゃんひっぱらないでえー。

「アイス忘れるなよ。2、3日分買い込んで来てくれ」

なんて言うキティを残して千雨ちゃんとひっぱられワタシはドレスルームにフェードアウトしたのでした。

あっ!?!? ちよっ!?!? なに!?!?

待って千雨ちゃん!!

へ? キスマークの上書きって!?!?

…んんっ!?!?

千雨ちゃんとワタシはドレスルームにフェードアウトしたのでした。

第2話 ひとり(?) たりない!? * (後書き)

本編の誤字修正しました。最後に一文追加しました。ご指摘感謝です

緊張の第2話です。

とりあえず汀の詳しいのとか、キャラの立ち位置とか徐々に出てきますので気長にお付き合い下さい。

本作品の茶々丸は稼働してから1年半くらい。

千雨は魔法関係者になって2年くらいになります。

その辺の経緯とかも徐々に、です。

あ、モチロン汀も魔法を使えますよ。

次話くらいで多分さらっと使い始めます。

「今回のふおろー的いいわけ」

・汀が冒頭で配膳していたのはノリです。シャワー出たら朝食出来てたからノリで強引に配膳。

・緊張云々は汀が料理からきしだからです。ノリと気分で生きる汀に格式や形式、レシピや説明書は天敵。まあやる気もないけど。

でわまた次のおはなしで。 grand病原でした

第3話 コレがイチャコラです*

あつつっ!!

外暑いっ!!

風とかイミねー…

だめだ、コレ溶けるよ。

ワタシは溶けてしまいます。

あいるびーばっく汀。

残念ながら未来からは来てないけれどチート美少女の緒々嶋オオシマトバリ 汀ですよ。

そろそろ覚えました？

次からはルビありませんからね。

いつもと同じく千雨コーデ、髪も結い上げて朝よりもっと美少女汀
だけどコレは…

繋いだオテテも汗でしっとり、ちょっぴりドキドキ千雨とデート。
しかしこの暑さは…

でも顔には汗をかきません!!

女はいつだって女優だから☆

「なあ汀、お前なんにもしてないんだよな？」

麻帆良学園都市の夏は今年も暑い。

突き刺す紫外線に、千雨ちゃんもたじたじみたいです。

まあワタシ達の肌を相手取るには、紫外線程度じゃなすすべなどないからこそその外デートですけどね。

「なになって、にやほう的なアレコレ？ ないないしてないよー。だってほら、夏特有のペツタリお肌でくつつくのが外デートの醍醐味でしょ」

ほらほら醍醐味！！と、手はそのまま離さずに腕を寄せ合う、しつとり。

千雨ちゃんのが背が高いから、見上げて目を合わせる。

ウチではエヴァが1番ちんまいくて、次がワタシ。

丁度エヴァと千雨ちゃんの間くらいのワタシの背丈。
だからいつも千雨ちゃんが屈んでくれる。

「……んっ」

そうしないとキスが届かないんです。

今お外だし、ふれ合うだけのやさしいちゅーで留めておきます。
リップの色も違うし。

って、千雨ちゃん？

なんで頬に添えた手をナデナデしてるんですか？

ちょいくすぐつたいぞー。

「…やっぱりだ」

「えっと何が？お外だしちゃんと我慢してるよ？」

えーと…

千雨ちゃん盛り上がっちゃったんですか？

「改めて聞くが、汗はかいてるんだよね？」

「え？もちろん。今朝の千雨ちゃんチョイスは、汗ばむ野外でもばつちりこーででしょう？」

家を出て30分強。

ここまで歩いてゆっくり来たけど、ばつちり汗かいてますよ。

ええホントに暑い、明らかに体温より気温が高い。いじょーきしよー…

「そうか…じゃあお前の顔に汗のあの字も見当たらないのはアレか、汀クオリティか…。汀と汗、字面も似てるしな、自由自在だとしても！？」

アレ？冷氣！？

ああ千雨ちゃんがどんよりしてる！？

「えと…ヘイヘイお待ちよ千雨ちゃん！！コレはアレだよ意識の成す業だよ！！千雨ちゃんも出来るよ！！…たぶん」

うん、たぶん。

ワタシの従者だし。

やってやれないコトは無いよ。

うん、たぶん。

「は？意識って？無詠唱みたいなのか？」

「いえ違います。ホンマもののメンタルです。こうね、私は女優！
！って意識するのよ。言うなれば“ガラス○仮面”みたいに」

てか千雨ちゃんてば思考がすっかり魔法寄り。

まあ教え込んだのワタシ達ですけどね。

「…………無理だろ」

「いやいやいや。そこはほら女の意地よ。淑女として持ち前の美貌に胡座をかいてなんかいられませんもの」

“淑女としてゝ胡座”って我ながら違和感。

ここはアレかな“淑女としてゝ三つ指つてはいられない”と言い直すべきかなあ？

「sy「いやいやいや、コッチがいやいやいや、だ。お前服選
びも人任せ、メイクも髪も人任せじゃねえか。胡座どころか布団敷
いて高いびきだろ」

しょぼーん…

言い直せなかったです…

「…って、え！？ワタシいびきしてる！？嘘っ！？」

うわーマジで!?

毎夜毎晩キティも千雨も茶々丸もワタシのいびきを黙殺してくれてたの!?

うっわあ…

今すぐいびきを消さないと!!

「ああいや、すまん言葉の綾だ。少なくとも私以外はいびきなんてしてない。お前もエヴァも高級人形みたく寝てるよ。可愛さが欠片も衰えてなくてコッチが大変だ」

…っ!!

千雨ちゃん抱いてください!!

…いけないいけない踵を返してしまう前に発散しなければ。
ぎゅーで当座を凌ごう。

しっとりぎゅー。

千雨ちゃんらぶー。

あ、もちろん千雨ちゃんもいびきなんかしてませんよ。
きゅってすると、やさしく抱き返してくれます。

眠ってるのね。

千雨ちゃん素敵すぎるよ。

屋内でも屋外でもイチャコラに歯止めはありませんとも!!
ワタシと千雨ちゃんはA Iとか止まりませんとも!!

夏でもいいじょーきしよーでもウチの方があつあつですね!!

ついでに言えば麻帆良の夏も熱い。

いやいやくだらないと言わないで。

確かにワタシ達のがずっとあつあつですけど。

麻帆良も大概ですよ。

ホントにそこかしこでイベントなり事件なり起きてるんですよ。

まあ普段も常識外の半無法地区ですけど。

やっぱし夏休みだからですよねー。

みんなテンションがひどいなあ。

あちこちでドツカン、そちこちでイミフ。

あ、ほら“夏期小売り”だって、千雨ちゃんあれ何売ってるのかな!?

しゃくしゃくキーンは売ってないの確かだよね!!

ねえ行ってみませんか?

キティに買って帰ってみる?

…って、ああ。

小売りが遠ざかる。

歩く!! 歩きますから!!

スカート引っ張らないで、千雨ちゃんてばあ。

ワタシと千雨ちゃんが手を繋いで歩いていけばそりゃあ目立つって
ものです。

ウチに来てからの千雨ちゃんは、俯かないし眼鏡も掛けてもいませ
ん。

眼鏡は賛否両論？だとしても彼女はど真ん中美少女。

そして何度でも言うけどワタシは完全無欠美少女ですし。

そんな2人がニコニコキヤツキヤツ。

イチャコラワールド構築中。

腕を組むようにして歩くから、歩を進める度に汗ばんだ肌が触れ合
う。

貪り合うような溶け合うようなアレをしてる時の感覚とは違うけれ
ど、確かな高鳴が胸をあたためる。

自然と頬が緩んで、世界が素敵に染まる。

千雨もおんなじ気持ちなのが瞳を通して伝わる。

なんにもないのに目を合わせて微笑み合う。

ああ、今日も幸せ。

「あれー！！スツゲエ美人じゃん君ら！！ねえ遊びに来てんだよね
？オレ達と一緒にしようよー！！」

…こんな感じのが来るまでは。

「はっはっはっはっ」

.....

「はっはっはっはっ」

.....

「はっはっはっはっ」

タカミチエ…。

飛ぶ様にして来るなり、問答無用でブチノメシて笑ってんなよ…。

「ちっ…」

あ、千雨ちゃんもご機嫌ななめさん。

「一応、どーも」

「いやいや、とんでもないよ。いくら強くたって君たちが僕の生徒である事に代わりはないしね」

千雨ちゃんってば感謝の欠片もないね、わかるけど。
でもちよっと可愛いかも。

あっと、見蕩れていないでワタシも交じるかー、仕方ない。

「随分と出張の速くないかしら？ 暇なの？ 仕事しなさいタカミチくん」

タカミチくんとは元同級の間柄。

キティも一緒です。

だからといって仲良くなんかありません

ワタシのお口もお外向け。

ああ千雨ちゃんが掌をキュッてしてくれるのだけが癒しです。

世界よ優しくなれ、てかワタシよ優しくなれ！。

「あいかわらず手厳しいな、でも今回のこれも歴とした僕の仕事さ。これでも広域指導員だからね」

知ったこっちゃありません。

なら早く広域に拡散してしまえ。

「それに忘れたとは言わせないよ。一昨年、君は一般生徒相手に僕らじゃフォロー出来ない傷を負わせたじゃないか。すっかり要注意対象だね、はっはっはっはっ」

あ、無理だ。

優しくとか無理。

ナチュラルイライラが募るわコイツ。

ちうちうもつとピタッとしてー。

「振っただけじゃない。彼ら完全にストーカーレベルだったのよ？ むしろ暴徒だったわ。他にどうしろと？」

一昨年の春。

てか春。

脳内ヘリウム浮かれ男子どもが決まってワタシ達を狙う。
あれだ、告白ってやつです。

てか春どころか、なんかイベントある度にそうなんですよ。

キティと2人、繰返し学生を続けるワタシ達はなにかある度にテンション恐慌です。

てかヘビーローテンションだ。

あいうおんちゅー、と迫る男子生徒どもにヘビーローテンションだ。

まあ一昨年は色々ありましたし。

当時は共学の高校で3年生。

学校のアイドル扱いだったワタシ達が、夏休みを境に不登校でしたからねえ。

なにせ従者千雨ちゃんの教育にかまけていたから。

そうしたら、マジストーカーの大量発生的な感じで。

まあ容赦なく振りまいたけどね。

卒業式もおおあらわ。

結果として今回からは女子校に入る運びとなりました。もちろんキティも一緒です。てか今回の入学からは、千雨ちゃんも茶々丸ちゃんも加わって4人一緒です。

当然だよねー。

で、卒業↓入学にあたって、主組が従者組に合わす事になりました。まあ合わすも何も予定通りでしたけどね。

あ、年齢を鑑みてだったんです。

まあ茶々丸ちゃんは産まれてすらいなかったけれど。

千雨ちゃんがね、ワタシの従者になった時にはまだ11だったから。2年前の夏休み時点で。

色々あって足早に“次”を女子中等部に決め、学園側と交渉も済ませました。

4人揃って中等部入り決定です。

この段階でまだ夏休み中。

「いや確かにストーカーはダメだよね、はっはっはっはっ」

…笑ってんなよ老け顔。

そう、速攻で手続きが済んでからやっと、その過ちに気付いたのです。

この老け顔と似て非なる過ち。

がつつり仕込んだんだ、キティの魔法球で。

ほぼ入りっぱでワタシ達の従者に相応しい実力が身につくまでがつつりね。

いやあ、がんばりました。

初めての従者だったから、気合い入れましたよー。
がつつりです、がつつり。

千雨ちゃんが通ってた初等部はスルーで、実家さえもまあ色々でスルーで。

詳しくは千雨ちゃんの機嫌が良いトキに話しましょうね。

とにかく約8ヶ月入りっぱでした。

あ、魔法球ってのは簡単に言えばアレです。

“精神と時〇部屋”。

つまり時間が引き延ばされますよ、と。

キティ所有の魔法球では、24倍引き延ばしですので約192ヶ月ですね。

なんで手続き前に気付かなかったかな：

ともかく、千雨ちゃんはマジ入りっぱだったからおおざっぱ計算16年。

少なく見ても15年は過ごしてます。

あ、茶々丸ちゃんは千雨ちゃん仕込み終えてから製作に入っただけで全然です。

たしか：1. 5ヶ月×24倍くらいかな？

ほら茶々丸ちゃんは零からの製作ですから。知識を植え込んだ状態で起動したらおっけーなのです。

ホントになんて中等部にしたんだろ：

ノリかな、うん。

主組はいいのです。

だってもとよりそうだから。

中等部↓高等部↓中↓高↓で今3度の中。

例年通りのループですもん。クラスに馴染む馴染まないってあなた、

ここ“麻帆良”にワタシ達が馴染むわけないでしょう。

こんな箱庭に。

で、茶々丸ちゃんもほぼ問題なしな様子です。

てか、ちょーしんか茶々丸は既にママ的なメンタルの持ち主だし…
ちょー包容力のママさんです。

なぜ…

もしやワタシのメンタルが幼過ぎる反面教師的な？

うん、なら仕方ない、めいっばい甘えよー。

問題だったのが千雨ちゃんですよ。

中等部に入学する美少女、心は26歳ですもんね。

まあ学校にいる間はずっとワタシとピッタンコしてます。

それで大丈夫なんですって。

わるいコトしちゃったなあ、と思う反面、一層愛しくも思う。

可愛い可愛い千雨ちゃん。

「ん、まあ気を付けて。問題起こさないでくれよ。じゃ行くからね」

あ、まだいたのか老け顔。

千雨ちゃんのコト考えてたら忘れてた。

「まだいたのね老け顔、あっちいいわよ。ぺいぺい」

「うっ…ひどいなあ…。ふう、じゃあね千雨くんも」

「…っす」

千雨ちゃんに話し掛けんな老け顔め。

去り行くソレを放つといて、千雨ちゃんをぎゅー。

はぁ落ち着く。

繰返すけれど千雨ちゃんは美少女です。

老け顔とは到底比べられない。

そう、まず間違いないアレの何倍も魔法球を使ってなお、美少女のまま。

だってね。

ワタシの従者よ？

ただの人間な訳がないでしょう？

ワタシとも違う、キティとも違う。

けれど千雨ちゃんもワタシ達と同じトキをゆく。

ずっと一緒。

はぁ、抱きつくとうっとりしちゃうー

第3話 コレがイチャコラです*（後書き）

第3話投稿

こんばんはgrand病原です。

千雨ちゃんイチャコラ回です。

本作品なり、他作品さまなり、エヴァとオリ主が仲良くなる経緯は皆さん予想がつきますよね。

だからこそ千雨プッシュです。

所々であまあまですが、汀を中心とした4名は普段からこんな感じ
です。

コレがイチャコラですね。

それからタカミチの登場。

エヴァ茶々より喋ってる？

彼は千雨との対比と言うか、当て馬役です。

本作品の千雨が「ザ・チサメ」でありコト。

それを違和感なくストーリーに乗せる為だけに登場しました。

まあアンチされ側ですしね。

エヴァにも嫌われてます、原作よりもずっと。

まあ千雨の詳細はやっぱり追々です。

因みに若返り薬とか不老指輪とかではないです。

ご期待ください。

【おしらせ】

活動報告に第2話修正について記載しました。
お暇なときにでもチェックしてあげてください。

【お礼】

感想をいただきました 七さま。

お気に入り登録をしてくださった皆さま。

本作品をご覧いただいた皆さま。

ホントにありがとうございます。

うれしくてgrand病原はもうたいへんです。

調子に乗って初日に3話目まで更新しちゃってます。

ただまあ明日はこんなことないでしょう。

でもがんばって執筆しますよ。

また読んでくださいね。

でわでわgrand病原でした
おやすみなさい

第4話 彼女はもうすぐ産まれます＊

「んうっ…っ！」

「待っ…って、ああ！」

「んああ、マイ！！…ロ、ロード、これ以上わぁんっ！！」

うふふ、ども、いじめっこ汀ですよ。

茶々丸ちゃんへの魔力供給中はちよっぴりいじめっこになってしま
うのです。

なんと言いましようか、普段はオカン級包容結界を展開する茶々丸
ちゃんが、ワタシの魔力で悶えるこの有り様を。

それこそ自身の核ごと、その存在の芯ごと一方的に侵され、捏ねら
れ、弄りまわされているのに、ソレを悦として受け入れる恥態を。

「ああ！！…う…お、願いですっ！！…キスっで！！も…っうだめ
だから！！…っん！！…さぁ…っい後は！！キスで！！…っしてくださ
い！！！」

そしてソレを、ワタシに侵食されるコトを心から、いいえ、魂から
望む艶姿を。

絡繰茶々丸には魂がある。

この濡れた瞳に宿る光がなによりの証でしょう。

あ、今までしていたのは、魔力供給とちゅーだけですよ。
あと、ぎゅってしただけです。

そうそう、これは言っておかないと。
ワタシは汀、チート美少女 汀ちゃんです。
ルビはいりませんよね？

あーん…ぎゅむぎゅむ。

この店のブラウニーは随分どっしりしてます。
すぐおなかいっぱいになりそう。

「マイロード、付いておりますよ」

紅茶を淹れて来てくれた茶々丸ちゃんが、自分の口元を指差しながら微笑んでいます。
むう…恥ずかしい。

口が大きくないのが悪いんですよ。
おっきく頬張ろうとすると、いっつもですもん。

「茶々丸ちゃん、ワタシは今おやつ的にとっても忙しいのです。にゅーケーキ屋さんの今後のお付き合いが決まろうとしているの。よって茶々丸ちゃんが取ってください」

言ってもう一口。

もぎゅもぎゅっとしながら、茶々丸ちゃんへ向きます。

「マイロード、そのケーキ店との関係判断にわたしも意見申し上げてよろしいですか？」

うん、流石の茶々丸ちゃんですね。

ワタシの意を逃さず酌む、実に良い従者です。
ラブリー笑顔で主を陥落させるなんてっ！？
キティの従者だけど。

「もちろん、むしろ望んじゃう！！」

茶々丸が近づくのに合わせて、もう一口。
もぎゅもぎゅしながら彼女に向き直ります。

座っているワタシの口元へと茶々丸ちゃんが手を伸ばして…

……んむ…ちゅむ、ちゅっ…

そのまま被さるように唇を合わせ舌を絡める。
もっと深く、と腕を首に回します。
ふんわり茶々丸ちゃんのかおりだー。

にちゃ…くちゅ、ちゅっ…ちゅむ…

溶けたブラウニーを互いの舌に押し付け合うように、深く深く絡め合う…

…ちゅむ、あー…ちにちゅに。

その後も何度か交代でケーキを口に含み、お皿が空くまで続けたおやつタイム。

至福の時間でしたが、もはやお互いの味しかなかったのここまで。最後に茶々丸ちゃんの舌をやさしく囁んでおわりを伝えます。

「…………すみませんマイロード。失敗しました」

食べ合いつこの途中からワタシを膝に乗せていた茶々丸ちゃんは、さつきからずうっとナデナデ。

あやまりながらもナデナデしてます。

うにゅーもっとなでろー。

「おうう…相変わらずのお手前。恐ろしい娘だわ茶々丸ちゃんは。ぎゅーしてやるー」

きゅっと抱きつくにあたまナデナデ、ほったたスリスリ、ぎゅっと返されてポカポカです。

はふう、茶々丸ちゃんがワタシよりずっとおつきーからこそこの包まれる感覚が素敵です。

「…マママ、マイっ、マイロード、マイロード…」

あー…

そろそろ茶々丸ちゃんがのぼせちゃうなあ。

最後にむぎゅう、っと。

「茶々丸ちゃん茶々丸ちゃんお願い聞いてくださいな」

一拍置いて、ぷしゅー…と排熱。

従者の鏡、茶々丸ちゃんは主のお願いを逃したりはしないのです。キティの従者だけど。

「イエス、マイロード」

横抱きで膝に乗せられたまま目線を合わせ、ちゅっ、っとやさしくちづけを。

さっきまでとはうって変わって穏やかな笑みで応じる茶々丸ちゃん。完璧従者の包容結界が発動しましたね。

「みみそーじをして茶々丸ちゃん。膝枕ね。あとはさっきした謝罪の説明をせよー」

茶々丸ちゃんは従者。

主を支え主に尽くし主と共にある存在。

だからワタシとキティのお願いや命令を逃しはしない。違えはしない。

それが彼女の在り方で、それが彼女の望みで、それが彼女の愛だか

ら。

「イエス、マイロード。では寝室に行きましょう。説明もそこで。わたしの部屋でよろしいですか？」

隠すことない愛を瞳に宿してワタシに微笑む茶々丸ちゃん。
今の彼女に照れはありません。

「おけー。せっかくだしこのまま運んでー」

明確な指示に基づいて行動する茶々丸ちゃんに照れなんかありません。

ワタシを愛し、ワタシの為に行動するのに邪魔になるトキは照れたりなんかしません。

それが従者だって言っていました。

たださっきみたく、2人でただイチャコラしてるトキにはすーぐオーバーヒートしちゃうみたいですけど。

マイロードが愛しすぎるんです、可愛いすぎるんです。

そう、ぐずりながら言い訳する茶々丸ちゃんが可愛くって、ついついイチャコラが加速しすぎたのだって愛の軌跡ですよ。

「イエス、マイロード」

ぎゅー。

ああ幸せです。

「ほう…気持ちいいよほ、茶々丸ちゃん…」

膝枕もみみそーじも気持ち良くて、なんだか眠ってしまいそうです。
う。

冬場のお布団レベルのまどろみ。

茶々丸ちゃんのお部屋は程よく冷房が効いていて、ほっぺに感じる膝枕があたたかい。みみそーじはもちろん、時折髪を鋤く指からも沢山のやさしい気持ち伝わるかのようです。

「マイロード、おやすみになる前に先程の謝罪を説明いたしますね」

片耳のそーじを終えたのか、やわらかく息を吹き込まれた。

ふぁ…

「先程わたしはケーキの味を判断する、と申し上げておりましたが、結果としてそれが成せませんでした。」

「…うん？2人でいっぱいおいしかったのに？」

身をひねり、茶々丸ちゃんを見上げて問いかける。

ワタシはすごく美味しいかったですよ？

ときどきうまうま、でした。

「はい、わたしも尋常ならざるほど美味しく感じました。マイロードが、です」

…なるほどなー。

ワタシも同じですソレ。

実際ケーキよりお互いを味わってたようなものでしたしね。

「完全に失念したね。ワタシもおんなじ。茶々丸ちゃんの味ばっかりに意識が向かってたわ。」

「はい、ですので謝罪いたしました」

ふむ…

もう少し身をひねって茶々丸ちゃんのおなかに、ぎゅー。

そうすると茶々丸ちゃんはゆっくりと髪を鋤いてくれます。

「…っん」

薄い服越しのおなかに熱い息を吹き掛けて一ちよつとさっきのお返し一茶々丸ちゃんに向き直る。

「でわ茶々丸ちゃんにはペナルティ。今度あのケーキ屋さんまで一緒に来なさい。エスコートを命じます。」

見つめ合って微笑んでオーダーします。

そして目を閉じる。

「…イエス、マイロード」

ごくごく近くで声が聴こえて、また唇が合わさるのでした。

午前中に出掛けたワタシと千雨ちゃんは、途中いやなコトがあったものの、せっかくのお出掛けだからと気を持ち直して再行動をはじめました。

お昼までうろうろ、あっちでウフフこっちできやつきゃつ。

あの後も何度かナンパこそされましたが、老け顔を筆頭にした“嫌な連中”が出張ってくることもなく平和にスルーしてイチャコラ。

お昼をくつつきながら食べてから、並んでお土産を選びゆっくり帰宅。すぐに2人一緒にシャワーで汗を流して出たら、キティに千雨ちゃんがからまれちゃいました。

曰く、いつまで待たせる気だ!!と。

キティは土産のアイスとケーキをみんなで食べたかったんですね。うっ…この娘、相変わらずの破壊力。

確かにシャワー、長かったですからね。

汗流しながら、一汗かいてましたから。

いや…二汗? あ、もっとかなあ?

千雨ちゃんにとってせっかくのデートを他ならともかく“あの連中”に邪魔されるコトは随分なストレスです。

見張られるのはスルーしてんだから、わざわざ出てくんなよ、話しかけんなよ。

ってな具合でしょう。

まだまだ突つつくトコロの多い千雨ちゃんのフォローはワタシの役

目です。

仕方ないとはいえ、この辺が見習い従者ですよね。

ある意味、旨みとも取れますけど。

まあワタシは単純に、もっとイチャコラしたかったって部分大きかったり。

てへり、千雨ちゃんらぶ。

すっかりした千雨ちゃんはキティを宥めようとしてましたが、事前の行為がバレてる以上まあ無理でして。

引き摺られて魔法球へと。

間違いなくドンパチですね。
まさしく魔法球。

そうしてワタシは茶々丸ちゃんとイチャコラにオヤツしていた訳です

ぐったり茶々丸ちゃんもらぶー。

肌をふれ合わせて行う、本格的魔力供給で茶々丸ちゃんは息も絶え絶え。

ぐったり茶々丸ちゃんです。

今日の触れ合いは…

おやつ↓みみそーじ↓魔力供給。

この順番でした。

そろそろキティ達も出てくるかな？

茶々丸ちゃんは稼働初期から今も猛烈な進化を続けています。

その胸の内に。

すなわち感情や魂が、です。

これは科学的な根拠のない私見ですが、だだの高等なだけのAIがワタシ手製ボディに入った瞬間から、その瞬間から茶々丸ちゃんは魂を得ていたのではないのでしょうか。

稼働初期こそ、それを表現出来なかっただけではないかと思うのです。

いえ、むしろ魂を得ていたからこそ茶々丸ちゃんが産まれたんだと思います。

とにかく茶々丸ちゃんは進化を続けていて、その内包魔力さえ変質を繰り返しているのです。

これは製作時にあえて“変質性に富んだ純魔力”を動力に組み込んだ影響でしょう。

ワタシにしか出来ないコトです。

本格的魔力供給とは、茶々丸ちゃんが持つ変質を繰り返す魔力の剪定と形成です。

魔力調整、と表現する方が正しいかもしれませんね。

これをひたすら続け、茶々丸ちゃんに自身での魔力生成を行わせるコトが現状の命題となっています。

そしてそれは既に結果を出し始めているのです。
今や茶々丸ちゃんは僅かながら、安定した自己魔力生成を常時行っているのです。

きゃー茶々丸ちゃん素敵ー！！

はっきりに宣言します！！

ワタシの茶々丸ちゃんへの愛を！！

茶々丸ちゃんのワタシへの愛を！！

茶々丸ちゃんの胸に宿るモノこそがその証です！！

そうしてワタシはキティ達が出てくるまで、茶々丸ちゃんと一緒の毛布にくるまるのでした。

あ、茶々丸ちゃん起きた？

ねえ、わかるよね？

前よりずっと安定してきてる。

ね？言ったでしょう？

もうすぐだよ、ほんのもうすぐ。

貴女はもうすぐ「茶々丸」って生物になる。

そうしたら約束通りにしてね？

緒々嶋茶々丸になるんだよ？

第4話 彼女はもうすぐ産まれます*（後書き）

＊複数の段落改行等を微調整＊

第4話です。

grand病原です、こんばんわ。

茶々丸イチャコラ回ですね。

本作品の茶々丸は、ほぼ汀のお手製です。

流石にAIは某麻帆良頭脳のものですが。

因みに汀としては無理にAIを組み込む必要はなかったのです。
てか“無理したうえで”組み込んでいます。

その辺含めて、経緯とかは例によって追々ですね。

汀が愛を主張するのは、茶々丸が引くからです。

被造物だと主張してたから、汀が愛を主張します。

もちろんエヴァや千雨にもたっぷりねっとり主張してますよ。

その成果もあって今の茶々丸ちゃんは既にだいぶ突き抜けています。

食べれるし匂えるし感じられます。

むしろ合成人間ですね。近いうちに魔法使うとおもう。

きつと原作始まる頃には多分もう生物です。

なにかしらのイベントを越えて。

さて、千雨ちゃん茶々丸ちゃんときたら次はエヴァです。

てかこのままだと作品内の時間帯が夜ってコトに…

イチャコラ大丈夫…かな？

【お礼！！】

投稿して2日目。

たった2日ですっごくたくさんの皆さまにご覧いただいてるみたい
です!!

ありがとうございます!!

お気に入り登録もドンドン増えてきていて、なんだかなんだろうす
ごいです!!

これからも執筆がんばります!!

ではgrand病原でした!!

おやすみなさい

第5話 不朽不滅と不老不死のらぶ＊

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

真祖の吸血鬼

最強種。

不老不死。

600歳。

最強の魔法使い。

でもそんなことよりも、彼女にはもっと重要なコトがいっぱいある。

ふわふわ金髪。

もちもちお肌。

ふるふる唇。

エターナル合法ロリータ。

尊大美少女。

やきもちやき。

隠れイチャコラ。

汀だけの永久の恋人。

汀だけのおくさま。

汀だけのだんなさま。

汀だけのパートナー。

キティは汀のもの。

汀はキティのもの。

だってワタシとキティは、愛し合っている。
愛し合うワタシとキティは、老いず死なない。
ワタシ達はお互いだけのもの。

不老不死の吸血鬼キティ。ワタシと出会い、愛し合う。
彼女は最早、他の誰かに殺されるコトも出来なくなった。
永遠のトキ、連れ立つ愛を得た。

不朽不滅の魔女トバリ。
キティと出会い、愛し合う。

ワタシはもとより、死も衰えもない女。
永遠のトキ、連れ立つ愛を得た。

トバリはキティの、ただ1人の特別。
キティはトバリの、ただ1人の特別。

キティは最早、他の誰にも殺せない。
汀と交わり、彼女自身が選んだ愛。
キティに残された死はただ1つ。

“汀に殺して貰うこと”

それはキティの愛。
不朽不滅の魔女への愛。
私は汀を愛しています。

汀はもとより、死のない存在。
キティと交わり、彼女の死を消した。
残した1つが汀自身の選んだ愛。

“キティを殺せるのはワタシだけ”

それは汀の愛。

不老不死の吸血鬼への愛。

ワタシはキティを愛しています。

そう、結局はそう言うおはなし。

これはワタシの愛のおはなし。

これはキティの愛のおはなし。

これは愛し合う2人のおはなし。

ぷはあ：

語り口調難しいですね。

ここからは美少女汀らしくいきますよー。

じゃあこれをまとめます。

チート美少女汀ちゃんのキティ愛しすぎてイチヤコラぎゅーしては
なさないぞー。

ですー！！

ワタシは千雨ちゃんも茶々丸ちゃんも愛しています。
2人はワタシに着いてきてくれる。

でもキティは特別なんです。
ワタシとキティはずっと一緒に。

キティはワタシだけのものです!!

“だけのもの”とか言っちゃうと背德的ですね!!
きゃあきゃあ!!

キティらぶー。

あーん、もぐ、もぐ

「ほら次はなんだ?パンか?」

今夜のお夕飯は洋食です。

ムニエルパンスープサラダ。

「も、一口むにえるぷりーず」

あーん、むに、える

「ん?…ふふん、千雨に茶々丸。そんな目で見てもダメだ。代わらんぞ…っと、ほら次だ」

むしゃむしゃ

ワタシはいま、キティにあーんしてもらったのお夕飯です。
わるくないです、うん、わるくない。

「ああまたついたな、ほら口を出せ、取ってやるぞ」
そう言いながらワタシの唇を舐めるキティもわるくないです!!

ぺろ…ぺちよ、ちゅむ…

すぐにちゅーしてまたお夕飯にもどります。

もう何度目かのちゅー。

わざとだよね。

ちゅーしてから、千雨ちゃんと茶々丸ちゃんに向かって「ふはは」
って顔見せてるもん。

「ほら次はスープだ。しかしこれは溢したら事だな、よし口移ししてやるから…」

「いい加減にしろ!! いちいちこっちチラ見して、どや顔すんじゃねえ!!」

「千雨さんの仰る通りですマスター。わたしの方が上手くマイロードへ給仕できます」

千雨ちゃんは分かるけど、茶々丸ちゃんは違くないかなあ。
まあ事実だけど。

キティも千雨ちゃんもどうしたってイチャコラになるしね。

らぶらぶー。

「おい茶々丸！！お前、私の従者だろうが！！」

「はいマスター、当然です。当然ですが、恥じらいを隠してまでわざと見せつけられると、わたしにも思うところがあります。ああマイロード、これが苛つきなんですね」

「茶々丸、お前わざとだな！！わざと聞こえるように言ってるだろう！！」

仲いいなあ、2人は。

でもワタシにはらぶりー従者千雨ちゃんがいるのです！！

「……………つとに、あいつら主従には呆れるぜ。ほら汀、私が食べさせてやるよ。スープの口移しだな、よっし！」

ほらね！！

ワタシ達、主従だって仲いいぞー。

千雨ちゃんくださいな、んゝ…

「つて、千雨！！許さんぞ！！どうせ昼に散々やったんだろうが！！私がやるって言ってるんだ！！」

ああ…

てか、いいかげん食事再会しようよ。

キティやるならはやくしてください、んゝ…

「おやつのケーキはわたしが口移しました。尋常ならざる美味でした、マイロードの味が」

「聞いてないぞ!?!」

うんアレはくせになるおやつでした。
だからだれか、んゝゝ

「私たちが魔法球にいる間か!?! 茶々丸、貴様!?! だったら今は邪魔するな!?!」

「おい私にも言わせろ!?! 私達はデートで外だったから、けっこう我慢したんだぞ!?! 食べさせっこくらいだったんだ!?! 今なら口移しくらいやってもいいはずだろ!?!」

確かに。

イチヤコラしてたけど、ちゅーしてぎゅっしてでしたね。
でもデートですから。

らぶーでしたよー。

「なにを言うか、千雨!?! 魔法球に連行された理由を忘れたか!?! 帰ってから散々やってただろ」

「ぐっ…。く、口移しはしてねえ!?!」

まあ食べ物は、してないですね。

「ふん!?! それがなんの言い訳になる!?! 口ごもった時点で貴様の負けだ!?!」

「いきますよ、マイロード。んゝゝ」

あ、やっとなですね。

茶々丸ちゃんとなら、なれっこさんです。

スープでも安心していただけます。

んゝゝ

…んちゃむ、じゅずじゅる…

「「茶々丸!!」」

「きゃっ…。マスター、千雨さん、危険です。急に引き離さないで下さい。マイロードに怪我があったら大事です」

ああスープ味付け茶々丸ちゃんがあ…

ちゅうとはんぱで、はらぺこり。

「お前、話聞いていたか!? 朝から昼から貴様達は私の汀を独占して!! なら夜は私の番だと宣言したはずだ!!」

きゃー、キティだ・い・た・ん!!

らぶー。

今夜はがんばっちゃうぞー。

だからお夕飯、続けましょうよう。

「そんなのより、絡繰!! いま必要以上に舌とか絡めてたろ!! エヴァ、これで私にも権利ができたよな!!」

権利が、とか千雨ちゃん可愛いなあもうっ!!

とりあえず誰かたべさせてー。

そしたらがんばるから。

ぎゅーしてちゅーあげるぞー!!

「お二人とも落ち着いてください。わたしがマイロードへ給仕するのはごくごく自然なことですし、唇を合わせたなら舌を絡めるのも当然のことです」

「「お前がどや顔すんのか!!」」

ほっとかないでよー。

結局、ワタシのお夕飯はみんなが順番に口移しするコトになりました。

キティが息荒く

「スムーズに行う為にも、汀の両手は後ろに縛ろう」とか言い出すもんだから大変でしたよ。

やれ目隠しだ、やれおねだりだ、と。

明らかにお夕飯そっちのけ、が目に見えてましたから、言ってやりました。

「いいけど、ワタシからぎゅーって出来ないよ？あ、おさわりも許さないから」

素直にお互いぎゅーしながらの口移しになりました。

みんなして一口を出来るだけ少なくするから、時間ばっかりかかったし。

味なんかほとんどわかんないし。

キティ味、千雨味、茶々丸味ばかりでしたよ。

ぜんぜん文句ないです。

てへり、みんならぶー。

お夕飯後のワタシとキティは決まってお茶を楽しみます。

千雨ちゃん茶々丸ちゃんはおかたづけ。

2人が戻るまでほんわかイチャコラ。

…んちゅっ…ちゅっちゅっ…

髪の毛長いワタシ達一家はお風呂に時間がかかります。
だからお夕飯が終わるとみんなで魔法球へ。

…くゅちっ…ぺちやぢゅっ…

そして4人でお風呂です。

あらいつこ、みがきっこですよ。

魔法球内の居住スペースはいつでも整備万全。

キティのドールがピカピカにしています。

あ、ドールってのはアレです。

魂も感情もない、機械的に働く魔法人形。

はうすきーぱーさんです。

…ずじゅ…むちゃ、ちゅっちゅ…

お風呂から出た後はどうぞぐゅっくり、です。
ワタシが誰と眠るかはその時々。

2人だったり、3人だったり、全員だったり。
でも1人で寝たことはキティと出会って以来一度もありません。

…あむちゅ…はみはみ…ちゅっちゅ…

そして外時間の朝に戻ってきます。

体感では丸9日前後。

千雨ちゃんの修行したり、茶々丸ちゃんの調整したり、キティとイチャコラが突き抜けたりで、あっという間です。

…ちゅむう…ぺちや、ぴちや…

これがワタシ達の毎日。

だから千雨ちゃんの修行年数とか、茶々丸ちゃんの活動累計時間とか、外時間で答えちゃいます。

かぞえてないからわかんないし。

…うずずず!!…ちう…ちゅっ…

あ、お察しですかね？

さっきからずっとキティに押し倒されてます。

ソファアでワタシ仰向け、キティの身体全部で押し倒されてます。
キティの熱、キティの香り、キティの味。

いとしいよーキティ。
らぶー。

…ちゅっちゅ、ぺちや…ちゅむ…

一心不乱にちゅーしてぎゅーしてくれるキティ。

ああダメだワタシも…って。

「…なっ!?! 放せ降ろせ茶々丸!?! 貴様ア、許さんぞ!?!」

茶々丸ちゃんに持ち上げられたキティ…

怒ってるけどかわいいー。

はふ…ほっぺがほてる。

「すみません、マスター。何度か声をかけましたが、本気で聞こえていないご様子でしたので」

ワタシは聞こえてました。

見下ろす茶々丸ちゃんと目が合ったし。

多分それで止めてくれたんでしょう。

「マスター、魔法球へ参りましょう。今夜はわたしも千雨さんも入浴を終え次第休みます。お二人の邪魔は致しませんので」

「ああ、私はあれだ、まあ色々したしな。夜はエヴァだったので構わない」

ああ、茶々丸ちゃんも千雨ちゃんもキティはホンキでやきもちもーどなのを察したんですね。

「…っち。わかったから降ろせ。入浴したらすぐに下がるんだな?」

ふまんげキティかわいいー!!

ワタシをちらちら見ながら赤らめ顔キティぷりていー！！
見てるだけでときどきします。

「イエス、マスター」

「千雨も確かにか？」

「ああ。あ、今夜は、だからな」

ふふふ、今夜はキティとで決まりみたいですネ。
らぶーキティらぶだよー。

「ふんっ！。貴様らの主として邪魔は許さんから！！」

「イエス、マスター」

「私の主は汀だ。けどまあわかったよ」

床に降ろされながらの念押しに、本氣ががんこもってますね。
さっきまでも余裕なさそうでしたし。

「…汀、すまん、行くぞ。ゆっくり風呂に入ろう。それから愛して
やる、それから愛してくれ」

「うん、キティ。ゆっくりお風呂入ろう。それから愛して？それか
ら愛し合おう？」

ぎゅーってしてちゅー。
ああ幸せ。

ワタシは汀。

完全無欠のチート美少女汀ちゃん。

不朽不滅の魔女。

あなたはキティ。

限界突破のエターナル美少女キティ。

不老不死の吸血鬼。

「愛している、汀」

「愛しています、キティ」

見つめ合って囁き合う。

それだけで幸せ。

ゆっくりお風呂したら、2人だけの時間。

胸がいっぱい、どうかしてしまいそう。

「そんな目で見えるな。風呂が先だと自分でも言っただろう。」

キティが手を伸ばす。

頬に触れると、熱が伝わる。

彼女の高鳴りが響いてくる。

「どんな目？」

ワタシより少し小さなキティ。
ワタシより華奢なキティ。

「わかるだろう？」

軽く抱き合って目を合わせる。

「お前が見ているモノと同じだ。狂おしいほどに求める目だ」

わかる。

ワタシ達の目はきつと同じ。

だって、でも、しかたがないでしょう？

「「愛しています」」

このままだっここでおふろまでごー！！
だっしゅしちやいますよ！！

「ふふふ」

「：ったく」

茶々丸ちゃんの笑みが、千雨ちゃんの呆れた声が背中越しに聞こえ

ました。

どちらもやさしさからあふれ出たような声。

今日も我が家は幸せです

第5話 不朽不滅と不老不死のらぶ＊（後書き）

第5話更新。

grand病原です、こんばんわ。

エヴァのイチャコラ回です。

賛否両論でしょうか？

本作品のエヴァは、自分の心のなか、一番深い場所に汀を据えています。

そのため、主義や性格にも変化があります。

汀ということを第一に考える部分が多々あります。

それら全ては汀の影響です。

あと、いじられポジでもないです。

てかむしろ男前ですよね。

汀に関しても、チートっぽくなってきましたね。

まだまだですけど。

この後の入浴描写は流石になしです。

今後は：

やっぱり彼女の登場でしょうか？

そこはさらっと流して、そろそろアンチ展開でしょうか？

悩みどころです。

てか飽きられないといいなあ。

イチャコラって結局、イベントとかななくてもキャツキャウフフして
る2人ってだけですし。

本作品の半分はこれですもんね。

さて気を取り直して報告です。
活動報告にも記載しましたが、P Vとユニークがびっくりな状況です。

本作品をご覧の皆さま、ほんとうにありがとうございます!!
これからもがんばりますよ!!
マンネリ回避が問題ですね!!
が、がんばります!!

ではgrand病原でした。
また読んでくださいね

第6話 ついに彼女の登場です*

《ずがーん!!》

キティの魔法球は今日も快適です。
アイスティもおいしー。

「ハーハッハッハッ!! ほらほら秘策とやらはどうした!?!」

《ばばがーん!!》

外と違って爽やかな常夏。

昼も夜も最適に保たれた気温。

なんだか精力的に動きたくなります。

「くっそ!! 冗談じゃねえ!! いけっ!!」

《どどどどどっ!!》

当然、のんびりにも適しています。

今のワタシみたいだね。

茶々丸ちゃんも控えてくれていて、高級リゾートもたじたじですね。

「つまらんな!! その程度でこの私に啖呵をきったのか!?!」

《ずっぱーん!!》

青い空、蒼いうみ、白い砂浜。

ふーむ…

「っ！っ！おい！！なんかマジ過ぎないか！？」

《しゅぱぱっ！！》

「茶々丸ちゃん、何か足りないと思いませんか？」

重要な要素が足りないよー。

「いまさら空惚けかつ！！余裕があるじゃないか！！」

《びゅごおー！！》

「…なんでしょうか。デザートですか？」

…それも重要な要素ですね。
ジャンポパフェとかいい。

「いったいなんのっ！！…って、あれか！？」

《ぱぱっ！！ぱぱっ！！》

「それもいい。でも、のん。ずばり水着だよ。リゾート気分南国気分なのに部屋着ってどう？ワタシ、水着着る。茶々丸ちゃんもね」

これ重要ですよ！！

「そろそろおしまいにしてやる！！汀の目の前でみっともなく凍りつけ！！」

《きゅぽっ!!!》

「イエス、マイロード。お手伝い致します」

ありゃ？

茶々丸ちゃんうれしそうですね。

「やっぱ汀か!? 汀に言ったアレか!?」

《ばかばかばかばん!!!》

「あり、茶々丸ちゃんごきげん? 水着のワタシが好み?」

それとも、ワタシのお着替えが、でしょうか?

「私を出し抜いて一発決めるんだろう!? 汀にご褒美をねだったんだろうか!? やってみせろ!!!」

《ががががが!!!》

「いえその…マイロードの身支度は、普段千雨さんの仕事ですので、たまには、と。それに千雨さんは本当に楽しそうにマイロードのお世話をされますし…」

ふむーなるほどなるほど。

でもまだあるよねー?

「ばっ!!! ちょっ!? そんなのちょっとした弟子の意気込みじゃねえか!!!」

《どっかどっかどーん!!》

「うふふ。つまり茶々丸ちゃんはワタシを着せ替えしてキャツキャしたいんだねー」

照れちゃってかわいいー。

いいこに育ったなあ、もうっ!!

「馬鹿め!! 聞く耳持たん!! これで終わりだ!!」

《どっっつばぁーん!!》

「…っ!?! あのだ…決して、その…」

うーふーふー。

ぎゅーっしてなでなーで。

「ん。じゃあ着替えに行こうか。あのね、千雨ちゃんはいっつも脱がせたり着せたりで、色んなトコ触ったり揉んだりするんだ。茶々丸ちゃんにも許しちゃうぞー」

耳元で囁いてあげました。

「……っ…!!…」

照れちゃった茶々丸ちゃんは、ほんとにかわいいー。

手を引いて、着替え部屋へエスコートしてあげましょう。

真っ赤でふらふらですからね!!

「オイ魔女。オレハオイテケヨ。ウゼーンダヨ」

ずっと頭にくつついてたくせに、今更もんくですか。
でもそうはいかないのさー!!

「だーめ。チャチャゼロも水着だよー。ふはは、こんなこともあろうかとー」

チャチャゼロの水着も、もちろん用意してございますよー!!
これで水着姉妹の主!!
キティがですけど。

「アンダヨメンドクセエナ、着替タラ酒ヨコセヨ」

あはは、額ぺしぺしするなよー。
その手を取って握手です。

「でもこの後は近接訓練だよ？」

キティの初代従者。

魔法使いの前衛。

キリングドール。

茶々丸ちゃんのお姉さん。

チャチャゼロ。

当然参戦ですよ。
てかやっとう登場です。

「アア覚エテタノカヨ。アンマリ綺麗ニシカトスルカラ忘レテンノ
カト思ツタゼ」

いやぁ楽しそうだったですし。
止めませんよ、良い訓練になりますからね。

「ん〜？チャチャゼロとイチャコラしてたかったからね」

嫉妬キティ眺めるのもぷりていーでしたし！！

「ヨク言ウゼ」

ですね。

てか茶々丸ちゃん喋らないですねー。
そんなにしたかったのかなあ？

「オイ妹ヨ。ツイタゾ、サツサトヤツチマエ」

「あ、はい姉さん、では一旦マイロードから降りてください。…マ
イロード、その…よろしいですか？」

俯いちゃってもう、仕方ないですね。
ほらほらぎゅーですよー
ちゅーですよ。

「…んっ。よいぞーくるしゅーない。やってたもれー」

ってあれ？

茶々丸ちゃんおめギラギラして…

「…ふぁん！！」

いきなりそこ!?

あっ…ちよつと…あん!?

「アア、始マッタ。コリヤナゲエナ。…ット、コレカ。オイ、オレハ先ニイクカラナ」

あん!!…ちよつと…コレは…

「チャチャゼロ、キティ達お願いんっ!!」

時間かかるかも…です。

「ふはははは!!見事な氷柱千雨だな!!おい見ろ汀!!これが“一発決められた”ツラだ!!」

……

「馬鹿なヤツめ!!私をダシにしようとは!!はーっはっはっはっ!!」

……

「おい汀!!コレは私がおねだりの権利を手に入れたってコトだな!!ふはは!!愉快だ!!実に愉快だぞ!!」

……

「…汀？…って汀！？どこへ行った汀…！」

………

「とおーばあーりーいー…！」

第6話 ついに彼女の登場です*（後書き）

第6話投稿。

grand病原です、こんばんわ。

ついにチャチャゼロ登場です。

いやまあ正直第2話の段階で、忘れていただけって言う…

もういっそ…とも思いましたが、エヴァの初代従者としてやっぱり必要ですからね。

今回登場と相成りました。

てかそれより“本作品ではいじられポジじゃない”とエヴァを評したハズが、早速…

ごめん、キティ。

唐突に気付いたのですが、本作品のタイトル『匂いがつくからヤキトリは嫌い』の部分で、原作『ネギま』自体を否定してますよね。そんなつもりはなかったんです、まいりました。変えようかなあ？

第7話　ゼロさんコレでゆるして

右からの横薙ぎを屈んでかわし、後押しするようにバランスを崩してあげちゃう。

「ナメンナ！！」

崩したバランスを回転力へと転化させたようで、急回転と共に両手の刃を振るってくる。

「つとりゃ」

その前に、一步踏み込み肩口の力点へ打突をとりゃ。

今度こそバランスを崩したチャチャゼロは、広く間合いを取るコトを選んだようです。

「メンドクセエ相手ダゼ。チットモ切レヤシネエ……っ！！」

猛烈な加速で一氣に間合いを詰め、両刃を振り下ろして来ますが、悪手です！！

殺那の間にこちらも加速、まだ振り上げたままの握りをそのまま掴んでしまいます。

「ッ！！」

しかし、拘束された両手はそのままに、球体関節を活かして更に加速した頭突きが降って来ました。

が、ふふーふ、もらいました。

両腕を開く事でチャチャゼロ宙ぶらりん。

「グエッ!!」

停止した宙ぶらりんチャチャゼロを放して、即正面から抱えます。

「catch!! チャチャゼロいただき!!」

「アア、クソ…。チツ、負けダ負け」

ふふふー。

ぎゅーしてから、クルッ。

後ろから抱えるようにして、チャチャゼロの手を取りぱたぱた。

「おわったよー」

遠巻きに観戦していた3人にアピール。
しよーりの美少女汀ちゃんです。

「チクシヨー、イツソ自爆シテエゼ…」

ふふーふ。

敗者はただ可愛がられるのみなのです!!
ぎゅー。

「グエエ…イツカ切ッテヤル…」

「しかし見事なもんだな。チャチャゼロ遊ばれっぱなしじゃねえか」
「お疲れさまです、お2人とも。流石です。わたしでは先程の姉さんには到底敵いそうありません」

「ふむ、チャチャゼロの動きは想定を上回っていたな。まあ汀には届かなくて当然だが」

てへり。
てれりこてれりこです。

「デメエ千雨、氷漬ケノ次ハ血ダルマニナリテエノカ」

「ちょっ!?! 勘弁しろ!?!」

「まあまあチャチャゼロ。まだ加減は難しいでしょ? 千雨ちゃんをしごくのはもうちょっと慣れてからにしなよ」

チャチャゼロは今、パワーアップの調整中なのです。
ごくごく単純な“魔力エミットによる各動作、威力の強化”なんですけどね。

「汀も止めるならちゃんと止めてくれ!! あんな速度、冗談じゃねえ!?!」

あはー。
まあいずれは殺りあってもらうわけですしね。

「でもやっぱりチャチャゼロはキティの従者だね。もともと魔力で身体を動かしてたって下積みはあっても、ここまで強化されるとは

ね。チャチャゼロ流石!!ぎゅ!!」

チャチャゼロは元よりキティの供給する魔力で動く魔法人形です。パワーアップもあくまでその範疇。

供給される魔力の効率化と増量。

新たな放回路設置と共に身体自体の再構成。
ついでに得物召喚機能。

「グエエ。褒メンナラ酒ヨコセ、アト放セ」

ワタシ達がしたことはこれくらい。

そもそもチャチャゼロは、キティと一緒に長年の血路を歩んで来た烈士ですからね。

今まで築いたその熟練の武技こそがチャチャゼロの真価なのでしよう。

「ふっ、敗けは敗けだろう。大人しくしているチャチャゼロ。水着の汀がお前くらいの人形を抱き締めている姿は実に絵になるぞ」

えへ、キティに褒められました、てれりこ。

そもそも今回までチャチャゼロが特別な強化をされるコトがなかったのも、彼女がその技巧で千雨ちゃん茶々丸ちゃんをバツタバツタと薙ぎ払い続けたからです。パワーもスピードも既に上回る2人を相手取り、その技巧、経験で圧倒し続けたから。

「ああ、2人とも水着似合ってたな。選んだの絡繰なんだろう？」

千雨ちゃんにも褒められたー、てへり。

まあ流石に最近2人の成長が突き抜けてきたところで、今回の強化へと至った訳です。

「あ、はい。すみません千雨さん。マイロードのお手伝いは千雨さんの…」

「ああいや、気にすんなって。汀になんか言われたんだろ？それにこう…汀を着飾る楽しさってよく分かるし」

数日の慣らし運転、ワタシとの数時間の^{チャチャゼロのみ}全力戦闘。いまや既にその新しい力を制御しかけています。

「おい貴様達、私を捨て置いて汀で楽しむだと？」

チャチャゼロがこの魔力エミットを完全にものにしたら、かなりの強さになりますよ。

得物もワタシ特製ですし。

老け面タカミチくんならとくに圧勝でしょう。どころかタカミチくん5人とかでも足りない？今後どこまで化けるでしょうか。

チャチャゼロ無双ですね！！

てか今のキティのセリフは！？このタイミングなら！？

「待って！！ワタシの為に争わないで！！……よし完璧。女の子、夢の台詞ゲット。やった！！」

きゃー、ワタシを取り合うキティ、千雨ちゃん、茶々丸ちゃん。
何度あっても素敵なシチュエーションです！！

3人ともらぶー！！

「…ふ。なら汀の望みの通り争わず、手を取り合おうじゃないか。
茶々丸、千雨。3人で汀を思う存分着せ替えするぞ！！」

……へ？

「成る程成る程、確かに。汀に辛い想いをさせるなんて、これ以上
なく心苦しいしな。賛成だ。」

……あれえ？

「すみませんマイロード。あの…先程のお手伝いは、抗いきれない
ほどの幸せでして…。決して悪くは致しませんから」

……えっとお？

「ジャア、オレハ慣ラシ続ケルワ。…ヨット、濟ンダラ訓練付キ合
エヨナ」

……ああ、逃げられました。

「ちなみに私は汀の着替えんとき、身体を触んの許されてる訳だが
…まあ、今回も当然だよな、3人とも」

……いやなよかーん。

「ほう…たまにシケこんでいると思えば、公認か。ふむ、私は許可なんぞ必要ないから当然だが、まあ今後は3人とも問題あるまい」

……たしかにキティは、だけど。

「あの…わたしも、その…先程許可をいただいております。ですの
で…3人一緒に」

……や、断りはしないですけど。

「…えっと、ふつーに4人でってコトだよなー？」

「「マイロード汀はされるだけだ（です）」」

やっぱり!?

「ほら、行くぞ。それともここでされたいか？」

「いやだめだろエヴァ、ここじゃ着替えがよごれちまうし道具もねえ」

「……マイロード、参りましょう」

チャチャゼロ!!

たあーすうーけえーてえー!!

…くすん。一方的に玩ばれました。

あ、でもでも美少女すぎるワタシが一方的にされるのって素敵かもです…！

とか思っ、少しサービスしたら、3人とも異常に燃え上がるんですもん…

でも、すっごく愛されちゃいました…！
てれてれ。

キティ、千雨ちゃん、茶々丸ちゃん、らぶー…！

第7話　ゼロさんコレでゆるして（後書き）

第7話更新。

grand病原です、こんばんわ。

チャチャゼロごめんね！！の回です。

いえ、本気で忘れてしまっていたので、せめてものお詫びに、ですね。

本作品のチャチャゼロはカワイイだけのマスコットではありません！！

スピードパワーガード、エヴァの魔力を頼りに満遍なく鬼化！！名前変えてもばれませんが、某はらぺこ騎士王ちゃん魔力放出です。

ちなみに今回の強化でチャチャゼロは、汀エヴァに次いで三番目の実力を得ました。

下2人も麻帆良では無双出来ます。

いったい誰と戦うのやら：

人形さん？

明確な敵に魔女は容赦などしません。

ばくっ！！っとヒトノミです。

本作品でバトルはオマケ扱いですね。

イチャコラがメインですから。

感想をいただいた　七さま。

ありがとうございます！！

コレでチャチャゼロもきつと記憶に残る！？

一家の非イチャコラ要員としてがんばってくれるはずです。

…たぶん!!

今回は更新が遅れてしまいました。
でもほら、アレです。

眠るまでが今日!!

更新してから寝ますから、セーフですよね!!

…ごめんなさい、もつとがんばります。

では、grand病原でした
おやすみなさい

第8話 ワタシ達とアイツラ その1

「あ、コレかわいいー。黒地に金もいい。」

長い夏休みは既に明け、幾らかの週を過ぎています。

「ふむ、黒か…だが浴衣だろう？もっと淡い色合いがいいんじゃないか？」

新学期のクラスは相変わらすの煩わしさで、しかも最近はワタシ達へ何故か積極的に干渉を始めているようです。

「まあ浴衣だしな。普段は着ないもんだし、色も普段と変えてみるか？」

穏やかに学生をやっているワタシ達に彼女達は何を望んでいるのでしょうか？

「ん…例えば？水色とか？ワタシには合わくない？」

夏休み中もクラスメイトの誘い全スルーしたり、新学期開始パーティーとやらもスルーしたけどソレが原因でしょうか。

いえ違いますね、今に始まったコトではないのですから。となると、誘導…でしょうね。

「「それはない!!」」

伴って、麻帆良の魔法使い達が何やら蠢いている様子です。

明らかに監視が増加しています。

「うわ、びっくりした。えー、水色いけるかなあ…」

面倒事の予感がしますね。

取り敢えず近衛くんからの連絡を待つとしますか。
そもそも今夜は会談の予定ですし。

「絶対いける！！汀なら淡い色だろうが、明るい色だろうがなんだって似合うに決まってんだろ。エヴァ、汀のは水色にしよう。小物は私がつくる。」

「そうだな、たまにはこんな色悪くない。いや…かなりいい。うむ、任せろよ汀！！私が飛びっきりの浴衣美人に仕立て上げてやる！！」

彼等は彼等の好きにするといいでしょう。

ワタシは関与しません。

けれどもし…

「えー…。まあ2人が言うんだし平気かなあ？ん、じゃあお願い。
キレイにしてくれたら、お礼にいっぱい可愛がってあげる」

隣に座っていたキティを引き寄せてちゅー。

…っん、ぺちよちゅぴゅ…

「んあ…あっ…」

軽くで済ませ、一瞬寂しそうな目をした千雨ちゃんへ自ら近づいて、
上からキスを落としてあげます。

…ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちよぷちゅ…

「…あ、んう…汀い…」

もし、ワタシの幸せを邪魔するのなら、容赦はしません。
不朽不滅の魔女、汀を怖れなさい。

怯えて動けないうちは、放っておいてあげるのですから。

でもいまはしあわせじかん。

んー、キティも千雨ちゃんもあまあい。
らぶー。

「キティ、千雨ちゃん、大好きだよ!!」

「ああ。汀、愛している」

「あ…っと、その、私も…だ」

きゃー!!

catch!!

ふあ、けだるうーい。

キティのなめらかな背中にちゅーしてくすくす。

「…あつ、…汀…」

千雨ちゃんをつややかなお腹にちゅーしてきやつきやつ。

「…ふあつ、もうむりだって…」

ふふーふ。

おだやかでイチャコラでどたばたでキャツキャな空間。
素敵です。

なんてしあわせなんでしょう。

でも残念です。

そろそろシャワーを浴びて、出かける支度をしなくちゃいけません。

「…………ちゅ。汀、電話だ。近衛学園長から着信、すでに絡繰が対応している」

ちえー。

ほにゃん、としてた千雨ちゃんが一気に不機嫌そうになっちゃった。
あ、キティもシートから起き上がって舌打ちしてるー。

ちえー。

「そっか、了解。千雨ちゃんはシャワー…じゃなくて別荘でお風呂にしよう。だから、会談用の外出着準備して待ってて。キティもお風呂行こうね。茶々丸ちゃんが来たら、一緒に準備してて。んー…ちゅっ。んー…ちゅっ」

あーあ、わざわざ会談の前、このタイミングで連絡してくるなんて面倒事でしょうねえ。ちゅーをチカラに変えてがんばろー。

「…っん。わかった、飛びきりの選んどくな」

「…んちゅ。ああ。詰まらん電話は早く切れよ。……近衛め、忌々しい」

よろしくねー。

…ああ面倒です。

《こんこん》

「失礼します。マイロード、麻帆良学園学園長よりお電話です」

「はい。あ、茶々丸ちゃんはキティと準備しておいて、詳しくは千雨ちゃんに」

「イエス、マイロード」

めんどうだなあー。

でもやらなきゃ、よし。

茶々丸ちゃんをきゅーでちゅー。

「…はぶ、んちゅ、ぺちゅ……。では、マイロード、先に行っておりますね」

うん、こころちから、かいふくです。

はあ…

取り敢えず外交もーど。

「…もしもし、汀よ」

『おお、わしじゃよ近右衛門じゃよ』

「要件をどうぞ」

『ひょ！？頼むぞい…留守番電話じゃないんじやし、挨拶くらいさせてくれんかの』

「……………」

『……聞いとるか？』

「挨拶がしたいと言うから待ってあげたんでしよう。早くなさいな」

『おお、合いわかった。では、夏休みが明けたがどうじゃ、調子なんぞは。今年は残暑厳しいからのう。老骨にはちとキツイわい』

「そうね、確かに残暑が厳しいようね。あなたのところの威勢がいのが何人か、脳ミソ沸騰しているみたいだね」

『ぐっ…』

「監視人数が倍に膨らんでいるし、ワタシの家に干渉しようとした茹で脳もいたわ」

『それは…その事もあって連絡したんじやよ』

「そう。近衛くんとは条約もある。干渉は失敗しかしていないし、監視も実質増えただけ。今はまだなにもしていないわ」

『わかつとる。わしらに被害等は一切ないからの。疑つとりやせん』

「心外ね。ワタシ、今は、と言ったのよ。明確に敵対すれば排除する、それだけ。だからよく手綱を引いておきなさい、そう言ったの。疑惑もなにも関係ないわ」

『面目無い限りじゃ、処罰は与えておくからの。…と言うか、“近衛くん”は止めてもらえんか。わしそんな年じゃないぞい』

「あら、そう。なら近衛学園長。いい加減要件を」

『…なぜか釈然とせんもう、まあ要件じゃな。今夜の会談はそちら全員で出席してほしいんじゃ。改めてそれぞれに条約について確認したい。可能なら、もっと歩み寄れればと思つとる』

「そう、全員で出席ね。まあ千雨もそろそろお披露目したいしね」

『……長S「緒々嶋よ。彼女は緒々嶋千雨。会談の際、改めて自己紹介させるわ。それ以降は間違えないで」

『……合いわかった。こちらからはわし、高畑くん、ガンドルフィーニくん、シスターシャークティ、あと緒々嶋千雨くん絡みの人員が何人かじゃ』

「何人か…ね。結構よ」

『では、今晚21時にわしの学園長室まで来てくれるかの』

「……………」

『来て…くれるかの?』

「冗談はいらないわよ」

『いや、冗談のつもりは…』

「ないんでも?ふう…なら断るわ。あなた達とワタシ達は決して友好的な関係ではないわ。ましてや傘下でもない。会談がしたいならキッチンとした中立の場を用意なさい。その上で結界なんなりを敷きなさい。ああ、結界を敷く前に、ワタシに承認をとりなさいよ。最悪、閉じ込められたと判断したなら、あなた達、即座に皆殺しよ。それくらいするのが当たり前でしょう」

『しかしのう…皆に学園長室まで来るよういつてしもうたし』

「……2度は言わないわ、どうする気なのか聞きましょう。これが最後」

『……すぐに料亭に席を設けよう。結界の事も承知した、他の者には強く言い聞かせておこう』

「そう。なら後で店を報せて。じゃあ切るわ」

『うむ、ではあとでの』

《ぷつ、ぷー、ぷー、ぷー》

駄目ですね。

最近彼等との関係は拗れるばかりか：

ワタシも言葉に棘を乗せてしまうし。

もういつそ始末してやりたい。

まあ千雨ちゃんのコトもあるし、ここに居るのも今度の卒業までで
しょうか。

ワタシの心情も大分嫌悪に傾いてきてます。

丁度いい切っ掛けかもしれません。

気を取り直して！！

これからの苦行を乗り越えるためにも！！

みんなとイチャコラしてエネルギー補給しましょう！！

キティー！！

千雨ちゃん！！

茶々丸ちゃん！！

いまいくよー！！

第8話 ワタシ達とアイツラ その1（後書き）

第8話更新。

grand病原です。

今回初登場、麻帆良学園長。

彼は本作品の黒幕役の一人です。

あまり言ってしまうてもあれですので、秘密にしておきます。
次回以降にご期待くださいね。

今回の後半部分はもう少し他のやり方があったのではないかと、更新した後でも悩んでいます。

やっぱり未熟者のgrand病原ですが、コレも経験にしておきかかります。

今後もし読み返してあげてください。

では、grand病原でした

おやすみなさい

第9話 ワタシ達とアイツラ その2＊

〽割烹 雪芽〽

当店は主に都心部、各都道府県要所に店舗を構えお客様に最高級のお食事とお寛ぎをご提供させていただいております。

全客室は各々が壁等で面しておらず、完全な個室でのひとときを、ごゆっくりとおすごしいただけます。

お食事は全国より厳選された食材を、新鮮なままご賞味していただいております。

お客様のお好み、ご要望にも可能な限り当店料理長が腕によりをかけてお応えいたします。

全国津々浦々より取り寄せました名酒秘酒と共におたのしみください。

どうぞ、こころゆくまで、最高のお時間をおすごしくくださいませ。
割烹 雪芽は皆様のご来店、心よりお待ちしております。

「待ってるのは魑魅魍魎どもだけどねー」

最高級割烹雪芽へ4名様（＋1）ご案内〽、中のチート美少女汀です。

（＋1）はもちろんチャチャゼロですよ。

タクシーに乗るワタシの膝の上。

上機嫌だからぎゅーし放題。

ぎゅー。

「ナンカ言ッタカ？ンナノヨリ、ゴ主人、魔女、待チキレネエ。高エ酒吞ミ放題ナンダヨナ」

最初は会談なんか面倒クサがっていたのに、店名聞いた途端これですもん。

「そうだな。千雨の紹介が終えたら、適当に頼むか。無論、近衛学園長につけてだ」

「…まあ悪くねえな。つまんねえ殺り合いよりそっちのが地味に痛そうだ。私も乗った」

「賛成です。しかし、学園長以外の方々が妨害するものではありませんか？」

うわー、みんな飲み会にでも行くような気軽さですね。

でも仕方ないとはいえ若干キレ気味だった千雨ちゃんにも余裕が出来たみたいです。

さすがワタシの家族。

「ん…ワタシ達が取引してるのは近衛学園長と英雄くんだからね。その部下どもには条約の確認でもして、さっさと退出してくれないとホントの会談にもならないもん。それは近衛学園長もわかってるし」

幻の条約でも、ワタシ達は15年間抵触していません。

千雨ちゃんのコトは…グレーゾーンかなあ。

「けど…今回はなんかあるんでしょ。たぶんアチラ側からなんらかの提案なり要求なりありそう。」

わざわざ会談前に連絡入れたコトといい、ワタシ達全員を召集したコトといい、最近のキナ臭さといい、分かりやすすぎますが…果たして何があるのか。

「ツマリドウナンダヨ、魔女」

チャチャゼロの為に、千雨ちゃんの為に早めに雑多どもは消さなきゃいけませんね。

「みんな最初は大人しくしててよ。自己紹介してから条約の確認、次いで千雨ちゃんの扱いについて。それからアッチのターンでしょう。」

まず、ワタシ達が麻帆良へ“捕らえられ、更正の為通学している”コトの確認。

双方が所持する、サウザウンドマスターの記録映像証文の確認。

それから千雨ちゃんの正式なお披露目。ワタシの従者であるコトは周知だから、今回で関東魔法協会に対して明確に宣言するコトになる。

「千雨ちゃんの今後はワタシのもので決まってるから。千雨ちゃんの好きなように言っちゃってね」

「はっ。汀を愛してるって言ってやろうかな……………っ…」

自分で言って照れるなんて!?

肩に頭預けてすりすりー。

すっごい好きだよ千雨ちゃんー。

「是非言って!! 千雨ちゃんらぶー」

んー…ちゅー。

…ちゅっ、ちゅっむ…

「おい…こっち向け。で、汀、続きは? んちゅ…」

わ! 急に引っ張るとあぶ…

…んっ、ちゅぷ…

キティにちゅーされちゃった、てれり。

ふふーふ、嫉妬かなあ?

キティらぶー。

「…今のはひどくねえか。」

「ウルセエ千雨、アトデ泣クマデ犯ラレロ。魔女、オレノウエデイチヤツイテンジャネエ、話ヲ続ケロヨ。ドウシタラ、呑ミ放題ナンダ?」

っと、そうでした。

キティすりすりー、っと。

「ごめんごめん、千雨ちゃんも後でいっぱい、ね。とにかく一通り話を聞けば、近衛学園長の方が外野を帰してくれるよ。そしたら、好き放題呑み放題いー。でもね、それくらい当然だよきつと、彼等の“一通り”は相当なストレスマッハだろうからねー」

実際のところ、ガス抜きみたいなものです。

正義かぶれ雑多どもが、ワタシ達を批難する。

近衛学園長がたしなめ、幻の条約が真実のそれであるかのように認識させる。

後は雑多どもにお帰りいただいてから、本当の会談。

ポーズを維持するための、定期的なガス抜きみたいなもの。

その分、好き勝手に言われますけどね。

「特に千雨ちゃん気を付けてね。彼等はあのトキのままだよ。平然とワタシを批難する。相手にするだけ損」

千雨ちゃんがワタシのもとへ来るコトになったトキのように言うでしょうね。

目の前で消える命に唾を吐くように。

“正義のため”って。

「……わかってる。中等部通ってみて身に染みた。上手くあしらったりはできねえけど、今更激昂したりもねえよ。……でも、その…帰ったら慰めてくれよ。汀のものだって、それこそチャチャゼロじやねえけど、私が泣くまで、わからせてくれ」

……帰りましょう。

今すぐ帰って千雨ちゃんを……いやいや。

「うん、千雨ちゃん。もうとっくに千雨ちゃんはワタシのものだけど、今日も1つの節目だね。千雨ちゃんの全部を愛してあげる。何度だってわからせてあげる。泣いたって気絶したって終わらないよ」

千雨ちゃんと瞳を合わせます。
結びついた魂が呼応するように、瞳に浮かぶ光が同調します。
魂から、心から、湧き出るような想いをゆっくりと口にします

「千雨ちゃん…」

千雨ちゃんも同じ。

瞳から伝わるんです

「汀…」

「「愛しています」」

「はぁ……わかった、今夜は千雨と寝ろ汀、許可してやる。だから
2人とも帰ってこい」

っと、いけません、みんながいるのに千雨ちゃんと2人だけの世界
に入り込むトコロでした。

「…てへり、キティありがと。まあそんな訳だから、基本の受け答
えはワタシに任せてよ。みんなは直接聞かれたら答えるってコトで。
」

千雨ちゃんの瞳がまだ、きらきらとコチラを向いてるのにウインク

を1つ。
まともに入ります。

「後は：攻撃は遠慮してね。枷もそのまま。どうせ彼等は実力差に気付けない程度だから。サウザウンドマスターや近衛学園長ですら未だに“ワタシとキティは魔力を隠している”って誤解してるんだし、雑多どもは封印を疑ってすらいらない」

ワタシ達がいくらサウザウンドマスターや近衛学園長の保護下にあるとされているとは言え、この麻帆良へ滞在出来る最大の理由。

関東魔法協会ひいてはその上役が、雑多の魔法使いどもが納得する理由。

それこそがコレです。

不朽不滅の魔女トバリ。

不老不死の魔法使いエヴァンジェリン。

両名はサウザウンドマスターに敗れた。

そしてその魔力を封印され、一般人として麻帆良へ縛り付けられた。サウザウンドマスターの慈悲と願いのもと、保護され学生をさせられている。

けれどその真実は：

「欠片も思わないんだろうね、サウザウンドマスターも近衛近右衛門も戦闘にすらならなかったなんて。軽くあしらわれて不平等な条約を結ばされたなんて」

利用されているのは彼等。

幻の封印を楯に、実のトコロ、ワタシ達はゆっくりスローライフしているだけ。

ストーリーカーと迷惑隣人多い土地なのが玉に傷ですね。

「そして、夢にも思わない。レベルが違いすぎて、次元が違いすぎて、ワタシとキティの魔力を感じることにすら出来ていないだけなんです。」

ただワタシ達が強すぎるだけ。

ただ彼等が弱すぎるだけ。

それは仕方のないコト。

だってワタシは魔女トバリ。

チート美少女汀ちゃんですからね。

「いやー“雪芽”初めてなんだね。そりゃあ楽しみだろうなあ。しかし可愛い子ぞろいで人形自慢か、なごむねえ。むしろ親御さんが娘自慢だろう、なあ？」

「（なるほど、ドライバーさんにはマイロードが姉さんを自慢しているように認識しているのですね、違和感のない認識阻害です）」

「次の信号曲がつてすぐだよ、妹達に言つてやんな、お姉ちゃん」

「（…いえ、わたしが一番年下です。しかしなぜわたしは助手席に…おめかしをしたマイロードに見蕩れたのが敗因でしょう。更にどうやら今晚は千雨さんとお約束されたようです…。こうなれば会談でのお酌は譲れません）わかりました。ありがとうございます」

第9話 ワタシ達とアイツラ その2＊（後書き）

第9話更新。

grand病原です、こんばんわ。

会談まで辿り着きませんでした…。

正義党のキャラ達に色々言われる場面の前に、汀が最強チートであるコトを示しておきたかったんです。

今回はもしかしたら“近衛、春野ケチョンケチョン事件”を回想として入れるかもです。

あと、ちらっと千雨関連で匂わせましたが、本作品では普通に人死がおきます。

今後ご注意を、です。

七さま 感想ありがとうございます!!

とっても励みになります。

次回こそは会談。

千雨の詳細ですとか、麻帆良との確執ですとか書きたいコトはいっぱいあります。

これからがんばりますね!!

実は今日初めて評価をいただきました。

grand病原には評価をいただけたコト自体がすごくうれしいです。

皆さんがつつい高評価しちゃうような、暇を見ては読んじやうよ
うな作品目指してがんばります。
ありがとうございます。

ではgrand病原でした
おやすみなさい

第10話 ワタシ達とアイツラ その3＊

静々と先導する女将さんについて歩きます。

外観も立派でしたけど、内装もかなりのものです。

やるなー、割烹雪芽。

そんな訳でワタシ達一行は、既に到着しているらしい近衛一門の待つ部屋へと案内されている最中です。

ワタシは外交モード。

基本的に外交はワタシ任せの、キティ。

千雨ちゃん茶々丸ちゃんは従者として、キッチンとワタシの後ろに控えてくれています。

キティが抱えるチャチャゼロが何だか雰囲気に合いませんが、常にワタシの横を歩くキティが抱えていれば、いざってトキに役立ちますからね。

「こちら“萌芽の間”にございます」

どうやら着いたようです。

ではチート美少女汀ちゃん、外交モードいきますよ!!

まあ、パワハラ外交ですけどねー。

ふふーふ、魔女におのけ雑多どもー。

店員さんが襖を開くと、そこは随分なお座敷です。

広いし調度品も素敵ですね。

キティとかこれ、みんなだけで来てたら大喜びじゃないですか？

ちえー、可愛いキティが見れたのに。

きつとまた来よつと。

そのお部屋、中央の重厚感ある卓を挟んで片側に近衛一門が揃い踏みです。

近衛学園長と老け顔タカミくんが卓に、他は一步後ろに並んで座っています。

それでも各自ゆったりとスペースがありますよ。

てか、気持ち悪い熱視線。

「うむ、よう来てくれたの。とりあえずソチラに座っとくれ」

うん、この位置取りなら上座下座ではないようです。

和 문화好きのキティが、即ギレするコトもないでしょう。

や、正直不安だったんですよー。

「待たせたかしら。約束通り全員で来たわよ。貴方達も…随分な面子ね」

彼等とは反対側に腰をおろします。

コチラは全員で卓に。

あ、キティちよつとそわそわしてる。

ふふ、お部屋が気に入ったんですね、らぶー。

「ふおつふおつ。なあに、重要な会談じゃ。此れくらい当然じゃよ。では取り敢えず人数分の茶を頼むぞい。その後は呼ぶまで人払いを

頼む」

近衛学園長が店員さんに指示を出すと、直ぐ様お茶とお菓子が配られました。

外で待ってたんですね…なんかごめん。

おいしそー、ずず…うん、いいお茶だ。

しかし彼の物言い、場合により戦闘も辞さないって訳ですかね？

身の程知らずです。

まあいいですけど。

「……ふむ、では最初に防諜と人払いの結界を敷くぞい。わしでよいかの？」

「ええ。コチラも道具なら持っているけど、お任せするわ。くれぐれも余計な気はまわさないで」

面倒ですからね。

むぐむぐ、お菓子もウマイ。

……どうやら言った通りの結界が敷かれたようです。

てか、後で何人か変な顔してますね。

どうせわからないんだから何か仕掛けるべきだ…とか思ってるのでしょうか。

ワタシ達の現状を知る近衛学園長には、まかり間違っても選べない選択肢です。

あ、だからわざわざ自分で敷いたのか。

万が一、雑多どもに余計なコトされないようにと。

「……さて、双方話しはあるじやろうが、先ずは現状の確認をするぞい。皆しばらくは聞いておってくれ」

ここは毎回お約束です。

氣勢を削ぐ意味でもね。

「ええ、どうぞ。何かあれば口を挟むわ」

でも面倒だからちゃんとやってくださいね、近衛学園長。

「まず彼女ら、緒々嶋汀くんとエヴァンジェリン・マクダウェルくんについてじゃ」

近衛学園長とワタシは親しくもないし、ましてや友人なんかではないので、キティのミドルネームは呼びません呼ばせませんとも。

「両名はサウザウンドマスター、ナギ・スプリングフィールドの保護下にある。そして彼の依頼で、旧知たるわしのもとで保護されておる。その際、彼女等の魔力は皆が感じての通りじゃ。つまり2人は一般人としてこの麻帆良で生活、学生をしておる」

ワタシ達の魔力は現状誰も感知出来ません。

この言い方なら封印されていると思ひ込むでしょうね。

麻帆良大結界は人ならざるものを封じるらしいですし。

ふふーふ、ワタシとキティには効果なかったですけど。

まあ、キティは真祖の吸血鬼です。

鍛えに鍛えワタシと共にいるいまや、人より精霊とかに近いです。てか種族とか超越してますかね。

いまさら世界樹程度、なんぼのもんじやい！！ですよね。
きゃーキティ、かつこいい！！

そしてワタシは魔女。

チート美少女汀ちゃんですし。

「ナギとの取り決めで、彼女等は自宅兼工房を所得しておる。彼の保護下、わしらの保護、監督下にあるとはいえ何が起こるかわからんからの。その自宅兼工房に結界を敷くこと、内部のプライバシーを保証すること、これに抵触した者への抵抗、これらを認めておる」

つまり、我が家に手を出すな！！ですね。

チート魔女の工房をなめてもらっちゃいけません。

麻帆良へ来た当初はびっくりする人数が自宅に敷いた結界に干渉。それにより、気絶後、学園長室へ直接転移して行きましたからね。この結界、近衛学園長の保護ですー、と誤魔化すのにとっても便利です。

もちろんワタシの謹製ですよー。

てかいまだに誰1人破れてません。

第1の結界なのに、まだまだいっぱいあるのになー。

「ついで、彼女等の魔法、戦闘技能についてじゃ。一般人として暮らしておるのじゃから、基本的に魔法行使、戦闘行動は禁止じゃ。彼女等の現状でも、魔法は魔道具や触媒、魔法薬などでなんとかするものがあるからの。自己防衛、秘匿に関する事、その他例外を除いて原則禁止じゃ。ただし、自宅工房内ではこの限りではない。戦闘行動もまた然り、彼女等は近接戦闘もこなすしの。これを遵守させるために、自宅より外出する際には監視をつけておる」

自宅内なら好きになよ、ですね。

ワタシもキティも研究者肌なトコロありますし。

魔法の研究、開発や自己鍛練など時間がいくらあっても足りません。

あと、いま“その他例外”って言われたトキに何人か反応しましたね。

まあ千雨ちゃんのコトがあってから、追加された訳ですから、思うトコロもあるのでしよう。

「これが破られた場合、わしの一存で処分出来る事になっておる。ナギからもうぐれぐれも、と頼まれておるからの。反面彼女等が魔法等を使わざるをえない状態に陥らないようにするのがわしの役目じや。わしには彼女等が一般人として、学生として暮らせる環境を保つ義務があるんじゃないや。サウザウンドマスター、ナギ・スプリングフィールドもこの場にいれば同じじやろう」

英雄くんの名前を連呼するたび、近衛一門の連中がキラキラしてます…

うわぁ…変態っぽいです。

キティ、千雨ちゃん、茶々丸ちゃんからもげんなりオーラがでてますよ…

「あとは…彼女等の従者じゃな。マクダウェルくんの従者、魔法人形チャチャゼロは彼女等と共にここへ来ておる。主たる彼女等と同じ制約で追従を認めたわい。他に生活用と護衛としての従者の自作はナギもわしも承知しとる。彼女等の現状では結局12年近くかったが、結果産まれたのがその2人じゃな」

あ、雑多がすごい何か言いたげです。

おおいしばってる。

千雨ちゃんのコトでしょう。

まあ千雨ちゃんはもともと半一般人ですし。

コトのきっかけはソツチでしょーに。

てか12年近くなかったんじゃないくて、キティと2人だけの生活を
楽しんでいたんです。

掃除とかはドールで十分だし。

四六時中キティとイチャコラする生活、素敵でした。

溶け合うように、混じり合うようにして暮らしていたんです。

あ、いまだってすごい素敵ですよ。

こんなつまらない会談早く終わらないでしょうか。

はーやーくーかーえーりーたーいー。

「2人にも同じような制約を言い聞かせとる。もしもの責任は当然、
主に帰属する。従者は今の人数で十分と判断したうえで、この三名
を彼女等の従者と認めた。千雨くん、後で正式な自己紹介を頼むぞ
い。」

千雨ちゃんが頷いて是とします。

あちら側と違って、落ち着いているようで何よりです。

「まとめようかの。従者を含めた彼女等の5名はサウザウンドマス
ター、ナギ・スプリングフィールドの名に於いて保護されておる。
わしはそれに賛同し、彼女等の保護、監視を行っておる。彼女等は
この麻帆良に於いては一般学生、守られる存在じゃ。これに異を唱
えるは、サウザウンドマスターとわしに異を唱えるものとする。以
上じゃ」

ま、ここまでは問題なしですね。

うんうん、最近はこちらに來れないような雑多のざわめきが煩くなつて來ていますし。

近衛学園長の焦りが最後あたりに感じられます。

所々に穴と言うか突っ込み所のある説明でしたが、英雄くん効果でがんばりましたね。

まあ必死にもなるか。

本気でワタシ達と対立したのなら、彼等魔法使いどもは1人たりとも生き残れませんから。

会談は進んでいます、ワタシとしては退屈すぎるので、さほど真面目になれません。

うー、たいくつ。

卓に向かつて真ん中左にワタシ、真ん中右にキティが座っています。ワタシと近衛学園長、キティと老け顔タカミチくんが対面です。

更にはワタシの左に千雨ちゃん。

キティの右に茶々丸ちゃん。

チャチャゼロは変わらずキティがだっこです。

これはあれですね、隠れてイチャコラしろってコトですよ。

ワタシの左手は千雨ちゃんと繋ぎあってすりすり。

ワタシの右手はキティと繋ぎあってなでなで。

ふふーふ、キティも千雨ちゃんもらぶー。

だきしめたいなあ。

つい、お互いの足も触ったりして、もぞもぞしちゃったりです。

ばれてないばれてない、てへり。

ごめんね茶々丸ちゃん、ちょっぴりなかまはずれだね。

あとでね。

とまあ、隠れイチャコラは卓の下で、ですから彼等には見えてないです。

流石にそれくらいはねえ。

はー、早く終わらないでしょうか。

はーやーくーかーえーりーたーいー。

でも残念ながら会談はまだ始まったばかりなんですよねー。

第10話 ワタシ達とアイツラ その3＊（後書き）

第10話更新。

grand病原です、こんばんわ。

説明ながいしご都合、ですよ。

いや、ごめんなさいコレ以上にはちょっと。

近衛一門では、近衛学園長と老け顔タカミチくんしか汀とエヴァが素の状態だとは知りません。

てか世界中でも後は英雄くんだけ。

だとしても、コレで正義かぶれ達は納得するでしょうか？

自宅工房内自由とかどんだけですか…

た、たぶん英雄くんばわーの恩恵です！！

近衛学園長と老け顔タカミチくんはこの15年間必死に、そりゃもう必死に部下たちを抑えています。

原作のエヴァにした以上にです。

でないとホントに殺されるし。

そろそろ千雨のターンですね。

本作品の千雨が若干口悪い理由が明らかに！？

しかしこの会談どれくらいかかるんだろう…
が、がんばります！！

ではgrand病原でした
おやすみなさい

第11話 ワタシ達とアイツラ その4＊

キティの瑞々しい指先がゆっくりとワタシの手をなぞる。

五本の指がそれぞれの動きで絡む。

指の股を擦り間接を撫で爪に触れる。

這うように、すぎるように、まるで繋がりを求めるように。

ワタシからも指を絡める。

キティの動きに逆らって、でも次第に同調するように、ちいさない
たずらです。

って、あわ、そくほかくされたー。

反対の手は千雨ちゃんと。

きゅっ、て恋人つながぎです。

たまに親指をすりあわせて。

しつとりと掌を重ね合う。

きゅっ、きゅっ、てなんだか確かめるみたいに。

抱き締めるつもりできゅっ、てしてあげる。

大丈夫だよ、って包み込むように。

ふふーふ、あまえんぼさんめー。

「緒々嶋くん達からなにか補足はあるかの？」

ああはい、ワタシがチート美少女緒々嶋汀です。

卓下のおていチャコラで、面倒な会談をのりきろー、おー。

「そうねえ…まずは千雨のコトかしら。ここ最近の会談の度に言っているけれど…。彼女はワタシの従者、本人も納得している。貴方達にとにかく言われる筋合いはないの。それでも煩いから、近衛学園長には経緯も原因も説明したうえで承知させたわ。これ以上どうして欲しいの？」

「黙れ！！穢らわしい魔女め！！長谷川を解放しろ！！何故この魔女を処罰しないのです学園長！！」

あーあ…。

てかいまさら長谷川って言われましたね。

叫んでるガンドルフィーニ教諭と…他にもどうやら何人か事情を知らない人がいるみたいです。

「近衛学園長、彼等は事情を知らないのね？」

「……うむ、あれは極秘事項じゃったからの。しかし説明せねば、皆納得せんようじゃ。聴いてくれんか、千雨くんのごとは関東魔法協会にとって至極重要な事件が絡んどるんじゃ。それを今から説明しよう。じゃが間違っても他言は許されんぞ。高畑くん、千雨くん、よいな？」

「はい学園長。僕は覚悟しています」

何が覚悟ですか。

ふー、まあ老け顔はもういいです。

千雨ちゃんもそう言ってましたし。

その千雨ちゃんはやっぱり頷いて返事です。
そんな仕草も可愛いなー。

「ならワタシから。当事者の目線で話しましょう。いいわね千雨？」
きゅっ、と繋がりを強めながら千雨ちゃんと目を合わせます。
うん、力強い瞳をしていますね。
どうやら大丈夫みたいです。

「ああ。1から説明して、私たちの関係にこれ以上口出し出来ないようにしてやってくれ」

任せて千雨ちゃん。
ワタシの千雨ちゃん。
絶対に離さないから。

あれは2年と少し前、7月の終わりだったわ。

あの夜のワタシとエヴァは、家から30分ほど離れたハイキングコースを歩いていたの。

（もちろんデートです。）

2人で星を観に行った帰り道。

（星も綺麗だったけれど、星空の下のキティってば神秘的なまでの可愛さでした。）

ああ、夜間の、普段なら立ち寄らない場所への移動だったから近衛

学園長には一報入れてあったわ。

（そうしないと色々煩いんですよ。）

その道中、ちょうど中頃かしら、付近に結界を感知したわ。

ワタシ達の家から程近い場所に不用意な結界を。

当然、自衛の為に対処にあたったの。

（この時点では、また正義かぶれの襲撃かと思っていました）

近衛学園長に連絡をすると、可能なら対処してほしい、との許可も取れたわ。

結界は単なる認識阻害。

でもなかなか高度な結界だったわ。

何かを隠していたかったのだろうけれど、アレでは慎重になりすぎね。

普通の相手ならともかく、ワタシ達からすればむしろ強烈な違和感が森の中でぽっかりと浮き上がっているように感じたわ。

結界の質から見て罫の類いでは無かったから、ワタシ達はすぐに踏み込んだわ。

（本当は隔離の結界も敷いてあったけど、ワタシには有って無いようなモノでしたね。）

結界内ではね、おぞましい儀式が行われていたのよ。

人の血肉を、命を生け贄に式神を強化し従える儀式。

（残念ながら実際はさして珍しい儀式ではありませんけれど。）

そこにいたのは驚いてこちらを見る男が1人。

そして陣の上で少女を饗^{むか}ひる巨大な獣。

その少女こそが千雨だったわ。

当時は名前も知らなかったけれど。

幸か不幸か千雨は意識が混濁していたの。

あとで聞いても、どうやら連れ去られる前に何かしらの処置を受けたようね。

千雨は頭や胸、生存に必要な器官を残すようにして喰われていたわ。血肉と、命をゆっくりと捧げる儀式だったんでしょう。

陣の効果か出血がほとんどなかったのも特徴的だったわね。

（でも、もう普通的手段では助からないのが目に見えていました。）
男は突然乱入したワタシ達相当動揺した様子で、慌てて式神に指示を出したわ。

そしてそれが男の最後。

意思のない、狂気だけに染まった眼差しを一瞬ワタシ達へと向けた式神は、即座に男へと襲いかかったわ。

あの儀式は恐らく、本来使役できない位の式神を強引に従え狂化する儀式だったんでしょう。

意思を失った式神は使役主の命令下に破壊のみを行う、そのはずだった。

でも相手が悪かったわね。

不朽不滅の魔女と真祖の吸血鬼、本能を強引に狂化された式神は、ワタシ達との格の違いを一瞬で感じ取った。

でも命令は破壊。

結果式神は従うはずの使役主を破壊し尽くしたの。

（本当はワタシが狂化と従属を打ち消しただけ。派手な儀式の割にはあまりに稚拙な術式でした。）

そして男の絶命と同時に結界も式神も消滅。

消え逝く式神が意思の戻った眼差しをこちらに向けたのが、今でも印象に残っているわ。

（びっくもふもふでした。時間があれば思う存分撫で回したのになー。）

でもそうになると千雨を生き長らえさせていた陣も消滅したのよ。

ワタシ達は急いで緊急用に持ち歩いていた延命結界道具を発動したわ。

（この時点では見知らぬ他人。別に放って帰ってもよかったんですけどね）

そして近衛学園長へと連絡を試みた。

何度か試したけれど、繋がらなかったわ。

だからワタシは決断したの。

千雨の魂と記憶を、所持していた自前の従者用義体に移し、肉体は封印することにしたわ。

（なにせあまりにも都合がよかったんです。目の前で死に逝く少女。近衛学園長には連絡不通。そしてワタシはこんなコトもあればと、完成以来従者用義体を携帯していたんです。）

そして後に肉体の補修を行うつもりだった。

その場ではそれ以上のコトをするにはあまりに不確定要素が多すぎたもの。

上手くいけば、元の肉体に戻ることも出来るでしょう。

最悪、人間に極力近い肉体を近衛学園長に用意させるつもりだったわ。

（とはいえ無理に従者にするつもりはありませんでした。本人が嫌がるなら元に戻すつもりでした。このトキはまだ。）

ワタシ達はすぐさま行動を開始したわ。

半ば肉体と解離していた魂を、記憶を僅かにも漏らさずに義体へ移したわ。

（実はコレそんな簡単になんてコトは有り得ない、とてつもない儀式なんです、ワタシにはよゆー。）

この時点で千雨は意識をうつすら取り戻していたそうよ。

まだ定着が完全ではなかったからか、ワタシの肩越しにモノを見ていたらしいわ。

（ホントはわざとです。千雨ちゃんにはキチンと考えて今後を決めて欲しかったから。）

そして肉体に封印を施そうと道具を準備し終えて発動を始めている最中、彼等が来たわ。

結界が解け、強大な式神が消えた。

さらに魔法道具頼りとはいえ、魂移しの儀式も行われたその場所を、流石に感知出来ないほど落ちぶれてはいなかったようね。

（魂移しは完全自力、さらに秘匿でやったので、実は結界と式神の

消滅を感知したらしいです。」

そこにいる高畑くんが複数の魔法使いを従えて駆け付けたわ。

高畑くんはワタシ達と状況を確認するやいなや、ご自慢の居合い拳を放ったわ。

ワタシの封印へ。

（問答無用でした。ホント何考えてるんでしょう。まあ彼等の選択なので、防がずスルーしました。繰返しますが、この段階ではまだ千雨ちゃんは他人だったのです。）

彼には気付けなかったんでしょうね。

その封印が千雨の肉体をぎりぎり繋ぎ止めていたコトに。

いいえ、もしかしたら千雨を解放するために放ったのかもしれないわね。

封印ではなく、儀式の真っ最中だとも思ったのかしら。

とにかく所詮道具、しかも緊急治療用の封印なんて防御力なんて無いわ。

封印はあまりにあっさり破壊され、その居合い拳はぎりぎりの肉体に止めをさした。

本当にぎりぎりの肉体はあっさり死んだわ。

彼が、高畑くんが殺したのよ。

話しはまだまだ終わりません。

その晩に起きていたコト。

正義かぶれ達の思惑。

千雨ちゃんの真実。

千雨ちゃんの手をぎゅっ、と握る。

千雨ちゃん、大好きです。

だから全部暴いて、そして言い切ってしましましょう。

千雨ちゃんはワタシの従者。

それ以外にはないんだって。

ちよっ!?! やんっ!?!

くすぐったいですキティ!?!

ええ? ここで嫉妬!?!

いや、キティのコトこれ以上なく愛していますから!!

今(多分)シリアスなんですってば!!

第11話 ワタシ達とアイツラ その4＊（後書き）

第11話更新。

grand病原です、こんばんわ。

グロテスク表現注意でした。

一応なるべく控え目にしたつもりです。

苦手だった皆さんはごめんなさい。

話しは相変わらず続きます。

長いですね、どうしよう…

でも続けるしか…

千雨はまだまだ酷い目にあっていたコトが発覚していきます。

あ、grand病原は千雨好きですからね？

ホントですよ？

ちょっと遅れてしまつて、後半駆け足でした。

ごめんなさい。

明日からはもっとがんばります！！

ではgrand病原でした
おやすみなさい

第12話 ワタシ達とアイツラ その5

「貴様……!! ふざけた事を!!」

…ふっ…くっ、ふふ……くうっ…

「待つんじゃ!! ……皆もじゃ、最後まで聞きなさい。もし彼女が間違いを言うたなら、わしと高畑くんがきちんと訂正する。のう?」

…ん!! ……くっ、くう…

「はい…。彼女が言ったことは事実です。あの晩は、2年前の麻帆良大侵攻の晩だったんです。」

…って!? ふえ!? 千雨ちゃんまで!? ……やん!?! …

「ご存知の通りあの日は麻帆良結界の外部からの侵攻と、内部からの異質な召喚が同時に起きていました。僕は結界内部に多数出現した召喚陣を破壊するために行動して…。そして千雨くんの事件が起きてしまったんです」

……もうむり!!

キティ、千雨ちゃんもうむりです!!

「ならば!! それは高畑先生に非はないでしょう!! あの事件の被害が抑えられたのは、麻帆良中の侵入者どもを制圧した高畑先生の功労だと聞き及んでいます!! そもそも生け贄にされた子供たちは、実に口惜しいが誰も助かっていない…。長谷川の事も同様だったはずです。貴方は正義の魔法使いとして寧ろ立派だった!!」

2人でふくらはぎくすぐらないでー!?!?
わ、笑っちゃうー!!

「うむ、わしも高畑くんを処罰しようとは思わなんだ。先の功労者でもあるしの。だが、事態はまだ続きがあったんじゃ。緒々嶋くん、頼めるかの」

…ふぁ…お、終わり?

くすぐりたいむ終わり?

…ああ、ワタシに話が振られたからですか。

「…………ええ。なら、続けるわ。質問は後にまわしなさいね」

…ふいー、しかし助かりましたね。

キティと千雨ちゃんにくすぐられて、会談真っ最中に笑い転げるトコロだったチート美少女汀です。

流石にもうダメかと…。

キティもー、それに千雨ちゃんまで!!

後でひどいですよー!!

まあその後はの展開は早かったわね。

なにせすぐに近衛学園長から指示が来たのよ。

(遠見の魔法でチェックですね。タカミチくんが来る少し前から感知していましたよ。)

ワタシ達は学園長室へ出頭。

高畑くんは遊撃を続行。

連れ立って来た魔法使いがその場の処理を任されたわ。

（吹き飛んだ千雨ちゃんを見たタカミチくんは、ワタシを相当睨んでましたよ。なんのつもりですかね。）

ああ、麻帆良大侵攻の方はこの後の高畑くんや魔法使い達が、なんとか押し止めたらしいわね。

事件の解決までワタシ達は学園長室で待機していたわよ。

明け方までずっとよ？

（もちろんこの間に千雨ちゃんと状況の確認をしました。完全でない魂移し状態の千雨ちゃんは心の起伏がある程度抑制されていました。そのおかげで自身の現状を受け入れられたようです。身体出来てからは暫く大変でしたけれど。）

その後、戻った近衛学園長にワタシ達はコトの顛末を説明したわ。

そして千雨の身元の調査を大至急依頼した。

このトキの千雨は不安定で、義体の製作者であるワタシが慎重に扱わないといけなかったの。

そして千雨の調整の為に、可能な限りの情報を必要としていた。

（本人との意志疎通が取れていたので、ホントは不要でしたが、彼女の中には普通ではない力があったので都合がよかったんです。）

それを踏まえて、ワタシ達は千雨と共に帰宅する旨を伝えたわ。

すると近衛学園長は暫く悩んだ後に、許可を出したわね。

そうしてその日は終わった。

でも、千雨の問題は次々に露見したわ。

ある程度安定した本人からワタシが知った限りを学園側へ伝え、そうして始まった調査は出足から躓いたのよ。

長谷川家の夫妻は千雨の、そもそも子供の存在を否定したの。

お察し通り魔法による記憶処理が行われていたわ。

でもね、恐らく貴方達の予想の逆ね。

長谷川夫妻は“千雨という名前の子供を育てる”と記憶処理されていたの。

いえ、意識処理かしら？

とにかく、恐らく術者が死んだせいでその効果が切れ、夫妻にはなかったコトになったの。

千雨という存在自体がね。

（千雨ちゃんをチラリと見ます。うん、大丈夫ですね。）

魔法による処理の内容がおかしい？

いえ、多分これが妥当なのよ。

夫妻が行ってきたのは、単なる育児ね。

本来の意味ではない、子供を育てる、って言葉そのまま最低限の行動だったの。

千雨の言では、何もなかった、そうよ。

確かに育てられたけれど、会話は必要性のあるもののみ。

邪険にはされなくても必要ともされない。

与えられる物も必要十分だけれど、過剰や娯楽用は一切なし。

完全に事務的な関係だったそうよ。

調べると、千雨には何故か部屋が与えられず、リビングの片隅にあるカラーボックスが彼女のスペースだったらしいわ。

異質な魔法による処理は、家族に正しい関係を作らせず、ある種の異様な空間での生活を強いていたって訳ね。

これでは、家族感情もなにもあったものではないわ。

（千雨ちゃんに聞いていたけれど、あまりに異常です。彼女の“認識”があったとはいえ、それでも。）

さらに、これは千雨だけの問題ではなかったの。

各学園などの出欠状況から判断された、麻帆良大侵攻での被害者。

その中でも生け贄にされたと予想される子供の親は、例外なくその存在を否定したわ。

千雨も含め、子供用の家財道具があったにも関わらずね。記録と証言では赤ん坊の頃から各家庭にいたはずなのに。これはとてつもない事態だわ。

10年近くものあいだ、十数組の偽物の家族がこの麻帆良に存在していたの。

調査の結果、犠牲者の子供達はどの夫妻とも血縁関係がないことも判明したそうよ。

もちろん千雨もね。

（だから千雨はもう長谷川を名乗らないのです。育てられた感謝はある、でもやっぱり家族とは思えないそうです。千雨の“認識”は歪な家庭を誤魔化すコトも許さなかった。物思いがつく頃からずっと、心が他人だと判断していたそうです。でも今はワタシ達がいます！！大好きですよ千雨ちゃん。）

何者かが麻帆良に住む罪もない夫妻に魔法による処理を行い、誰とも知れない子供を育てさせたのね。

恐らく、麻帆良大侵攻のためだけに。

そして、それをしたのが例の召喚者たち。

麻帆良結界の内部で一斉に召喚を行った者達よ。

彼等は、この麻帆良に魔法先生として長年在籍している魔法使いだったの。

捕縛された者は例外なく自害、他は皆死亡したけれど、状況証拠からいって間違いないそうよ。

（実は証拠があったそうですが、極秘とされています。）

彼等は随分と地味で勤勉な魔法先生だったらしいわ。

貴方達が不得意な事務仕事、書類仕事を率先してこなし、数人はそれなりの立場もあったようね。

子供達を紛れ込まされて、気付きも出来なかった訳だわ。

何故彼等がこんな微妙な操作で子供達を紛れ込ませたのかはわからない。

でもコレで千雨に、子供達に帰る場所がないコトはわかったでしょ

う？

ワタシは決して短くない時間を千雨と過ごし、話し合っただけ彼女を従者にすると決めたわ。

千雨だってもちろん自分の意思でそれを選択した。何度も言わせないで。

千雨は不朽不滅の魔女トバリの従者なの。

千雨はワタシのものよ。

（そう、ワタシは千雨ちゃんを愛しています。）

どう、わかったかしら？

実はまだ言っていないコトがいくらか存在します。

今この場で話すと、多分ギャーギャーと喚く連中がいるだろうから割愛しました。

近衛学園長とタカミチくんは認識していますけど、彼等も同じ判断でしょう。

これ以上騒がれるとかホントかんべん！。

1つは千雨ちゃん達、生け贄の子供は力のある血筋だったであろうコトです。

生け贄に相応しい血筋の子供だったから、わざわざ外部から紛れ込

ませたのでしょうか。

事実、千雨ちゃんには精神操作、干渉に対する異常な耐性があります。

ワタシが魂移しの際に感じた力はコレです。

そして千雨ちゃんに興味を持ち、従者へと持ち掛けた最初の理由も。

あ、今は千雨ちゃん丸ごと愛してますからね。

良く考えたら魔法とかで操作、干渉されない程度ワタシ達では当然ですし。

千雨ちゃんのも従者化で、ばーじょんあっぷの完全無効化になります。

千雨ちゃんかけーひゅー。

ふふーふ、らぶだよー。

で、恐らく他の子供達にもなんらかがあったのでしょうか。

そしてもう1つ。

麻帆良大侵攻が規模に反してあまりに低被害だったコトの要因。

それが千雨ちゃんが存在が切っ掛けであるコトです。

千雨ちゃんのあまりにも強い精神干渉耐性は、麻帆良大結界の効果の1つである“認識阻害”を無効化していました。

この認識阻害とは、麻帆良学園都市内に存在する本来は異常な、異質なモノに対して「麻帆良ならあり得る、当然だ」と認識させるものです。

それが千雨ちゃんには、ほぼ効かなかった。

世界樹、図書館島、学園内の科学技術。

住民達の突き抜けた能力に、アンバランスな精神面。

欠けすぎている危機意識や安全配慮。

そして異常に軽いノリ。

そもそもの学園都市の規模も異常です。

コレ等を正しく異常と認識した千雨ちゃんでしたが、麻帆良に於いてはむしろソレが平常なのです。

ワタシ達が麻帆良に馴染めるハズもないのは、その認識阻害が微塵も作用しないからです。

魔女だったり吸血鬼だったり、その従者だったりしますけれど。

女の子どうして愛しあっていますけれど。

キティ、千雨ちゃん、茶々丸ちゃん、らぶー！！

それらが現代の世間的にどうなのかも含めてキチンと常識、把握していますから。

長生きし過ぎると、世界に紛れ込むのにも気を使うんですよ。

で、麻帆良はその常識の把握すら…ですからね。

会話自体の成立が危ぶまれるくらいですもん。

話を戻しますね。

異常に悩み、訴えるほど千雨ちゃんは孤立していきました。

家族は問題外。

学園のクラスメイトも先生も、近所の住民も、みんな千雨ちゃんこそが異常で異質と非難しました。

そしてその環境は端から見れば異常でしたが、一般人には当然気付けません。

気付いたのは魔法使い達でした。

千雨ちゃんの所属していた学校の魔法先生ではなく、広域指導員と呼ばれる魔法使いが彼女を不審に思ったのです。

報告を受けた近衛学園長は、監視と調査を命じました。

彼女のそれは、この麻帆良に於いて異常過ぎたのですから。

すると千雨ちゃん一家の不自然な生活が浮かび上がりました。

調べればあっさりと判明する、人為的な家庭。

これまで気付けなかったのは、邪魔があったから。

明らかな黒幕が存在していたのです。

もちろん黒幕とは麻帆良大侵攻での召喚者です。

裏切者、いえ恐らく潜入工作員達です。

関東魔法協会は事態を重く見ていました。

千雨ちゃん一家への干渉を控え、監視、調査を進めるコトにしたのです。

学園都市の責任者として、これは正しい判断なのかもしれません。

ですが、この判断が生け贄の子供達を喪う結果をもたらしたのです。

慎重な調査により、大侵攻の日取りまでを掴んだ学園側でしたが、黒幕の全貌も、千雨ちゃんの、子供達の役割を知るコトも出来なかったのですから。

結果、生け贄の子供達と引き換えに、麻帆良大侵攻に対する準備が整った訳です。

ただ、結界内部の召喚に対しては後手にまわり、幾らかの被害を出しました。

そして彼等はその被害を“尊い犠牲”と呼ぶのです。

ワタシの肩越しに説明を聞いていた千雨ちゃんの目の前で“正義は下された”と声だけに。

呆れます。

しかもまだまだ叩けば埃はでますよ。

近衛学園長が千雨ちゃんの調査を命じた相手は黒幕の一人で、進捗なんか全然なかったりですか。

でも、コレが重要だったんですね。

大侵攻の日取りは、不慮の事故で入院したその調査役の持ち物から偶然入手したですか。

どうやら無茶な指示で忙しかったみたいです。

でも、それを入手したのは大侵攻の直前で、慌てて準備したせいで、千雨ちゃん達の拉致を完全に見過ごしたりですか。

千雨ちゃんすら呆れていましたからね。

はぁー、喉かわきました。
外交モードも大変です。

お茶、お茶、って両手塞がってますよー？

あの一、キティ？

あ、ダメですか。

むう、そんなかわいい顔しないでー。

離しません、離したりしませんからー！！

ほらほらぎゅー！！

で、その、千雨ちゃん？

あ、嘘ですウソ。

え？ いや口移しは今はむりー。

後でしましょう？

ね？ぎゅっ！！どうだー。

のどかわいたなあー。

ああ、だから口移しは後でー！！

第12話 ワタシ達とアイツラ その5（後書き）

第12話更新。

こんばんわ、grand病原です。

ながい…

我ながら驚くほどながい…

そして読みにくいですね…

赤○ン先生添削してください…

千雨捏造は実に熱が入ります。

コレ、茶々丸捏造のトキは大丈夫なんでしょうか？

うん、後ろ向きでもアレですので、次回の話してもしますね。

いい加減に読みにくい独白風はおしまいです。

イチャコラ足りませんしね。

学園長の前でイチャコラする…の？

ううむ…むつかしいです。

でもかんばります！！

少し前にタグを微妙に入れ換えてから、アクセス増加がとてつごいんですよ。

読んでくれた皆さんに、楽しんでいただけているのなら、とてもとてもうれしいです。

どうぞこれからも読んであげてください。

皆さんありがとうございます！！

感想に関してはg r a n d病原の活動報告にてお礼申し上げております。

ちよつと長いので。

そちらもどうぞ。

ではg r a n d病原でした
おやすみなさい

第13話 会談中だけど回想 その1＊

……足、崩していいですか？

「……学園長、高畑先生、否定は…:されないのですか。我々が知り得ていたものとはあまりにも…。何故隠されていたのですか!？」

こーきゅーわしつ、に相応しく、なんとなく正座していたんですけれど…

そろそろ崩していいですか？

「…わしらは事態を重く受け止める事にしてのう。主犯格は皆死に、事件は終わったと判断された。情報漏洩を危惧し、極一部のみが真相を知る事となったんじゃない」

なんて言うのでしょうか…

温度差？

「我々は…裏切者の死を悼んでいたのか…」

彼等は彼等で一生懸命なんですよ？

ワタシにもちゃんとわかってまいます。

でもなー。

千雨ちゃんが乗り越えている以上、もういいかなあ…って。

「お話しを邪魔するようで悪いけれど、そろそろサウザンドマスタ一の映像記録証文の確認でもしましょうか。貴方達の事情も察するけれど、ワタシ達の前では話せないコト多いでしょう？まずは会談

を済ませてしましましょうよ」

もうめんどくさい。

はやくかえりたい。

早く千雨ちゃんとイチャコラしたい、チート美少女汀です。

「…うむ、皆もすぐには受け入れられんじやろうしのう。休憩でも挟みたいところじゃが…そうじゃの、そうしようかの」

近衛学園長も察し悪くないですね。

さっさと確認するだけ確認させて取り敢えず解散しましょう、な流れを作り始めました。

眼がね、彼の眼だけが辛そうでもなんでもないですもん。

真横でタカミチくんが自責に顔しかめてますけど。

「茶々丸、お願い」

ワタシいま両手に華状態継続中。

愛しいワタシだけの華。

ふふーふ、らぶー。

あ、茶々丸ちゃん後ろに置いたポーチに入ってますよ。

うん、それです。

ありがとう、あとでいっぱいお礼しますよ。

いっぱい、ね。

「此方のはここにあるぞい」

15cm四方の金属のプレート。

描かれた魔方陣を、ぴったり半分になるように分割されています。それを合わせるコトで、サウザンドマスターがぼっぷあっぷ。ワタシに強制された証言を喋り出します。

「よう、ナギ・スプリングフィールドだ…」

コレ作ってからもう15年ですかあ…

家族も増えたし、研究も進んだし、案外ココへ来たのも間違いではなかったみたいですな。

思い出すなあ…

まだキティとチャチャゼロの3人だった頃…

ぶらぶらぶらぶら3桁年。

東に竜が暴れば張り飛ばしに行き。

西に珍しい鉱石があれば掘り出しに行き。

世界を渡り歩いて西に東に。

旧世界に評判のケーキがあれば食べに行き。

魔法世界に話題の料理があれば食べに行き。

世界を跨いで北に南に。

世界間すら散歩道、チート美少女トバリです。

東の竜、微妙でしたね。

ワタシが近づくだけで、冷たい雨に濡れた子犬みたくなっちゃうんです。

逃げれもせずぶるぶると。

ある意味かわいい？

西の鉱石も、無駄足でした。

手持ちの宝石のがずっと希少だったみたいです。

最近の鉱山はまったく：

ケーキと料理？

あ、もちろん食べ専門です。

うん、美味しかったです！！

「で、結局この街に来たばかりなのに、アリアドネーへ行きたがる理由はなんなんだ？私が納得出来るような話なんだろう？」

あ、紹介が遅れました。

彼女はワタシのハニーです。

てへり、言っちゃった言っちゃった！！

名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

ミドルネームはアタナシア・キティ。

キティって呼べるのはワタシだけの特権。

真祖の吸血鬼。

不老不死の大魔法使い。

そしてワタシの奥さん。

そしてワタシの奥さん!!

大事だから2度言いました。

そうです!!

ワタシ達は愛し合っています!!

キティ、らぶー!!

「……アイスを食べたら、アリアドネーのクレープっぽい食べたくなった!!」

「うろ覚えじゃないか!! おい、本気か? ……はあ、面倒だしさつさと転移でも……」

キティやさしい!!

じゃあ手を繋いで……っ!!

「まってキティ!! あの店見てよ!!」

がつつりと、どさくさ紛れに腕を組んで引き止めます。

キティぷにぷにすべすべー。

ワタシの自慢の美肌に勝るとも劣りませんね!!

ついすりすりー。

「……っと、魔法薬の店か? 中途半端な店構えだし明らかにたいした事ないように……」

「カップルパフェだって!! キャンペーン中で、食べさせ合ってる
ところ魔法写真にしてくれるみたいだよ!!」

魔法写真とはアレです、立体に浮き上がる映像的な写真。
キティと食べさせ合ってる写真欲しい!!

「恥ずかしいわ!!……今度、2人だけで食べている時になら、
写真くらいいくらだって撮ってやるからここでは諦めろ」

ちえー。

でもいいです、ほった赤らめたキティって、すごいかわいいし
!!

でも言質は取りましたよ。

「ちえー……きつとだよ? ね、腕このままでいい?」

「……ああ。もうすっかり慣らされたからな、今では組んでいたほう
が落ち着くくらいだ。それにお前は少し眼を離すと、すぐにどこぞ
の男に声かけられてるからな」

ふふーふ、絶対について行ったりしないって分かってるくせに。

キティが大好きなんですよ?

行く訳ないよー。

「2人でいたって、しょっちゅうナンパされるじゃん」

「……私の眼の付く場所にいろと言ってるんだ。離れるなよ汀、お
前は私のものだ」

っ！！

うれしすぎます！！

最近（数百年単位）のキティは、少し照れながらも、きちんと言葉にしてくれます！！

「……はい、キティ。ワタシはキティのものです。愛してます」

「ああ、そして私は汀のものだ。愛している」

ああ、なんてしあわせ。

世界ってこんなに素敵。

キティとなら何百年でも何億年でも生きていきます！！
らぶー！！

転移で裏路地に飛び、幻術を解きます。

「ねえキティ、今しあわせ？ワタシはすっごいしあわせ。産まれてきてよかった。魔女でよかった。キティと出会えて、愛し合えてよかった。キティと共に生きるコトがワタシのしあわせだよ」

キティの潤んだ瞳を覗き込みます。

間違いなくワタシも同じ瞳をしている。

「ああ、しあわせだ。自分でも驚くほどしあわせだ。産まれてきてよかった。吸血鬼にされてよかった。汀と出会って、愛し合ってよかった。あの地獄の日々も、汀と共に生きるためならと思えばなんて事なかった。心からそう思う」

「愛してます」

「愛している」

……っん……

「……ねえキティ、今晚はちよつといいホテルに泊まろうよ？ 着いたばかりだし、いきなり襲われたりはないと思うし」

ワタシ達って実は賞金首なんですよ。

2人とも500万ドルの。

まあ基本的に好き勝手して生きていますからね。

あとワタシは不朽不滅で、キティは不老不死ですから。
権力者がいかにも欲しがりそうですね。

街中ではちゃんと幻術を使って変装してますよ。

キティは変装しても美人！！

ワタシも当然美人ですよ！！

念入りに念入りに幻術を使っていますから。

「……ふ。それは泊まるって言えるのか？ なぁ汀？ 私は寝かせてもらえるのか？ どうなんだ、ほら言ってみろ？」

もちろんですよ！！

「吸血鬼は夜が本番！！」

「お前は魔女だろうが……いや、魔女も夜が本分か？」

「んー…？ キティと一緒にコトにしとくよ」

……でも結局どうなんでしょ？

ワタシってホントは睡眠とか必要ないんですね。

でもまあ、毎日キティをだっこしながら寝てるけど。

だって、おやすみキティすごい愛くるしすぎるんですもん！！

「……ん、まあいいか。だがな、久しぶりに拠点を用意するんだろ？使った分は稼ぐぞ。私も色々研究したいしな。まずは先立つものだ」

そうなんですよね。

やっぱり色々好きにやるにもお金は必要ですし。

拠点を増えたいですし、そろそろワタシ用のちゃんと働く従者も造りたいです。

……皮が高く売れるって言ってあったのに、戦闘に夢中になって全身ズタズタにするような従者はいない。

「だよね。錦竜を狩っちゃったのも近いうちに露見するだろうし、今夜目一杯楽しんだら明日から派手に稼ごうよ。チマチマせずに、連中が来る前にかつりさ！！」

「そうだな。ならまず今夜の目一杯だな…」

幻術を解いたキティはワタシより頭1つ分弱ちっさいのです。

ワタシ達はもう体つきに変化はないから、これからもずっとこの構図です。

キティの瞳に吸い込まれるように、ゆっくり顔を寄せます。

…ちゅっ…ちゅっ…ちゅっ…ちゅっ…

ひたい、まぶた、はな、ほほ、ちゅーを落としながら少しずつお互いの唇が近寄っていきます。

…っん…ちゅっ…ちゅむ…ふちゅ…

キティ、ワタシだけのキティ。

愛しています。

この愛が質量を持ったなら、世界なんか簡単に埋め尽くすでしょう。総てを埋め尽くし、押し潰し、消し去り、世界を2人だけのものにするでしょう。

魂で繋がったキティにはそれが伝わっています。

そしてワタシには、キティ胸のうかが伝わる。

その愛が質量を持ったなら、世界なんか簡単に押し流すでしょう。総てを押し流し、磨り潰し、飲み干し、世界を2人だけのものにするでしょう。

狂おしい程の愛で。

いえ、既にワタシ達は愛に狂っているのです。

キティから伝わるそれも、ワタシから伝わるそれも。

自らを押し潰し、自らを押し流したのですから。

「あの……よ。無粋なのは分かってるんだが、ちょっといいか？…
つか、確かに裏路地だけど街中だぜ？あとその足下のガムテープ
でぐるぐるな人形はなんだ？」

……誰ですかこの赤毛。

第13話 会談中だけど回想 その1＊（後書き）

第13話更新。

こんばんわ、grand病原です。

遅くなってしまつてごめんなさい。

唐突にエヴァのイチャコラ回です。

汀達が麻帆良に来ることになった経緯を、回想としてお届けします。
ナギさん微妙すぎる初登場。

次回は戦うけど…あっさりです。

てか一瞬？

チート美少女はバトルに興味ないんです。

感想枠にて質問とご意見が来しました。

- ・第12話内にあった“正義の魔法使い”とはなんなのか。
 - ・説明不足の汀一家と、麻帆良勢との対立は現状当然だろう。
- です

まず正義の魔法使いについて。

コレは本作品内の対比表現です。

本作品のエヴァは“悪”を自称しません。

汀の影響で、善悪というある種の枠組みに、拘りを持たなくなったからです。

当然、汀も千雨も茶々丸もチャチャゼロも、善だの悪だのとか言いません。

彼女達、てか汀は好き勝手しているだけで“良いコト、悪いコト”なんて考えてませんからね。

ですがそうなる、汀一家と、学園勢を含めたネギ組との対立が表裏的に弛くなります。

ですので彼らには“正義の魔法使い”を自称してもらい、汀一家との対立を明らかにしていくつもりです。

“正義の魔法使い”とは、なにか特別な存在を示す言葉ではなく、学園勢やネギが単に自称する時に使う程度と認識してください。

次に麻帆良勢との対立について。

汀は麻帆良の魔法使いをなんとも思っていないません。

たまに愚痴っているのは、真夏にセミが五月蠅いなあ…、とかそんなのと同レベルの愚痴です。

五月蠅くても、セミを説得して黙ってもらおうとも思わないし、全部殺し尽くそうとも思わないのです。

「麻帆良の地は魔法使いが五月蠅いよね」と、そんな風物詩的な捉え方をしています。

仲良くなる気が欠片もないので、対立は当然です。

説明とかもする気がないですし。

面倒になったら彼女達は麻帆良から去ればいいだけですからね。

コンビニとかあるし、一応拠点も認められてるし。

便利だから五月蠅過ぎないならいる、程度です。

こんなところでしょうか？

今後もご質問等ありましたら、お気軽にどうぞ。

では、g r a n d病原でした
おやすみなさい

第14話 会談中だけど回想 その2

裏路地でキティとイチャコラしていたら、見知らぬ赤毛の青年に声をかけられました。

……なんのつもりでしょう？

2人だけの甘々時空を、十分に展開していたと思うんですが……このタイミングで乱入するなんて、よっぽどの強度を持った人物のようです。

空気読めない系？唯我独尊系？どちらにしろ、金属たわしのような神経の持ち主でしょうね。

なんか纏う雰囲気もそんな感じを醸し出してます。

こう……まるで狙ったように失言を繰り返すラブコメ体質的な？

「…………しっしっ」

キティを抱き締めたまま、左手だけでこちらの意向を伝えてやりました。

ワタシは今、キティとのイチャコラに夢中なんですよ。

他のコトは後回し後回し。

「わりいけど話し聞かない訳にもいかねーんだ。今、短距離だったけど街中で転移したよな？ここじゃ転移阻害があんだぜ？なあアンタら、もしかして魔女と吸血鬼のコンビであってるか？」

……………はあ。

ついてないです。

背後から射たれてないトコロをみるに、面倒事へ巻き込まれそうなチート美少女汀です。

射ってくれたほうが解決早くて結果的に楽なんですよ。
すぐに反撃、はいさようならですから。

ふふーふ、魔女ですからねー。
敵に容赦はしません。

「ねえ、どうしようか。随分と図太い赤色デバガメがにじり寄って来てるよ」

ニヤニヤしながらキティに問いかけてみます。

……キティもワタシの意を察してくれたようです。

「ほう…見た目では珍しい種族ではないようだが、随分と特殊な嗜好を持った個体のようなな」

「だよねだよね。ワタシ達から声もかけてないのに、自発的に迫ってくる相手って、いつもそうだもんね」

「あ、いや誤…」

「ああ、ヤツの目線が煩わしくて堪らん。初対面の相手を、まるで

舐め回すようにじっとりと凝視するなど常軌を逸しているな」

「おいっ!!」

お、赤毛もノって来ましたね。

「きゃあ!! 第2形態だ!! あかげ は おおごえ で いかく している!!」

「まずい、まずいぞ。ヤツは日中の街中でも本性をさらけ出し始めた。気を付けろ、いつ飛びかかってくるかわからんからな」

「ぐっ…こんなヤツらだったのか…。ジジイ、扱いに注意ってこう言う事かよ…。いや、もしかして人違いか？」

おや？

ジジイさんとやらの依頼でも受けての行動のようですね。でもとりあえずぞっこー。

「うわ、こわあ……。ぶつぶつとなんか唱え始めたよ。変身の呪文？や、変態の呪文!？」

「いや待て、その言い方では分かりにくい。ヤツがこれから呪文で本性をさらし、変態に変身するのか？それとも変態であるヤツが小声で卑猥なコトを口走っているだけなのか？あるいはその全てか？」

あ、びくびくしてます。

こめかみとかびくびくしてます、堪えてるんですね。
ふふーふ、あまいあまい。

「やっぱり全部じゃない？本性をさらして変態に変身するために、小声で卑猥なコトを口走っててるんじゃない？……聞いてみよっか？」

「おい止めておけ、危険だぞ。ヤツは今、偽りの赤毛を脱ぎ捨て真なる変態に戻ろうとしているんだ。下手に声をかけて阻害されたら、中途半端に赤毛を抜け散らす結果になってしまうかもしれない」

「そっかそうだね。彼も厚手のフード付きローブとか着てるあたり、世間様に顔向け出来ない自覚あるんだもんね。これ以上人前に出られない面構えになっちゃったら、もう普段から本性を隠さなくなっちゃうだろしね」

「ああ、先程までも隠していたつもりだったのだろうが、その陰湿で卑猥で汚濁した眼差しは寧ろ際立っていた。フードはその自覚があるからだろう。ヤツが素顔で声をかけてきたのは、最初から私達を標的にして来ていたからだ。赤毛の皮を被っているのは、唯一残った理性なんだ。それを奪うなんて後々の被害が知れないぞ」

「でも今まさにワタシ達が危機に直面してるよ。ほら見て変にふるふるしてる。もしかして人の形を維持するのが、もう限界なんじゃない？あのローブの下、実は不定形だったり、によろによろのうねうねだったりするんじゃない？」

「ああ成程確かに。何やら先程から袖口やら足元やらがはためいていたのは、本体の触手？が我慢仕切れなかったからなのか。おい冗談じゃないぞ、赤毛という理性の皮を被った変質者ならギリギリ最低人間種だが、触手の先に赤毛を生やして人に化ける不定形生物なんておぞましいにも程があるぞ」

どがん!!…ぱらぱら…

いえーい、ふいつしゅ!!

赤毛が横にあった木箱を破壊しました。

我慢の限度だったんですね。

でもまだ、いいたりないぞー。

「……だあー!!こつちが黙ってりや次から次へと!!誰が変態だ!!オレはナ……」

「ぎゃあああー!!いやあああー!!助けて!!誰か助けてえええ!!」

「誰か!?変質者だ!!誰かいないか!!」

……おい聞こえたか?この奥だ!!……

……破壊音と女の子の悲鳴だった!!……

……お前は警備団に連絡しろ!!急ぐぞ!!……

「…テメェら…つどわ!?なんだあ…?」

ふふーふ、怒れる赤毛の顔にプシュッ、つとな。

魔法道具『コツチだ鬼さんハイパー』です。

説明しよう!!

『コッチだ鬼さん』とは、近年アリアドネーで開発された魔法道具である。

口紅程のサイズの噴射式容器から特殊な魔法薬を射出。

直接散布された対象に、追跡用のマーキングを施す魔法道具である。マーキングは対象の魔力を極僅かに吸い取り続け、空中に蛍光色の動線を描き続ける。

描かれた動線は空間に静止し続け、また何物にも影響されないため追跡が非常に容易である。

性質上、使用の際には対象の皮膚に直接散布することが相応しい。

ノーマル、ハイパー、軍用の3種類があり、それぞれ発色と効果時間が異なる。

左から順に強力になり、軍用は最早対象に魔力的な障害すら引き起こすため、一般には流通していない。

効果時間中に作用を打ち消すことは不可能なため、ご使用の際には用法、用量を守ってただしくお使いください。

余談だが、製作者はアリアドネー外部開発者部門所属“まじかる美女とぼりん”である。

本製品は製作者以外での生産が不可能であるため、需要に対して供給が及ばない事態に対しここにお詫び申し上げます。

現在アリアドネーでは、製作者の“まじかる美女とぼりん”を探しています。

情報をお持ちの方は、アリアドネーまで御一報ください。

とりあえず普段より幼めに幻術っと。

「逃げなくていいんですか？こんな少女に暴力で迫った不定形生物さん？すぐに人が集まりますよ？」

「だな。こいつの演技はちょっとしたものだぞ。一瞬で貴様が変質者だと断定されるな」

ふあ…

幻術でいつもよりちみっこいキティかわいいー。
ぎゅーしたいなあ…

「マジかよ！？冗談じゃ……」

……いたぞあこそだ！！……

「くそっ！！」

おー、なかなかの瞬動です。
眼が覚めるような、蛍光ピンクのラインが一瞬で。
ワレながらい仕事です。

「キティ！！すごいすごいかわいいよそれ！！……じゃなくて、
どうする？とりあえず来た人全員で赤毛を追わせる？」

おさなキティをぎゅー!!
事情聴取とかめんどくさいですもんね

「うぷ……ほら人が来るぞ、放せ。面倒はごめんだからそれでいいさ。……いや、手まで放さなくていいだろ……」

ふふーふ、かわいいなあもう!!

この場面ならぎゅーしてても平気だと思うけどね。

じゃあ、おてて繋いでつと。

さて、善意の市民さんには追跡をお願いしましょうか。

「君たち!! 大丈夫か!？」

来た来た。

じゃ、かるーくせんのー。

「あ、ありがとう!! 凄く怖かったよう……。あのね、貴方達が来たら変なお兄さんは逃げちゃったの。『コッチだ鬼さん』かけたから、全員で行って。彼は幼女に力づくで迫った変質者だから、絶対に捕まえて!!」

泣きまねとかしなくても、多少の疑問があってもワタシのせんのーには逆らえまい。

ふふーふ。

「……許せん!! お嬢ちゃん達、俺らに任せな!! 変質者なんかすぐブタ箱入りにしてやるよ!! 行くぜみんな!!」

「「……おう!!」」

みんな飛び出して行きましたね。

じゃあ、おねがいしまーす。

『コッチだ鬼さんハイパー』が切れる頃にはせんのも程よくゆるまってるから安心ですよ。

がんばれー、やっつけろー。

変質者をゆるすなー。

彼が誰だか知らないけど、まあいいでしょ。

ジジイさんとやらの依頼らしいし、また来るでしょうか？

まあ逃げ切れたら、ですね。

ワタシのせんのは感染するから、逃げれば逃げる程追跡者が増えていくぞー。

ワタシ達のイチャコラを邪魔するからですよーだ。

「じゃ、キティ行こう？ね、さっきも言ったけどその幻術すごいかわいいよ！！ワタシが大人役するから、チェックインまではそれでいてよ」

「とっさに汀と合わせたつもりだったが、そんなに言うほどか？…
…まあ嬉しくはあるが」

照れキティぎゅー！！

はーなーさーなーいーぞー!!

幻術で姿を大人にして、キティを抱き上げます。
親子に見えるかな？

ならちゅーしても平気だよね。

……っん…っちゅ…ちゅっ……

「ぷっ…わぶ…なんだ、子供相手のように……ああ、なるほどな、
母様とでも呼ぶか？」

顔中にちゅーしてたら、キティも察したみたいです。

「記帳はマクダウエル親子だね、んー…ちゅっ…」

……っちゅ…んっ…ちゅむ……

「…んちゅ…親子なら舌を入れるな。ほら、そうしたいならさっさと
チェックイン済ませてベッドでだ……ちゅっ…」

……んちゅ…ちゅっ……

至近距離で見つめあって、てれり。

キティ、だーいすき!!

あ、いけない。

ガムテープで簀巻きにしたチャチャゼロのコト、完璧忘れてました。
取ってこなきゃ。

第14話 会談中だけど回想 その2（後書き）

第14話更新。

こんばんわ、grand病原です。

バトルのハズが、何故かこんな展開に：

次くらいで回想も終わるでしょうか。

瞬殺バトルもきつとあります。

英雄のネームバリューがあれば、逃げる必要なかったのでは？
なんて聞かないでくださいね。

汀が幼女化して涙目なら、そりゃあ理性なんか吹っ飛ぶですよ。
真っ当な大人も生唾ごつくんです。

もしかしたら、ナギさんも生唾ごつくん？

まあ赤毛はノリで逃げたんでしょう。

たしか、英雄として持て囃されるの嫌だったんですよね？

人が集まるのは避けたいから、裏路地まで追って声かけたのでしょうし。

あの後、赤毛はちゃんと逃げ切りましたとさ。

七さま 感想ありがとうございます！！

そう思っていたら、すごくうれしいです！！

書きがいがありますね！！

赤毛、まさかの長丁場、まさかの逃走になりました。
あれえ？

うれしくて浮かれすぎちゃったかも…

ではgrand病原でした
おやすみなさい

第15話 会談中だけど回想 その3

カーテンの隙間から射し込む朝陽が眩しい。

キティの穏やかな寝息に自然、頬がゆるみます。

ここは、街一番のホテル。

もちろんスイートです。

昨日、赤毛との接触により、夜間の襲撃が危惧されるコトとなりました。

そこでワタシ達は、これでもかこれでもかと言わんばかりに部屋へと結界を張り、そうして2人だけの時間を目一杯楽しんだ訳です。

ワタシもキティも、折角盛り上がっているトコロを邪魔されるなんて絶対に許せるコトではないので、明らかに必要以上の強度で結界を展開しました。

そんな風に必死になって守りに力を割くなんて、もう最近は全くなかったコトでした。

だからなのか、なんだか可笑しくなってしまったワタシ達は、代わる代わる、もっと硬く、もっと複雑に、と結界で遊び笑い合いました。

共同で築き上げたこの部屋の守りは、いつの間にかキティ本人でさえ突破できないであろうモノになっていました。

あ、ワタシは出来ますよ。

ワタシにしか出来ない特別な方法で、ですけど。

まあ、チート美少女汀ですからね。

当然と言えば当然です。

そんな部屋の中、ワタシ達は一頻り笑い合った後、強く深く求め合いました。

やりすぎた結界、その安心感が煽ったのでしょうか。

ついさっきキティが本当に力尽きるまで、延々と溶け合っていました。

気絶のち魔法で回復、のループで。

つまり徹夜で朝チュンです。

結界で鳥のさえずりとか聞こえないですけど。

さ、キティを抱き締めて一眠りしましょうか。

シートやらなにやは、魔法でぱぱと綺麗に仕上げましたよ。

ふふーふ、おやすみなさい。

キティ、愛してます。

寝顔もかわいいよー。

きゅー。

リリリリーン！リリリリーン！

昼下がりにワタシが起き出して、ベッド横の姿見にうつとり。

少しして起きたキティが、ワタシに突っ込み。

その後一緒に、シャワーでしっぽり。

てへ、ついつい昨晚の残り火が、ね。

とにかく、のんびりとした目覚めを済ませたころ、備え付けの内線電話がなりました。

「はいはい、っと」

シャワー出たばかりだけど、ワタシ達だけだしいいですよね。

「おい、汀、はしたないぞ。ほらバスローブくらい羽織ってからにしろ」

駄目みたいでした。

キティがシルクのバスローブを着せてくれます。

「ふふーふ、ありがと。ねえ、やっぱりキスマーク残ったほうが素敵じゃない？ね？今朝はコレに見蕩れてたんだよ、実はね。キティのものって感じが素敵！！」

キティは真祖の吸血鬼なので、キスマークもいじめた痕も残りません。

一瞬したら、すぐに回復しちゃうんです。

そしてそれはワタシも同じ。

でも今日はなんだか残したい気分でしたから、無理に身体を制御してキスマーク残してみました。

気を抜くと、その瞬間に回復して消えてしまうけれど。

「……妙なところで器用だな。だが、粗方消えてるぞ、つけた数より明らかに少ない。……それに、そんなものなくとも、最早お前の姿形自体が私のモノだ。その身体全てがだ。そして私も……そうだろ

う？」

……嬉しくてキスマーク全部消えちゃった。

「うん、そうです。ワタシのこの形、この姿、それそのものがキティのモノだって証。キティのその形、その姿、それそのものがワタシのモノだって証です」

「ああ、そうだ。あらためて、おはよう良い朝だな汀。愛している」

「うん、そうだね。あらためて、おはよう素敵な朝だねキティ。愛してます」

……っん……ちゅっ……

、リーン！………

あ、ずっと鳴ってた電話、イチャコラしてたら切れちゃった。
まあ、必要な用事ならまた鳴るでしょう。

「……っ、切れたな。」

「ふふーふ、ちゅーのが大事だよー。あ、でもルームサービス頼むつもりなんだった。取ればよかったかな」

お昼過ぎてますからね。

じゃ、こーるこーる。

てか、スイートな豪華部屋に相応しい、アンティークチックな電話だ。

「ねえキティ、見て見て。この電話かわいいよ!! 拠点にはこんな
の置きたいね」

「ん? ああ、確かに悪くない。トコロで汀、チャチャゼロをそろ
そろ解放したいんだが……どこへやった?」

さーてね?

皮が高値な錦竜の恨みは深いのです。

ま、安全な場所だから気にしない気にしない。

「……そう、わかったわ。とりあえず頼んだルームサービスを持っ
て来て。彼には、食事を済ませたら行く、と伝えて待たせなさい。
ついでにコーヒーでも入れてあげて」

あちゃー、です。

とある人物の使い、と名乗る男がロビーに来ているようです。

ホテルなどを利用する際、ワタシ達は偽名を使わずにマクダウエル
もしくは緒々嶋で記帳をしています。

一部の利害関係にある人物達は、それをもとにワタシ達を探すコト
があるのですが……

昨日の今日、はちょっと早いですね。

もしかしなくても昨日の赤毛でしょうか。

となるとジジイさんとやらは、そこそこのネームバリューを持って
いるようです。

普通は最高級ホテルで宿泊客を調べるなんて不可能ですし、“とあ

る人物の使い”とかで通用しないですから。

「キティ、見つかった。でも結界に干渉を試してすらいない。となると、依頼……かな？もしくは罠。ロビーで待つって。チャチャゼロ出すね」

ソファーベッドで弛緩していたキティの目が、瞬時に戦闘者のそれに変わります。

……凛々しくて素敵、ちゅーしてくれないかなあ。

「ちっ……。昨日の今日か……あの赤毛か？とにかく支度だな。汀、来い」

着替えは普段、キティが選んでくれます。

ワタシが自分でやると、シンプルすぎるんですって。

「あ、でもルームサービス食べたらね。コーヒー出させて、待たせるように言つといた」

うんまあ、食べたならとりあえず話を聞いてみましょうか。考えていても始まらないですし。

じゃ、ルームサービス来るまでに支度ですね。

キティ、今日はちよびつとお揃いめにしよーよー。

あ、あとチャチャゼロもだ。

んー……チャチャゼロもお揃いめがいいかなあ？

食事、準備、チャチャゼロのごきげんとり、全てを終える頃には、そこその時間がたっていました。

そうしてやっとロビーへ向かったワタシを待っていたのは、昨日の赤毛ではありませんでした。

なんでも連合のとある人の使いだとか。身分証も提示したとか。

あー…

それ言われると、ここのホテルは仕方無いですよね。ここもメセンブリーナ連合の一部ですし。

……しかし、ここ暫くの追跡はいい加減鬱陶しくなってきました。

昨日の赤毛にもストレスをぶつけてしまいましたし。

まあ、それはキティとの時間を邪魔した、彼の空気読めなさが主因ですけれど。

魔法世界の大分裂戦争が終わって…5年？

そろそろ権力者達に余裕が出てきて、ワタシ達への追い込みを強めているようです。

ほっといてくれないかなー。

戦争に参加しなかったからでしょうか？

賞金の取り下げを、とか言ってたけど、無視しました。

主に旧世界の観光してきましたよ。

折角戦争も終わったから来たのに、やっぱり拠点は旧世界に、でしょうか。

それはそれで色々問題あるんですよね。

「ようお前ら。昨日はよくもやってくれたな」

……ここで赤毛か。

直接ホテルに押し掛けたら、逃げられるとでも思ったのでしょうか？

「あら、昨日ぶりね赤毛くん、その様子だと逃げ切れたみたいね。
あとそちらは…はじめてまして、かしら」

お使いさんに着いて移動した、街から程近い湖畔。

昨日の赤毛と、耳と後頭部の長い老人が……老人は実体ではないようですね。

その2人が待ち受けていました。

「ふおっふおっ、お噂はかねがねじゃ、魔女殿。わしは近衛近右衛門。旧世界の麻帆良にて魔法協会の長をしておる」

「やっと名乗れるぜ。俺はナギ・スプリングフィールド、サウザン
ドマスターって呼ばれてる」

サウザンドマスター…。

たしか大戦の英雄でしたっけ。

麻帆良の近衛……。

知らないなあ？

あ、お使いさんが一礼して去って行きました。
普通に歩いて。

なんか後ろ姿シユール…。

でも、となりのキティとチャチャゼロに目配せをします。
奇襲警戒をお願いします。

「ワタシ達のコトは知っているようだし、さっそく用件を聞きましようか」

「いや、俺は知らねえ。魔女と吸血鬼のコンビでムカつくガキって事しかない。あと顔」

うわー、のっけからコレですか。

彼らの目的って交渉じゃないんですかね？
読み違えた？

あ、キティがイラッときてますよ。

「貴様いい度胸じゃないか、ええ？ サウザンドマスターだかなんだか知らんが人間風情が調子に乗るなよ」

「はっ！ 今更デカイ態度とっても意味ねえよ。昨日はさんざんだったんだからな！！」

「これナギ、止めんか。そちらも治めてもらえんかの。昨日の話は聞いとる、ちとやりすぎだったのではないか？」

ふーん、用件を聞きいたらそれですか。
まあいいですけど。

「そう、つまり昨日のうさを晴らしに来たのね？」

「ほう、なら今度は逃げ帰れなくしてやろう」

「こっちのセリフだ!! 昨日のコト謝らせて、自己紹介のしかた教えてやるよ!!」

赤毛の魔力が膨らみます。

……ん? 手加減してますね。

仮にも英雄がこの程度ではおかしい。

【キティ、殺さないで。ボコして問い詰めよう。旧世界ってのが気になる】

【仕方無いな、チャチャゼロ待機だ】

【マタカヨ!! 魔女!! 酒追加シロヨナ!!】

彼はキティが即落とすでしょう。

近衛は…式神ベースの幻術ですか。

旧世界から繋いでいるなら、戦闘は無理でしょう。

なら……《ばちっ!!》

「ぬう!?! ……固定、かの?」

「そこで見ていなさい、すぐ終わるわ」

ワタシの魔力で縫い止める!!

「ジジイ!? 魔女てめ《ずだん!!》ぐああ!!」

気を逸らした赤毛をキティが即座に空気投げ…じゃなくて、魔力糸で引き摺り倒し拘束しました。
アレ、切れないんですねー。

「つまり、実につまらんど。これが噂のサウザンドマスターか…」

「ぐっ!!…ぐおお…くそっ!!まじか…」

ぺいつ、っと赤毛の魔法発動体をのけちやいます。
気を高めたり、魔力高めたりしているみたいですけど、むだむだ。
じゃ、仕切り直して尋問ですかね。

……チャチャゼロにワイン先払いしておきましょう。
ほら、そんな暇そうにしないの。

「はぁ?麻帆良で警備員をやらせるつもりだった?」

……正気ですか?

しょうがない、詳しく聞きましょうか。

第15話 会談中だけど回想 その3（後書き）

第15話更新。

こんばんわ、grand病原です。

とりあえず。

今話の【】は、念話での会話です。

今後コレで表現します。

てか、回想終わりました。

次は近右衛門の企み、汀の企みを書きます。

で、回想終われる：かな？

赤毛さんチョロい回。

これはアレです、汀とエヴァが突き抜けた強さなんです。

ごめんねナギさんいいトコなくて。

前話についてご意見いただきました。

アンチ描写など、今後の執筆に参考にします。

ただ汀は、善人でもないし、なによりワガママ美少女なので、たまにそういった描写があるかもしれません。

そこはそれとご理解ください。

ほら魔女ですし。

ご指摘増えるようでしたら、タグの変更も検討します。

貴重なご意見ありがとうございます。

あと、本作品が百合ハーレムと言えるのか？ともいただきました。
どうでしょう？

grand病原は女の子主人公1人、ヒロイン3人なら百合ハーレムかなあ、と思います。

ほらアプリの逆ハーのゲームとかで、男の子は3人とかありますし。ただ、ヒロイン間の絡みが少ないのが目下の課題だと自覚してます。が、がんばります！！

最後に主人公の名前“汀”について。

これが通常『トバリ』と読まないコトは承知しています。
いわゆる当て字です。

ちゃんとした理由があつて、この当て字にしたそうですよ。

とまあ、実際にこの読みをする人がいます。

本名が決して珍しくないgrand病原は、羨ましく思っていたコトがあります。

そこから引つ張ってきました。

キャラのモデルとかでは全然ないですけどね。

ではgrand病原でした

おやすみなさい

第16話 会談中だけど回想 その4

「…ンク…ンク…プハア！タマラネエ、流石ノ魔女印ダナ」

「おい人形！！退きやがれ！！ぐっ……………くそっ！！」

「ウルセエヨ、ンナコトシテムムダダ。ゴ主人ガ魔女ヲ縛ルタメニ開発シタンダゼ。テメエ程度ガ外セルカヨ」

「関係ねえ！！ぐおお……………くそっ！どうなってんだよ」

「諦メロ。マア、オ前ノ気分モ分カルゼ。昨日ノオレナンカ、ガムテープデ簀巻キダゼ？ナ？マア飲メヨ、魔女印ワインダ。極上品ダゼ」

「そうかお前もか……………じゃねえよ！！俺は今、動けねえんだよ！！だいたいそれ言うなら、人の上から降りやがれ！！」

赤毛に乗ったチャチャゼロ。

物語のタイトルになりそうな字面です。

なんだかもう少し放っておいたら、仲良くなりそうですね。

でわチート美少女汀は、麻帆良の近衛くんとお話します。

……あと、キティが近衛くんの耳と後頭部に興味を持っています。
見たコトない亜人だな？みたいな目線です。

いやいや、彼は旧世界にいるみたいですから、たぶん人間ですよ。
可哀想だからあまり見ちゃ駄目ですって。
本人もきつと気にしてますよ。

まあワタシにはどうでもいいけど。

「……なるほどね。ワタシ達が旧世界に拠点を設けようとしているのを耳にした、と」

「…見かけ倒しではなく、高性能な耳なんだな」

ちよつとキティ!?

ぽそつと面白いコト言うのやめてくださいよ。

一応交渉の段階なんですからね。

「うむ。お主らはある程度の地位ないし実力のある相手となら、交渉や取引、商売を行うと聞いておったからの。魔法世界なら知らぬ者のおらん、ナギに繋ぎを頼んだんじゃ」

彼には聞こえていなかったみたいです。

まあキティも本気で興味を抱いている訳ではないですからね。

単に退屈なんでしょう。

「それって人選ミスじゃないかしら？昨日のコトはともかく、さつきも安い挑発に釣られてアレじゃない」

チャチャゼロとの友情はなかなか芽生えないみたいです。

彼、まだ叫んでいますね。

「いやの、とりあえず自己紹介させたらすぐに、今のこの式神を起こしてもらはずじゃったんじゃよ。じゃがまあ結果として渡りがついたから良しとしようかの」

「……ふん、よく言うな。まあ聞いてやる、警備員とはなんだ。正気か？ 私達が素直に頷くとも思ったのか？」

ですよね。

そもそもどうやって引き込むつもりなんでしょうか？

ワタシ達に賞金を掛けたメガロメセンブリアの下部組織風情が。

「そうよね。それにMMの下部組織である貴方達が、ワタシ達を雇えるつもりなの？ それとも……あわよくば封印でもするつもりだったのかしらね？」

だから英雄サウザンドマスターを差し向けたのではないですか？
彼が麻帆良に封印した、となるとMMも強行には出られないでしょうね。

ワタシ達2人の賞金があれば、賄賂もし放題でしょうし。

「…お主達が旧世界で拠点を求めているのは、本国の、メガロメセンブリアの追跡が手に負えなくなって来たからだとの噂じゃ。今回のナギとの事を見るに、どうやら噂でしかなかったようじゃがの」

はぐらかしたつもりでしょうか？

つまり、他に捕られる前に、麻帆良へ捕らえようと切り札を切った訳でしょう？

隠し種を含ませて。

ふむ、しかし……

なぜそんなにもナメられた噂が？

もしかして、世界間ケーキ食べ比べ！！のせいでしょうか？

短期間に行ったり来たりしていたのが、まるで逃げ回っているように捉えられた？

ワタシとしてはただのデートだったんですけどね。

「そう。で、どうするのかしら？サウザンドマスターは捕らえられ、貴方はワタシが許すまで戻れもしないわ。近衛くん、どうするの？」

「……なにやら行き違いが「つまらん言い訳で濁すな、人間。貴様があの赤毛をも誤魔化していたコトは知れている。その寄代には汀が干渉しているんだぞ。秘密裏に仕込まれた術式なんぞ、とうに掌握している。くだらん、実にくだらん。その程度の封印術式とは、私達も随分ナメられたものだ」

その通りです。

近衛くんを捕縛したのは、彼自身が寄代に仕込んだであろう封印術式を弄ったモノです。

なかなかの練度ではありましたが、哀しいかな人間レベル止まりですな。

ワタシならあっさりと干渉し掌握し改変するコトが出来ました。

キティも、外から見ただけで把握したようです。

楽勝ですね、キティ素敵ー！！

でもこの術式って……たしか登校地獄？

馬鹿にしていますか？

「……………」

だんまり…ね。

つまらない、つまらないです。

どうしてやりましょうか？

「そうね…ねえエヴァ？彼らの計画に乗りましょうか？」

「ん？サウザンドマスターに捕らわれたコトに偽装する訳か？」

流石愛しのキティ、ツーカーですね。

「ええ、そう。彼に捕らわれたコトに偽装して麻帆良に拠点を作るのよ。あそこならマホネット通販もしやすいし、コンビニもデパートもあるわ。そしてMMは、ワタシ達の賞金で近衛くんが抑えてくれる」

ですよね？

まあ、近衛くんを選択肢はありませんが。

「待ってくれんか。来てくれるならもちろん大歓迎じゃ、じゃがそれだとわしらの安全が保証されん。失礼を承知で言うが、麻帆良に来てくれるのなら、念書契約かなにかで封印なり制約なりをしてくれんかのう」

あらら？

さすがに協会長ですね。

この状況下で譲歩を求めるなんて、がんばりますね。
でもそれじゃだめでーす。

「…呆れるな。既に貴様の魂胆は露呈し、退路もない。弁えろ、交渉の場は終わっている」

わ、かつこいい！！

キティ素敵かつこいい！！

すぐにぎゅーしたいです！！

「それにこの期に及んで悪巧みとはね。麻帆良には大結界とやらがあるのでしょうか？認識を阻害し、人外の魔力を封じ込める大規模結界らしいじゃない。たしか魔法と科学のハイブリッドとか。人外の魔力って言ったら、吸血鬼も魔女も含まれるわね、きっと。…ねえ、近衛くん？貴方さっきから自分の首を絞めているわよ」

彼が追加したかった制約なりなんなりは、恐らく“麻帆良から許可なく出られない”とかでしょう。

麻帆良の大結界の実用性は、ある程度以上の機密レベルにおいて有名ですから。

かつての実験で個体指定すれば、最強種吸血鬼ですら抑え込めるであらうと断定されています。

ついでに言えば魔法世界にも旧世界にも、魔女を名乗るのはワタシひとりです。

もちろん魔法使い達の中での話です。

長年の功績？で魔女トバリは単一種族と認識されているのです。

ワタシ自身も、魔女という種族だと認識しています。

世界でただひとり、不朽不滅の魔女。

それがワタシ。

キティと一緒にだから寂しくはありませんよ!!

「…………断ればどうなる」

おやおや、余裕がなくなって来てますね。

「手間を掛ける気にもならんからな。安心しろ、楽に殺してやる」

まあ、妥当かな。

交渉を装った不意打ちでしょうしね、コレ。

未遂でした、で許される相手ではないですよ、ワタシ達。

「…………わかった、承諾しよう。じゃがいくつか守ってもらわねばなん事もある。お主らが麻帆良で生活する為に最低限必要な事がの」

ありま、案外あっさりでしたね。

ダメですよう、大結界を過信しすぎです。

ワタシにも、キティにも効果がないコト確認済みなんですよ？

「…………わかった、賞金での裏工作。拠点地の正式譲渡。生活の保証。そして、ナギに証文を作らせる。コレでいいんじゃない？」

おおまかに、ですけどね。

「そうね、詳しく詰めるのは麻帆良に行ってからにしましょう。貴方達は名声と、ワタシ達が麻帆良に存在するという情報を自由に扱える。さっき言った通り拠点に設置する結界は、捕縛転移に設定しておくから上手く使いなさい」

ワタシ達の情報を敢えて晒して、敵を誘き寄せる。

そしてワタシお手製の結界で捕縛して、指定場所に転移。これが警備員の代わりにワタシ達が差し出すもの。

ワタシ達のネームバリューもさるコトながら“サウザンドマスターが保護した相手”というのは、実に利用価値のある情報です。もちろん餌としても十二分でしょう。

「あ、あとそのうちに従者造るから。お手製のやつ。今から認めておいて」

「あいわかった。とりあえずナギと共に麻帆良へ来とくれ。待っておるぞい」

そうしてワタシ達は麻帆良へ来たのでした。

麻帆良に着いてからも、安定までにはなかなか大変でした。

麻帆良大結界がワタシ達に全く効果を及ぼさないコトが確認されて、近衛くんが焦りまくったりですとか。

映像記録証文の作製を拒否する赤毛に対し、仕方がないから彼が満足するまでかるーく戦ってやったりですとか。

そうしたらヤケに爽やかに証文作るもんだから、それを確認した魔法使い達がえらくキモかったりですとか。

サウザンドマスターの保護下を主張するために、学生をやるコトにして、制服でキティとイチャコラしたりですとか。

初めて通った学校は、ワタシ達の美少女っぷりに大騒ぎだったりですとか。

自宅兼工房の拠点が戦略上、街よりも山に配置されて不満気味だったりですとか。

その結界には、毎日ちよつとビクリするような数の外敵と、一部の魔法先生が引っ掛かり続けたりですとか。

色々ありましたけど、なんとか麻帆良で暮らすコトになったんでしたね。

なつかしいなあ。

第16話 会談中だけど回想 その4（後書き）

第16話更新。

こんばんわ、grand病原です。

駆け足に回想を終了させました回。

イチャコラも少ないし…。

我ながら長かったです。

この回想のうちに、汀の性格を話に練り込みたかったんですが…微妙ですね。

この後は原作までイチャコラ。

原作始まっててもやっぱりイチャコラ。

そうなってしまうから。

191

汀は損得勘定したうえで、なのに感情に従って生きています。

自身の行いの結果、他者の感情、それらに伴う損得。

それらをキチンと知り計算しつつ、それを踏まえて、自分がやりたいコトをします。

汀を魔女としたのは、ここが1番のポイントだと思っています。

汀はもちろん麻帆良が他勢力の支配地域であるコトをちゃんと認識しています。

ですので、不用意に魔法使ったりしません。

無茶苦茶なコトをいきなりしたりしません。

まあ15年やってきている訳ですし。

ですので回想の段階、旅というある意味縛りのない状況下のうちに、もっとわがまま魔女っぽさを書きたかったのに…

力不足です、もっとがんばります。

今回も感想いただきました。
ありがとうございます！！

grand病原は誰に相談したりする訳でもなく、1人黙々と執筆しています。

ですのでどんな小さなモノでも、励ましかったり、ご期待だったり、ご指摘やご意見だったり、それらみんながとても励みになります！！
本当にありがとうございます。

ちょっとした感想も、辛口ご意見も、次話への活力ですよ。

よろしければ、またお願いします。

もっと良い、もっとおもしろい作品にするための糧にしますから。

では、grand病原でした
おやすみなさい

第17話 ワタシ達とアイツラ その6

「……だから俺は、2人に光のなかで生きて欲しいと思ったんだ。これを見てるお前ら、2人の事をよろしく頼むぜ」

サウザンドマスターの証文が再生を終了しました。

最後の部分は、ワタシ達が指定しなかった、彼自身の言葉。

なるほど、と言わざるをえない程の善人ですよね。

彼は恐らくMMの、メガロメセンブリアの後押しなどなくともその名を馳せていたかも知れません。

たしかにまあ、感心はしますけどね。

見てください、タカミチくんを筆頭に、キラキラ目線で証文を見詰める学園の魔法使い達を。

アレはやっぱ異常だなあ、と思っちゃうチート美少女汀です。

あと、赤毛はどこか抜けているようです。

ワタシ達の賞金額500万ドル。

史上最高額のコレは、びっくりするくらい濡れ衣とでっち上げ分が含まれています。

一部のやり取りがある権力者がいなければ、もっと増えていたそうです。

その濡れ衣、でっち上げとされる数々の事件の本当のトコロを、近衛くんと赤毛に教えてあげたコトがあります。

そうして話すうちに彼の中でのワタシ達は、随分とかわいそうな娘扱いになったようなんです。

とは言うものの、実際にワタシが起こした事件もあります。

そしてなにより襲撃者や追撃者、賞金稼ぎ達を殺してきているのは確かなコトです。

ワタシ達が賞金首であるコトは、間違いないコトなのです。

そう伝えているのに彼は、麻帆良が守ってくれる、俺もな!!とか言い出すのでした。

いやいや…

まあ、証文を嬉々として仕上げてくれたのでいいですけど。

でも、そんな彼の言葉を聞いたキティはぷりぷりと怒っていました。同情するな、私達には必要ない、って。

「2人でいるコト、愛し合っているコト、世界を見る旅を続けているコト、全てが自身の選択だ。私達はしあわせだ」

キティの瞳に澄み渡っていて、その言葉の価値を如実に伝えていました。

普段、彼らに接するトキのそれとは隔絶した態度に、2人は驚いていたようでした。

ワタシも続きます。

「そうね、ワタシ達に同情は必要ないわ。ワタシ達はずっと自らの選択で生きているの。お互いだからこそ愛し合って、楽しいからこそ世界を渡り歩いているのよ。付随するものも、キチンと理解しているわ。ワタシ達はしあわせなのよ。それでも思うところがあるのなら、協力する、そう言いなさい。忘れていない？ワタシ達のほうが強いんだよ？」

最後に少しおどけてみせます。

まあ彼等は2人とは取引関係を結びましたし、最低限のやり取りはしないといけませんからね。

赤毛はワタシ達の言葉にどうやら感心したようです。

近衛くんの方は、特に態度を変えるコトはありませんでしたけど。

さて、千雨ちゃんに目配せします。

この場をもって、千雨ちゃんがワタシの従者だと自己申告する。

コレがワタシ達の目的ですからね。

「いいかしら？先の話、今の証文、そしてワタシと本人の言葉で、千雨を魔女トバリの従者だと宣言するわ。まずは千雨、自分の口で彼等に伝えなさい、本心でね」

ビバ赤毛状態の連中に言い放ちます。

何か言いたそうな感じはあるものの、サウザンドマスターの証文直後ですからね。

次第に興奮を諫め、千雨へ注目します。
従者を認めるとの断言は、まだ彼等の融通の効かない頭にも残っているのでしょうか。

タカミチくんの落差がすごいです。

キラキラから、ドンヨリへ。

自己責任でしょうよ。

「千雨だ。さっきの話しの事件から、汀に、主に世話になってる。ぐちゃぐちゃと言う気はない。私は汀の従者だ。緒々嶋千雨って名前の、不朽不滅の魔女トバリの従者だ。あんたがたに言いたいコトは他にはない」

ああ、千雨ちゃんはやっぱ彼等に何も求めないようです。

知らなかったこれまで、知ってからの今まで。

魔女の従者、千雨ちゃんにとっての彼等は、主の取引相手以上の何者でもないんです。

「……僕を、僕たち魔法使いを怨んでいるんだろう？ならなぜ……！」

タカミチくんなんだか元カノにすがっているみたい……って、イラ……

自分の思考にムカつきました。

千雨ちゃんの手をぎゅー！！

千雨ちゃんはワタシのですもん……！！

「……うん？」

あ、いえいえなんでもないです千雨ちゃん。

ちょっとセルフジェラシーでした。

てか、悲壮感漂うタカミチくんに全然関心ないんですね千雨ちゃん。それだけワタシを思ってくれてうれしいです、ぎゅー。

親指で手の甲に“ダイスキ”となぞっ：れない！！

ワタシそんなに指長くないです！！

えーん、つたわれこのおもいー。

「聞いたわね？ワタシ、不朽不滅の魔女トバリも緒々嶋千雨を従者だと宣言するわ」

近衛く：昔を思い出しているうちに、呼び方戻ってました失敗失敗。近衛学園長に目配せをします。

「タカミチくん、今は落ち着くんじゃ。：皆聞いたの？あの事件があり、それ以来千雨くんは緒々嶋を名乗っておる。今なら理解できるだろう。では、従者の件をわしとナギの名のもとに認め、千雨くんは正式に緒々嶋姓とする。皆よいか？」

「長谷っ：千雨くんの姓の事も、身体の事も分かりました！！しかし魔女の従者である必要はない筈です！！承服しかねます！！彼女は我々正義の魔法使いが正しく導くべきです！！」

お？なんですか千雨ちゃん？

指を絡めたまま手のひらを放して、そこに親指で：。
く、くすぐった：「アイシテル」？

わ！！わ！！素敵です！！

ワタシもですよ！！

えっと：「アイシテイマス」：よし！！

あ、コレ、もしかしてタクシーで言っていたコトが理由ですか？
彼等に愛し合ってるって宣言しなかったからですか？

もー、千雨ちゃんが照れ屋さんだって知ってるから全然いいのにー。

「……千雨くんの身体を殺した僕では、僕が所属する協会では信用
されないのも無理ありませんよ。それに……」

おっと、タカミチくん言い辛そうなので引き継ぎましょうか。

千雨ちゃんの手を改めて、ぎゅー。

「それにね、千雨の身体はあの事件の現場で焼き尽くされたの。彼
が遊撃に戻った後、残った魔法使いがやったそうよ？ 仮に行く宛が
なくなつて、そんな人達の元に行きたがる訳ないわよ」

仮に、なんて無意味ですけどね。

ワタシがいます、千雨ちゃんにはワタシがいますから。

ぎゅーした手から、動揺やは伝わってきません。

どころかチラリと目配せして、目を細めてくれました。

流し目です！！

千雨ちゃんの流し目！！

うっとりしちゃいます。

「事件中の事じゃ、麻帆良の危機じゃったんじゃ。放置すれば何ら
かが召喚される恐れがあった。言い訳ではないが、ソレをした彼等
の判断は……わたしには間違いとは言えん。じゃが千雨くんに納得出来
ない事なのは想像に容易い。むしろ麻帆良の魔法使いが彼女を思う
なら、今後の行動で示すしかないんじゃないじゃよ。皆、これを聞いてもな
お、彼女を説得出来ると思うかの？」

「ですが！……っ千雨くん！！確かに身体の事は不幸な事故だっただろう！！だが君の犠牲が麻帆良を守ったんだ！！幸いにも今君は生きている！！魔女どもなどと居れば、その功績も失われるぞ！！もう戻れないなら我々と正義を貫くべきだ！！」

勝手言いますねえ。

ねえコレって説得ですか？

てか戻れないとか、普通ならトラウマスイッチでしょうに。
ま、ワタシの千雨ちゃんなら平気ですけどね。

「……はあ。あんたがたは何時もそれだ。私には知らない誰かの功績も評価も要らないんだ。汀の信と…あ、愛が欲しい。それが私の一番なんだよ。あんたがたを恨んだりとか、そう言うのはもう済んだコトなんだ。折角生きているんなら、汀と一緒にいたいんだ」

千雨ちゃんの雰囲気が変わりました。

いつもワタシに気持ち伝えてくれるトキのそれです。

「あの後私の有り様は正直自分でも思い出したくもない。恐怖に暴れて、受け止めきれず安心して、謂れなく汀達に当たって。それを繰り返した。その私にずっと傍にいてくれたのが汀だ。ブチマケルだけ全部を出し切らせてくれて、空っぽの私に自分を取り戻させてくれて、それを繰り返した。そうしてやっと安定した私に、知りたいうコトも知りたくなかったコトも、全部を教えてくれたのが汀だ。それからだって今思えば酷かった。安定したつもりでいたけど、振り返れば完全に病人だった。その私を乗り越えさせてくれたのが汀だ。」

正式に保護すると決めたワタシは、従者専用義体ではなく後に魂移

し出来るだけの義体に千雨ちゃんを定着させました。

そして別荘の中、千雨ちゃん用に拵えた部屋で生活の面倒を見ましたが……

それはむしろ看護と言った状態でした。

「私が自分に余裕が出た頃、汀の行動に疑問がわいた、なんでここまでって。だから聞いた。聞いてみて拍子抜けしたよ、選ばせるためだって言いやがるんだ。普通に戻るか、魔法と生きるか、選ばせるためだって。でもそんなの意味なんてない、だって決まってんだ。私が汀に質問したのは、知りたかったからだ。何か汀のために出来ることがないかって。介護がなくなった私が、汀の傍にいる理由がないかって」

その日ワタシと千雨ちゃんは主従となりました。

魂と魂で繋がりを持ったのです。

千雨ちゃんを今の身体にした日です。

あ、愛し合ったのはもう少し後ですよ。

ワタシは千雨ちゃんを保護した段階で、その全てをワタシのモノにしたいと思っていました。

だから、彼女に選択肢を残しながらも、その心を絡め取るコトにしたのです。

じっくりねっぷり攻め落とした訳ですね。

まあこの時点で大分傾いていましたね。

完全陥落は遠くありませんでした。

「それからまあ……いい、色々大切なコトがあった……！だ、だから私は汀の傍にいるんだ。今じゃ汀から離れるなんて無理だ。嫌なんだ。緒々嶋千雨は緒々嶋汀とずっと一緒だ。それが私なんだ……！」

ワタシは総てを求めます。

誇り高き真祖の吸血鬼キティも。

人を辞めてまでワタシに尽くす千雨ちゃんも。

ワタシに零から創られた存在、茶々丸ちゃんも。

心も身体も、魂も。

過去も未来も現在も。

その総てをワタシのものにしました。

それがワタシの、不朽不滅の魔女トバリの身内であるというコト。
愛しています、ワタシの総てで。

キティと茶々丸ちゃんの視線がイタタです。

千雨ちゃんが真剣な告白をしたのが羨ましい様子です。

や、千雨ちゃん以外はね、連中に言い放つ必要ないでしょ？

わかってるから、ワタシがわかってるし、いくらでも聞くから。

宣言はいらないでしょ？

え？これも愛を示す良い方法？

いやいやいや、声高らかにノロケる場面じゃないから！！

第17話 ワタシ達とアイツラ その6（後書き）

第17話更新です。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただけてうれしいです。

会談も終盤、千雨宣言回です。

ホントはリアル介護回も考えていたんですが、回想について回想ってアレかな、と。

てか、リアル介護って、読んで楽しむモノではないですね。

ちなみに千雨介護期間のエヴァはそりゃあ荒れていました。

魔法による分身？みたいので常に一緒ではありましたが、汀本体は千雨とでしたから。

後に千雨が完全陥落した際、エヴァと汀はお互いがお互いのもの、千雨は総て汀のモノ、と明確に宣言し、立ち位置を明らかにしたコトで落ち着きます。

千雨自身も汀の魔女としての異質すぎる存在そのもの知り、総てを捧げる従者の位置に自覚と誇りを持っています。

まあ寵愛的なライバル心はありますが、汀の甘えっぷりは相当なので大丈夫みたいです。

今後也多分描写はしませんが、汀は分身的な魔法をイチヤコラに利用しています。

grand病原の独占欲の問題ですが、相手が複数ならコレ系の技が必須だと思っています。

だって好きな人が、自ら認めた相手とは言えその人と一緒にいて、自分は1人寝とかgrand病原には不可能です。

基本的にエヴァと寝ている汀は、千雨と茶々丸それぞれに有実体分身的な魔法を派遣しています。

するコトもして、魔法解除で経験共有です。

びばうずまきさん。

コレは譲れません。

今日も感想をいただきました。

ありがとうございます!!

やっぱりすごくうれしいです。

会社でもちらちら携帯気にしてしまいますね。

前話のと言うか交渉時の汀達が素直なのはやはり優先度の問題でしょう。

汀達は正直、麻帆良に行かなくてもいい訳ですからね。

渡りに船だし乗っとくかな?とその程度です。

現在でも何時でも引っ越せます。

大事なモノは魔法球へですから、便利ですよ魔法球。

あと、どうですか?今回はイチャコラ足りました?

エヴァは人前でイチャコラしないんです。

でもその分は千雨、茶々丸がいますので、学校でもイチャコラしますよ。

パルさんブンヤさんが煩いでしょうね。

では明日もがんばります

grand病原でした

おやすみなさい

第18話　ワタシ達とアイツラ　その7＊

「そうか…わかった。君たちの絆は確かなものみたいだな。魔女、いや緒々嶋汀。貴様を信じる訳じゃない、だがそれが千雨くんの望みなら我々は譲ろう。一步離れて君たちを見守ろう。だが忘れるな、千雨くんを悪に引き摺りこんだなら、その時は貴様を許しはしない、我々の正義にかけて!!」

ガンドルフィーニくんは眼鏡を光らせながらそんなコトを……

言う訳がありませんでした。

もー、ののしるののしる。

彼の、彼等の罵詈雑言は、ついに近衛学園長が遮るまでにヒートアップしていったようです。

今回の会談には、彼等のガス抜きが含まれていると承知していた筈の近衛学園長でさえも、流石に呆れるほどだったそうです。

そんな罵倒の雨の中、ワタシ達は…。

「“助けてください!! だれか助けてください!!” …とか合ってるんじゃないか? ほらなんか必死っぽいし」

「いや違うぞ千雨、コレは“それでも僕はやってない!! 手の甲に偶然触れただけです!!” …だろう?」

「ソレ犯ツタヤツノ言イ訳ダロ、ゴ主人。ココハ“屑ハ死ネ!! 貴様ヲ屑ニ生キル価値ナドナイ!!”…ジャネエカ?」

「姉さんのソレはもう少しソフトにして、実際言っているのではありませんか?“事件は座敷で起きてるんじゃない!! 本国で起きてるんだ!!”…とかではどうでしょう?」

「え、なんでみんなネタ? ワタシだけ“綺麗なガンドルフィーニくん”とかひどい」

認識阻害と遮音結界で、彼はナニを言っている? ゲームをしてました!!

近衛学園長以外の彼等は、ワタシが適度に反論しているように認識しています。

そしてワタシ達に罵詈雑言は届きません。

いや、いちいち聞いていたら流石に千雨ちゃんとかがキレるかもしれませんし。

今回は特にようちゅーい。

てか、流石ワタシの認識阻害。

魔法使いの彼等が微塵もレジスト出来ていませんねー。

あ、近衛学園長の顔、引きつってます。

てか、んゝ…?

彼はもしかして、1人だけワザと対象から外してあげたコトに気付

いていませんか？

なんか、顔つきが“不甲斐ない、わしは大丈夫だったのに”みたいな雰囲気かもしだしてますよ？

まあいいか。

「じゃあじゃあ“私自身、薄々思っていました。チャカとナイフが武器って魔法使いっぽくないって！！”とか必死に訴えるの図、とかは？」

あ、だめ？

ちえー、だめ出しされちゃったチート美少女汀です。

綺麗なガンドルフィーニくんとか面白いかもなのにー。

「マイロード、あーんしますか？ちゅーでしますか？」

「あ、おい絡繰！！今日は私の：私が汀に甘えていいハズだろ！！」

「ふっ：。汀、酌をしろ。美少女を肴にタダ酒だ。」

結局、近衛学園長はワタシの認識阻害を上手く利用し傘下の魔法使い達を纏めました。

まあぶっちゃけ、言いたいだけ言わせてから折を見て誤魔化した、と。

あとはわし直々に説教するから、皆さん帰ってね、と。

「まーまー、たまの外食なんだしゆっくりしようよー。じゃ、まずはお酌ね。はいキティ…っと。ね、せっかくだし千雨ちゃんもおちよこ出してよ、茶々丸ちゃんも。リアルに傾国したコトある美少女のお酌だぞー」

タカミチくんがすごい渋ってましたね。

千雨ちゃんと真面目に話すチャンスがウンタラカンタラとか。

すごい渋ってたのに、千雨ちゃんにはやっぱり、ふつーにスルーされてました。

「オイジジイ！！コノコレ、寒梅ツテノ追加ダ！！アテニハ、スジコ頼メー！！」

あんまり悲壮感を漂わせてるけどこの人、昨日までは千雨ちゃんに對しても完全普通に對応していたんですね。

そもそも今日までアレから2年以上も放置しといて今更？

もしかして、仲間内に公開されたから、だから今やっと謝罪する気になったのでしょうか？

で、自己憐憫にでもハマりました？

だとしたら、なさけないなあ。

「んっ…ふう…、悪くない。なんてコトない酒も、汀に酌をさせれば途端に甘露だ。汀、近くに來い。お前が近くにいれば、ただそれだけでもっと旨くなる」

…っ！！

きゅん、てしました！！

ふふーふ、キティだいすきだよー！！

ぎゅー、すりすりー、てへり。

あ、そうだ!!

「キティ、千雨ちゃん、茶々丸ちゃん。ね、みんなのおちよこで吞ませて? ワタシは自分のおちよこなし!! みんなで順番こにワタシを酔わせてよ、ね?」

ふふーふ、みんなでたのしく吞んじやうぞー!!

「:のう、わし忘れられとらん? しかもタダ酒タダ酒って、わし払うのかの?」

当たり前でしょうに。

貴方が招待したんでしょ?

「:うん:茶々丸ちゃん? 茶々丸ちゃん?:あっ:酔ってないよね?」

「イエス、マイロード。この程度で酔いはしません、いくらでもマイロードのお世話が出来ます」

何故指を舐めてるんですか?

あ、でも舌が熱いくらいできもちいいかも。

ふふーふ、ほらべろ catch!!

「:.....あうん:千雨ちゃん、千雨ちゃん息があったかすぎ:ふう:」

「すうー…はあ…、すうー…はあ…。やばいな汀の熱、汀の匂い」

膝枕はいいんですけど、鼻先がお腹に埋まっていますよ？

ぐりぐりするとくすぐったいよう。

仕方ないなあ、ほらなでなーで。

「……うあん！！…キティ…やるならはやくしてよ…」

「ふふ…汀の肌…コレで酒が呑めるな。だがこの下に、至高の美酒が流れている…我慢ならんな、いくぞ…」

…っんっ！！後ろから首筋を吸血されています。

ぴったりくっついて、ワタシの血に夢中なキティかわいいなあ。

傷口を維持して、血を出してあげる。

ほらほら、魔力も込めちゃうぞ。

今、近衛学園長には認識阻害の餌食になってもらっています。

このイチャコラは見せません。

普段人前でのイチャコラするために、魔法を使ったりはしないワタシ達ですが、今は別。

キティも千雨ちゃんも茶々丸ちゃんも、みんなさっきまでのコト結構気にしてるみたいですからね。

まあわかるかな。

ワタシだって3人の誰かが檜玉に上げられたら、相当なストレスですもん。

キティ、千雨ちゃん、茶々丸ちゃん、だいすきだよ。

ワタシが麻帆良に住むって決めたから、言い返したくても、殴り飛ばしたくてもガマンしてくれてるんだよね。
彼等の悪口なんか気にしてないですよー。
ふふーふ、だからね、ゆっくり気持ちを治めてね。

「オイジジイ！！オカワリダ！！ナマコ酢モ一緒ニナ！！」

「ふおっふお、わかったぞい。緒々嶋くん達は三人で酌をし合ってわしら放置じゃからな。たまにはこんなのも悪くはあるまいて」

チャチャゼロ満喫してるなあ…。

そろそろみんな落ち着いたみたいです。
ぎゅーとか、食べさせっことか、吞ませっことか散々しましたし。

まあコレくらいなら近衛学園長の前でも出来るかなってコトは、大體総なめにしました。

ダメそうなコトは、認識阻害でやりました。
やっぱり彼も気付きやしないですね。
まあ当然だし、どうでもいいか。

じゃ、聞いてみましょうか。

「…んく、ふあ。で、何を伝えたかったの？」

ぎくり、とチャチャゼロに酌をていた近衛学園長が反応しました。
うわーろこつ。

案外お酒まわってるのでは？

「…気付いておったのか。…今日はわしからも特別な通達があるんじゃない」

ふーん、じゃあまあ千雨ちゃんに目配せ。

すぐにワタシの脇へと控えてくれます。

さすがワタシの従者だね！！

そんな千雨ちゃんもらぶー。

キティと茶々丸ちゃんもだいたい同じ。

チャチャゼロも揉め事の気配でも感じたのか、ワタシの膝へ乗って来ました。

あ、ワタシに乗るんだね、キティはいいのかな？

「まず、わしらの条約に変更はなしじゃ」

麻帆良入居の際、パワハラ交渉で得た不平等条約ですネ。

近衛学園長も色々言いたいコトはあっても、フタを開けてみれば、ウチの結界による捕縛があまりに有益なため、手を出しようがないのです。

まあ例えば、既に去った彼らがワタシに対して何を言って来たとしても、歯牙にもかけません。

だって普通にどうでもいいですもん。

キティ達のコトが入ると別ですけどね。

でも近衛学園長とは、交渉で成り立っている関係。

ナメたコト言えば、分を弁えなければ、相応の受け答えをしますとも。

ええ、相応しい償いを。

ですからコレは当然のお話し。

「当然ね、続けて」

「うむ、では本題じゃ。年が明け三学期になったなら、この麻帆良に新しい魔法先生を迎える事になったんじゃ。それをわし直々に指導したいと思うておる」

おや珍しい。

魔法先生の出入りはまあそこそこありますが、近衛学園長の直下とは。

「いいんじゃない？好きにしなさい。あ、ワタシ達は手伝わないわよ」

まさかとは思うけれど、一応潰しておきます。

「むう…そこをなんとか頼めんかのう。実はの、彼はのナギの息子なんじゃよ」

冗談じゃない。

あ、キティが聞き体勢を解除した。
茶々丸ちゃんもあっさりお酌始めちゃった。

え？

あ、はい、ありがとう千雨ちゃん。

…んく、ぷあ、おいし。

「オイジジイ、呑ミ過ギタミタイダナ、今日ハ帰レヨ」

あ、チャチャゼロに心配されてるし。

第18話 ワタシ達とアイツラ その7＊（後書き）

第18話更新です。

こんばんわ、grand病原です。

読んでくださってありがとうございます。

もうホントごめんなさい。

残業と持ち帰り分で：

でも仕上げて更新してから寝ます。

もうよくわからないくらい眠いです。

今回も感想いただいていたのに、ごめんなさい。

でもそのおかげで眠気に負けずかけました。

ありがとうございます。

期待していただけるなんて、うれしいです！！

これからも、もっとがんばりますね！！

あと感想に間違いなんてぜんぜんですよ。

だって、いただいた感想を読んで、糧にしてるんです。

コレで、もっとがんばれます！！

ではgrand病原でした

おやすみなさい

第19話 こんな噂が広がったら!?!*

《きーんこーんかーんこーん》

午前中の授業をすべて終えたワタシ達に待っているのは、たのしいたのしいお弁当たいむです。

お弁当は、千雨ちゃんと茶々丸ちゃんの2人に、日替わり交代で作ってもらっています。

今日は確か茶々丸ちゃんの日です。

茶々丸ちゃんのお弁当は、計算し尽くされた栄養バランスと、女の子らしい彩りが両立したパーフェクトお弁当です。

きょうのおかずはなにかなー。

「あの、さ。緒々嶋さん？ちょっと聞きたいんだけど…今いい？」

って、神楽坂明日菜だ。

めずらしー。

ワタシ達ってぶっちゃけ、クラスメイトとは溝がありますからね。

あ、彼女の後で何人かちらちらこっち見てる。

クラスメイト注目のチート美少女、汀です。

美少女クラスの中でも突き抜けた美少女っぷり、その汀ちゃんが注目されるのは仕方ないですね!!

いやまあ、今回は単にめずらしーから見られてるだけでしょうけど。神楽坂明日菜とは、今まで接点がぜんぜんありませんでしたからね。

「何かしら？これからお弁当だから、手早くお願いね」

ワタシの隣の席は、千雨ちゃん。

ちょっと、あいこんたくとー。

千雨ちゃんらぶー、てへ。

秘密の多いワタシ達が、べんりまほー念話を多様しないのは、気分的な理由です。

だってワタシ達はいつも近くにいるから。

それなら、気持ちを伝える方法なんていくらでもあります。

アイコンタクトとか目配せとかの、深いところで繋がってる感、想い合ってる感が素敵なんです。

だから、簡単なコトや、違っても笑って済ませられるコトなら、それで伝えればいいんです。

だいすぎだよ、って想いを乗せて、とどけワタシのきもち！！

ちょっと離れたら、すぐに念話使いますけどね。

別に使用を避けてたりはないので。

「あ、ごめん、えっと千雨…さん？のほうに聞きたい事あってさ」

あら？

思わず千雨ちゃんと目を合わせて、はてな？

学校での千雨ちゃんはワタシからまず離れませんか、お互いの行動をほぼ把握してます。

精々お手洗いの個室くらいしか、離れませんからね。

だからワタシも千雨ちゃんの行動、把握してますけど…

千雨ちゃんだけが呼ばれる要素なんてあったかな？

神楽坂明日菜の言い分だと、千雨ちゃん1人に話を聞きたい感じですよ？

魔法使い連中の仕業？

いや…うんやっぱり意識誘導の魔法は使われていないですね。やたら力業の記憶封印が、普段通りあるだけです。

「私、1人でか？もし昼飯の誘ってんなら、汀達と食うから無理だぞ」

「あ、うん、えっと…ちょっとだけ聞きたい事あるだけだから、今ダメ？」

「あー…汀？」

千雨ちゃんの目が“助けろ、断れ”って、がんがんに伝えてきてます。

うんまあ千雨ちゃんは特に、麻帆良住人との付き合い減らしたがつてますからね。

普段から。

じゃ、だきようあんでへるぷってあげよー。

「ね、神楽坂さん？千雨ってね、とても人見知りなのよ。だからね、

もしよかったらワタシも行っていいいかしら？そのかわり、貴女は後ろのお友達連れてきなさいな」

彼女の背中にはクラスメイトの近衛木乃香が熱視線びーむしています。その近衛木乃香を、こちらもクラスメイトの桜咲刹那がちらちら盗み見？しています。

まあ他にも何人もワタシ達を見えますけどね。
まあ放置です。

「あー…えっと、ちょっと待ってくれる？木乃香に相談するから！」

言うないなやダッシュする神楽坂明日菜。

いや、貴女、机3つ分くらいの距離を走りなさんな。

まあいいや、じゃ待ってくれてる2人を呼びましょうか。
さっさと軽く話して、みんなでいつもの場所へいこうね、千雨ちゃん。

ここは学園の屋上。

人払いと遮音の結界を敷いて、4人でお昼を食べるのが恒例です。
いつもイチャコラおべんとたいむ。

なんですが！！

今日は荒れています！！

「…ああ！！最悪だ！！ふゆかいだー！！」

「ホントだよ！！びっくりしました！！美少女、汀はびっくりしましたよ！！」

神楽坂明日菜の…ベルのご用事は最悪でした！！

もはや彼女なんかベルで十分です。

これから彼女のコトは、御本人愛用髪留めを用いて表記するコトにします！！

「ふはは、まさかの勘違いだったな。アレなら麻帆良壊滅のほうがまだ現実的だ」

「千雨さん、お気の毒です。もしわたしがそんな誤解を受けていたらと思うと……。本当にお気の毒です」

新聞部にでも知られて、学園内で広められたらと思うと…。でもまあ事実無根ですけどね。

「私が高畑に迫られてる！？冗談じゃない！！私は汀のモノだ！！」

どんな勘違いですかベルめ！！

千雨ちゃんはワタシのモノですよー！！

「はい、次はゴハンね。あーん…」

先週に無事行われた近衛一門との会談以来、タカミチくんが千雨ちゃんへ微妙な視線を向けるようになりました。

「ん、…むぐむぐ。汀に食わせて貰うと、米でもすごい美味しいな。次はアスパラベーコン頼む」

ワタシ達は当然のするー。

いや、仮に謝られても許すとかって問題じゃないし。

ワタシ達にとっては、もうそんな段階はどうに越えています。

「てれり。じゃ、アスパラね。はい、あーん…」

そしてあのコトが、千雨ちゃんの麻帆良住人嫌悪の、ひいては魔法使い嫌悪の一因であるのは確かです。

いや、むしろ主因でしょうか。

「ん、…むぐむ…ぐ。やっぱコレ、私が作るより美味しいなあ。汀効果を抜いてもやっぱ絡繰の料理のほうが美味しいよ。私ももっと頑張らないとな」

でもワタシ達は千雨ちゃんにどうこう言ったりしません。

別に嫌いなら嫌いでいいです。

まあ、無差別に敵意を振り撒いて、暴れたりする訳でもないですしね。

「確かに茶々丸ちゃんの料理は流石。すっごくおいしーよ！！毎日ありがたいね。でも千雨ちゃんの料理だって負けてなんかないよ？

とってもおいしいもん、ね。それでも、もし千雨ちゃんがそう思うなら、これからがんばってよ。ワタシのために、ワタシにおいしいゴハン食べさすためにがんばって、千雨ちゃん。」

まあそれは置いておきまして。

ベルは脳のどの回路を混線させたのか、そんなタカミチくんの視線を恋愛的に誤解したのです。

「だな。そうして茶々丸以上になれば、次は茶々丸が成長する番だ。2人とも、これからも期待しているぞ」

で、近衛木乃香に相談して、直接アタックに来るコトにしたようです。

もちろん事実無根だと否定してあげました。

ちょっと認識の食い違いがあるだけ、放っておけば落ち着くよ、と助言も。

「マイロード、マスター、千雨さん。ありがとうございます。これから精進いたします」

「ああ、任せてくれ。いつまでも駆け出し従者じゃないからな」

それで満足したようでした。

で、軽く昼食に誘われたけれど、断りを。

2人はたいして気にせず教室へ戻って行きました。

「ういうい、ワタシ達はホントにいい従者を持ちましたー。ほらほら千雨ちゃん、ぎゅー」

そんな訳で、ちよつとふて腐れ千雨ちゃんに、あーん…、してあげ

ていたのです。

あーん…もいいけど、ぎゅーもいいね。

あったか千雨ちゃん、だいすきー、ぎゅー。

「汀…汀のためならなんだって出来そうだ」

やさしくて、ちょっと潤んだ瞳がワタシだけを写しています。

「あつ、うん、ありがとう千雨ちゃん…」

微笑んで、頬に添えられる手に任せ、瞼をおろします。

…っん、はぷ…んちゅっ、ちゅっ…

愛してます、千雨ちゃん。

ずっとワタシのそばにいてね。

あ、会談の最後で近衛学園長が言っていたコト。

サウザンドマスターの子供の話は、キチンと拒否しました。

いや、だって知りませんよ。

特に親しくもない知人の子って……最早完全他人でしょ。

ワタシ達にはいつもみたく、のんびり暮らせるならそれがいいのです。

その子が変に突っかかって来なければ、基本スルーしますよ。

え、千雨ちゃんにばかりちゅーとかずるい？

あーと：嫌だつて、離さないって、ワタシの耳はむはむしながら言ってる。

タカミチくん由来の嫌悪感消えるまで、このままがいいってつさ。

ふふーふ、かわいいなあ、ぎゅー

第19話 こんな噂が広がったら!?!* (後書き)

第19話更新です。

こんばんわ、grand病原です。

読んでいただいて、ありがとうございます。

しばらくは、こんな感じの日常編回。

次は茶々丸かな？

感想枠にてご指摘いただきました。

ありがとうございます。

恐らく眠気に負けたんですね…

実にはずかしいです。

急いで修正しました。

ではgrand病原でした
おやすみなさい

第20話 はじめてのおるすばん＊

《…ぱちぱち…》

9月をすぎた麻帆良は、強烈だった残暑をあっさりと振り切り、すっかり秋の装いです。

学園都市一斉衣替えも無事に済み、身近な場所にも季節の移ろいを感じます。

千雨ちゃんこーでも、何枚か重ねて着るコトが増えましたね。

《…ぱち、ぱち…》

ワタシ達の家の周辺ではずいぶんと紅葉がみられ、落ち葉掃きも日常になっています。

そしてワタシがそれに火を放つのも。

「マイロード、まだしばらく焼けませんよ？中でお休みになられてはいかがですか？」

「むー…ん？ごめん茶々丸ちゃん、なにー？呼んだ？」

「はい。おいもが焼けるまでは、わたしがおります。お部屋でお待ちいただいて結構ですよ？、と」

もちろん、焚き火、ヤキイモです。

秋と言えばヤキイモ。

外せませんよね。

「ふふーふ、あまーいよ茶々丸ちゃん。ほくほくヤキイモよりあまーいね。」

「…?。と、仰いますと?」

「ワタシの眼力でヤキイモを美味しくしてるの!!おいしくなーれ魔力をガンつけてしてるのさ!!」

「まさかそんなコトが……出来るのですね?」

「うん、魔女トバリに出来ないコトは、したくないコトだけだからね」

天高く、馬肥ゆる秋。

チート美少女、汀はヤキイモいっぱい食べても肥ゆりません。細すぎるくらい的美少女です。

《ごぼおおう!!》

「わ、焚き火に魔力行っちゃった…」

「マイロード!?!」

ぐてー。

「少なくとも汀の分、魔女は作らないとな」

ぐててー。

ねむひ。

「そうだな、正しく魔女なんだからな。まあ折角の機会だ、全員に用意したほうが汀も喜ぶだろう」

すりすりー。

キティ、なでて？

なでてよー。

「コレは…かわいっ…。猫でも相応しいのでは…あ、いえ、すみません。」

ふふーふ。

ごろごろー…

キティだいすきい…

「確かに…。なんだコノかわいい生き物。エヴァ、譲ってくれ。その究極にかわいいの、私にくれ！」

むう？…っ！？…ふっ…ううん…

キティ…すりすりい…

「……マスター、猫はわたしの管轄です。すぐに引き渡してください。……マママイロードは！！わたしの猫でです！？」

ねこお…？

…んにゃー、ぺろぺろ…
すりすりい…にゅふ…

「……誰が貴様ら、いや誰にもやるものか。私の…ネコ汀だ…。もういつそ誰の目にも…そうだな、部屋へ行く。私だけのネコ汀を監き…寝かしつけてやらんといかん、うむ。私だけのだからな、うむ」

…むふー…
…すう…

「…おいエヴァ、目がやべえ、お前マジだな…」

「貴様が言うか…その卑猥に蠢く指を切り落としてやろうか？」

「…マママイロード…マイロード、マイロード…マイ…ロード…
わたしの…わたしの…だけの…!!」

………んう？

「」「殺るか!?(わたしの…!!)」」「」

………なあにい…もう…

「………うるさあい…」

ねむ…いの……に…!!

…キティ!?

…千雨ちゃん!?

…茶々丸ちゃん!?

「……“煩いよ!!”」

「「す、すみません!!」」

もー、じゃましないでよ…

「…なあ、やっぱ起こしたほうがいいんじゃないか?」

「…千雨お前…またさっきの威圧をくraitたいのか?」

「ですがマスター…万が一起きられたら…」

「汀だってガキじゃない。そもそも世界の何処にいたって、こいつなら即座に探知してくる。私達を見失う訳ないだろ。それにもともと汀は私の買い物に付き合うだけだったからな」

「そっか、ならまあ困りはしないか。それに探知のコトは確かに、だもんな。…じゃあ書き置きすればいいか?」

「あ…では、わたしが」

「うむ、茶々丸が書き上げたら出るぞ。一応急いで行くか」

「だな。場所はわかってんだ、転移で往復すればいい。…やっぱ起きる前に帰りてえしな」

「…はい、では行きましょう」

……んー？…

すり…すり……？

…あれ？…コレ…そふぁー？

「…キティ…？」

毛布？いつの間に…ああ寝ちゃったんだ。

「キティ？…あれ？」

いない？

……この座標は、麻帆良百貨店。

…千雨ちゃんも茶々丸ちゃんも一緒ですね。

そっか、買い物に行くって言ってましたっけ。
寝てたから、置いてかれてしまいました。
っと、書き置きはっけんー。

えっとなになに…

“ 予定通り買い物に行って参ります。マイロードはそのままお休み
になっていてください。可能な限り急いで戻ります 茶々丸 ”

しんぷるー…。

うん、そっか。

えっと…：チャチャゼロは別荘入れたままみたいですな。

…いつもみんなと一緒の居間で一人きり。
…静かです。

普段だってこの居間で、穏やかな時間をすごすコトは珍しくもあり
ません。

窓の外をのんびり眺めながらお茶したり、それぞれが好きな本を読
んでいたり。

ワタシ達の日常が賑やかなのは確かだけれど、ゆったりした時間だ
って大切にすごしています。

でも一人きりの静寂は…きらいだな。

そっか、麻帆良に来てから15年。

ここ2年は千雨ちゃんに茶々丸ちゃんもいました。

それ以前の生活よりも、ずっと安定した日々を暮らしています。

ここの生活は、常に誰かと一緒にいました。

どこかに行くにも、なにをするにも、常に誰かと一緒。

キティといつも一緒なのは当然です。

千雨ちゃんはどこでも付き従ってくれています。

茶々丸ちゃんはどこでも手助けしてくれます。

チャチャゼロは何だかんだ言いながら、結局いつもついて来てました。

賑やかで、穏やかで、しあわせな日常。

それは旅暮らしで得ていたのとはまた別の喜び。

：だから一人きりになると、こんなに寂しいなんて思いませんでした。

いつからこんなコト考えるようになったんでしょう。

さみしいなあ：

みんなはやく帰って来てぎゅーしてくれないかなあ：

キティにあのどんなトキよりも真剣な瞳で、愛してるって抱き締めたい。

千雨ちゃんのあの照れながらも真っ直ぐ見つめる瞳で、愛してるって抱き寄せて欲しい。

茶々丸ちゃんのテンパりを突き抜けて潤んだ瞳で、愛してるって包み抱いて欲しい。

みんなの位置探知を止めます。

それぞれがばらばらに動いていたのは、きっと急いでくれているからでしょう。

だからワタシも、ただ待つコトにします。

みんなが帰ってきて、起きてるワタシに驚くところを想像しながら。きつとすぐに謝ってくれて、それからぎゅーしてくれるの想像しながら。

ああ、不思議です。

なんだか、胸があたたかくなってきました。

みんなが帰ってきてくれるのを想像しただけなのに。

その当たり前が、すごくしあわせ。

早く帰ってきてください。

“おかえり” って、とびきりの笑顔でみんなを迎えますから。

「…ん？今…」

「おい、なんだ？買い忘れか？転移直前に気付けてよかったな」

「マスター？それとも何かございましたか？」

「いや…なんだか今、汀が凄く可愛く笑った気がする」

「「いや何故わかる（のですか）！？」」

第20話 はじめてのおるすばん＊（後書き）

第20話更新でした。

こんばんわ、grand病原です。

読んでいただいてありがとうございます。

いただいた感想のアドバイスより、考えてみた回。

まずお礼。

感想ありがとうございます。

とてもうれしい言葉をいただいちゃいました。

これからも汀達、最強一家の余裕でスルーストーリーをお楽しみくださいね。

で、今回のお話ですが、いただいたアドバイスを元に執筆してみました。

お楽しみいただけただしょうか？

まだ力不足で、中途半端かな？

これからかんばります。

出来はともかくとして、とてもためになるアドバイスでした。

これから様々なシチュエーション、試していきます。

ありがとうございます。

あ、第19話の意味不明部分、修正しました。

ご指摘ありがとうございます。

きつと眠気に負けたんだ。

ではgrand病原でした
すぐくねむいです、おやすみなさい

第21話 たまには茶々丸と帰り道

唐突だけれども、ワタシの考え方がいつも正しいなんてコトはありえませんが。

それどころか、愛し合い繋がっている大事な相手、キティを怒らせてしまうコトだってあります。

まあそんなのわざわざ言うほどのコトではない、至極当然ではありますけど。

「はい、さようなら」

ワタシとキティは、その魂までもが永久に溶け合い混じり合う関係とはいえ、それはお互いの全てを認識出来るというコトではありません。

明確な違いがあるからこそ“溶け合い混じり合う”コトが出来るのですから、それは逆説的に“永久に異なる存在”である証明になるのでしょうか。

「ごめんなさい、もう行っていにかしら？」

ワタシはワタシ、キティはキティ。

当然です。

確かにワタシはチート美少女でナルで自分大好き自信たっぷりですが、キティに向ける愛は完全に突き抜けた別物です。相手がキティだから愛しています。

「何回も言わせないでちょうだい。断るわ」

チート美少女、汀はキティだから愛しているのです。

意見が違ふトキがあるのも当然です。

別々の行動をするコトだって当たり前です。

だって相手は自分とは違ふ存在なんですもの。

それは千雨ちゃん、茶々丸ちゃんも同じコト。

「貴女の新聞は読んでいないわ。家族を載せる気もない。もういいかしら？ 朝倉和美さん？」

だから切なくなんて、ないっただけなんですもん！

キティと千雨ちゃんと茶々丸ちゃんが、3人での買い物中にパパラツチされたのなんか何とも思っていないんですーだ。

撮られた写真の中で3人が選んだのは、ワタシのための物だって知ってますもんね。

写真の3人が素敵な笑顔なのは、ワタシのコト考えてくれてるからだって知ってますもんね！

：でもこの写真だけ見ると、やっぱりちょっと寂しいです。
やだなあこんな気持ち。

キティが好きすぎるから。

千雨ちゃんが好きすぎるから。

茶々丸ちゃんが好きすぎるから。

側にいないと、すぐ寂しくなっちゃいます。

遠くで楽しそうにしていると、すぐ切なくなっちゃいます。

ねえ、こんどワタシとも一緒に写真撮ろうよ？

「あ、はい、マスターも千雨さんも当然気付かれていました。ただ、わたし達の容姿ですと見知らぬ男性に無断で撮影されるコトもままありますし、別段撮られて困る状況ではありませんでしたから。なにより急いで帰るつもりでいましたので放置しました。それがまさか朝倉和美さんだったとは予想していませんでした」

放課後の帰り道。

今日は茶々丸ちゃんと2人で帰ります。

もちろんおてきゅつとね。

「まあ認識阻害的にそろそろ盛り返して来る頃だから仕方ないのかもねー。定期的にきっちり拒否してるのに、しばらくするとそんなコト忘れたみたく付け回し始めるもんね」

話題はクラスメイトの朝倉和美について。

彼女は麻帆良報道部に所属する噂好きさんです。

「認識阻害ですか…。取材を拒絶をしても彼女の興味は尽きた訳ではない。次第に膨らみ、いつしか此方の拒絶を忘れたのかように行動を再開する。よくある類いの認識阻害が後押しした事例ですね」

彼女はワタシ達の関係や生活を記事にして報道したいと定期的に主

張します。

確かにワタシ達は、ジャンルの異なる美少女揃い。
出掛ければ、それがどこでもすぐ注目を集めますからね。

「ふわふわの金髪、鋭利に輝く瞳、手折れそうな身体、おとぎの国の美少女キティ。さらさらの髪、くりくりつり目、理想のスレンダー体型、全女子が羨む美少女千雨ちゃん。鮮やかロング、優しい眼差し、女の子の理想のボディ、パーフェクトスタイル美少女茶々丸ちゃん。そしてその中心にいて、なおも輝くチート美少女汀!!! なるほど確かに、記事にしたらそりゃあ売れるよね」

有名になるとか、全く興味がありませんが。
じつにめんどーです。

茶々丸ちゃんに体を預けちゃえ、だきつ。

「:ありがとうございます、マイロード。マイロードからいただいたこの身体は、わたしの自慢です」

茶々丸ちゃんは謙遜しませんよ。

それは拵えたワタシを貶めるコトに繋がりますから。

ワタシに愛されている自覚もありますしね。

腕をぎゅーされて歩きにくいだろうに、むしろ近づくように歩幅を
合わせてくれます。

えへ、うれしくてもっときゅっとしちゃう。

「ふふーふ、ワタシも好き。でもそれは心が今の茶々丸ちゃんだからだよ。その身体の主が茶々丸みたいな子で、ワタシも自慢だね」

「……いいえ、マイロード。嬉しいお言葉ですが、す、少し違いま

す」

んお？

立ち止まって見つめられました。

ん？とりあえずぎゅーで密着、見上げます。

あ、照れてる。

うれしいコト聞けそうだから後押ししー。

「なに？ちゃんと言ってみて？不足なく伝えて？」

覗き込んでくる瞳が想いに灯る。

溶かされそうな眼差しが愛しい。

「イエス、マイロード。…この身体も、この心も、この魂も、わたしの主は貴女ですマイロード。わたしはマスターにお仕えする従者です。誇りと自覚、責任と感謝を持ってお仕えしております。それでもこの魂が貴女を愛するコトを、総てを捧げるコトを渴望するのです。マイロードとマスターが決して別たないからこそ、主張出来る想いですが、それがわたしの確かです。マイロード…こんなわたしですが、貴女を愛していると言って良いですか？」

うん、もちろんです。

だってワタシがそうしたのですから。

キティの従者として0から造り上げたのに、ワタシを愛するように育てました。

不合理な、矛盾した行いです。

でもだめ。

ワタシの愛するキティを、ワタシが愛せもしない程度の存在に任せるなんてだめ。

「うん、いーよ。いいんだよ。茶々丸ちゃんを感じたコト、ワタシはうれしいよ。ワタシとキティのための茶々丸ちゃん。ワタシだけのモノの茶々丸ちゃん。どちらも確かに茶々丸ちゃんなんだね。うん、茶々丸ちゃん、これからずっとそばで、愛していると言っ
ね」

でもね、愛するキティのためだからって、それだけで人を愛するなんてむりです。

だからね、茶々丸ちゃん。

産まれてきたのが茶々丸ちゃんによかった。

産まれてきてくれてありがとう。

茶々丸ちゃんできてくれてありがとう。

茶々丸ちゃんを愛しています。

茶々丸ちゃんだから愛したんです。

……んっ、ちゅっ…ちゅっ…

「で、なんで今日はキティに千雨ちゃんがついていったの？」

「昨晚将棋をモチーフにしたTVゲームで、マスターは千雨さんに3連敗しました。そしてそのリベンジに将棋部の部室を貸し切りまして」

「えー…。ウチでやればいいのに」

「決闘だそうです。マイロードにおねだりする権利を賭けた、と。おのずと相応しい場所を用意するコトになりました」

「聞いてないし…」

「わたしはマイロードと2人で帰れますので、既にご褒美をいただいたようなものです」

「あら策略家。ふふーふ、じゃ、しっかりごほうびあげなきゃね。早く帰ろっ」

「イエス、マイロード」

第21話 たまには茶々丸と帰り道（後書き）

第21話更新でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

なんてコトない帰り道回。

本作品ってこんな日常を綴るのがメインなんです。

あまりイベントばかり起こさず、なんてコトないイチャコラな日々がメインの小説ですよ。

つまりgrand病原が茶々丸とイチャコラしたかった…だけ…なんです。

原作読んでネタ考えてたら、茶々丸ちゃんの健気さについて…

あと、マイロードとマスター、主を2人も据えるのって、実際どうなの？と思っていました。

今回はそのへんのフォローになればいいな、とも思います。

とてもうれしい感想をいただきました。

試行錯誤の結果が評価されたのだと思うと、つつい小躍りしちゃうほど喜んじゃいます。

すごく嬉しかったです。

ありがとうございます。

これからがんばります！！

では g r a n d 病原でした
おやすみなさい

第22話 衝突？スルー？

じゅーじゅー、もぐもぐ。

「茶々丸、タレを取ってくれ」

今日の晩ごはんは焼き肉です。
うまうまー。

「はい、マスター。つけすぎないで下さいね」

魔法世界のお肉ですよ。

ドラゴン焼き肉です。

高級食材ですうまうま。

「あ、エヴァ、岩塩買ってみたんだ、試してみてくれよ」

ぱっぱと狩って来ました。

転移がワタシ、ハントが千雨ちゃんとチャチャゼロのお仕事です。

「アレ、オレが焼イテタモツハドコダ？誰か食イヤガッタノカ!？」

キティ、茶々丸ちゃんは近場の街で他の食材を揃えてくれました。
旧世界にはないものばかり。

今夜の食卓は魔法世界ディナーです。

「ほら汀、コレもコレも焼けてるぞ。せっかくだし岩塩も試してみ
てくれよ」

もぐもぐ？

魔法岩塩ですね。

きつと悪魔的に美味しいに違いありません。

「千雨ちゃん、千雨ちゃん。あーん…」

あーんしてもらえば、公爵悪魔級に美味しいに違いありません。
うれしいしね。

「つとに、仕方ねえな…。ほら、あーん…」

あむ、もぐもぐ…美味しい！！
公爵悪魔もかしづく美味しさ！？

「あ、千雨貴様！！汀、コッチも食べろ。ほら、あーん…」

キティは全くもう、かわいいんですから。

あーむ、もぐもぐ。

「ん、ありがとう千雨ちゃん、キティ。悪魔的に美味しいよ。ふははー、な美味しさ！やっぱりお肉とかはあっちで手に入れたほうがいいね」

もつと焼きましょう、そうしましょう。

まあ焼くのかは、千雨ちゃんと茶々丸ちゃんの役目ですけどね。

「あ、姉さん、モツこちらでは？鉄板の端で炭になっています」

「ア、クソッ。サケニ夢中デ焼キスギタ。マアイイ、妹、ソレ取ッ
テクレ」

あ、チャチャゼロなんてモノを食べる気ですか…
的確な表現で、炭です。

まっくろ…

「うわあ、チャチャゼロそれは止めたら？モツまだあるんでしょ？
ぜったい美味しくないよ」

「そうですよ姉さん、新しく焼きますから少し待っていてください。
コレは捨てますね。」

ですよ、流石にそんな炭は美味しくないですよ。
わざわざ食べるのですから、美味しいモノを食べませんと。

なにせワタシもチャチャゼロも、食事に必要性はありません。

ワタシは不朽不滅の魔女トバリ。

飲まず食わずでも、摂取するモノがなに一つなくても、活動に問題
は一切ありません。

摂取、補給、供給、それら一切なくたって、なに一つ不自由しませ
ん。

チャチャゼロはキティの魔法人形。

キティから魔力供給さえあれば活動出来る存在ですし。

とはいえチート美少女汀としては、美味しいモノいっぱい食べたい
のです。

女の子ですもん、甘いいっぱい食べたいのです。

ワタシは必要もないのに、楽しみのために食事をしています。
ならばなおのコト、食べるのなら美味しいモノを、です。

そしてなにより、ごはんは家族でたのしく、ですよ。

今日の晩ごはんは別荘を利用しました。

狩ったドラゴンの転送先を別荘にしましたからね。

ごちそうさま後のていーたいむも普段よりもっとのんびりもーどです。

「んー…。ごはんもおいしーし、お茶もおいしーし、家族はそばにいるし。コレってしあわせだね」

千雨ちゃんと茶々丸ちゃんもすでに食事の片付けを終えていて、一緒にのんびりしています。

チャチャゼロも今はお茶。

「当然だ。私達が側にいるんだ。いつだってお前には幸せでいてもらうさ」

「ああ勿論だな。一緒に目一杯幸せに生きるって誓ったんだから。」

「マイロードの幸せのため、いつでも全力でお仕えます」

「う……。素敵すぎる、みんな素敵すぎるよ」

なにげに口をついて出ただけの言葉に対し、愛に満ちたこの返事。
もうめろめろです。

隣に座るキティの肩に頭を預け、千雨ちゃんと茶々丸ちゃんに笑顔
をむけます。
らぶー。

「トコロデヨ、魔女。最近ハ魔法使イ連中ガウルサイラシイジャネ
エカ。ソロソロ殺ルカ？」

最初こそ「砂吐ク、砂糖吐ク」とワタシとキティのイチヤコラを擲
揄していたチャチャゼロも、長年の生活で十分なスルーちからを獲
得しています。

ふふーふ、すっかりなかよし家族ですね。

「ああそうなんだよ、チャチャゼロ聞いてくれ。この間、汀と2人
で帰って来てたらよ、アイツら汀の目の前で私を引き抜こうとしや
がんだよ」

あー、あったありました。

名前とか知らない人でしたけど、一方的にまくし立ててましたよ。

「なに？ 本当か汀？」

言ってなかったでしょか？

まあ話題にする程のコトでもありませんしね。

最近ちよくちよくあるんですよね。

「ん、ホントホント、呆れるよねー。ワタシのコト見えてないのか
と思っちゃった。手、繋いでたのにね」

千雨ちゃんに手を伸ばします。

あ、ふふーふ、にぎにぎ。

恋人繋ぎしてくれました。

千雨ちゃんらぶー。

「行動が露骨過ぎますね。なにかあったのでしょうか？」

あ、茶々丸ちゃんがちよっとうやらましそうかな。

じゃあ茶々丸ちゃんには、お風呂のトキにがんばってもらっちゃい
ましょう。

「戦争ナノカ？ヤットココノフザケタ魔法使イドモヲ殺レルノカ？」

期待してるトコ悪いけど、今のチャチャゼロとともに殺り合える
相手なんて、麻帆良に存在しませんよ？

「まさかだよチャチャゼロ、まだ戦争はダメ。今回の卒業くらいま
ではいるよてー」

なんだか最近のきな臭さで、早めに出て行くべき？なんて、少しし
か考えてません。

麻帆良は便利な土地ですけど、魔法使い皆殺しにしたらその都市機
能は立ち行かないでしょう。

彼等と戦争になれば、どのみち旅の再開って訳です。

経営とか統治とかワタシ達はやらないので。

なら面倒増える前に出発しちゃうでしょうか？と、たまに考えてま

す。

たまに、少しだけですよ？

「おいおい“まだ”って、出ていく前に殺るのかよ？そりゃ私も麻帆良は嫌いだし、借りもあるからな、いざってなったら賛成するぜ。けど汀のコトだし、今日みたいに黙って行くもんかと思ってたんだが…違うのか？」

それでもいいんですけどね。

てか、それがらくなんだけどな！。

近衛学園長がちょっと後先考えずによくばった弊害があるのです。彼、派手に宣伝しすぎちゃってるんです。

「ふん、連中が黙って私達を見送ると思うか？考えが甘いな千雨。私達は麻帆良の宣伝塔だ。伝説として語り継がれる程の私達を、サウザンドマスターが麻帆良へ封じた。近衛学園長は世界にソレを誇示した。正義強し、麻帆良頼もし、とな。まあ実情はコレだな。よって、出て行くなど連中は認めないだろうし、黙って行けば追跡があるだろう。面子の問題だからな、実情を知る近衛学園長とて半端は出来んさ」

そうなんですよね。

最初の数年の根回しとか宣伝効果とかが上手くいったらしくて、彼調子にのっちゃったんですね。

「ならば最初からある程度戦闘。例えば近衛学園長との談合のうへの戦闘など後の交流の余地を残した、建前上の事件を起こしてから出奔する訳ですか？」

お、茶々丸ちゃんやりますね。

やっぱりいまごほうびです。

キティと千雨ちゃんに目配せ、ゆっくり離れて茶々丸ちゃんの膝に座ります。

んー、素敵な座り心地。

「：よっと、ありがと茶々丸ちゃん。よしよし冴えてる茶々丸ちゃんには、ぎゅーしてあげましょう、ぎゅー。：で、まあそのトキ次第って考えてるよ。結局さ、ウチに敷いた結界、わざと構築も強度も弱く敷いた1番外のやつすら、彼等は抜けてないでしょう？なんか今まで受けた被害って、悪口言われた程度じゃない？もう放つといてもいいかなあって」

ふふーふ、茶々丸ちゃんも身体に腕をまわして抱き止めてくれます。らぶー、ってキティがすこしヤキモチしてますね。

もう、ワタシはキティのコト大好きですよ？

そんな顔じゃなくていいのに。

「：む、汀、いやまあいいか。とにかく、連中の出方次第だ。今度来るらしいサウザンドマスターの息子とやらも同じだな。明確に敵なら殺ればいい、半端なら放置でいいさ。所詮雑多だからな、気にするコトもない」

そうなんですよね、結局。

彼等が仮に殺意を持って来たトコロで、ワタシ達には何も出来やしません。

「ああ分かった、了解。ま、ココ便利ではあるしな。旅開始までは多少は配慮しとくか」

だからって、されるがままなんてありえません。

それは明確な敵対、排除対象です。

果たしてどうなるでしょう？

「わたしはお2人に従うまでです」

なるべく面倒ないのがいいんですけどね。

愛するキティと、愛する千雨ちゃんと、愛する茶々丸ちゃんと、あとチャチャゼロのみんなで暮らす。

「ドウセ殺ルコトニナルト思ウゼ。ダカラマアイマハ我慢シテヤル」

おだやかで、さわがしくて、しあわせに満ちていて。
ワタシ達は、ずっとずっとそうしていきます。

「おっけー。じゃあ、お風呂行こっか」

邪魔はゆるさない。

誰にも、何にも邪魔はさせません。

よし！

今日はワタシが洗ってあげま、ひゃん！？

あ、ちよっとキティ？

え？もしかしてさっき離れたコトまだヤキモチしてくれてるの…って、千雨ちゃんも！？

いやいや、だから今日はワタシが…ううん!?
ちよっ…あん!?…まだ話してる…ふぁ…にい…

…んふっ!…茶々丸ちゃんも!?

第22話 衝突？スルー？（後書き）

第22話更新でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいてありがとうございます。

最近の更新、ずっと深夜ですね。

ごめんなさい、もちよつとなんとかがんばります。

日常は続くよ回。

じつは、全然違うお話の予定でしたが、今後について感想をいただき、いい機会なのでこの内容になりました。

前も似たような話し出しましたが、汀達の麻帆良へのあたりは、明確に決まっているではありません。

つまりgrand病原も明確に決めていない訳です…

あれ、コレってだめだめ発言ですか？

ま、まあ現時点での予定では、原作イベントを適度にスルーして適度に裏から解決するつもりです。

裏からってか、結果解決させました、みたいな感じかもです。

ネギさん登場まで、まだしばらくありますので、時間を使って考えますね。

あ、茶々丸捏造そろそろやりませんと。

grand病原は日常回好きなので、意識しないと本筋が進まない…。

もっとかんばります！！

今日も感想いただきました。

ありがとうございます。

作品の今後にご意見いただけるのって、期待していただいてる実感があつてとてもうれしいです。

これからどうなるのか、grand病原にもまだ不明瞭ですが、正直ネギさん次第です。

汀達はスルー姿勢を外さないでしょうから、ネギさんががんばって絡んでくれれば！

ネギさんの活躍に乞うご期待？

：さくつと殺されたりして。

いやいや。

ではgrand病原でした
おやすみなさい

第23話 人造人間？ロボ？ その1＊

「ふむ、いいな、よく似合ってる。汀が魔女らしい格好をしているのを見られるのは、1年に今日だけだから、より可愛らしく見えるな」

ワタシはいま、濃紫のトンがりぼうしに風もないのに揺れるローブを纏っています。

左手には大振りな箒。

絵に描いたような魔女スタイルです。

でもなぜかローブの下はミニスカートにガーターストッキング、ヒールのないブーツ、飾り紐でアクセントされた白いシャツです。

まあかわいいからいいですけど。

美少女にふさわしい、きゅーと魔女です。

「ホントに？ふふーふ、うれしい、ありがとキティ。キティもその格好、ギャップがすごくいいよ。凛々しいのにかわいい！」

そしてキティは立派なスーツ姿。

それも中世っぽく、フリルで彩られたシャツが襟や袖から見え隠れしています。

そして襟が長く、常にたなびく漆黒のマント。

ゆるくまとめられた自慢の金髪、普段は隠しているはずの牙。

それはまさに吸血鬼。

くらくらするほどの魅力です。

ああこんな吸血鬼キティになら、奪われてしまいたいです!!

「でもやっぱり見た目大事だな。なんつーか美少女すぎて、魔女っ娘って感じだけど、うん、めっちゃくちゃ似合ってる」

横に控えていた千雨ちゃんも褒めてくれました。
てれり。

でもやっぱりそうだよね、ワタシの格好魔女っていうより、アニメとかの魔女っ娘だよね…

ねえミニスカートが悪いんじゃない？

でも、かわいいからよしとします!!

「もう!ほめすぎだよ!でも、ありがとう。千雨ちゃんのスーツ黒猫はやっぱり使い魔役?すごい似合ってるよ、かわいい!髪は魔法?」

そんな千雨ちゃんは、かちつとした黒のスーツ姿です。

ベストにリボンタイ、胸ポケットに白のハンカチーフ。

金のチェーンはきつと懐中時計ですよね。

そしてその頭には黒のネコミミ。

それにともなつて髪も黒く変わっているのです。

あ、後ろ側に尻尾もあります、黒の猫尻尾。

もしかしてもしかしてワタシ専属、黒猫執事さんでしょうか。

うわー、こんな千雨ちゃんに仕えられたら、一日中愛でて愛でて愛でちゃいますよ。

「ああ、髪は幻術の類い、猫耳が魔法道具なんだ。で、やっぱ魔女の侍従ったら黒猫だろ？ エヴァには絡繰ともどもからかわれたけど、やっぱ私だって…な」

照れ気味の千雨ちゃんだけど、すっごく似合ってますよ！

はあ、ぎゅーしたい！！

でも衣装にしわが寄ったらだめだし、いまは手を繋いでがまんがまんです。

千雨ちゃんのおててぎゅー。

「からかう？ すっごく素敵じゃん！ かつこいいよ？ 茶々丸ちゃんの色違いふさふさ耳尻尾も、ぎゅーしてもふもふしたいくらいだしね！」

そして茶々丸ちゃん。

こちらは千雨ちゃんの色違い、耳と尻尾も若干違います。

全体を灰色で装ったスーツ姿ですね。

そしてお耳と髪、ふさふさ尻尾も灰色。

うわーうわー、すっごいかわいいです！

もじもじしてる、もふもふ茶々丸ちゃんすっごいかわいい！

この耳尻尾は、狼でしょうか？

魔女の執事が黒猫だから、吸血鬼の執事は灰色狼なんですね。

ライカン茶々丸ちゃんですね。

「あ、ありがとうございますマイロード。…少し、その恥ずかしいですが、お気に召していただけたなら幸いです。…マイロードもとても可愛らしくていらっしやいます」

ですよね、やっぱりこの魔女っ娘、可愛さ重視ですよね。そもそもワタシ自身の見た目が、幼げな成長しきらない美“少女”だから、魔女スタイルに装ったとしても、どうしたって魔女っ娘になっちゃうんですよね。

でもま、ほめられたし、問題なしです。

「ふふーふ、ありがとね。あとでもふもふさせてよ。あ、でもからかわれるって？こんなに素敵な執事さん達なのにな？」

かわいがられる、じゃなくですか？
だってこんなにも素敵な執事さん達。
はあー、抱き寄せてほしいです。

「なに、簡単なコトだ。こいつらにはもっと相応しい役があるだろう？」

キティがちらりと横目で促しますけれど…
うーん？

あ、もっと女の子っぽいのがいいってコト？
確かにワタシ以外、男装っぽいんですね。
だから“抱き寄せて欲しい”なんて思ってしまったし。
てれり。

「だからなんで従者2人で被らなくちゃいけないんだよ。それにあんなのじゃ、どうやっても汀の隣には立てねえだろうが!!」

いや、隣に立てないってよっぽどですよ？
えっと…へどろまじん？とか？

「わたしもマイロードに褒められるほうが…」

こんなにいい子な茶々丸ちゃんを、褒められないような格好？

あ、必要以外の露出！？

いやないですね、ちがうかー。

「んん？ふさわしくて、かぶってて、ほめられない？…なにそれ？」

いや、全然わかりません。

おてあげ汀。

「簡単だ、フランケンシュタインの怪物だ。こいつらは汀の造った人造人間なんだから…ん？汀は魔女であって人ではないし、こいつらもどう転んだトコロで人間ではないな。魔女製…侍従生物？」

ああ！！

なるほどフランケンシュタインなら、確かにハロウィンぽいです！！

てか侍従生物って…

まああんな風に言うてはいますが、千雨ちゃんとキティががんばれば、かわいいフランケンシュタインの怪物だって出来そうですね。

なにセワタシ達の衣装は、全部キティと千雨ちゃんの手作りなんです。

あと茶々丸ちゃんもお手伝いしたらしいですね。

この間の、寝こけて置いてきぼりになってしまった買い物は、この材料を買いに出していたそうです。

うんでも、いまの執事さんスタイルすごくいいから、やっぱりコレで正解ですよ。

すごくワタシ好みです!!

「いや呼び方なんざどうでもいいだろ!! フランケンシュタインなんざお断りだ!!」

「侍従生物：わたしには褒め言葉です」

「そうか!?! よく考えろよ絡繰!!」

そんな訳で今日はハロウィンです。

今日は年に1度の、チート美少女汀が魔女っぽい格好をする日です。

ふふーふ、キティも千雨ちゃんも茶々丸ちゃんも、そしてワタシだって、すごくすっごくよく似合ってますよね。

でも1番は…

「オイ魔女、チラチラ見テ笑イ堪エンノ止メロ。イツソ笑ヨ!」

ぷぷ…そうですチャチャゼロのが1番だと思っうのです。

「ふふっ…あはははははっ!! チャチャゼロなにそれ!?! ジャックオーランタンってやつ? むしろチャックオーランタン!?! あははははははっ!!」

頭にカボチャランタンのかぶりモノしたチャチャゼロすごいかわいい！！

ランタンの口部分からチャチャゼロの顔が覗く、コミカルなかぶりモノがすごいかわいい！！

あはははははっ！！

似合ってる、似合ってますですチャチャゼロ！！

「テメエ笑イスギダロ！！」

あはっあはははっ！！

許可したのチャチャゼロでしょ！！

ーいらっしやいませ！只今お菓子のサービス中です！！ー

ーランタン作りイベントやってまーす！ー

ーイタズラ避けに飴玉大安売りしてます！ー

ハロウィンで盛り上がる麻帆良を歩きます。

あちらこちらにランタンやコウモリの飾り付け、そこかしこでコスプレして練り歩く人たち。

出店や露店、屋台に呼び込み、お菓子におもちゃ、こうして歩き回るだけで、目移りしちゃいます。

麻帆良はやっぱりイベント大好きですね。

「トリッ 《べしっ！》 「飴玉くれてやる、帰れ」

しかしまあ、数メートル歩けば恒例のセリフと共に湧いて出る男達にはうんざりですよ。

既に一袋分以上の飴で、千雨ちゃん茶々丸ちゃんが迎撃してくれています。

「…いい加減鬱陶しいな。なんとかしたいが、監視が邪魔か」

ワタシ達がいろんな出店や屋台を覗いて歩けば、常に注目的です。お店側にもたくさんたくさんサービスしてもらっちゃってます。

チャックオーランタンを抱えて歩くワタシなんか特に、行く店行く店でお菓子もらってばかりです。

「はいマスター、市街地に入ってより、4人が尾行しています。今からなにがしか手を打てば、彼等が行動を起こすでしょう」

最近の連中は、血気盛んっぷりがすごいですからね。

かるーく認識阻害を敷いただけで、警告されかねないですよ。スプリングフィールド2代目のコトが、下っぱ連中にも通達されてきている影響でしょうね。

「汀なら連中に気付かれねえで何か出来るんじゃないのか？」

家への干渉や襲撃も増えていますし。
軒並みシャットアウト！ですけど。

「うんできるよー。やる？コレもイベントのうちかなって思ってたんだけどね」

まあ今日はせっかくのハロウィン。

連中のコトはスルーして楽しみましょう！

「む：汀がいいなら構わないが、男どもは明らかにナンパ目的だろう？不快ではないのか？」

「ん？全然たのしーよ！千雨ちゃんと茶々丸ちゃんが撃退してくれるの、何回見てもたのしい。さすが執事さんだね！」

「「そっちか（ですか）：」」

えー？

だって何度見ても素敵な執事さんなんですもん。

その胸に抱き寄せられて、悪者から守ってもらう。

想像しただけで、うっとりです。

ふふーふ。

「：ふん、なるほどな。汀、チャチャゼロは千雨に渡せ、腕を組むぞ。ほら早くその菓子も食べてしまえ」

とか言いつつ、チャチャゼロを千雨ちゃんへぽいとしてしまうキティ。

おやおや？

ワタシが千雨ちゃん茶々丸ちゃんにうっとりしているのが、お気に召さなかったんですね？

もー、キティかわいいなあ！

「つと、チャチャゼロ、千雨ちゃんごめんねー。ふふーふ、ぎゅー、ねえいいの？ 街中だよキティ？」

ぎゅー、つと身体ごとキティに抱きついて問いかけてみます。

キティは他人の前でイチャコラするのを避けますからね。

2人でデートのトキだって、手を恋人繋ぎするくらいです。

その分、家ではべったりです。

ふふーふ、キティらぶー。

「うるさい。あまり私を蔑ろにするなよ汀。いつそ拐って閉じ込めてしまおうか？」

キティは足を止めて、腕にくっついたワタシと眼を合わせました。

その格好にふさわしい、悠然とした眼差しは、それでも確かな愛を滲ませて訴えかけています。

「…うんいいよ、閉じ込めて。ワタシを縛って。壊れるくらい愛して。キティにならなにされてもいいんだ。でもお世話係りに2人はつかってあげてね」

あ、千雨ちゃんと茶々丸ちゃんが人目を遮ってくれていますね。

ジェラシーな眼を、ちらっと向けつつワタシのために滅私の行動さすが必要です。

あとで、ごほうびあげなきゃ。

「ふん、従者の心配とは余裕じゃないか。言ったな？覚悟しておけよ、今夜のお前は囚われた魔女だ。私に絡め取られた哀れな魔女だ。その身体に、心に、決して消えぬ痕を刻みつけてやる」

キティがワタシを抱きすくめます。

強い瞳。

ワタシの好きなキティの瞳…

「はい…ワタシの吸血鬼さま…」

ワタシは従順に瞼をおろしました。

…んちゅっ…ちゅむ…あむ…

ずっと閉じ込めていてください。

ずっと囚えていてください

強くされても、きつくされても、すこしも苦ではありません。

だって汀はキティを愛していますから。

だからどうか…

身勝手なのはわかっていただけますけれど。

それでもお願いしてしまうんです。

ワタシを縛り囚えるために、ワタシだけを見つめていて下さい。どうか愛しいその瞳を、他には向けたりしないで下さい。

キティと腕を組み、千雨ちゃん茶々丸ちゃんを従えたまま散策を再開です。

そうしてしばらく歩いていると、聞き覚えのある声に呼び止められました。

「おやおや目に毒だね。そんな仲良しさん達、どうだ寄って行かないか？超包子、今日はハロウィンサービス中ヨ」

おや。

超鈴音とは珍しいです。

“いまさら”なんのご用事でしょうか？

「なあ絡繰」

「はい千雨さん」

「私だってエヴァが正妻なのは当然理解も納得もしてる。汀がいつだって私達も見えてくれているのも分かってる」

「はい」

「にしてもコレは…なあ？せつかくの魔女スタイル汀なのにな」

「不敬を承知で申し上げれば…実に羨ましいです」

「おまつ！？…いや、その通りだ。コレはアレだよな？特別なおねだりだって許されると思わないか？」

「先程人目を遮ったトキ、マイロードと目が合いました。その視線の意味から、おねだりは確実に了承されると思います」

「よしっ！！…あ、今日はバラバラな。個人個人で頼む」

「はい、わたしもソレで」

「オ前ラ…飽キネエナア…」

「汀に愛されるコトが存在意義だからな（ですから）！！」

第23話 人造人間？ロボ？ その1＊（後書き）

第23話更新でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいてありがとうございます。

一月遅れのハロウィン回。

そろそろ茶々丸捏造に入ります。

なんだか捏造祭りが始まりそうです…

時期遅れのハロウィンネタは、もとより茶々丸捏造に絡めるつもりでいました。

せっかくだし丸一月遅れでお送りします？

いや、続くんですけどね。

実は、お気に入り、評価ポイント、共にじわじわ増えてきています。
まだまだなgrand病原ですが、これからがんばります。

：いえ、昨日で連続更新が切れてしまったので、気合いを入れ直した訳です、はい。

ではgrand病原でした

おやすみなさい

第24話 人造人間？ロボ？ その2

ワタシ達が超鈴音と初めて接触したのは、今の中等部に入学する直前でした。

まだ3月、桜の頃です。

千雨ちゃん茶々丸ちゃんの教育？も一段落。

ワタシとキティはお互いへのご褒美として、久しぶりのデートへと出掛けた先の出来事でした。

そうあれは思い出すだけでも、身も凍るような出来事でした。

ええ、だって本当に久しぶりだったんです、キティとのデート。

別荘を使った教育？で、実時間約半年。

ワタシは千雨ちゃんに、ついで茶々丸ちゃんにべったりでしたから。

や、とても大事な時間だったんですよ。

キティをないがしろにしたつもりはありません、ホントに。

キティは耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、ワタシを支え、新しい家族を受け入れてくれました。

それは聞くも涙、語るも涙の『愛と愛とのその狭間物語』だったのです！

具体的には…受け入れたうえで、しばらくの間イチャコラを減らしてがまんしつつも、自分だけが正妻でワタシと対等であるコトを実

力行使含みで教育し尽くしたのでした。

あれ？あんまり耐えてはいない…かな？

とにかく、そんな生活が一段落し、待ちに待ったデートの日だったんです。

あははうふふ、と市街地を仲睦まじく歩き、お店を冷やかす。人目を避けて、ちゅーをして笑い合う。

普段は外でのイチャコラを控えがちなキティも、この日は咲き誇る笑顔で愛を囁いてくれました。

桜爛漫、愛絢爛です。

チョコよりケーキより、ずっとずっと甘々な時間だったんです。

そこへ彼女がやってきました。

キティを名指しで、なんらかの交渉を持ちかけて来たのです。

ですからええもう、キティのイライラがすごくって…

冷氣出てましたよ、冷氣。

舞い散る桜の花びらがキティに近づくと、一瞬で凍りつき垂直落下ですもん。

足元でピンクダイヤモンドダストするさまは、冷氣の強烈さを如実に表していました。

まさに、身も凍るって状況です。

でもでも、ワタシにはなーんにも影響ないものですから、なんともわかりやすいですね。

ふふーふ、キティらぶー。

とまあそんな出会いでは交渉なんか成り立つ訳ありません。

しかも彼女はキティとの交渉を望んでいたのです、キティだけとの。

いちおうワタシが交渉担当なんですけどね。

彼女はワタシに外して欲しそうでしたが、キティはワタシの手を離しませんでした。

もちろんワタシも。

当然ながらキティさん、ばっさり。

「黙れ」「殺すか」でしゅーりょー。

交渉以前の問題でしたとさ。

ワタシとしては、その後のデートに何にも影響がなかったので特になんとも思いませんでした。

彼女が去れば、すぐにキティも元通り。

笑顔爛漫、イチャコラ絢爛です。

まあ結局、このチート美少女汀を虜にして止まない、愛しいキティとのしあわせな1日でした、と。

超鈴音との出会いを思い返していると、自動的にキティとのしあわせな1日が浮かんでついにやにやしちゃう訳ですね。

きゃーきゃー！

キティだーいすきです！
てれり。

「これまで長かたヨ、ようやく交渉してくれると見ていいのかな？」

超鈴音が話しかけてきますが、飲食店なんだしまずは注文でしょう。

「あ、ハロウィンセット4人分で頼む。汀はホットウーロンだよな？
エヴァは？」

【汀、超鈴音製偵察機がブンブンしてる。録音に録画。ネットワーク機にスタンドアローン機に両方だな。どうしても交渉して言質が欲しいみたいだ】

千雨ちゃんは実に有能ですね。

注文も警戒もお任せです。

「ん、汀と同じで：いや、ふふっ、トマトジュース飲むべきか？」

【ふむ、なんだか私を指名してたんだっただか？断ったんだろう？】

あ、いやさつきはつい、素敵すぎるキティにうかれてたんです、はい。

超鈴音のご指名が断固キティなのも理解できる素敵さだもん、しかたないのです：よ？

「あー…さつき飲んでくれたじゃん。けっこう寒いし、ホットにしないよ」

【うん、何度かね。だって「エヴァンジェリンさんと話したい」の一点張りなんだもん。しつとー！だから内容聞かず断ってたよ。まあこうして店に誘われて応じるってなかったから、なんか勘違いしてるんじゃない？…と、魔法的な誓約契約の類いは展開出来なかったから好きにしゃべっても平気。電子系は千雨ちゃん、頼りにしてるよ】

魔法はワタシが、機械は千雨ちゃんが、僅かにもワタシ達の不利になるようなモノはゆるしません。

てか、最近の超鈴音は麻帆良連中とは別の勢力として成り立ってるっぽいので要警戒です。

「ふ…もういいのか？吸血鬼はコレだって言い張ってたじゃないか」

うう…さつきの発言をいじられてしまいました。

ええええ、日頃からキティに血を吸わせてるワタシが、はしゃいでトマトジュースとか…。

うう、はずかしいっ！！

【麻帆良の連中はどうしてる？】

警戒レベルを上げてますね。

そもそも麻帆良連中は王道な魔法使いが多いですから。

機械化電子化した魔法、精霊の類いは、専用の人員が担当しているようです。

つまりそれ以外の魔法使いは機械ダメさんばかり、と。

だからこそ超鈴音はチェックされてるのでしょうか？
最近はなにやら不審さを嗅ぎ付けられたらしいです。

もしかして麻帆良連中が対ワタシ達へと警戒を強化し続けていたから、彼女が引っ掛かったんでしょうか？ いやいやまさか。

「う…ごめんよー。ね？ いっしょにあったかいウーロン茶飲もうよー」

もうおねがいですから、あほのこ発言は忘れてくださいー！
キティにすぎりついてかわいくおねだりこうげきです！

ひっさつの、小悪魔うる目！

【付近で警戒中だね、遠見、遠聞、杖構えてるものもいるし。ハロウィンだからってやり放題だねえ。あと、超包子に着いてから、警戒レベル上がったね。コレは超鈴音もチェックされてたのかな？】

てかホントにすごいですね。

いや、秘匿秘匿…。

しむらーうしろー、って感じ？ 違うか。

「イエス、マイロード！！ 超鈴音さんわたしはマイロードと同じウーロン茶でお願いします！！」

ありゃ？

茶々丸ちゃんが釣れました。

てへ、ありがとう茶々丸ちゃん。
じゃあいっしょのだね。

【戦闘準備完了、ロックオン。彼等が詠唱すると同時に、魔法発動体を破壊できます】

ワタシが魔法的に、千雨ちゃんが電子的に、それぞれ警戒をおく場面では、キティと茶々丸ちゃんが制圧担当です。

今回はキティが交渉の主軸っぽいので、茶々丸ちゃんにお任せです。

ふふーふ、茶々丸ちゃんの武器は色々すごいんですよ。

麻帆良連中では、瞬きすら赦されないでしょうね。

さすがですね、自慢の子です！

「私もだ！！汀と同じ急須…でいいのか？とにかくそれで持って来てくれよ！！」

あ、やっぱり千雨ちゃんも釣れちゃった。

ふふーふ、かわいいなあもう。

これで千雨ちゃんもいっしょ。

てへり、うれしいなあ、らぶー。

【各ネットワークに侵入、領域確保。監視カメラ、超鈴音偵察機共に掌握した。周囲100メートル圏内のその他記録装置も…随時掌握。スタンドアローン機も…よし掌握。戦闘オツケーだ】

ワタシが任せるだけあって千雨ちゃんの電子戦能力は、もういっそ呆れる程です。

ワタシでも現状じゃ勝てないですからね。

あ、ワタシ達はみんな科学分野もくわしいですよ。

ワタシはもちろん、キティもです。

これからも10年、100年、1000年、それ以上にと、終わりにくなく生きるのに、新しく進化する技術を避けるなんてありえませんかよ。

ワタシが千雨ちゃんにその方面で勝つには、魔女としての本気で対峙しないとけませんね。

つまり、まあ間違いなく現代の技術で、千雨ちゃんに打ち勝てる相手はいません。

事実、この麻帆良で最高と謳われる超鈴音ですら、相手にもなりませんから。

「あ、こら、黙れ侍従生物どもっ！！汀は私に言ったんだ！！おい超鈴音！！私と汀、こいつら2人、そうやって別けて持ってこい！」

あは、もうキティってば。

ぎゅーだよ、ぎゅー。

【うむ。茶々丸、攻撃は探知不可能な武器を選択しろ、攻撃魔法の詠唱が始まったら即やれ。千雨は警戒続行、僅かにも痕跡を残すな。汀、超鈴音との交渉はやはり私か？】

キティ司令官クールです！

口調がね、ワタシよりキティのほうが指揮向きですよ。

かっこいいキティも見られますし。

てれり。

「…………とりあえず、注文承たヨ。サービスするから、本当に後で頼むヨ」

【どうかな？多分だけど注文と一緒に通信装置持ってくるんじゃない？キティの分しかなかったら、足りないって言ってやりなよ。まあ彼女もそこその存在みたいじゃない。話聞いてみよう】

さてはてどうなるんでしょうか。

超鈴音、今のところマイナススタートですよ？

彼女、ウチに向けて偵察機を散々飛ばしちゃってますからねえ。ばっちりシャットアウトしてますが。

なんにせよ、交渉スタートです。

あとハロウィンセットもです！！
だってすごく美味しそうですよ！！

【オイ、テメエラ、オレノ分ハ？】

【大丈夫です姉さん、わたしとご一緒しましょう】

【お、姉妹愛だね。うんうん、チャチャゼロはしっかり言い付け守ってるし、帰ったらご褒美だ】

【ヨッシャー!! 魔女、コノ間ノワイン頼ムゼ!!】

【おけー。だからココから人形のフリでおねがいね。バトルになったら指示出すけどそれまでは、ね】

【任せやガレ!!】

第24話 人造人間？ロボ？ その2（後書き）

第24話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいてありがとうございます。

超鈴音置いてけぼり回。

はい、茶々丸は汀一家製でした。

汀と千雨のチート能力も、そろそろ詳細が出てきそうですね。

これから無茶な能力が色々出てきますが、寛容に受け止めてください、ホントに。

ではgrand病原でした
おやすみなさい

第25話 人造人間？ロボ？ その3

テーブルにならぶ4つの蒸し籠から、ほかほかと湯気が立ち上ぼります。

コウモリでアレンジされた、フタの持ち手がかわいいです。

ぱかっと開けば、色鮮やか。

ひとくちサイズの小籠包が、ハロウィンに装っています。

カボチャ型にオバケ型、ドクロ型に棺桶型まで！！

うわー！すごくかわいい！！

星や月の形にくり貫かれた野菜蒸しも一緒に入っていて、すっごく賑やか色とりどりです。

食べるのがもったいないくらいですよ！！

それぞれの小籠包はキッチンと顔も描かれていて、蒸したてのぷりぷり感がコミカル。

ほかほかと、とっても美味しそうな匂いなのが、ニクイですね。

「ではお手を合わせてー」

でもごめんね、かわいい小籠包たち。

ワタシは魔女。

あなたたちをペロリといただいてしまいます。

チート美少女汀は美味しいものが、だいすきなんですもん。

こんなにかわいいんですから、きっと美味しいに決まっていますよ。

「「「いただきます！」「」」」

あー…あふっ！？あちっ！熱いっ！？

あ、でもやっぱり美味しい。
うまうまー。

いや、実に結構なお手前でした。
ほんとにおいしかったー。

あーん…とか、おべんと付けて…とかイチャコラしながら食べました。

まんぞくまんぞくです。

一方の超鈴音は、ワタシ達にさりげなく通信機を渡すとそそくさ店舗の奥へ。

まあワタシ達が食べ終わるまで、交渉なんか始まる訳がありませんが。

〔大変ご好評いただきなによりだヨ。…でも少しくらい遠慮してほしいネ〕

おかわりもしちゃいましたよ。
いや、おはずかしい。

あ、2つ目はキティと半分こでしたからね？

「おいしかったねー」

いえホントにうそいつわりなく。

なにやら画策したりせずに、一流飲食店目指したらいいんじゃない
でしょうか、彼女。

麻帆良においても、十分にやっていけそうですよ。

〔食事の間、待たせただけじゃない。この状況でエヴァにだけ通信
機渡すだなんて：帰らなかったただけ譲歩したわよ〕

しかしまあ余裕ありますよね、超鈴音。
なんでしょう、侮られています？
それとも切り札でもあるんでしょうか。

「ああ、コレはたいしたもんだ。それにウーロンもたまには悪くな
いな。なあ汀、今度ウチにも一式そろえるか？」

お、いいかもですね。

中華お菓子も期待できますか？

えと、飲茶でしたっけ？

【この期に及んでもエヴァとだけ交渉出来ると思うとは呆れるやら
感心するやらだな。警戒続行、問題なし】

残念予想が当たってしまいましたよね。

腹いせに「全員分寄せ」とだけ通信して、追加注文食べ終わるまで放置しました。

ふふーふ、とーぜんのむくいさ！

「千雨ちゃん茶々丸ちゃん、ウーロン茶もおいしく淹れられそう？」

ウチのティータイムは基本的に紅茶です。

キティが紅茶好きですからね。

千雨ちゃんがコーヒーたまに飲んでますけど。

なんか千雨ちゃんがコーヒー飲むのって、カッコイイんですよ。

なんだか思い出して、てれりこ。

〔確認するわ。通信機は貴女とワタシ達の5人が所持、常時オープン回線。麻帆良の魔法使いには探知出来ない科学的通信なのね？〕

ついでに録音でしょうね。

まあ千雨ちゃんが警戒中です。

間違いなく痕跡すら残ってはいませんね。

【茶々丸ちゃん、念のため通信機に介入。通信はこの5機間のみに、ついでオープン回線専用で】

まあ、一応の対策です。

超鈴音の情報が少ない現状、して困る警戒なんてありません。

「その通りネ。今日まで長かたヨ。こんなイベントでもないど、貴女方と長時間接触なんか出来ないからネ」

彼女もやはりチェックされてるんですね。

そんな彼女が平時に、ワタシ達へと接触したら…
やっぱり麻帆良連中は実力行使に出るでしょうか？

要警戒勢力が接触したようだ、とりあえず拘束して強制的に事情聴取しよう！！

とか、平気でやりそうですもんね。
うん、これまで避けて来たのは正解です。

今日は…まあ彼女の話聞くなって決めちゃいましたし。
鎮圧もやむなし…かな？

いや、そもそもこの交渉に気付くコトが出来るのでしょうか、麻帆良連中は？なんか超鈴音が奥に下がってワタシ達が普段通りの歓談始めたら、連中の警戒レベルって言うか緊張感がゆるんだんですけど…

え？そんな程度で麻帆良大丈夫ですか？
いや、好都合ですけどね。

「淹れ方でしたら問題ありません。マイロード、マスター、いかがなさいますか？」

どうやらティータイムに選択肢が拡がりそうです。

：チャイナドレスとか着たら喜んでくれるかな？
あ、いや、中華からなんだか連想されて、はい。

【イエス、マイロード。……把握、介入完了しました。以後この通信機では強制的に、該当の5機間でのみ通信可能、さらにオープン回線専用となります】

うんうん、すばらしい手際ですね。

今日は茶々丸ちゃんも千雨ちゃんも特にカッコイイなあ。

耳尻尾執事さんばわーでしょうか？

ふふーふ、らぶー。

「そうだな、悪くないな。麻帆良なら良い葉も手に入るだろうしな」

ですね、拒否する理由がありませんよね。

今度、一揃え買いに行きましょうね。

よし、デートです！

ふふーふ、たのしみー。

【よし、ならば交渉開始だ。私が主導で進めるぞ】

〔いいだろう。改めて私がエヴァンジェリン・マクダウェルだ〕

そうですね、ずっとそれを求めていたようですし。

うん、キティにおねがいしましょうか。

〔ではこちらも自己紹介するヨ。超鈴音ネ。あなたとは…あなた方とは、ずっと交渉したいと思ってたヨ〕

もれてます、本音もれてますよ。
なんでそこまでこだわるんでしょう？

「期待してるねー。あ、折角だしあまいのもいっしょにおねがいできる？桃饅頭とか胡麻団子とか」

あ、でも飲茶ってあまくないの食べるんですけど？
おやつ時間に食べるんですよね？
ならやっぱりあまいのがいいですよ、うんうん。

「トバリよ、魔女トバリ」

交渉目的なんですし、まあこの対応でしょう。気をつけて下さいね、
魔女は怖いですよ？

【千雨ちゃん茶々丸ちゃんも一応自己紹介ね。対応はてきとーでいいよ。間違っても対等ではないから】

あえて全員分の通信機を用意させたんですから、自己紹介くらいは、
ですよね。

とはいえ普通なら、ワタシから軽く紹介するくらいなんですけどね。
ね。

なにせ従者ですし。

ただ今回の交渉はサウンドオンリーですから、声くらいは聞かせて
おきましようか。

「あー…レシピはともかくなあ。…絡繰は？」

千雨ちゃんは努力の子ですからね。
すぐになんでも出来る訳ではないんです。

必死に努力してくれるんです、ワタシのために。
そんな千雨ちゃんが、だいすきだよ。
らぶー。

〔魔女の従者、千雨だ〕

【ああわかった、普通でやるぜ】

うんうん気楽に対応しちゃってください。
下手は打たないって、信じてますよ。

「お任せください。ですがレシピがあるのなら、千雨さんでしたら
簡単では？」

茶々丸ちゃんは炊事掃除なんでも従者ですもんね。
中華お菓子も余裕ですか、さすがです。

製作時に、これでもかこれでもか！と詰め込んだ成果でしょう。
ですが、茶々丸ちゃんのがんばりがあってこそ現在のものは、決して忘れてはいけないコトです。

茶々丸ちゃん自身のがんばりがあって始めて、その知識技術を使いこなせる訳ですからね。

いつもありがとうね、茶々丸ちゃん。
だいすきだよ、らぶー。

〔エヴァンジェリン様の従者、茶々丸です〕

【イエス、マイロード】

茶々丸ちゃんはナチュラル丁寧さん。

こちらにも心配ありません。

「いやほら汀達に出すなら、何度か作って出来をみないとな。半端なもんなんかは出したくないんだ」

ね？千雨ちゃんはいつもこうして、ワタシのために一生懸命なんです。

ふふーふ、ホントらぶー。

【そう言やこの交渉の記録、私達の手元に残す必要はあるか？】

あ、指示してませんでしたね。

まあ普段から交渉事に記録は取らないワタシです。今回のもの、もちろんいらないでしょう。

「ふふーふ、ありがとうね。期待してるから」

とっても期待です。

いまからたのしみですねー。

【ないない、完全消去でおねがい。茶々丸ちゃんも通信機への介入、知られないようにね】

うん、念のため茶々丸ちゃんにも指示を出しておきましょう。
茶々丸ちゃんなら、言わずとも察してくれているとは思いますがど
ね。

「ああ、まあ任せてくれよ」

【ん、任せてくれ】

「イエス、マイロード」

【イエス、マイロード。交渉終了と同時に、通信機を元通りへ再介
入いたします】

うんうん、さすがの素敵執事さん達です。

猫耳、狼耳をもふもふしたいぞ！。

〔皆さんよろしく頼むネ。では始めに、こちらの要求を説明するヨ〕

では交渉の始まりです。

お手並み拝見といきましょうか。

ふふーふ、超鈴音が店舗の奥に引っ込んでいるコトが確認出来てい
る今！！

ワタシを阻むモノはありません！！

キティ、ぎゅー!!

隣に座るキティを抱きしめます。

ふふーふ、普通の交渉は相手側と対面しますから、こんなコト出来ません。

でも今はぎゅー、し放題です!!

千雨ちゃんと茶々丸ちゃんとも、順番にぎゅー、しちやいますよ。らぶー。

今度から交渉事はサウンドオンリーでお願いしましょうか…

第25話 人造人間？ロボ？ その3（後書き）

第25話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

トリプル会話めんどくさい回。

いや、ごめんなさい、なんかこんな風に。

□が念話です。

もちろん汀達にしか聞こえませんし、察知も出来ないチート魔女魔法ですね。

今後も汀達の念話がバレたり阻害されたりはあり得ません。だってチート魔女ですから。

☞が超りんの通信機会話です。

未来科学でしょうが、チート従者には瞬き程で乗っ取られてしまいました。

しかも超りん気付けない…ごめんね。

後で記録出来ていないコトに気付いて、そこから警戒を強めるでしょうが…まあ無駄でしょう。

今回大活躍の千雨、茶々丸チート技能は、もちろん汀が原因です。何度か描写された“魂の繋がり”が関係しています。

設定は出来ているんですが…原作入って、淫獣絡みの仮契約事件が出てきたあたりで、詳しくやりたいなあと思っています。

当然エヴァにもありますよ。

今夜も感想とご意見、いただけました。
ありがとうございます！！

超りんごめんね展開は、まだまだ続いちゃいます。

彼女って、正義魔王タイプですよね。

辛い過去があった、だからこそ私が世界を支配して、平和にしてやる！！みたいな。

でもごめん、本作品にはもっとヤバイ魔女がいるんです。
進化する魔女一家がいるんです。

もう超包子経営で生きたら？ いやいや。

原作入ってからは、悩みドロコロですね。
でも1つ決まっています。

鴨は駄目。

コレは決まっています、ええ。

正直grand病原は葱さんのチカン行為もギリギリです。

最近の原作で、エヴァも千雨ちゃんも脱がされちゃってましたね…
あれ？許せないかも、葱さんも駄目かも。
まずいですよ…

てか、grand病原も分かっています。

漫画だとちゃんと分かっています。

でも鴨は完全にただの犯罪ですよ。

下着泥棒とか何で許せるの？

grand病原には無理です。

このままのテンションで書いたらあっさり消えそうです、鴨。
どうしよう…

で、ではgrand病原でした

おやすみなさい

第26話 人造人間？ロボ？ その4＊

「こちらの要求は実に簡単な話ネ。面倒なんてかけないヨ、むしろ逆をお願いするくらいネ」

「要求、要求か…。おい貴様、随分なご身分なんだな？ 私達に対峙して、まず自分の要求を突きつけるか。何様だ、ええ？」

「あ、いやいや申し訳ないネ。かの有名なお二人と交渉だなんて、緊張して気が逸ってしまったヨ。不老不死の大魔法使い殿、不朽不滅の魔女殿、聞いていたよりずっと格上ネ」

「つまらん」

「……………」

「……………」

「……………えっと？ エヴァンジェリン殿？」

さて、ワンアウトですか？

あ、いえ冗談です。

この間の魔法世界でドラゴン狩ったとき、色々と情報収集もしていました。

それにより、と言うより彼女は随分方々へその手を拡げているようでした。

超鈴音がワタシ達を探っていたコトは以前から把握しています。

うん、どうやら彼女は情報を上手く得すぎたために、勘違いをしたようですよ。

あ、当然ワタシ達が魔女と吸血鬼だなんて知られずに、情報収集等を行っています。

魔女の面目躍如です。

チート美少女汀の胸の内を知れるのは、大切な大切な家族のみんなだけです。

世界的に見れば“正義に破れた惨めな魔女”ですが……だからなに？

今現在に至っても、近衛学園長とサウザントマスターしか真実を知りません。

でもそれでいいですよ。

魔法使い達にとって、それが相応しい有り方ですよ。

自由な理想を描けばいい。

綺麗な伝記を騙ればいい。

だって仮に知ったとして――

何が出来るのですか？

「つまりらんと言ったんだ。それで世辞のつもりか？ここ1、2年私達をかき回った割りには程度が低いな。……なにか勘違いでもしているのか？乞うている自覚はあるのか？私の機嫌を取りたければ跪け、額を没っしろ、くだらん用件なら返事はその首にくれてやる」

どうやら超鈴音は、ワタシ達が麻帆良に来る以前に取引をしていた相手を調査したようでした。

それに伴い、ワタシ達の行動原理、人となりを知ろうとしたようです。

ワタシ達、人じゃないですけど。

「…これは手厳しいネ、謝罪するヨ。言い訳ではないが、貴女方はくだらない前振りを嫌う、まず要求を述べ乞え…と聞いていたネ。だから単刀直入にしたつもりだったが、機嫌を損ねてしまったのなら申し訳ないネ」

まんまかつての取引相手に厳命していたコトですね。

そう、かつて“ワタシ達が選んだ”取引相手に厳命していたコトです。

超鈴音、勘違いしたままどこまで行く気ですか？

「わからんヤツだな、その薄笑いを辞めろと言ったんだ。通信越しにも貴様の面の皮が癩に触る……いや、いい、用件を言え。貴様に

時間を割くつもりはない」

ワタシが用件を聞くと決めたせいで、キティを付き合わせるカタチになっちゃいましたね。

ごめんねキティ、後でいっぱいいっぱいお詫びするからね。

だってすごく嫌そうですもん。

もう超鈴音の態度とか、わざとらしい片言とかスルーで行くみたいです。

しかし彼女は、ワタシ達が生きた時間を、ハリボテだったとでも思ってるんでしょうか？

その程度のつまらない嘘が、気付けないとでも？

でもまあ今回はとりあえず進めましょう。

だって小籠包美味しかったし…

「……相互不可侵協定を求めるヨ。期間は来年末までネ。見返りの準備もあるが…その情報自体が既に価値あるものネ、今は言えないヨ。けど、それは貴女方が求め欲するものだヨ。我が身命に誓ってネ」

ふーむ、なんかあったでしょうか欲しいものとか。

……新しい枕？

あ、いや、もしかして封印関係ですかね？

んー…この勿体ぶった言い方があります。

確かにソレならワタシ達には必殺の手札でしょうね。
まあ世間的にはですが。

つまり、麻帆良大結界がワタシ達を個体指定しているから……って
コトでしょう。

科学分野とのハイブリッド結界だから、麻帆良最強頭脳な自分なら
緩和、あわよくば解放できる……とか言うつもりですかね？

いや、当然と言うか、いまさらと言うか……
大結界の個体指定すらワタシ達には無効ですよ、もちろん。

それに……うーん、やっぱり違いますよね？

いくら封印解除を行うのが被封印者以外なら比較的楽であるとは言
え、彼女だってサウザントマスターや近衛学園長の实力を知らない
訳ではないでしょうし。

仮に解除出来る人物だとして、それを秘密裏に行うのは無理でしょ
う。

そしてその所業が世に知れたら、一躍時の人ですよ。

“魔女と吸血鬼を世に放った大テロリスト”扱いされるのは明らか
です。

それともアレですか？

封印下で魔力が全くない、とされているワタシ達を、封印解除or
緩和をエサに操るつもりでしょうか？

おお、悪党ですね。

でもコノ予想が彼女の不遜な態度とかと合致しますね。

彼女の言う期限は、彼女自身が何かを成すためではなく、ワタシ達をあの手この手で飼い慣らすための時間。
そしてゆくゆくは従わせるつもり…とか？

確かに、15年も大人しく捕まっていれば、そんな風に考えるアホが出て来てもおかしくはありませんね。

それともやっぱり…超包子くれるとか？

あ、ちよっとうれしいかもです。

でも店舗経営はなあ…

じゃあじゃあ“超包子食べ放題券えたーなる”とか！！
…でもお金には困ってないんですね。

{……………}

彼女の言い分はまあ、色々と考えられておもしろいです。
食後のウーロンタイムによい娯楽です。

交渉材料としては最低、いやそれ以前に成り立っていませんが。

キティは…呆れちゃってますね。

ま、当然でしょう、千雨ちゃん茶々丸ちゃんも苦笑いですよ。

〔皆さんだけで相談する力？次にいつ接触出来るか分からないから

出来たらこの場で決めて欲しいヨ。ああ、今言った対価はエヴァンジェリン殿とトバリ殿の分ネ。従者のお二人には、別口で可能な限り用意するつもりヨ

ん？ふふーふ、ほらほらぎゅー。

キティ抑えて抑えて。

あんな女の言うコトなんて気にしないの。

彼女がワタシの名前を読んだ瞬間、キティがとても嫌そうにしてくれました。

キティらぶー。

いいんですよ、彼女は滑稽な勘違いさんなんですから。

「…ふう、時間など必要ない。決裂だ。何を焦っているのか知らんが、貴様のそれは交渉とは呼べんぞ。もはや呆れも過ぎた。詳しく聞く気にもならん」

と、もう行きますか？

折角色々がまんしたんだし、彼女の目的くらい聞き出すつもりなのかと思いました。

キティってば本当に、ワタシのわがままを聞いてくれていただけなんですネ。

ありがとキティ、だいすきー！

でもまあこの結末は仕方ないコトなんですよね。

現状の力関係を、彼女は正しく把握出来ないのですし。

あれです、自分が対等以上の立場にいますと思っているんでしょう。

15年も囚われたままの魔女相手なら“警戒こそすれど結局その程度”とでも思っているんでしょう。

だめだなあ、だめですそんなじゃ。

そのままならどうやったって魔女の気は引けませんよ。

ふふーふ、こんな噛み合わない交渉もないですよね。

まあ教えてやるつもりなんて皆無ですから、やっぱり仕方ないコトなんです。

さようなら、超鈴音。

最初からあなたとなんか取引する気はなかったんですよ。

だって、麻帆良にいる間はのんびりするって決めたんですよ。
ただそれだけが、拒絶の理由です。

「なあ汀、食べ物はそろそろいいだろ？次はアトラクション系の出し物見てまわろうぜ」

「あ、そんなのあるんだ？」

「ハロウィン射的とかハロウィン型ぬきとか、祭りと混同したのが乱立してる区画があるんだ」

「その区画では、ハロウィンコスプレの参加者にサービスをしているようです。更にサークル単位で製作されたハロウィン逆バンジージャンプ、ハロウィン手作りコースター、部室棟利用ハロウィン巨大肝試しなど、麻帆良らしいアトラクションも存在していますね」

「私らが参加して楽しめるのは、どうしたって限られてるだろうけどな。まあとりあえず行ってみようぜ」

「うん、じゃあさ、手を引いてよ、ワタシの黒猫さん」

「いいのか？エヴァのご機嫌取りは？」

「ふふーふ、左手を開けておくのさ。………ぐらいじゃ足りないね、うん。ごめん千雨ちゃん、また後でエスコートしてくれる？」

「まあそうなるわな。今の聞いてたし、仕方ないから譲ってやるよ」

「マスターをお願いします、マイロード」

「うんうん、実に出来た従者だね！」

「………、後でたっぷりごほうびくれよな」

「わ、わたしにもお願いします…」

「ふふーふ、もちろんだよ。うん、じゃあ今、少しだけ先に…ね？」

「あっ…んっ…ちゅう…」

「マイロー…んっ…むちゅ…」

「おい！！今更認識阻害敷いて何してるんだ！！それなら最初から敷け！！くだらん奴の相手なんかさせるなよ！！」

第26話 人造人間？ロボ？ その4＊（後書き）

第26話でした。

こんにちは、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

結局噛み合わない超りん回。

では超鈴音サイドのフォローしますね。

本作品の超鈴音は原作に登場した超鈴音と同じ経緯で過去に来ています。

ですので彼女の知識に汀と茶々丸は存在せず、エヴァと千雨の現状に正直うろたえました。

超鈴音がエヴァに固執したのは、調査で浮かび上がった魔女の異常性を恐れただけでなく、パラレルワールドの可能性を否定したかったからです。

まあその調査でも、汀達の真の現状には辿り着かなかったんですけどね。

結局、超鈴音も未来の英雄ネギの、ひいてはサウザントマスターの威光から脱け出せない存在です。

「ネギの父が封印した」と聞けば、調べはすれこそ疑いはしないのでした、と。

原作の超鈴音の飄々とした雰囲気は、本作品のエヴァには逆効果です。

原作では「私相手におもしろいヤツだ」くらいに思われたかもしれ

ませんが、本作品では「なんだこの勘違い女は」ですよね。
実際勘違い女な訳ですし。

汀が色々と予想した超鈴音の取引材料は、やっぱり「麻帆良大結界と機械の関連性、及びそれへの対処」です。

原作茶々丸が出来たコトですし、超鈴音には余裕でしょう。

超鈴音は汀一家のチートをもちろん知りませんし、15年間も大停電をスルーしてるんだから科学分野には精通していいだろう、と認識しています。

ですから、封印を緩和するつもりでいても、解除する気はありません。

いずれ超鈴音の計画が成ったあと、障害でしかないでしょうから。
まあ汀一家には千雨茶々丸がいますから、「従者をプレゼントする」なんて言えないですよ。

てか茶々丸捏造の予定だったんですけど…
ち、超りんががんばってよ!?

ではgrand病原でした
またのちほど…?

第27話 人造人間？ロボ？ その5

……つちゅ…あむ…ずじゅ…ちゅる…

「…ごめんねキティ、ね？」

「あーあーいいよなエヴァは」

「マスター、独り占めは…その…」

「五月蠅いぞ！！私が嫌々対応をしてれば、すぐ横で汀に甘えおつて！！普段なら許してやってるだろうが！！こんなトキこそ従者らしくしてみせろ！！」

「まあまあキティ、ね？彼女の話を聞いてみたのはワタシが決めたからでしょ？怒るならワタシにね」

「……汀も汀だ。私を蔑ろにするなど、さっき言ったばかりだろう。私を見ている。お前の望みならなんでも叶えてやる。今だってそうだったろう？な、だから私を蔑ろにするなよ汀」

「うん、ごめんなさい、キティ。キティと同じで彼女の話、途中で飽きちゃったんだ。だからキティの邪魔しないようにしてたつもりだったけど…ごめんね、寂しい思いさせちゃって。お詫びじゃないけど、これからいっぱい楽しいね。一緒にね」

「…ああ。私は駄目だな、汀にはこうも甘い。だがそれはお前が、お前だけが私の特別だからだ。それを確り意識しろ、さあ次に行く

ぞ」

「ちえっ…私がエスコート役だったのによ。まあ仕方ないか、相手があれじゃあな。まあでもごほうびは忘れんなよ汀」

「超鈴音さんはわたし達を正しく認識出来ていませんから。魔法関連の交渉ともなれば、まともな成立はありませんよ。……マイロード、あの、わたしも、です」

茶々丸ちゃんの言うようにワタシ達を正しく認識出来ない相手、近衛学園長以外では交渉の成立など不可能でしょう。もちろん魔法関連においてですよ。

でも近衛学園長やサウザントマスターなら、ワタシ達に交渉など無謀だと、その身に染みているでしょう。

チート美少女汀が相手なんですよ？
どうしてもと言うのなら、ワタシ達“が”持ち掛けるのを待っているのが正解でしょう。

だって、欲しいければ奪ってしまえるワタシ達です。
だって、欲しいければ造ってしまえるワタシ達です。

ワタシ達は誰かに何かを求める必要、ないんですもん。

まあ運が良ければ、暇になったり、何気無く気が向いたワタシ達から声が掛かります。

ワタシ達にとっては、交渉だなんてそんな感じなんですよね。

「ナア結界敷イタンナラ、オレニモ何カ食ワセロヨ」

おっと、チャチャゼロにも何かあげなくちゃ。

って、次からアトラクション系攻めるんですした。

ありゃ、ごめんね、チャチャゼロ。

また屋台のお菓子でいいですか？

あの後、通信機越しに聞こえる超鈴音の呼び声をスルーし、ワタシ達はあっさりその場を去りました。

認識阻害により“交渉を打ち切ったキティをたしなめていたワタシ達”が急に席を立ったように感じた超鈴音は、相当焦ったみたいですよ。

でも結局、麻帆良連中の目を気にしてか、追っては来ませんでした。

結果的に麻帆良連中が役立ちましたね。

いや、珍しい。

ハロウィンだからかな？

そうしてワタシ達は、いろんなアトラクションを満喫し、はしゃぎまわったのでした。

ふふーふ、たのしかった。

——とはいきませんよね、はい。

結局認識障害を敷いたコトにより、チャチャゼロの不満がぶーぶー交渉？のストレスにより、キティがぶーぶー。

ワタシがキティのご機嫌を取り始めたコトにより、千雨ちゃん茶々丸ちゃんが弱じえらしー。

おのれ超鈴音っ！！

では済まされず、別のお茶屋さんでワタシは弁明をするコトとなったのでした。

なんだよー、ワタシだってたまには間違うんだよー。

あ、はい、ごめんなさいです。

「オレハ好きニ飲ミ食イ出来テルカラ、モウイイゼ。ア、デモ魔女、アトデワインハ寄越セヨ、ケケケ」

認識阻害ばっちり敷いて、チャチャゼロは好き勝手に食べ放題しています。

チャチャゼロめえ、足下見るなんてひどいですよう。

「だが私には説明してらおうか。汀、なぜちよつと美味しい料理程度で奴の話を聞いた？」

う…

キティからは逃げられない。

うん、汀はキティから逃げられはしませんよね。

白状しますよう。

「えーとね、前にちらつと、こう、ありまして。なんだか不審だったからさあ…ね？」

ね？

「いやいや、わかんねえって。つか、確かに汀らしくなかったよな。ほんと何かあんのか？」

千雨ちゃんまで！？

千雨ちゃんだって関係してるのに…

「ふむ、…茶々丸も気になるだろう？ 敬愛するお前のロードが悩んでるようだぞ？」

え？ あ、キティってば包囲網作戦！？
ずるーい、ずるいよキティ。

「…マイロード、わたしではお力になれませんか？」

…うう。

いやね、力になるとかならないとかじゃないからね、茶々丸ちゃん。

「オイ千雨、ハロウィン春巻キ追加シテクレヨ」

…むしろ清々しいですね、チャチャゼロ。

聞く気ゼロなんですネ。

それもそれでなぜか不満。

「チャチャゼロ、黙って食べていろ。千雨、適当に暫く黙らせられるくらい頼んでやれ。飲み物もだ、汀が喋りやすいようにな」

「ああ、わかった。…いや、つかなんで私に命令すんだよ、私は汀の従者だったの！………すいません、追加あー」

「マイロード。ゆっくりでいいですから1つずつ、わたしを頼ってくださいね」

やっぱり白状するしかないんですね…

えーん、包囲網完成間近だよー。

「超鈴音の技術をパクったから…かな？」

はい、白状させられました。

「…ん？それだけか？」

はいまあ、そうです…

いやそんな“隠すコトか？”みたいな顔しないでよキティー。

いや実際隠してなんかはいないんですけどね。
なんとなく言いそびれた？みたいな？

「うん、前にね。えと、千雨ちゃん、覚えてる？まだ千雨ちゃんが別荘にいた頃のコトなんだけど…」

あ、千雨ちゃんが急に振られて少しびっくりしてます。

いやいや、このコトは千雨ちゃんとっても関係していますよ？

「は？え？…って、アレ…か？」

はい、アレです。

いやまあ結局は別物ですから誰も気付かないでしょうけど、アレです。

「アレだのコレだの、分からんわ！！キッチンと説明しないか！！」

「申し訳ありませんマイロード、千雨さん。もう少し分かりやすくお願いします」

うう…はい、ちゃんとします。

「あのね、当時千雨ちゃんの修行や教育は一先ずの区切りだったの。ほらキティとも2人きりになったりとかしてた頃ね。千雨ちゃんに自由時間を与えて、好きにネットやらせていたの。ね？」

ごめんなさい、千雨ちゃん。
一緒に白状してください。

いまワタシを助けられるのは千雨ちゃんだけなんです！

「え？ ああそうだったっけか。まあそんな感じだったかな？ だいぶ前だしあんまり覚えてねえんだよね…」

って、千雨ちゃん忘れてる！？

…あ、千雨ちゃんにもその後のコト詳しく言ってなかったかも、です。

あっちゃあ…

「あ、言うよ、言うからキティ睨まないでー。うん、でね、千雨ちゃんがネットで色んなコト試してるうちに、次第にハッキングとかクラッキングを覚えたの。ね？」

千雨ちゃんのハッカースキルは当時から既にワタシのサポートが出来るくらいのの、先程もやってみせた各ネットワークへの侵入が出来るくらいのモノへ登り詰め始めていました。

今と比べれば当然それはまだまだでしたが、確実に才能があると見たワタシは暇を見ては好きにやらせていたのでした。

ほめてあげたら、いっぱい照れて、そしてもっともっとがんばる千雨ちゃんに、きゅんきゅんしちゃいましたよ。

思い出しても、らぶー。

「ああそう、そうだ。で、とりあえず学園結界関連は避けて、でもセキュリティ高いトコに仕掛けてたんだよな。そうしたら超鈴音と葉加瀬が所属してた、ロボット研究会のデータに行き合ったんだ」

いつの間にやら千雨ちゃんは、麻帆良最高の科学組織を相手にハッキングを成功させていたんです。

うん、さすがですよ千雨ちゃん。

「まあ色々見さしてもらってたらさ、メールかなんかだったかな？で、そいつらが高性能人工知能を作ってるってわかったんだ。だからまあ、それコピーしてちょろまかしてみた」

話を聞いたワタシが「へー、面白いじゃん。後で見せてよ千雨ちゃん」とか言ったら、千雨ちゃんてば相手方に一切悟られずコピーしていました。

さすがにちょっとびっくりしましたよ。

でもでもワタシをよろこばせるための行動なんですよ、コレ。ふふーふ、やっぱり千雨ちゃんらぶー。

「つまりそれが超鈴音の技術だった訳か。だがそれがなんだ？盗み見たから後ろめたい、なんて言わないだろう？」

はいそうですよね。

それくらいなら、全然放置でした。

「なるほど、そのコトでしたか。当のわたしが気にしてはいないのに、マイロードは気になさっていたんですね」

あ、逆に茶々丸ちゃんが気を使いはじめちゃいました。
いやまあだってさ、茶々丸ちゃんが茶々丸ちゃんてホントにうれし
いんですもん。

「うん茶々丸ちゃん、わかったみたいだね。それは茶々丸ちゃんが
産まれる1週間前の出来事だったの。茶々丸ちゃんの身体はすっか
り出来上がってて、核部分にどんな機能をつけるのか考えていた、
その頃なの」

だから超鈴音の話を聞く気になりました。
まあ機会があったら聞こう…程度ではありましたが。

「ってコトは茶々丸の頭には、あのトキ私がハックした超鈴音の人
工知能が入ってるってのか？」

あ、やっぱり千雨ちゃんにもその後のコトは話してなかったよう
です。

あちゃー、いや秘密になんかは全然してなかったんですけどね。

「ううん、実を言えば違うの。超鈴音の人工知能にはヒントをもら
っただけ。茶々丸ちゃんは“魔法金属を核として産まれた従者”だ
からね。パソコンで組む人工知能なんかでは、ここにいる茶々丸ち
ゃんは産まれないよ」

茶々丸ちゃんが自身を被造物と言うのは、その存在の核が魔法金属
だからです。

ワタシとしては魔法金属を“産み出した”つもりだから、モノ扱い
はしていないんですけどね。

それに茶々丸ちゃんのコトが大好きですし！

「だって超鈴音のは所詮ただのプログラムだからね。どうしたってそれ以上にはならないよ。ワタシはその“思考し学習するデータ”そのものにヒントをもらって、それを解析分析したの。それで得た知識で、ワタシ自身が新たな魔法を構築して組み上げた訳。で、それにより“思考し学習し成長する魔法金属”をゼロから造るコトに成功したんだよ。つまり、うん、その魔法金属が茶々丸ちゃんの核：なの。あ、茶々丸ちゃんはこのコト知ってるよ？」

まあ、実際インスピレーションを受けたってくらいの影響でした。でもでもそれが切っ掛けだったのです。

あの人工知能のデータを見なければ、茶々丸ちゃんはたぶん今みたいに存在にはならなかったと思うんですよ。

それに触発を受けて、全力で核を造り上げたからこそ、今の茶々丸ちゃんが産まれたんだと思うんです。

ワタシは茶々丸ちゃんを愛しています。
だから何度でも思うんです。

産まれて来てくれてありがとう。
茶々丸ちゃんできてくれてありがとう。

すごくすごく愛しています。

だからまあ……ちょっとくらい超鈴音にチャンスを与えました。

でも無駄だったみたいですけど。

「普通ノ魔法人形デ何が悪いンダ？」

「え？うーん、特には。実際あのままなら気合い入れて造った“普通の魔法人形”になってたしね」

「それだとやっぱ今とはちがうのか？」

「たぶんだけど、ワタシと魂での契約、出来なかったんじゃないかな。アレってワタシの魔法の中でもかなり特殊な部類だから」

「……………超鈴音さんに感謝します」

「ふふーふ、それよりハックした千雨ちゃんに感謝しなきゃ。ワタシなんか茶々丸ちゃんの核が出来たトキ、それはそれは千雨ちゃんにありがとうしたんだよ」

「……………死ぬかと思ったけどな。気持ち良すぎて死にけるって、どんな経験だよ」

「ああアレか。だが千雨は一晩程度だろう？アレの本領は、延々と

そのギリギリ状態を続けるコトなんだ。1週間とか続けられてみろ、もう色々終わるぞ」

「ふふーふ、ご希望ならやるよ？あ、でも当時のキティで1週間だったからね。今ならもつといけるんじゃない？」

「………とんでもない未来が待っているのに、身体も感情も拒否したがない。ああ、私も大抵狂っているんだな。もちろん汀への愛にだが」

「わ、私だってやれるぞ！あ、愛ならその、私だって十分なんだよ！！」

「……………」

「ありがとう、キティ、千雨ちゃん。って、茶々丸ちゃんオバーヒートしてるし。ははーん、前にやったの思い出しちゃったんだね？」

「オイ魔女、食イ終ワツタゼ。」

「あ、終わりでいいの？じゃあ茶々丸ちゃん起こして、アトラクシヨンのほう見に行こうか」

「ああ、わかった。おい絡繰？おーおー真っ赤だな」

「いつまでたっても馴れん奴だな。おい！茶々丸、起きないか！」

「茶々丸ちゃんやーい？」

「マ、マイロード!!ここ、今度こそ最後まで耐えてみせます!!あ
ああ愛でっ!!」

「「うわっ!!びっくりした」」

第27話 人造人間？ロボ？ その5（後書き）

第27話でした。

こんばんは、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

やっと茶々丸捏造回。

ながいぞー。

下手したら2回分くらいあります。

なぜか纏まらなかった…

今回は汀の無茶チートの片鱗が見えた？

作品中で茶々丸の核を産み出したの力を“魔法”と表記されていますが、コレ実は所謂普通の魔法とは少し違います。

千雨茶々丸のチートと同じく“魂の契約”で得た能力です。

ですが“魂の契約”事態は汀の魔法なので、汀自身はそれに派生して産まれた能力も“魔法”と呼んでいます。

もちろん設定できてますよ。

まさしく孤高の超絶安心チートです。

お目見えすれば“魔法”呼びに納得いただけます、きつと。

超鈴音のAIをパクって物質化出来たのも、一重にチートのおかげおかげ。

チート設定にしてホントよかったです。

今回も感想いただきました。

ありがとうございます!!

どこまでいっても汀は汀ですからね。

相手を諭す、納得させる、正しいを教える、そんなコトはまあありえませんが。

超鈴音にも麻帆良連中にもずっとそんな感じですよ。

今回さらっと消えた超鈴音は、コレで終わりにはしません。

汀達に一矢報いるコトは：うんゴメン無理でしょうけど、まだ出番はあります。

麻帆良連中と違って、明らかに敵対姿勢を取れますから彼女なら。ほら葱さんとかをね、唆したり焚き付けたりね：

てか寝落ちしました。

後書き書きながら、寝ました。

電気つけっぱなしだし：

気が付いたら3時だし：

いや明日仕事ですって：とか言いつつ仕上げてから寝ます。お待ちいただいていたら、ホントにごめんなさい。

ではgrand病原でした

朝おきれるのかな：

第28話 宅配便は届かない その1

「あ、やべえ、忘れてた」

おだやかな小春日和の、とある午後。
学園からの帰り道です。

日頃からのんびりと通学しているワタシ達ですが、いや、麻帆良って広すぎ。

学園まで徒歩1時間以上ですよ？

いつもキティと並んで、常に千雨ちゃん茶々丸ちゃんが一緒に、ワタシは1人で学園に通ったコトはありません。

もしそうでなかったら、こんな長々と移動なんて出来ませんよ。

イチャコラとデート気分だから通えるってモノです。

今日も今日とてみんなでぷらぷら。

毎日々々通る道を変えてみて、色んなお店をのぞいたり、色んなお菓子をためしたり。

んゝ！しあわせゝ！！

チート美少女汀は、こんな帰り道も大好きです。

キティが、千雨ちゃんが、茶々丸ちゃんがいてくれるから大好きです。

帰宅すれば別荘で好きなだけごろごろ出来るからこそ、徒歩通学ですけどね。

じゃなかったら、誰に何言われてもパッパと転移します。

うん、転移すごく便利、転移。

「なんだいきなり？何か買い物でもあったか？」

ゆっくりと街を見て、遊んだ帰り道。

時刻は既に夕暮れ時をすぎています。

11月の太陽は早足で西空へと身を沈め、既に街並みには灯りが。空から見下ろしたのなら、それは素敵な光景でしょうね。

ワタシ達が歩く林道は、そりゃあもう真っ暗ですけど。

「いや、ほら、このあいだ通販した本がもう届いてるハズなんだよ。コンビニ受け取りだからさ、忘れてた」

でもワタシ達って夜目とか関係ないので、全然よゆー。星明かりすらない、塗り潰したような暗闇の中でも、神経衰弱だって出来ちゃいます。

いや、しないと思うけど。

「戻りますか？」

キティと手を繋ぎ、千雨ちゃん茶々丸ちゃんと肩を並べて、我が家へと歩きます。

普段とおんなじ帰り道、でも二度と来るコトのない今日という日の帰り道。

素敵で大切な時間です。

ふふーふ、しあわせ。

「ここまで来たんだ、明日にしろ。今日のデザートには時間がかかると言っていただろう？」

お、そうそう今夜はちょっと新しいデザートが出てくるんですって。たのしみー。

「あゝ…いいのか？」

ん？

キティを手を繋いだまま一緒に、はてな？

「「かわいっ…!？」」

千雨ちゃんと茶々丸ちゃんからナニかが溢れそうですけど、うん、よくあるよくある。

ふふーふ、かわいいのはそっちもだよー。

あ、ワタシは本とか頼んでないですよ。

「……おい、聞こえるか？千雨？」

キティも普通のご機嫌ですし、こんな従者ちゃんにも馴れたモノです
ね。

おこりんぼしてるトキのキティなら、がー！っとなりますけどね。

てかキティも、ちょっとほっぺたあかいぞー。

「えっ！？あ、ああ悪い、ついその…」

もう、しかたないなあ。

照れ屋さんだらけなんですから。

ふふーふ、ラブー。

「わかってる、わかってるから私の話を聞け。なあ、なぜ私に確認
する？お前の本なんだろう」

うんうん、そうですよね。

促すのならともかく、後回しにしろと命じたキティに何を確認する
んでしょう？

「ああえっと、うん。じゃなくて、ほら、一緒にエヴァのゲーム頼
んだじゃねえか」

あー、なるほど。

言ってみましたね、たしか。

「『魔界戦争〜魔女の追憶〜』か！？明日じゃないのか！？」

旧世界のある一般人が、作り話として、かの大分裂戦争を知ったとか。

そしてそれをもとに作ったゲーム、と一部の魔法使いが噂するアレですね。

残念？ながらココに出てくる魔女は、ワタシのコトではありませんよ。

主人公達を助け、見守る良い魔女らしいです。

ワタシ大分裂戦争はスルーしましたし。

「いや言ったじゃねえか、通販限定で早く届くって」

キティはその設定を面白がって、設定資料付き限定版を予約しました。

設定資料読んで、笑ってやるんだって。

もー、悪趣味な楽しみ方ですよ。

でもその気持ちちよっとわかるかも。

きつと魔法使い達に売れるんじゃないでしょうか？

あ、でも魔女の件がダメかなあ？

「行くぞ！すぐ行くぞ！！ほらばさつとするなよ汀！！」

……かなり期待していたみたいですね。

そういえば、ネットで頻繁にPVとかチェックしてたかも。

「あ、マスター、お待ちください。今日中に別のゲームをクリアす

るではありませんでしたか？」

キティの麻帆良での趣味はゲームです。

ワタシをないがしろには全然しないけれど、暇を見つけたり、ワタシを近くに呼んだりしてピコピコやっています。

あと、みんなと一緒にやったりも結構しますね。
ふふーふ、仲良し一家ですからね。

「……………しまった。明日の発売に合わせて、今日中に終えるつもりでいたんだ」

「今日中って、別荘ででしょ？」

別荘でなら24倍の猶予があります。

明日も学園があるけれど、帰宅してすぐ別荘に入れば13日分くらい稼げますね。

「ああ、あと少しやれば終わるからな。ほら、汀が主人公の名前つけたヤツだ」

アレですね、宇宙とか超科学とかのRPG。

千雨ちゃんと一緒にやり込んでましたよね。

「“ピコの従者ムロ”とか無茶な名前のヤツな。ラスボとか従者にやられるってあんまりだろ。つか“ピコ”どこいったんだよ。中盤のシリ阿斯展開とかも会話文メチャクチャだったじゃねえか」

えー。

千雨ちゃんだって最初はウケてたじゃん。

「冴え渡ったネーミングセンスだったと思う」

“勇者ぴょん従者むろふし”もよかったんですが、文字数制限に引っ掛かってしまいました。

画期的、2人組主人公!?

「どこがだよ!？」

だってキティが好きにしろって言ったもん。

普通のかっこいい名前じゃつまないんだもん。

「ちえー、次はもっといいの考えるから見てろー。…んで、キティ。そーゆーコトなら先に帰って、すぐ別荘でやっていいよ。千雨ちゃんとワタシとで買って帰って来るからさ。うん、ちょぴりデートだ。で、茶々丸ちゃんはキティのお世話お願いできる?」

ここしばらく千雨ちゃんと2人で出かけてなかったですし、ちょぴりラッキーです。

あ、おみやげ買って帰りますね。

「む…仕方無い、そうするか。さしてはかからん、あまり遅くなるなよ」

うん、りよかー。

普通に行って帰ってくれば、十分ですよね。

でもちょっとはデートっぽくしますよ?

「イエス、マイロード。お任せください」

うんうん、素敵従者茶々丸ちゃんに頼めば、キティもゲームに集中できます。

…あれ？なんか一般的にはダメ発言？

や、うん長生きに興味って大事ですしね。
ワタシも別荘に農園こさえてますし。

…ほぼ人形任せだけど。

「千雨ちゃんもいい？」

千雨ちゃんに手を差し出しながら確認です。
うん、2人で歩くならコレですね。

「ああ。私は自分の分もあるしな、全然オツケーだ」

ふふーふ、きゅっ。

もちろん恋人繋ぎー。

千雨ちゃんラブー。

「ん、じゃ行こっか。行ってくるねー」

「行ってくる、家のコト頼んだ」

立ち止まって見送ってくれるキティと茶々丸ちゃんに手を振ります。

「ああ、すまん」

「いってらっしゃいませ」

では、千雨ちゃんと突発デートですね。

しゅっぱー！

「よし、茶々丸急いで帰るぞ」

「はいマスター。帰宅後すぐに別荘へ向かわれますか？」

「ああ。お前は家事があるなら、それをしていてもいいぞ」

「いえ、おそばに」

「そうか。しかし、宅配が直接届かないのは少し不便だな」

「ですが仕方ありません。マイロードの結界は、わたし達以外の全てを排除対象に設定しているとのコトですし」

「それでいて、自然物関係はそのままだからな。∴茶々丸、お前この結界、解析なり介入なり出来るか？」

「不可能です」

「…私もだ、結界は適性があまり無いしな」

「…さすが私^{わたし}の汀^{わたし}だな（マイロードです）」

第28話 宅配便は届かない その1（後書き）

第28話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

2分割の日常回前編。

後編は千雨ちゃんイチャコラですよ。

エヴァが登場していると、どうしてもエヴァ優先になっちゃいます。
ヒロイン同士の絡みって難しいです。

汀達はそれぞれに興味を持っています。

そしてそれを半共有して楽しんでいます。

エヴァはゲームですね。

TVゲーム以外にも将棋囲碁みたいなのも好きです。

この辺は原作と同じ感じで。

ただ、相手はもっぱら家族です。

近衛とは一回もやってません。

感想枠にて質問をいただきました。

とうとう来ましたね。

“イチャコラってなに？”です。

grand病原としては“スキンシップ過多なイチヤイチヤ＋
コメディー要素”だと思っています。
略語とか合体語とかではないです。
音でなんとなく理解してください。
ね、寛容におねがいします、ね。

あとR的な描写についてですね。

これは…もし不快でしたらご一報ください。
小説トップにあります通りのつもりで書いていますが、感じ方は読
み手次第ですもんね。
おねがいします。

ではgrand病原でした
おやすみなさい

第29話 宅配便は届かない その2＊

日の落ちた街を千雨ちゃんと歩きます。
腕を組み指を絡めて、抱きつくように。

11月にもなればときおり木枯らしも吹いてきて、季節の移ろいを
感じさせます。

でもまだまだ魔法に頼るほど寒くないかな。

麻帆良の街は日が落ちたとて、まだまだにぎやかです。
ワタシ達のように学生服もちらほら。

お店も全然やっていますよ。

学園都市じゃねーのかよ…ってくらい、あっちこっちで商売つけ丸
出しです。

てか麻帆良って深夜帯でも開いてるお店多いんです。

飲食店とかコンビニとか。

アミューズメント系とかゲームセンターも開いてるトコあるみたい
ですよ。

学園のほうも大学くらいになると、朝まで活動しているトコ結構多
いですし。

中心街のほうは夜も眠らないようですね。

「あっ！見て千雨ちゃん、あの帽子かわいくない！？かぶりに行こ

うよー」

チート美少女汀ちゃんにとっては、普通に便利な街です。

一般的な品物は買って済ませればいいし、遊び場も沢山あるしね。

夜デートもしやすい！！

あと、麻帆良の魔法使い連中にとっても便利な街みたいですよ？

深夜帯まで一般人が活動しているなら、そのエリアの警備は最小限でいいらしいので。

あえて深夜活動を規制せずについて、魔法の秘匿を盾に襲撃地点を絞ってるようです。

前にどこぞの迂濶な魔法使いが念話してました。

うーん：

襲撃側が本気でいるなら、むしろその辺を基点に作戦行動すると思いますけどね。

実際この15年間でも何度かありましたし。

千雨ちゃんの件もそうですよね。

ま、ワタシ達には関係ないか。

夜デートって言っても夕食くらいで、深夜帯には別荘にいるのが普

通ですし。

ワタシ達が面倒な事件に巻き込まれないのなら、好きにしたらいいじゃない？

「…しまった！？おい汀違うだろ、受け取りだよ受け取り」

へ？

なんで急にそのコトを？

もちろん後で取りに行きますよ？

「え？うん、わかってるよ？待ってね、すぐ選ぶから」

そんなコトよりコレですよ。

本日のオススメって3種類もあるし。

えー、どーしよー。

「いやいや……そうか、帽子か。汀がああ帽子かぶって、私が色違いススメて……そっからデートになっちゃったのか」

ムース…かな。

オレンジムースケーキ…色もキレイだし、コレにしましょう。

あ、てか、千雨ちゃんいま聞き捨てならないコトを言ったなー。

「デートになっちゃった」なんて酷いよ千雨ちゃん。千雨ちゃんだって色違いブラ買ったじゃん。…うん、オレンジムースのセットにきーめた」

うんうん、甘いのはベツバラです、ベツバラ。

だから、おうちで晩ごはんが待ってるけど、きっと大丈夫！

おいしかったらキティと茶々丸ちゃんにも買ってってあげよー。

「ああ、いや悪い。汀とデートすんのが嫌なんじゃねえって。受け取りスツカリ忘れてた自分に呆れたってか、そーゆーヤツだ」

それって、デートがそれだけ楽しかったってコトですよね！

てれり、千雨ちゃんらぶー。

「ふふーふ、ならゆるーす。ワタシと一緒になのが楽しくて受け取り忘れるなんて、千雨ちゃんてばかわいーぞー。そんなかわいい千雨ちゃんは決まってるの？」

出来たらコーヒー飲んでるかっこいいトコ見たいなあ。
あ、でもでもカップルドリンクとか……は、ないみたいです、ちえ
い。

「いや、いいのか？こんなトコでケーキとか食ってて。まだ注文してねえし、店出れるだろ？」

うーん…

でもキティにはワタシ達がデートしてるって言ったよ？

多分ゲーム終わってたら、呼ぶんじゃないかな？

「んー、連絡は来てないでしょ？ならもう少しゆっくりでもいいんじゃない？」

とりあえず、ワタシには念話が来ていません。
まだゲーム中なんじゃないかなあ？

ちなみにワタシのケータイは千雨ちゃんが持っています。
てか、ワタシと千雨ちゃんだけで1つ。
キティも茶々丸ちゃんとで1つ。

ワタシ達にはあんまり必要ないですからね。
一応、程度に所持してます。

「つと、ああ確かにケータイにも来てないな。じゃあ平気か？」

やっぱりね。

まあワタシ達はめったに電話なんかしないですけど。

念話のほうがよくぽど便利ですからね。

「うん、平気だよ。ほら千雨ちゃん、選んで選んで。ワタシはこのオレンジームースのにするから、千雨ちゃん別のにしようよ。で、食べさせ合うのね」

カップルドリンクなくなつてイチヤコラ出来ますよー。
ふふーふ、らぶー。

「うえ…ここですか…。まあわかった、汀がそう言うならやってやる。これでいいのか？」

梨のタルトですね。

千雨ちゃんてば何も言わなくなつて、ワタシが好きなを選んでくれます。

んー！

千雨ちゃんかっこいいぞ！

らぶー。

「ふふーふ、ありがとう千雨ちゃん。大好きだよっ！」

自然と笑顔になっちゃいます。

やさしくてかっこいい千雨ちゃんが大好きだからです。

テーブル席で向かい合ったまま、千雨ちゃんへ手をのばします。

「……っ。…ああ、私もだ汀。ほら」

きゅっと、千雨ちゃんが手をとってくれます。

本当は人前で照れくさいハズなのに、真っ赤になりながらも笑ってくれる。

うん、デートだもん、こうでなくっちゃ。

にぎにぎ、ぎゅー。

「ねえ、不親切だね。隣り合って座れる席がよかったよ。そしたらもっときゅー出来たのに」

身体ごとぎゅーして、もっと近くで見つめ合えたのに。
耳元で大好きって囁けたのに。

そしたらもつと真つ赤な千雨ちゃんが見れたのにな。

「でも向かい合わせならお互いに食べさせやすいだろ。それに外だとやっぱ恥ずかしいし…。他人に見せるもんじゃねえよ…」

そっかそうですね。

向かい合ってお互いにフオークを相手へと運ぶのって素敵。

普段、家では寄り添ってあーんとか、もういつそ口移しとか珍しくないですもんね。

たまにはこんなのも悪くないです。

「ふふーふ、照れ屋な千雨ちゃんらぶー。じゃあじゃあ大好きって気持ちいっぱいこめて、あーんするからね」

てか思い返せば、家だとワタシってされるばかりでした。千雨ちゃんもけっこうワタシの世話好きですし。

誰かが始めると、みんなしてお世話してくれるんですよ。

「……っ！……ってか、こうして2人で出掛けんの久しぶりだよなっ！うん！なんつーかアレだ、言ったらデートっぽい気がしてきたっ」

えー、さっきまでのお買い物も十分デートっぽかったけどなー。
あ、でも確かにワタシの選ぶあいだは従者っぽかったかもです。

イチヤコラって言うより、かなり真剣に似合うの探してたかも。

「ふふーふ、千雨ちゃん露骨だよ？しかたないなあ。でもワタシはデートのつもりだからゆるしませーん。ココからはちゃんとおねがいね。まずはあーんだー」

大好きな千雨ちゃんとお出かけなんですから、たとえおつかいでもデートです、もちろん。

千雨ちゃんだって心はきつとそう感じてくれました。

だって、とっても楽しそうだったから。

でも今回はおつかいがあったから、従者の自覚が先立ったみたいですよ。

受け取り忘れるくらい夢中だったのに、どこか従者モードでいたみたい。

ふふーふ、それはそれで愛ですね。

らぶー。

「わ、わかってる、やるって。じゃあ注文するからな」

照れ屋な千雨ちゃん、ごめんね。

せっかくのデートだから、大好きの気持ちを抑えたくないんです。

ワタシには他人なんかあんまり気になりません。

もちろん限度もわきまえていますけれど、他人はやっぱり他人だから。

ぎゅーしてるの见られるくらいなら平気なんです。

ちゅーとかなら結界敷きますけど。

でも今は向かい合ったまま食べさせ合おうね。

千雨ちゃんの真っ赤な笑顔見たいから。

口移しするトキとかわらないくらい、いっぱい大好きで、ね。

「…んふぁ…ちゅっ…千雨っ…ちゃん?…」

「…んちゅぶっ…はっ…ちゅっ…」

「…あんっ…ふふっ…お店出るなり急にどうしたの?…うむっ…」

「…ちゆる…汀…ちゅっ…ちゅっ…」

「…ちゅぷ…なーに？食べさせっこそんっ、うんっ…そんなによかつたぁ…？」

「…悪い…んちゅっ、ちゅっ…なんかデートだっと思って汀見てたら…あむっ…久しぶりだし…ちゅー…」

「…ちゅぷ…んっ…しょーがないなあ、急にひっぱりこむからびっくりしたぞー…ちゅっ…」

「…ちゃびっ…ちゅっ、ちゅに…好きだ汀、愛してる…ちゅう…」

「…ちゅっむ…くちゅ…ワタシも愛してるよ…ちゅー…でも路地裏で抑えつけられて、あんっ…ふふ、くすぐりたい…」

「…結果は？…ちゅっ…ずちゅっ…」

「…ずちゅっ、ちゅっちゅっ…敷いたよー…ちゅっ…てかべろちゅーしながら聞くなー…ぺちゅ…」

「…んっ…、悪い、なんか抑えらんなかった。愛してる、汀。…んっ…」

「…んっ…ぷはっ。ふふーふ、千雨ちゃん、ワタシも愛してるよ。でもどしたの？急に肉食系？」

「わかんねえ、なんか急に…怒ったか？」

「ぜんぜん…んっ…、ね？でも、コレ以上はだめ」

「ああ、わかってる……なあ、もうすこし抱き締めてていいか？」

「うん、好きなだけいーよ。千雨ちゃんが落ちついたら帰ろうね」

「ん……。なあ汀？」

「わかってます。今日は千雨ちゃんのお部屋で寝るよ。キティはゲームあるから多分へーき」

「ああ…ならすぐ帰るか…」

「とか言いつつぎゅーしてるよー。ふふーふ、千雨ちゃんだーいき」

「……んっ…あんま言うなよ、おちつかねえ…んっ、ちゅっ…」

「…ちゅっ…ふふーふ…ちゅっむ…」

「よし！！コンプリートだ！！」

「おめでとうございます、マスター。どうぞお茶です」

「ああすまん。…ずずっ。茶々丸、汀はどうしてる」

「マイロードはまだお帰りではありません」

「む…そうか、気を使わせ……はっ！！」

「マスター？」

「汀め、千雨とデートして楽しんでるな!？」

「なるほど、確かに少し時間がたっていますね。……羨ましいです」

「くっ…そう言えば、見送ったトキ宣言してたか…」

「ええ、そのトキも羨ましく思いました」

「聞いてないわっ!!…くそっ!仕方ない、私が遣わせたんだ仕方がない…がっ!」

「はい、ですがそろそろお帰りいただきませんと。別荘外も夕食のお時間ですし。……いえ決して妬みからではなく」

「お前本音ボロボロ出てるからな…。だがその通りだ。茶々丸、汀達を呼べ」

「え…わたしですか? デートの邪魔はさすがに…」

「私にさせる気か！？それでも従者かっ！？？」

「…イエス、マスター」

「微妙に嫌そうにするなっ！！」

第29話 宅配便は届かない その2＊（後書き）

第29話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

千雨イチャコラ回でした。

ちなみにこの後急いで帰った2人は、受け取りをすっかり忘れしました。

帰宅直前に気付いて、結局転移で往復。

幸いエヴァにはバレず、多少嫉妬されつつ無事ゲームを届けましたとき。

そして、夜はもちろんイチャコラ全開でした。

今回も感想をいただきました。

ありがとうございます！！

第28話の最後をほめていただきました。

うれしいです！！

うれしくって、今回、予定にはなかった最後の1幕、エヴァ茶々丸の掛け合いを書きました。

つつい調子にのっちゃいました。

てへり。

ではgrand病原でした
おやすみなさい

第30話 不思議の図書館島*

《きーんこーんかーこーん》

「やあ、みんな、久しぶりですまないね。はっはっはっ」

「はいっ！お久しぶりです高畑先生！あの、出張お疲れさまです！」

「うん、ありがとうアスナくん。君たちがしっかりしてくれから、僕も安心して出張に行けるよ。はっはっはっ」

「…はいっ！任せてください！」

「ちょっとアスナさん！聞き捨てなりません！このクラスを任せられているのは、クラス委員であるこの私ですわ。高畑先生の前だからって、カッコつけないでいただけます？」

「ちよっ！？いいんちよ何言ってんのよ！？べ、別にカッコつけてなんか…」

「アスナ、アスナ。そないに顔、真っ赤にしても説得力ない

で？」

「木乃香さんの言うとおりですわ。と言うかアスナさんのジジコンは知れ渡っていますし、今更隠す事でもないでしょう？」

「ジッ、ジジコン言うんじゃねー！シヨタコンのクセにー！」

「なっ！？誰がシヨタコンですか！？きー！！」

「おっ、もはや恒例のカードが今日も火蓋を切ったようです！！さあ、実況はおなじみ麻帆良報道部の朝倉でお送りします。解説のゆーなさん、いかがですか？」

「いいんちよのメンタル先制攻撃は、見事にアスナのクロスカウンターで痛み分けのよーです！ここからは女の意地のぶつかり合いだー！シヨタとジジ、底辺の戦いを制するのはどっち！？」

「「ちょっと！？」」

「うひい！？」

「はっはっはっ、みんな元気があって結構だけど、あまり騒ぎすぎ

てはダメだぞ」

「バカだらけです、うるさくて本も読めないです」

「ゆえー、き、聞こえちゃうよ…」

「くんくん…。やっぱり緒々嶋・マクダウエル一家からはラブ臭がするわ。それも家族愛とは違う！？…………ぐっへっへ」

「うわあ…パルがスゴイ顔で笑ってる…キモ」

「いやいや、くぎみーも結構ひどいじゃん？」

「くぎみー言うな！」

帰りのHRって無視して帰宅しちゃっていいんでしたっけ？

いつまでも始まらないからついそんなコトかん考えちゃいました。でもコレってワタシ達の所属する、麻帆良学園女子中等部2・Aの日常なんですよね。

まあどうでもいいからはよおわれー。

「ほら汀、雲見てないで教科書とか寄越せ」

お、ありがと千雨ちゃん。

はいコレおねがいね。

チート美少女汀ちゃんは荷物を持ち歩きません。
従者の千雨ちゃんが全部持ってくれますからね。

ワタシの“魔法”を応用した収納もありますから、本来は荷物って
考え方自体が必要ないんですけどね。

実際のトコ、自作のチート魔法具とか貴重な素材とかは全部ソコで
すし。

でも主の荷物を扱うのも、従者の立派なお仕事ですから。
学園用品や身の回り品などは、全部千雨ちゃんが持ち歩いてくれて
います。

実は千雨ちゃん、魔女の従者として既に能力的な部分は十分です！
あとはメンタル。

ワタシが貶されたりすると、実はキティ以上に沸点低いんだもんね。

ふふーふ、千雨ちゃんらぶー。

わかりやすすぎる愛情がとってもうれしいです。

「緒々嶋さん、珍しいです、本をお探しですか？」

「ああ、まあな」

今日は図書館島にきてみました。

小規模の島がそのまま図書館になっている、麻帆良的施設の1つです。

なんでわざわざ島？

「こんにちは、綾瀬さん」

この島にある巨大な建物は、もちろんすべて図書館。

しかもなにを考えちゃったのか、地下にがんがん掘り下げて拡張されまくった司書泣かせな施設です。

てか、魔法前提の建築様式とか：

秘匿秘匿：

「絡繰さんも、お二人も、こんにちはです」

“ない本はない”なんてまことしやかに囁かれる図書館島ですが、とてつもない欠点があります。

ぶっちゃけ、管理が出来てないって欠点が。

“ない本はない、でも見つからない”なんて言われていますからね。

「綾瀬夕映か、随分な格好だな」

司書が管理が出来ているのは、ごくごく表面部分だけ。

新しく発行された書籍を管理し、古きを奥へ押しやるだけ。

その奥ってのが、アレです魔法前提エリアです。

「こんにちは、綾瀬夕映さん」

しかもそのエリアには古い書籍だけではなく、ど真ん中の魔法書とかあるし。

もしかしなくても、普通の書籍のほうがかモフラージュ：なんだろうな。

管理が出来てない、ではなく、あえて管理をさせていないって訳ですね。

かなりの深部に察知出来る魔法使いの気配、コレがおそらく本命の

司書。

一定以上の深部からは、魔法使いの書架があるんでしょう。

そうです、ここも一般人への秘匿を盾にした防衛をしてるんですね。

地下深くに魔法使いの書架を配置し、上から蓋をするように一般人向け図書館をかぶせる。

異常な書籍量で一般人を誤魔化しつつ、外部魔法使いへのデコイとしても活用。

実際、地下には相当な魔力を持つ魔法具が、この場合魔法書の類いが感知できます。

立派な襲撃候補地でしょう。

「はいです、これから図書館探検部の活動なのです。今日こそ新しいエリアに踏み込んでやるです」

だってのに、この図書館島には麻帆良全域の各学園をまたいだ部活、図書館島探検部なんてのが活動しています。

中高大の合同サークルとして、びっくりするくらいの人数が所属するこの探検部は相応のコミュニティを持つ巨大組織。

しかも麻帆良公認です。

まあいいけど。

彼女、綾瀬夕映もその一員らしいです。

ヘルメットにライト、ザイルにリュックサックの重装備です、見たらわかるし。

そこまですんなら制服も着替えたら？

「では、のどかが待っているので失礼するです」

そう言って彼女は駆けて行きました。

行く先はまさしく魔窟ですが。

さ、邪魔者は去りました。

テキトーな奥まったトコで人工司書精霊呼び出して、本を探させましょう。

「えっと…あれ？司書精霊呼び出すのってどうやんだ？」

わっ、ぽひゅ、って鳴った。

構築し出した魔力で照らされてた千雨ちゃんが、急にソレを拡散させたから、ぽひゅ、って。

ふふーふ、おかしいの。

「あ、千雨さん、ではわたしが呼び出します。リストをお願いしますね」

もー。

千雨ちゃんは学園の魔法施設を、本当に無意識に避けちゃってますね。

でも千雨ちゃんの麻帆良キライは仕方ないかなあ…
なんて甘やかしちゃうのは、主としてダメなトコ？

でも千雨ちゃんらぶだからしょうがないのです！

「ああ、悪い。なんつーか図書館島自体好きになれないせいとか、すぐ忘れんだよね…」

本人にも自覚がありますし、あんまり厳しくいくのも、ね？
それにその分は茶々丸ちゃんがフォローしてくれますし。

茶々丸ちゃんてば、オカン級万能従者だもんね。

「お前は麻帆良自体が嫌いだからな。敵対的な介入なら嬉々として行くくらいだ、そう言うコトもあるだろう。だが従者としては減点だな」

やっぱりキティから見ても、マイナスかー。

後から生まれた茶々丸ちゃんが従者としては完璧すぎだからこそ、千雨ちゃんの所作が目につくのは確かですもんね。

言葉使いもあのままだし。

それはワタシの希望なんですけどね。

千雨ちゃんのまま、全てを奪ったワタシの希望。

まあ今の千雨ちゃんの実力なら、強制介入でも余裕で行使できるハズですから問題はないと言えはなないです。

てか強制介入とか得意分野？

主に似ちゃったなあ：

「ふふーふ、介入しちゃう？」

わざわざ施設深くで作業を続ける人工精霊を正式に呼び出す必要は、実はないのです。

図書館島自体に掛けられた人工精霊を管理する魔法式に介入、手っ取り早くワタシ達専用のソレを作ってしまうえばそれで済む話。

千雨ちゃんでも余裕で出来ますよ。

もちろん麻帆良連中には気付かれずに。

ワタシ達の魔法行使は、極端な隠匿が前提ですから。

「ぐっ…絡繰、後で教えてくれ」

ふふーふ、千雨ちゃんは一生懸命ですね。

がんばれー、いつでもすぐ側で応援してますよ。

先生してる茶々丸ちゃんも見たいし…

「お任せください。簡単ですから大丈夫ですよ。…では呼び出しますので」

茶々丸ちゃんの身体が淡く照らされ、けれどその光は瞬時に消え失せる。

まだまだ完全ではないけれど、それでも十分な隠匿です。

麻帆良連中程度では、茶々丸ちゃんの魔法行使を察知するコトも特定するコトもムリでしょうね。

当然無詠唱で行使された召喚によって、1メートルほどの精霊が姿を現しました。

足がなくぶかぶか浮かんだ、コミカルな幽霊みたいなかわいい精霊です。

てか、でかくない？

「…マイロード、大きくありませんか？」

前に呼んだトキのは半分くらいだったのに…
えーと…探査探査っと…あれ変質してる？

「うん、おつきーね…なんだコレ」

なんだコレ…レア種？

人工精霊にレア種ってなに？

しかも自称！？

「ま、まあ本のリスト渡して…平気だよな？」

え？…ふんふん…

つまりとっても珍しい人工精霊でめったに呼び出しに応じないけど、
出てきたらすごいラッキー？

はい？…好きな本をプレゼント？

この子、本気？

「わ、私に聞くなっ」

禁書あげるよって…

まてまて、本格的に探査しよう。

……いない？

「茶々丸ちゃん、この子ちょっと普通じゃないみたい。この図書館島に掛かってる人工精霊管理の魔法式に存在していないもの」

図書館島の人工精霊管理魔法式を全部探査してもこの子は存在していません。

はぐれ精霊みたいです。

攻撃の意思はないみたいだけれど…
この子の言ってるコトって、とんでもないコトです。

しかも昨日今日誕生した訳ではない様子から見て、ソレを頼んでも恐らく発覚しないでしょう。
どうやら何冊も持って来れるみたいだし…

やった、すごいラッキー！！

「マイロード…つまりどうゆうコトですか？」

ココにある禁書のリストなんて知りませんから、今から探知して選ばなきゃいけません！

えーと…

うわっ、目移りしちゃう！？

あ、みんなに説明しないと…

「うんとね、たぶん何かの魔法書から漏れ出た精霊が図書館島の管理式で変質したか、人工精霊が禁書とかに侵された結果かなあ？どちみち真つ当な精霊じゃないね。……うん、しかも使い捨て」

ねえ、棚ごと取れないの？

あ、無理なの。

ちえつ。

ココの深部なら棚ごと崩落とか珍しくないみたいだし、いけるかと思っただけだな…

「うん？使い捨てってどうなってんだ？」

持ち出しはバレないにしても、魔法書が移動したらダメじゃないかしら？

ふむ、なるほど、あなたの体内に入れると大丈夫なのね？

ならば、容赦なくリストアップです！

アレとコレとソレと…

「当たり前だけど、1度命令を行使したら消滅するってコト。完全に島の管理式から外れてる証拠だね。で、ココからがびっくりする話」

このくらいなら平気ね？

あら、まだいけるの？

わかったわ少し待ちなさい。

リストアップと同時にこの子の探査も改めて行っていますが、圧巻です。

「ふむ、珍しいだろうが、コレだけ力ある魔法書が揃えば無くもない話だ。で、びっくりとは？」

この子内部に結界があります。

いえ、結界そのものが半司書精霊化したような存在です。

ワタシも長生きしているけれど、とても珍しい現象ですよ。

「本、くれるって。禁書でもなんでも完璧に隠して持ち出せるんだって」

うん、コレでいいわ。

ワタシの魔力も貸してあげるから、がんばって。

30分したらソレを目安に強制召喚するわ、それまでに揃えるのよ？

ふう、しかし驚きましたね。

棚ぼたです、うん。

「「「は？」」」

別にワタシ自身でも強奪するコトは楽勝ですが、一応麻帆良在住ってコトで遠慮していました。

でもこの偶然、貰っとくしかありませんよね。

あ、でも適当にコピって、知られずに返しとくコトにしましょうか。コレクターとかではないですからね。

所詮書物、内容の把握さえ出来ればそれで済む話です。

「それがこの子の在り方なんだって。じゃ、行きなさい」

でも、とてもすばらしい出来事でした。

あとで茶々丸ちゃんにはたっぷりごほうびですね！

ふふーふ、寝かさないぞー。

「「「待て（待ってください）理解が追い付かない（追い付きません）！？」」」

ん？

ふふーふ、ラッキーってコトだってば。

「ゆえー、遅れちゃうよー」

「すみません、のどか。先ほど緒々嶋さん達に会ったのです」

「緒々嶋さん…って、クラスの？」

「はいです。4人揃って本を探していました」

「そっかし、本好きなのかなあ？」

「図書館島まで来るくらいです、おそろくは」

「ゆえ、緒々嶋さん達とお話ししてたの？」

「あ、いえ挨拶程度です。それより…」

「なにかあったの？」

「緒々嶋さん：汀さんが本棚をなぞって歩く姿があまりに綺麗で見惚れてしまっていたのです。あの4人は皆さんとても綺麗ですが、汀さんは：言葉に出来ないくらいです」

「あ、うん、わかるかも。綺麗すぎて気持ち」

「はいです。汀さんの綺麗さは、同じ女ながら思わずため息ついてしまう程です。マクダウエルさんや絡繰さん、千雨さんだってクラスでも飛び抜けた別格の美人ですが、汀さんはその3人すら置き去りにする綺麗さです」

「ゆえ、緒々嶋さんとなにかあったの？すごく力入ってるよ」

「あ、いえ、違います。ですがあれほどの存在が同じクラスなのです、なんだか憧れすら超えた不思議な気持ちがあるです」

「私は憧れなんておそれ多いかなあ…」

「まったく：汀さんの事は別にしても、のどかのそれは何とかしないといけないですね。のどかは可愛いんですから、自信を持つです」

「む、無理だよー」

「あっ、まずいです! のどか、急ぎましょう、この話は後です!」

「あううう、まってよゆえー」

第30話 不思議の図書館島＊（後書き）

第30話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいてありがとうございます。

図書館島回。

あれを管理するなら人工精霊とか必要ですよね？ってだけの回です。
イチャコラないし。

汀はゲットした禁書をコピーして、ちゃんとオリジナルを返却しました。

もちろんバレずに。

夕映を使って汀がクラスでどんな印象を受けているかを書いてみました。

なんか夕映ってばあやしげなセリフを言っていました、百合に向かったりはしませんよ。

千雨茶々丸の身体は汀の謹製です。

原作よりいくらか美人度アップしてます。

ベースは原作の感じでイメージしちゃってください。

あ、茶々丸捏造で書き忘れましたが、茶々丸は耳とか普通です。
てか見た目人間です、あしからず。
表情もちやんとありますよ。

今回も、感想をいただきました。

ありがとうございます！！

今話は少し控え目ですが、明日からまたイチャコラします。

ご期待にそえますようにがんばります！！

今夜はちよつと体調的にアレで眠れず、しかも執筆も遅れてしまいました。

ごめんなさい。

明日もちよつとだめかも…

ではg r a n d病原でした
おやすみなさい

第31話 嫉妬だって大事な気持ち

——まさかこんな事になるとは思いもよらなかった。世界の、力なき人々のために戦い続けていたつもりで、私はいったい何をしてきたのだろう。同じ志を抱いていたハズのかの国には裏切られ、いまや追われる身だ。かつてその手を取った人々も、多額の懸賞金目当てに私に武器を向ける。私はこんな世界のために戦っていたのか。もはや私の心にはあの人しかない。まだ私が彼らにこの杖を向けることなく諦めることもないのは、ただひたすらに彼女を胸に抱いているからだ。互いに想いを伝えたあの日からこの胸に宿る確かなかがり火が、暗闇を行くような今の私を支えてくれている。ああ愛しの姫、オステイラの姫君よ。君の名を噛み締めるこの一瞬が、私を奮い立たせる。……どうやら見つかったようだ。今日も彼らを殺さずにいられるだろうか。だがどうあれ戦うしかない。私は彼女に会うまで死ぬわけにはいかないんだ！いくぞ！——

「あ、ごめんキティ、ちょっと外すよ？」

山場のシリアス展開に集中するキティかわいい…

ワタシの手を握ったままムービーを見入っていたキティに、断りをいれます。

バトルに入ったからもう声かけても平気だね？

「む？なんだ飽きたか？少し待ってくれ、すぐにセーブする」

「いえいえ、キティは続けて？ワタシにはワタシの闘いが待ってるのさ。ほらほら」

だから、繋いだ手を放したらいいと思います。
右手だけじゃ、上手く操作できないでしょ？

ぷらぷらゆすつて、放せアピールです。

「む…くっ…、闘い？ああ茶々丸か」

あ、ふふーふ、意地になっちゃってかわいいなあ、らぶー。
ちよつと痛いくらいに強く握られて、ぷらぷら止められちゃいました。

どうしよう、キティともっとくつつきたいです。
ぎゅーしたらやっぱり邪魔になる？

よし、じゃあ邪魔にならない方法でこの気持ちを伝えよう！！
ん…ちゅっ。

「っ…なんだ急に。…やはり飽きたか、邪魔したくなったな？」

「ちーがーうーよー。ほっぺにちゅーは大好きを伝えたいから。邪魔したくないからぎゅー我慢してるもん」

キティ、ひどいよー。

おもいっきりぎゅーして、邪魔しちゃいましょうか。

…うん、いいよね？

ふふーふ、ぎゅー！

「あつ、こらっ、つと。わかった、わかったからちよつと待て。ほら後ろからにしてくれ、今死んだら随分やり直しになる」

ふふーふ、キティを観念させたようです。

しかたない、邪魔しないでやるかー。

ソファーとキティのあいだに入り込んで、後ろから抱き締めちゃいます。

お腹に手をまわしてなでなで、うなじに頬を預けてうつとり。

んー！！キティだいすきー！！

すりすり、なでなで…

あ、なんだか好きすぎて涙が出る。

完全無欠のチート美少女汀ちゃんですが、キティの側では結構泣い

たりしてます。

ぽろりと零れるような、そんな涙が出るコトがあるんです。

たしか感情が震え過ぎると、出るんですっけ？

うん、だとしたら納得ですね。

いつだって好きの気持ちが高鳴ってますもん。

「……ん？ うわっ！？ な、泣くな汀！？ すまん、私が悪かった！！
すぐ切る、ゲームなんかすぐ止めるから泣かないでくれ！！」

ふふーふ、違うよキティ。

好きで好きで気持ちが止められなくて、それで涙が出ちゃったんだ。

しあわせ過ぎて涙が出ちゃったんだよ。

「マイロード…はあ……」

バレっ…てないみたいですネ。

まさかワタシの抜き足に気付いたのかと思いましたよ。

ふふーふ、いたずら続行です。

「…：…呼んだかなっ？」

台所に立つ茶々丸ちゃんの両手を背後から拘束します！

茶々丸ちゃんの匂い、茶々丸ちゃんの熱を感じて胸がほっこり。

…さっきまでキティにさんざん甘えましたから、今度はそうそう泣いたりしませんよ。

てか、うん、包丁とか持つてるからね。

拘束はむしろ危険防止ね。

包丁程度じゃワタシも茶々丸ちゃんも傷なんかつきやしませんから、食材への危険防止になっちゃうけど。

「！？…っ！？…マイロード…見ましたか？」

ふふーふ、ここ最近の茶々丸ちゃんは反応とってもかわいいのです。わたわたと、でもすぐ手にしていたモノを置いて無抵抗。

拘束を緩めると、こっちに向き直ってぎゅー。

「なにがかなあ？お口もごもごしてたコト？口臭消し何回もつかってたコト？」

茶々丸ちゃんてば、ワタシを抱き留めるのホント上手。ぴったり包まれて、安心感すごいです。

うん、だから上目遣いで聞いてあげます。

もちろん見てたよ？

「…っ！！…マ、マイロードがっ！！…わたしの…あ、味がいいなんて言うから…だって…」

口移しとか、べろちゅーの感想です。
きゃー！

あせあせ茶々丸ちゃんかわいい！
らぶー。

ワタシもちよっと、てれり。

「ふふーふ、急に気になっちゃったんだ？前から茶々丸ちゃん味って言ったりしてたのに？急に恥ずかしくなってきたんだ？」

そうです。

前からしょっちゅう言ってたコトです。

ふふーふ、てれり。

「……はい：マスターや千雨さんが、マイロードのために：その、色々身仕度されるのを見ていたら：わたし、あの、今まで不十分だった気がして…」

確かにキティも千雨ちゃんもいっぱいいい女の子としてがんばってくれています。

全部ぜーんぶワタシのためです。

ふふーふ、愛しています。

だからもちろんワタシもいっぱい好きって伝えて、いっぱいいっぱいがんばっていますよ。

でも茶々丸ちゃんだって不十分だなんてコトはないよ？

「うん、あのね茶々丸ちゃん、気付いてる？ 今までの茶々丸ちゃんなら、きつともうオーバーヒートしちゃってるよ？」

べろちゅーの話題、身仕度の話題、とても想像しやすい話題ばかり。ワタシだって多少てれりこです。

でもワタシまだ何も命令してません。

今までの茶々丸ちゃんならとくに、ですよ？

ふふーふ、そろそろ、だね？

「…あ、…わたし、やっぱり？」

ふふーふ“やっぱり” なんだね。

自覚、あるんだよね。

「だね。もうすぐ茶々丸ちゃん自身の心が白旗あげるんだ。てかね、ホントはオーバーヒートなんて起きる訳ないの、ワタシが造ったんだよ？ 最初から全部茶々丸ちゃんの心の問題。魂の問題だって言ってたでしょ？」

抱き合って、瞳を合わせて、真剣な気持ちを込めます。

茶々丸ちゃんは今もうきつと逃げないけれど、でも逃がさないって気持ち。

なんだか急展開だけど、茶々丸ちゃんずっと抱えてたモノが溢れそうだから。

「…はい。わたしが…機械でいたがったから…」

そう、茶々丸ちゃんのオーバーヒートは“逃避”なんです。
幸せな感情、ワタシへの愛と共に沸き上がる醜い自分を隠すための

逃避。

憎しみと嫉妬を隠すための。

「うん。造られた、金属の、従者、茶々丸ちゃん。だから造られた存在でいるコトが、例えば機械のようでいるコトこそが、1番ワタシの役に立てるって、側にいる方法だって思ったんだもんね」

茶々丸ちゃんの核が完成した当初、ワタシはとてよろこびました。暇があれば抱き締めて、全開で魔力供給と調整をして。

たぶん、いえ間違いなく、愛情がこもったそれだったでしょう。今の茶々丸ちゃんへと向けるモノとは違うけれど、間違いなく愛情を向けていたんです。

そして当時はその存在を想像すらしなかったけど、核の中には茶々丸ちゃんの自我が既にいたそうです。

生きた魔法金属ですから、あり得なくはない話です。

産まれたばかりの茶々丸ちゃんは、ワタシの想いを、祝福を、ずっと受け取り続けていたそうです。

「…いいえ、わたしは逃げたんです。機械になれば、この気持ちから解放されて貴女の役に立てると…。わたしは…産まれた瞬間に嫉妬しました。貴女の隣にいるマスターに。貴女に仕える千雨さんに。だから…逃げたんです」

「うん知ってた、知ってたよ茶々丸ちゃん。だって体に宿る前の、核の中にいた茶々丸ちゃんの心にずっとワタシだけが接してたんだよ？あの頃は色々挑戦の日々だったけど、核の中のまだ名前もなかった茶々丸ちゃんはワタシを好きになってくれてたんだよね。だから産まれて、そこにあつた光景が受け入れられなかった。ワタシのために産まれたハズなのに、ワタシを愛するために身体を得たハズなのに、ワタシにはもう従者がいて、キティに名付けられて。それでも茶々丸ちゃんはこの生活を選んでくれた。ワタシを愛して、キティに仕えてくれたね。うん、だからね、ずっと待ってたんだ。茶々丸ちゃんの心が、嫉妬も、醜い部分さえもワタシに捧げるその日を。ずっと待ってるんだよ」

茶々丸ちゃんが身体を得て、完成したその瞬間です。

ワタシがそれに気が付いたのは。

壊れそうな、すぎるような瞳が、一瞬でチカラを得たのを見たんです。

ワタシはあの瞬間こそ、今の茶々丸ちゃんが産まれたんだと思うコトにしました。

ワタシは今日まで茶々丸ちゃんの愛を疑うコトなどありませんでした。

そしてこれからもないでしょう。

魔法なんかよりずっと素敵なチカラが、その瞳に宿ったのを見たんですから。

そして今も、ワタシだけを見つめているのですから。

「はい：マイロード、もう少しだけ：あと少しだけ待っていてください。産まれたあの日から、いえ、まだ名もなかったあの頃から、誰よりも貴女を愛しています。必ず、必ず他の誰よりもお側に参ります。マスターにも、千雨さんにも、遠慮なんかなくなってみせます」

「ふふーふ、うん、待ってるよ。そのトキは名乗ってね、緒々嶋だよ？」

「イエス、マイロード」

……んっ……

「ナア、ゴ主人ヨ」

「つと…なんだ？」

「魔女ハ妹ノ所カ？」

「だろうな、追い込むと言っていたから…よしっ」

「ケケケ、妹モ長持ちシタモンダゼ」

「それがあいつの手管だろ。…またこのアイテムか…。千雨が例外だったんだ」

「フーン、ドウデモイイゼ。ア、ソウダ気ニナッテタンダガ、何デ妹ハ“絡繰”ナンダヨ？」

「今更か？ああお前は妹としか呼ばんしな。簡単だ、プレッシャーを掛けていたんだ。汀はいずれ茶々丸が最近のようになると確信…いや、自らするつもりだった。だからあえて絡繰なんて名乗らせて、あいつの心を追い込んでいたんだ」

「ケケケ、サスガ魔女ダ」

「まあ、最初の頃は逆に安心感すら与える魔法の言葉だったろうがな。あいつ自身がそう在りたがっていたんだからな。だがその実、汀へと想いが募る程に自分の首を絞める、魔女の魔法だ」

「ケケケ、尊敬スラシチマウゼ」

「言っている。こっちは堪らん、コレからの茶々丸は難敵だぞ。…
そうだな千雨にも伝えておくか」

「仲ノイイコツテ」

「まあな。我ながら…不思議だよ。だが汀だ。汀が中心なんだ、私
にはそれが1番だ」

「意味不明ダゼ、マ、オレニモナントナク、ワカルケドナ」

「出たっ!!よし、おーい千雨えー!!調合調べ終わったかあー!!
」

——ああ、今行くから待ってろっ!!——

「ホント、仲イイゼ」

第31話 嫉妬だって大事な気持ち（後書き）

第31話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

茶々丸ブースト回でした。

いやまあ今後のイベントの伏線のつもりが、告白回になっちゃいました。

でもこれくらいしないとgrand病原の持つ、原作茶々丸イメージを抜け出せなくて。

いつまでもエヴァを優先する茶々丸ではありませんよ！

今回エヴァが遊んだのは通販したアレです。

あんがい良作？

今回も感想をいただきました。

ありがとうございます！！

タイトルにもイチャコラと銘打った手前、気負っていたのかもしれない。

アドバイス、ありがとうございます。

噛み締めて、がんばります！！

誤字のご指摘も感謝です、急いで直しました。

では、g r a n d病原でした
おやすみなさい

第32話 グロ気味ですが平常です*

「…はあ…はあ…うぷっ、吐きそ…」

あーん、もぐむぐ。

おー、おいしー。

「チッ、ダラシネエナ。オラ立チヤガレ」

んく、くぴくぴ

っぷは。

「待て…少し待ってくれ…てかなんだその速さは…。ギリ見えない
って、どうしろってんだよ…」

あむ、しゃりしゃり。

うん、とってもみずみずしいです。

「ア？マダ本気ジャネエゾ。言ッタロウガ、トリアエズ1戦ッテヨ」

え？うむっ……。

てれり、ありがとキティ。

「……頼む…誰か嘘だと言ってくれ…。あんだだけ追い回しておいて、何がとりあえずだよ…」

うわふ！？…ちよっともうなにー？

あんっ、やだ茶々丸ちゃんてばっ。

「ウルセエ、サツサト立チヤガレットテンダ。ドタマカチ割ル、ゾっ
！！」

ぐりぐり。

ふふーふ、どうだ？

「うわっ！？っ、危ねえな！！」

おわぷっ。

うあー、みえないー。

「ケケケ、ヤツパ立テンジャネエカ」

つと、あれ？

あ、うんいるいる。

「頭割られるくらいなら必死こくつつの！！…くそっ、思い出しちまったじゃねえかつ！！ほら見ろこのトリハダ！！」

ん…あむ…ちゅっ…

ふふー…ふあ？あっ…ちゅむ…

「イイ加減、壊サレルノクライ馴レヤガレ。コレカラモマタ、バツカンバツカン割ッテヤルゼ」

んん！？…ふあむ…むうつ…

いっしよは…ふあ…

「馴れるかつ！？冗談じゃねえ、やっと追い抜いたと思ったのに…」

見えないよっ…うつむ…

ぷはっ…って、だめだってば。

「ケケケ、マダマダシゴイテヤルゼ」

ほらほら茶々丸ちゃんはぎゅーまでなら許すから、落ち着きなさいってば。

ふぁっ!?!…キティ…あっ、こらもう…

「……いやまあそれはそれとして、チャチャゼロ少し待ってくれ。もういい加減スルーできねえ」

あっ!?!…もう、ホントにだーめ。

次はキティが指導するんでしょー?

「アン?」

ほら、見て千雨ちゃんが何か…

「おまえら……人が必死こいて訓練してる横でイチャコラしてんじやねえよ!!なんだそのフルーツ盛!?!なんだそのカップルジュース!?!いつの間に揃えたんだよ!!?私の血とか腕とかガンガン飛んでんのにリゾート気分かつ!?!白い波、目映い太陽、吹き飛ぶ私、染まる砂浜かつ!?!ホラーゲームかつ!?!挙げ句なんで絡繰が汀抱えてんだ!?!お前いつからビーチチェアに転職したんだよ!?!椅子なら椅子らしく大人しく潰されてやがれっ!!汀を撫で回して恍惚とすんなっ!!エヴァも、あーんウフフ、じゃねえ!!飛んできた私の腕何気無く消し飛ばすなよ!!汀だけしか見てくれないのなら、せめて2人は邪魔すんなよ!!」

やっぱり怒らせちゃったじゃん。

いえね、チート美少女汀ちゃんとしては全然困らないですけどね？
いやむしろワタシのために色々してくれたり、はっきり愛情を示
してもらえてすごくうれしいです、うん。

ふふーふ、しあわせー。

キティ、茶々丸ちゃん、らぶー。

でも今は一応訓練中な訳で。

千雨ちゃんが苦手とする近接戦闘のアドバイスをね、うん、する
ために観戦していた訳で。

ちゃんとやろうよ…

「訓練終わったら私が独占するからな！！」

「ケケケ、ナラソノ間ハ妹ヲシゴイテヤルゼ」

「…そうですか、仕方ありませんね。では大変遺憾ですが、わたし
は姉さんをフルボッコにしてマイロードにごほうびをいただくコト
にします」

「ふはは。なんだなんだ、こいつ案外面白く仕上がったじゃないか。うむ、我が従者ならそれくらいは言えんな」

「地力では勝てずとしても、勝つ気概で挑みます。万一でも億一でも、勝機を作り、掴んでみせます。マイロード、マスター、本当のわたしをどうぞご覧ください」

「言ウジャネエカ妹、バラバラニシテヤルゼ。ヨカッタナ、好キナ場所ニ突ツ込ンデモラエヨ」

「ただでは殺られませんよ。…では、マイロード、大変名残惜しいですがコチラでお待ちください」

「先に下ろせよ!! 汀抱っこしてすりすりしながら決め顔とか、頭おかしいだろ!？」

「千雨さん…逆の立場ならどうされましたか？」

「ぐっ……。ったく、はいはい、わかりましたよ。どうせ同じようにしましたよ。私も汀狂いですよ」

「私なら貴様らなんぞ汀を抱いたまま粉にしてやるな。うむ、ほら汀、私の膝を使え。茶々丸が出るなら空中戦だ、見やすいように膝

枕してやるぞ」

「む…千雨さん、早急に姉さんをフルボッコにする必要が出てきました」

「だな。わかった、まずは訓練を終えるぞ。バトル云々が絡むとエヴァには勝ちようがねえ」

「はい、それに勝てばごほうびです」

「あ、それ私もだよな？」

「ケケケ、勝ッテカラ言イヤガレ。オラッ!!」

だから真面目に…あ、ガチ本気でやってますね。

ふふーふ、キティのお膝すりすりー。

やんっ、みみいじらないでよう。

あ、千雨ちゃんと茶々丸ちゃんの首、落ちてきました。

うん、もっとがんばれ、期待してるよ。

「あー、まだ違和感残ってるよ、くっそ」

訓練はひとまず終わり。
恒例の反省会中です。

ふふーふ、千雨ちゃんてば頭気にしすぎですよ。

「そうだな、頭が前後ろ逆に再生してるぞ」

「あほか、気付くっつの」

あはは、そんな訳ないのに、もうキティってば。
したくたって出来ませんよ。

千雨ちゃんも気にしすぎです。

8回くらい首落とされて25回くらい頭叩き割られたからって、
もうすっかり元どおりでしょ。

ちゃんとワタシが大好きな千雨ちゃんの顔ですよ。

ふふーふ、らぶーだよ。

「千雨さんは頭狙いでしたからまだましですよ。わたし全身の至るところが気になりますし。：マイロード、よければ不備がないか確認していただけますか？」

茶々丸ちゃんも千雨ちゃんもワタシとの“魂の契約”により擬似的な不老不死です。

擬似的なのは、例外があるから。

ワタシが死ねば、同時に死にます。

ま、つまり死にませんってコトですね。

首が跳ねても、身体がバラされても、吸血鬼のお株を奪うくらいに即刻再生。

ですからワタシ達の訓練は、結構過激にドンパチです。

「ふふーふ、今すぐ？ だーめ、反省会終わったからね」

茶々丸ちゃんは本当に積極性が増しました。

けれど2人きりのトキは、今まで以上にてれてれでかわいい茶々丸ちゃんになっちゃうんですよ。

なのに前以上に愛を囁いて、身体に示してくれるんです。

ふふーふ、ホントにかわいい、らぶー。

「イエス、マイロード」

「あ、くっそ。汀、私にも「千雨ハバツゲームダゼ。オマエ死ニスギナンダヨ」

「だな。ごほうびなら今日は茶々丸だろう。お前は近接距離の苦手意識からか、間合い取りに注意し過ぎだ。実際、後退しようとして何度殺られた？」

お、茶々丸ちゃんのごほうびキティ公認みたいです。
ワタシにもごほうびみたいなものですね。

てか、ご主人様なキティかっこいいです。

ふふーふ、さすがワタシの旦那様です。
うっとりしちゃう、らぶー。

「……はあ、だよな。ああ、わかってんだ、今日は流石に自分でも呆れたくらいだ。頭じゃわかってんだよなあ」

そうなんです、実は千雨ちゃんは戦闘自体が苦手なんです。
近接戦闘ともなれば、正直1番弱いんですよね。

本人にも自覚があつて、克服したいと思つてくれています。
でも茶々丸ちゃんだって、千雨ちゃんと同じくらいがんばってる
し…やっぱり、ね？

「ナラ途中カラデモナントカシテミセロ」

「言うなよな、出来たらやってるつつの。つか、お前強くなりすぎ
なんだよ」

「ケケケ、ツマンネエ負け惜シミダナ」

けど確かにチャチャゼロは強くなりました。

ワタシやキティとは当然比べるコトすら馬鹿馬鹿しいですが、千
雨ちゃん茶々丸ちゃんでは手も足もでないくらいです。

まあ、攻撃魔法なしの縛りですけどね。

とはいえ転移と見紛う移動速度をみにつけましたから、広域殲滅
魔法すら発動してから回避できちゃいます。

そしてその魔法を目眩ましに、術者をバツサリ…ですね。

うんうん、一生懸命強化した甲斐がありますね。

とても頼もしいアタッカーの誕生です！！

「訓練を積んでいけば、いずれ速度にはついてゆけるようになる。だが、苦手意識の克服については……むしろキツパリ後衛ではいかなのか？」

このキティの問い掛けは、既に何度も繰り返されたモノです。そして千雨ちゃんの答えも変わりません。

「……私は汀の従者なんだ。バトルが好きじゃねえからって、主の後ろに引っ込むようになるのは嫌だ。今は無理でもいつかは汀の盾になりてえ。見習いなんかじゃなく、胸張って汀の従者なんだって言えるようになりてえ」

千雨ちゃんはいつも、それはそれは悔しそうにこう答えてくれます。

その願いがいつか叶うそのトキまで、決して折れず違えず、苦しみ悔しがってくれるでしょう。

ただひたすらワタシのために。

「ありがとう、千雨ちゃん。何回聞いてもすぐすっごくうれしいよ。ワタシは千雨ちゃんのコトが大好き。いつかきつと、千雨ちゃんが守ってくれるようになるって信じてるから」

だからワタシは待ちます。
ずっとずっと千雨ちゃんのすぐそばで。

「…ああ。ああ、何千年かかったって…いつか、絶対、汀を守れるくらいに…絶対なるから…」

千雨ちゃんの言うように、たとえ何千年かかったって。たとえそれ以上かかったって。

「ほら…泣かないで？ううん、泣くならこっち、ワタシの胸において」

千雨ちゃんが自分を認められるまで。

千雨ちゃんが自信を持てるまで。

「…うん…っ…ひくっ…ううあ……」

だから今は泣いていいよ。

いっぱいのお愛で包んであげるから。

また千雨ちゃんががんばれるように、ワタシが目一杯愛してあげるから。

どうか悲しまないで、愛しい千雨ちゃん。

「千雨さん…。マスター、退席してよろしかったのでしょうか？悔しいですが、わたしも十分に醜態を晒しました。マイロードと共に、千雨さんをお慰め出来ると思います…」

「…ふん。お前は千雨と違ってむしろ戦闘向きだから、いざとなれば積極的に前に出れる。だがあいつは敵と相対して、咄嗟に汀を頼る可能性がある。本人としてはそれが堪らないんだろう。今回の訓練結果が問題じゃないんだ、察してやれ」

「はい、マスター。それにやはりマイロードにお任せするのが1番ですよ。…わたしも千雨さんに負けないように精進します」

「ああ、そうしろ。特に今回は近接距離限定、攻撃魔法なしだったからお前に分があったが、枷を外して魔法を許可すれば結果は逆だ。その身体も魔力も汀渾身の特別製だが、上手く扱えないのであれば意味などないのだから」

「はい。必ずお役に立てるようになります」

「期待している。あいつらはまあ…時間があるだろう。茶々丸、茶

を淹れろ」

「はい、マスター。よいお煎餅がありますので、日本茶を淹れますね」

「任せる。…ふむ、魔界大戦のレベル上げでもするか」

「ナア、ゴ主人ニ妹ヨォ」

「なんだ？」

「姉さん？」

「敵ッテ誰ヲ想定シテンダ？オレ達ト戦闘ガ成立スル敵ナンザインノカ？ドイツモコイツモ獲物カのカダロ。身内デ比ベルト駄目ナ千雨ダッテ、外ジャ化物ダゼ？」

「「…………たしかに」」

第32話 グロ気味ですが平常です*（後書き）

第32話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

9日で投稿開始から1ヶ月。

これからがんばります。

評価やお気に入り登録してくださってるみなさん、すっごくうれしいです!!

ありがとうございます!!

この1ヶ月間、毎日それを確認するのがgrand病原の密かな楽しみでした。

従者はまだ発展途上なの回、でした。

まずごめんなさい。

今回みたいな表現は嫌いな方いるかもですよね。

なるべくおふざけ気味にしたつもりですが、逆に気にさわるって方もいるかもですよね。

ごめんなさい。

汀達は原作のエヴァみたく、ぱっぱか再生します。

それどころか、粉碎されても消し去られてもすぐ再生します。

結果、訓練も殺し合いです。

千雨茶々丸はまだまだ強くなりますが、実は既に比較対象がいなくらい強いです。

英雄？なにそれ美味しいの？的に。

今話中のチャチャゼロが言うとおり、敵として成立する相手はほばいません。

原作の最強状態ネギくらいかな？

汀？

彼女はチート魔女です。

魔法やら気やらを使う以上勝てる訳がありません。

今回も感想をいただきました。

ありがとうございます！！

1ヶ月間でgrand病原も成長出来てるってコトでしょうか。

コレからもがんばれます、ありがとうございます。

ちょこちょこ書き方変えてみます。

不快な表記あったりしたら、修正しますので是非ご指摘ください。

よさそうならスルーで。

ではgrand病原でした

おやすみなさい

第33話 今日急遽、ケーキ屋へ

ふと見上げた空は抜けるような青さです。

胸に風が吹き抜けるような、いやむしろすべてが落ちて行きそうな、そんな午後の空です。

ワタシがふと思い浮かべたのは魔法世界でいつか見た、地平線へと沈みゆく太陽。

なぜだか、あの夕暮れの大地を思い浮かべていました。

キティとチャチャゼロと見たあの夕暮れ。

トリハダが立つような雄大さに心が震えたあの夕暮れ。

訳もなく繋いだ手をきつく握りしめ、太陽が沈みきるまで誰も口を開かず、ただ真っ直ぐに見つめ続けたのを鮮明に覚えています。

《きーこーんかーんこーん》

ふう、やっと授業終わった。

あゝ…つまらないです。

やっぱり、旅したいなあ。

かつて経験したコトがないくらいに授業進行が遅れているこのク

ラス。

どの教科もぎりぎり基本の最低限をこなすのが精一杯のご様子。

チート美少女汀ちゃんがそれを楽しめる訳もなく、内職するかぼんやりするしかないのです…。

勉強自体は嫌いなんかじゃないんですよ、なにせ時間が有り余っていますから。

千雨ちゃんはこっそり読書、キティは寝てます。

ふふーふ、チャイム鳴ったよ？

あ、茶々丸ちゃんだけは授業に集中していたようですね。
ノート仕舞っています。

さ、退屈な授業も今日はコレまで。
なにしてお遊びしましょうか？

「なあ緒々嶋さんたち、いま時間ええかなあ？」

「あら近衛木乃香さん、ご用事？」

千雨ちゃんがワタシ達の帰り支度をしてくれている最中、ぱたぱたと近衛木乃香が寄って来ました。

うんうん、いつもありがとうね千雨ちゃん、ふふーふ。

ちなみに茶々丸ちゃんは、キティを起こしています。

とってもやさしい笑顔で肩をゆすって声かけてるのが、横目で見えます。

茶々丸ちゃんって、ふとしたトキの笑顔がとても素敵。

やさしくって、やわらかくって、包み込むようないっぱい想いを感じる笑顔なんです。

ココ最近の茶々丸ちゃんは特に素敵になってきています。

おもわず見蕩れちゃったりして、てれり。

そんな素敵な茶々丸ちゃんも、照れ屋さんな茶々丸ちゃんも大好きだよ。

らぶー。

あ、ふふ、キティむにゃむにゃしてるー。

「あ、うんそうなんやけど…あかん？」

「まあ…構わないわよ。どうぞ」

なんか彼女、及び腰ですよ？

まあろくに話したコトもないですからね。

近衛木乃香は近衛学園長の孫です。
望んで近付きたい相手じゃありません。

てか、彼女って魔力だらなんですよね：

コレってたぶん、ただ放置するだけでもまわりに影響出てる。
だって総魔力量が一般とは明らかに差のあるせいで、ただ制御出来ていないだけでも目立ってしょうがないですよ。

麻帆良が霊地であるコトも後押しするでしょうし、ヘタに“チチンパイパイ”とか言ったらなにかしら発動する可能性がありますよ。
あからさまに危険、なんで放置してるんでしょうね。

もしかして彼女って存在自体がなにかのワナ？

「うん、えつとな、ちょおこないだみたく話聞きたいんやけど」

「このあいだの話……？」

このあいだ…どのあいだ？

ワタシ達には別荘とかあるので、そんなコト急に言われても困ります。
ワタシ自身がコレは必要だと判断した事柄なら、いつだつてすぐに思い出せるんですけどね。

ふふーふ、不朽不滅は伊達じゃないよ？

てか彼女とは別に接点多くありませんし。

雑談とか挨拶まじりとかなら覚えてる訳ないない。

んゝ…？

千雨ちゃんわかる？

「おい…それはまたアレか、高畑のコトじゃねえよな？」

「あ、うん、高畑先生のこと。またあん時みたくアドバイスしてくれへん？」

…ああ、なるほど。

あのふざけた誤解のコトですか。

何度だって言ってやるもの。

千雨ちゃんはワタシのですよーだ。

…神楽坂明日菜に何か呼び名を付けた気がするけど、忘れちゃいました。

まあいいや、勢いだったでしょうし。

てかアドバイスなんかしたかなあ？

「あら、アドバイスなんてした？」

「アスナがな、緒々嶋さんの言葉ってえらい説得力あるー言うて。ほらアスナ興奮しとったのに、ゆっくり説明してくれたやろ。やか

らウチもそう思ってたんや。それに、高畑先生とは知り合いなんやろ？色々聞きたい言うてんけど、あかんやろか？」

ん…説得力？

麻帆良結界の認識阻害に染まった彼女達が、たった数分の会話でそれを感じた？

違和感があります。

ワタシは彼女達になにもしていません。

むしろ“ほぼなにも感じ入らないように”したハズです。

コレは誰かが意識介入をしましたね…

でも、あえてワタシに近づけるように仕向けるなんて…

近衛学園長の一派の仕業でしょうか？

「おい、汀、行くぞ」

あ、キティ起きたんだね。

あらら、ちよつとごきげんなめさん？

ふふーふ、むしろかわいいよう。

ぷりぷりキティらぶー。

ぎゅーするとすぐごきげんになってくれるのに、ココが教室だなんて残念すぎ。

いっそ結界敷いて……いやいや。

要警戒も発覚しましたしね。

「ええ、少し待っていて。彼女がお話あるんですって」

【要警戒状況だよ。近衛木乃香が誘導されてワタシに接触して来たみたい】

「で、近衛。その神楽坂はどうしたんだよ？」

【マジか。……くそ、ダメだ感知出来ねえ】

あ、……ちえー。

千雨ちゃんて魔力を行使するトキ、すごく凛々しく見えてカッコいいんですよ。

でも今はすぐしかめっ面になっちゃった。

ふふーふ、あとでおねだりするからいいもん。

「あ、先に店行って席とってるて。あんな、マクダウェルさんたちの分もー、て言うてるんやけど……」

「なんだ？ 私の分とは何の話だ？」

【待て千雨、私も気付かなかった。汀、なにがあった？】

基本的にワタシとキティは、常に周囲を魔法探知しています。

自身の付近を重点的にと、麻帆良結界に介入してです。

付近の探知では、一定範囲内の魔法発動やその種類、さらに魔力や気等の動きまでも容易に詳細に把握します。

まあコレはワタシやキティからしたら、当たり前前の行動です。

逆に結界の介入は、単純にそれへの出入りを感じ取る程度です。結界内にある魔力存在、つまり魔法使いや魔具の数を感知していて、それが増えたり減ったりがわかります。

基本的にこの方法では位置までは把握出来ませんし、大規模でもない魔法の発動も感知出来ません。

まあ、あんまり関心ないですからね。

この介入は、近衛学園長がワタシ達へと行った“麻帆良大結界・个体指定封印”を逆手に取った手法です。

頼みの綱が完全無効なうえ逆に利用された彼の狼狽たるや、それはお笑いでしたね。

明確な敵対行動だと賠償を求め、この介入を認めさせて、現在までも便利に使っています。

もちろん他にも色々、ね。

生活が便利になるよう譲歩させてやったのだ。

魔女なめんなー、ふふーふ。

「高畑先生のコトが聞きたいそうよ。神楽坂明日菜さんが、ですって。本人は席を用意して待っているみたい」

【今じゃなくて、事前に意識介入を行われている可能性が高いの。神楽坂明日菜と共に“緒々嶋汀は信用出来る”みたいな感じだと思う。彼女、ワタシに“説得力を感じた”って言ったんだよね。近衛木乃香、神楽坂明日菜の両名との接触には、注意を払って意識させないようにしてきたから感じた訳がないのに。あと、ねむねむキティとってもぷりていだったよ？】

ふふーふ、ワタシ以外の前であんなかわいい姿を見せるなんて嫉妬しちゃうよ？

ぎゅーして…じゃないや、ココ教室だ。

キティが嫌がるから、ぎゅーはあとに取っておきます、がまんがまん。

「なんだ、ココではいかなのか？あまり時間は取りたくないな」

【うるさい、なら汀が起こしに来い。しかし…ふむ、対象が対象だからな。考えられるとすれば…軽い誘導程度で“汀の話は役に立った”とお互いに言い合わせるだけで出来る簡単な操作の類い、か。悪意がない分、仕込みも早いし当の本人には違和感などない。状況が整えば、簡単かつ効果的な手法だな】

この手法、魔法探知で本来は辿れず、発覚しても証拠がないのが特徴です。

が、ある種の使いふるされた手法でもありますから、それなりに場数を踏んだ者なら予測もたちます。

魔法で意識を変革してしまうコトと比べると流石に効果は薄いですが、探知が効かず証拠も残らないコトは相当な利点。

その性質から少くない悪用の実績がある手法です。

当然ながら一般的魔法使い同士では好まれていない、使われていないハズです。

でもこの街では、こんな意識誘導は普通みたいですけどね。

あ、この街自体、一般的じゃないや。

「ごめんな、アスナ照れ屋やから。こっそりお話しできるお店に来て欲しい」

「ふむ…汀？」

【このやり口と仮定するなら近衛学園長か？最近は二代目英雄の件もあって、こちらをほだそうと必死だしな】

まあ麻帆良連中ならこんなまわりくどい方法ではなく、背中に魔法を放ちますしね。

近衛学園長か、それとも彼を出し抜く存在がいるのか…ですね。

うん、確証はないけれど、そろそろ煩わしくなってきましたね。

このごろの二代目くんキツカケ騒動、実にめんどくさいよ。

麻帆良、滅ぼしちやおっかなあ…

「ワタシはパスね。千雨？」

【可能性は高いね。近衛学園長があれだけ執心なんだもん、きっと孫でもなんでも使って二代目くんを取り込もうとするよ。そのトキ

にワタシ達が近衛木乃香と交流があれば、楔になると考えるかも。
最近五月蠅いんだよね千雨ちゃん？」

なんにせよ、ワタシの邪魔するなら消そう。

ま、今は目の前の問題、近衛木乃香の提案についてですね。

では、みんなに意見を聞いてみよー。

「私は…高畑のうぜえのが緩和されんなら行ってもいい」

【ああ、暇があれば電話来てるぜ。汀が録音した不在応答で相手してやってる。いいんだよね？】

ちなみに我が家のインターネットなど通信関連は、千雨ちゃんの
担当です。

電話も含みます。

ほら、別口に完全管理して繋がないと、ワタシの結界で遮断され
っぱなしになっちゃうからね。

千雨ちゃんがウチに来るまでは、ワタシもキティも面倒で放置。
遮断されっぱなしでした。

ありがとうね、千雨ちゃん。

「あら神楽坂明日菜さんにそんなコト期待してるの？」

【うん、ありがとう千雨ちゃん。てかね、昔に決めた定期会談には

出てるのに、急にそれ以上を求められたって知らないもの。さて、決を取ろう。賛成？反対？」

では改めて、みんな意見を聞いてみよー。

「いや、まさか。神楽坂が騒ぐのも、高畑うぜえのウチだろ？今日断っても諦めなさそうだしな。だから賛成。絡繰は？」

【まあ従者としては反対だな。汀が言うように誘導してるんなら、間違いない罠だろ。汀が引っ掛かるとは思えないけど、面倒はさけてえな】

「わたしは特に問題ありません。夕食の買い物に時間が取れるようでしたら、大丈夫です。ですので消極的賛成に一票を。マスターはいかがされますか？」

【個人的にも賛成です。マイロードを煩わす連中には1度制裁をと考えていましたので。あちらからの接触です、いい機会かと】

「高畑のコトなど覚えとらん。行っても言うコトなどない。反対だな」

【しかし、ふむ、殺り合う殺り合わないは別にして、今回こんなコトに踏みきったのが誰だか確証を得ておくのは今後のためになる。それがわからずとも、麻帆良連中がどこまで過敏か確かめておくのも悪くはない。賛成だ。汀どうする？】

「ふむ、賛成2反対1ね…」

【足して賛成4反対2だね。うん、わかった】

ふう、今日はいい天気だし、ゆっくり出歩くつもりでいたんだけ
とな。

一応ただのクラスメイト相手なら、最低限の会話をするコトを逆
手に取られちゃったか。

まあこんな日もあります。

「2人はありがとうな。あんなマクダウェルさん、行くお店フルー
ツのタルトとかが美味しいんやて、やからお茶のつもりで付き合っ
てくれへん？緒々嶋さんもおねがいや」

「そうね、じゃあ…」

うん、今日はフルーツタルトを食べに行こう！！

「あ、ラズベリータルトおいしい」

「マジか。このレモンムースはあんまりだ、しくったな」

「こちらのは抹茶ムースはなかなかですよ千雨さん。少し食べます
か？」

「ほら桃のタルトも食べてみる。汀が好きそうな味だぞ」

「いーの？じゃ、あーん…」

「む…、阻害で敷くぞ」

「ふふーふ、キティってば。女の子どうしであーんなんで、誰も気にしないよー」

「いやいや、店入ってからずっと注目されてるっつの。客も店員も私らガン見してるぜ？」

「マスターがしないようでしたら、わたしが。はいマイロード、あーん…」

「っあむ。…うん、おねえさんな味。おいしい」

「あっ！？茶々丸貴様…」

「もっと食べますか？」

「聞かんかった！」

「じゃ、次は私だ。ほら汀、あんま美味くないけど食べてみてくれ。あーん…」

「ふふーふ、なにそれー。っあむ。…うんまあ、普通？」

「だよな？…そうだ、これ食い終えたら近衛が言ってたフルーツのが美味いって店、探してみようぜ。次は私もタルト食うからさ」

「もういい、行くならさっさと次に行くぞっ！汀、次の店では最初から敷くからな。お前にフォークは持たせん」

「ふふーふ。キティってば、かーわーいーいー」

「いいから早く食え！！貴様らもだ、もたもたするなっ！！」

「へいへい。つか近衛達とかち合ったりしてな」

「マスターが最初から阻害を敷くと仰っていますし、仮にそうなくても気付かれないのでは？」

「そっか、ならいいか。流石に“行きたくないから、行かない”なんて断った後にかち合いたくねえし。連中ならともかく、あいつらは一応ただのクラスメイトだからな」

「千雨ちゃんは賛成してたんだし、気にしないでいいのに。断ったのワタシだよ？」

「そんな訳にいくか、汀の決定は私の決定だ。そのつもりだから正直に発言したんだからな。決定はどうあれ、私の意思は汀に伝わってる。後はついていくだけだ」

「マイロード、わたしも同じ想いです。いつまでもお側に」

「汀のわがままは今に始まったコトではないからな。……お前は好きなように生きたらいいんだ、面倒は私が薙ぎ払ってやる」

「うん、ありがとう。ふふーふ、キティ、千雨ちゃん、茶々丸ちゃ

ん、
らぶーだよ」

第33話 今日急遽、ケーキ屋へ（後書き）

第33話でした。

こんばんわgrand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

汀はやっぱり汀なの回、ですね。

色々と問題を匂わせましたし、流石の汀も誘いに乗ると思いましたが？

うまく騙せていればいいなあ。

汀達はクラスの魔法関係者以外とは普通に会話します。

ただいつも4人一纏めなので、1つのクラス内グループと判断されちゃってます。

しかも突き抜けた美少女グループなので、そうゆう意味で浮き気味。

さらに、まさしく会話するだけ、です。

お誘いとかには全然のりません。

授業と授業のあいだとかにするだけ。

お昼も4人で結界で、です。

汀が今回断ったのも、木乃香が近衛だからじゃないし、誘導されている可能性があるからでもないです。

普段のとおり家族だけで過ごしたかったからです。

美味しいフルーツタルトを食べるなら、好きな相手とがよかった

からです。

いざ本格的に何かが起これば、面倒事は全部消して旅に出ればいいしね、とかいつものように考えてます。

ちなみに最後の1幕でエヴァが「敷く」と言ったのは、認識阻害です。

普通のケーキ屋ですからね、明言を避けました。
魔法秘匿です、一応。

今回、たくさんの感想をいただきました。
ありがとうございます！！

しかも狙い通りに楽しんでいただけたみたいで、とてもうれしいです。

これくらいのグロならまた出せそうですね、了解です。
今回もがんばってみました。
楽しんでいただけてたらしいなあ。
これからがんばりますね！！

あ、葱さん弟子入りはありませんよ。
ええ、有り得ませんとも。

だから現時点千雨茶々丸の2人でも、相手になるのは人形さんくらいいですね。

てか、2人タッグならフルボッコでしょう。
修学旅行までにはもちろん…？

てかうん魔法世界どうしましょう？

ご指摘部分も修正修正。
ありがとうございます。

では grand 病原でした
おやすみなさい

第34話　こんなのも魔女の日常＊

ソレは気だるいお昼時、ワタシの寝ぼけ眼が写しているのは一人の美少女です。

艶やかな髪、もちもち赤ちゃん肌、ちょっぴり小柄だけどバランスとメリハリに富んだ体躯。

今は寝ぼけてうにゅってるけど、普段の顔立ちはそりやもう分かりやすいくらい突き抜けた美少女です。

いや、おねむでシヨボシヨボしてる仕草だってむしろ愛らしいね。

可愛い系超絶美少女^{ちよいロリ}!!

特殊な努力もせずにコレって最早選ばれた存在です。

あ、いや、選ぶとか違います、自力です。

そう…魂？

魂の美しさが現れ出たんじゃないかな？

比類するモノのないこの美しさは、同じく比類するモノのないワタシの魂に相応s…

《スパーン!!》

「おはよう汀、相変わらず突き抜けた美少女なのは認めてやる。どうだ、満足したか？このナル娘め」

「……おはやくないようキティ。でも今日もとっても美少女だね。

驚愕好み」

寝室の姿見に写ったワタシ自身に見惚れるナルシスワタシを、スリッパでぶったたくマイラバーキティ。

チート美少女汀ちゃんは今日も平常運転です。
不朽不滅に突き抜けた絶好調美少女です、自分がまぶしいぜ。

「ふふーふ、以外と復活早かったねキティ、足りなかったのん？」

「……こっちのセリフだ底なしめ」

「きゃー!! ね、ぎゅーしていいよね、するからね!!」

「断定してるじゃっ、わぷ」

「ふふーふ、ほらほら不足分を満たしてあげるからね」

「んっ!?!?…くそっ、こら、う、あっ…そこっ、は…やめっ…ああっ!?!?…んあっ…ひっ!?!?…」

「ぜんかーい。キティ…思いっきり感じて」

「…ばっ、っ…かあ…ひっ!?!?、うあ…んっんっ!…ああ…やあめっ…くう!?!?…む…りい…ふああ!?!?…」

「…んっ。キティ、べろだして…」

「…うつ、ん…ふっ…ひい!?…うふあ…ああ…うああ?…んふっ!?!…ふ…あ…?」

「いいこだねキティ、べろだけちゅー…ぺちや、ぺろ、ふふっ、ぺちや、」

「…へちゅ、あっ…?、ぺろ、んくっ、ふあ!?!…ああ…?…ぺちや、んんっ…ぺちや…」

「…ぺろぺちよ…だーめ、もっと深いちゅーしたかったら…ぺちよ…おねだりしてごらん?…ぺちや、ぺろ、ふふーふ…」

「…ぺちゅ、んはあ…んっんっ!?…ぺろ…ふあ!?!…やあ…ぺちや、もっ…んくっ!?…や、あ…ひっ!?…ぺえちゅ…」

大好きな子をいじめたい気持ちで絶好調ですよ。

ワタシしか知らない、キティが従順でかわいくなっちゃうトコばかり攻めちゃうぞ。

すぐにふにやふにや涙目になっちゃったキティらぶー!

ほらほらべろちゅーして…あげないっ!

ふふーふ、お・ね・だ・り・は?

「…うあ…とばりい…も…だめあ…ううつ!?…ひっ!ひいっ!?…」

わあ、かわいいなあ…

うん、たっぷりいじめて抜いてあげる。

ふふーふ、キティはワタシのモノだもん、容赦なんかしないから
がんばってね。

どんなに鳴いたって、どんなに泣いたって、ワタシの気の済むま
で終わらないよ。

ワタシのキティ、ワタシのだけのキティ。
愛して愛して愛しています。

「……長えよ」

「まったくです」

「あははー、…えと、ごめん…ね？」

リビングに入るなり、怒られてしまいました。
あ、正座ですか？はい…。

うう…シャワー浴びたいよう。

「なあ汀。今日のお前らって、朝起きて、メシ食って、やって、やって、んで今だよな？」

「うん、そう…だね？」

あわわ、おこりんぼ千雨ちゃんこわー。

目尻がびくびくしてます！

口角がひくひくしてます！

やばいです、えまーじえんしー！

「いいですかマイロード。食事は三食キッチンと食べる、睡眠は夜に取る、籠りきりにならない。コレはマイロードが決めた生活ルールですよ？」

「うん：ワタシ達是不健康とは無縁だから、せめて不健全を避けようかって」

ううう、茶々丸ちゃんもおかんむりだ。

眼差しがやさしくない：

口元がわらってない：

まずいです、おーらがみえます：

「不健全、不健全な。…まあ私も咎め立てれる立場じゃねえけどな。だが今日のは言う」

「わたしも…まあ言えませんか。ですが今日のは駄目ですよ」

「えとー…あはは」

だよねだよね、千雨ちゃんとも茶々丸ちゃんとも、真っ昼間っからよくしてるもんね！

生活ルール守りつつ、いっぱいいっぱい愛し合ってるもんね！

…って、そうだ、ひるごはんスルーしちゃったよ。

「「食事はみんなで、だろ（ですよね）」」

「ごめんなさい」

うう、反省です。

はー、さっぱりん。
シャワーして来ました。

魔法でぱっぱときれいきれい出来るってかしてるけど、やっぱりシャワーが好き。

あったまるし、きもちいいし。

お風呂が好きなんです、ワタシ

「風呂場ではしっかりやさしくしてやったよな？じゃあ続きだ」

逃避しっばいです…。

てか、ひどいよ千雨ちゃん！

お風呂場ではとつてもご機嫌で洗ってくれたのに！

にやにや笑いで「反省してるんだよな？」とか言って、ぷるぷる子ウサギ無抵抗なワタシに色々したのに！

ダメって言ったのに、ワタシはダメって言ったのに！

………てれり、千雨ちゃんらぶ。

「マイロード、どうぞ。魔法野菜のタルトです。お昼の代わりにと、ご入浴中に焼き上げました。まだ熱いので気をつけてくださいね。…では続きにしましょうか」

うわぁ美味しそう！

…うん、すごく美味しそうですけど、やっぱり茶々丸ちゃんも許してくれてないのね。

下手な言い訳とかしないで、とりあえずタルトに集中しましょう、うん。

で、なんで茶々丸ちゃんがフォーク握ってる訳？

「ではまず一口どうぞ。ふー、ふー、はいあーん…」

「いや待て絡繰おかしいだろ。とりあえず説教終えるまでは止めろって」

「なるほど、千雨さんもマイロードの隣に正座がご希望ですか？脱衣場からシルエットが見えていましたよ。随分と奇抜な洗い方でしたね、まるで絡みつくかのように見えました」

「……さあ、汀の説教だな。あ、絡繰、適度に食わせて口を割らせてくれよな。あははは」

「お任せください。ではマイロード、あーん…」

あー…茶々丸ちゃん見てたんだね…

てかアレかな、千雨が隠匿で敷いたハズの遮音結界に気がついたのかもです。

ワタシはされるがままでしたからね、うんされるがまま。

そして今も食べさせられるがままです…

「あー…あむっ、もぐもぐ。あ、おいしー。コレおいしいよ茶々丸ちゃん」

「ありがとうございます。ふー、ふー、では次をどうぞ、あーん…」

別荘内で育てた旧世界にはない野菜、通称“魔法野菜”のタルトは、なんだかキシシュのパイ包みたいです。
さくさくしっとり、ボリユーム満点。

とってもおいしいよ、ありがとうね茶々丸ちゃん！

「で、エヴァは？」

……………てへり。

「……………えへ？」

「くっ…落ち着け私、ふうふう、ふー…。ああくそ、普通ならイラつくだけだろう仕草なのに、思わず抱き締めるトコロだったのは、うん流石だな汀。…で、エヴァは？」

だめか。

ぶりってみましたが、千雨ちゃんにはぎり通用しなかったみたい

です。

だがまだ茶々丸ちゃんがあります！

茶々丸ちゃんはダメーじ抜けきっていないようです、畳み掛ける！

きゅーん…茶々丸ちゃん？

「ああ、マイロード、わたしのマイロード…」

「あ、おいコラ、帰ってこい絡繰！」

「…はっ！？そうでした、お説教中でした。…危うく押し倒すトロでしたよ。マイロード、恐ろしい子…」

うう、まずいよう。

フォローし合われると、分が悪いです。

ぶーぶー、いつもならすぐケダモノみたく押し倒してくるくせにっ！

「まあだいたい予想つくけど、自白させるコトに意味があるよな。でエヴァは？」

「ですね。マイロード、ダメなコトをしたらちゃんと反省ですよ？それで、マスターはどうされたのですか？」

「…気絶しちゃった」

うん、うそはついてません。
うそはね。

うん、ちよつと…。
やりすぎちゃったんだよね、あはは…。

「あのエヴァがもう1時間以上もか？…いったいなにしたんだよ？」
「その…本気全開で気絶するまでして、魔法のちゅーでびっくりきもちよく回復させて、また気絶するまでして。の繰り返し？」

し、仕方ないんだよ！
キティがすごくかわいいすぎるんだもん！

そう、うん、必然ですよ。
必然的に、いじわる汀ちゃんが、とってもはりきってしまったのです。

ふふーふ、愛ゆえにです！！

魔法のちゅー、はオリジナル回復魔法。
心も身体もばっちり回復させます。

ついでに、キティが泣くほどの快楽が全身にしばらく渦巻きます。
本気のトキ専用にして使っていて、キティにも千雨ちゃんにも茶々丸ちゃんにも大好評？です。

うん、見た感じではこれ以上なく大好評。

「…もしかしてずっとですか？」

「あ、ううん。朝ご飯のあとお互いにしてて、それから軽くお昼寝したの。で、起きてから…ずっと？」

「…それどんくらいだよ」

「たぶん…3時間くらい？」

今が4時半だし、そのくらいです。
うん、ワレながら絶好調でしたね。

キティもおよろこびだったし、言うコトなし！

これでお昼ご飯さえ忘れなきやなあ…

「うらやま、じゃなくて、そりゃ起きて来ねえよな……。本気って本気なんだろ？手加減とかなく？」

「うん、もちろん！なんだか今日は絶好調なんだよね！」

「マスター…うらやま、ではなく、大丈夫でしょうか」

「ん…。ふふーふ、茶々丸ちゃんも試してみる？」

まあ、悪影響はないですって。
きもちいいすぎただけだもん。

特に相手はキティなんだし、キャパが違いますよ。
ワタシ達がどれくらいのアいだ、こうして来たと思うんですか。

でもこんなふうには、千雨ちゃん茶々丸ちゃんを蔑ろに耽ったのなんて久しぶりです。

んゝゝなんでだろ？

…ワタシ、欲求不満だった？

最近いじめっこモードしてなかったし、茶々丸ちゃんが積極的に
なった影響でキティも千雨ちゃんも押せ押せだし。

思い返せば、最近ワタシがいじめられてばっかじゃん。

……うん、決めた。

今日は絶好調いじめっこの日にしましょうか。

千雨ちゃん茶々丸ちゃんにも、ワタシの愛を刻み込んであげちゃ
いましょう！

ふふーふ、次の獲物はどちらかなあ？

「……………はっ！？私は…」

「……………」

「……千雨？おい？…ぴくりともせんな」

「……………」

「これは…そうか汀！…って21時だと！？」

「……………」

「まず茶々丸を呼んで…」

「あ、キティ起きたんだ？ふふーふ、じゃあ2周目だね」

「汀！？いつのまに、っ！？身体に力が入らん！？」

「ふふーふ、実はさっき魔法のちゅーしといたんだ。ちなみに茶々丸ちゃんなら台所で千雨ちゃんみたくなってるよ？」

「ま、待て汀、一旦休憩んむっ…ちゅっむ…ぷあっ、待って、ふうっ…」

「ふふーふ、またなーい…愛してるよキティ…」

「「やりすぎだ（です）！」」

「うう、ごめんなさい」

「ならアレだな」

「だな、私らの番だな」

「ですね、順当です」

「えーと…もしかして？」

「「たっぷりいじめてやるからな（さしあげます）！」」
「」
「」

第34話　こんなのも魔女の日常＊（後書き）

第34話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

布団の魔力がすごいです。

なんども首かくんかくんで、こんな時間になっちゃいましたよ…。

イチャコラしたかったのよ回、でした。

内容は…あはは、ありませんね。

最近ストーリーが上手く出来てた反面、イチャコラ減ってたので充電。

本作品ってこんなんです。

今回も感想いただきました。

ありがとうございます！！

ストーリー的なコトほめていただいた矢先に、この展開とは…

だ、大丈夫です、がんばります！！

てか今回R描写大丈夫ですか？

R18にはしないつもりで書いてますが、駄目そうなら注意してください、直します。

うーむ、べろちゅーとかってR15ですよねえ？

ではgrand病原でした
おやすみなさい

第35話 寒い朝もあつあつ その1＊

「は～…寒い!!」

「ホントだな、息まっしろだ。はあ～…」

「全く…子供かお前ら。ほら汀、はやく魔法保護しないか、寒いだろう」

「ふうう、さむさむ、そんなのよりキティぎゅー!」

「つと、…仕方ないヤツだな。ほら、跳ねていないでちゃんと腕をまわせ。だが抱きついたからといって暖まりはしないだろう?」

「今朝は特に冷え込みますね。マイロード、わたしがかけましようか?」

「ふふーふ、ぎゅー。魔法保護なんかいらないよ。寒いならくっつけばいいの。千雨ちゃんもおいで」

「3人並ぶのかよ…まあやるけどな」

「ではわたしはマイロードの背中からハグで」

「動きにくいわっ!」

「ぶっ、ははっ、なんだコレ」

「浮いてるっ!?! 茶々丸ちゃん、ハグって浮いちゃってるよ!?!」

「ご安心ください。組んだ腕が外れないよう、細心の注意でお連れします」

「このまま登校!?!」

師も駆けずり回る12月。

ぐんと冷え込むコトが増えてきました。

そんな寒空の下でもワタシ達は平常運転。
今日も元気に登校しますよ。

チート美少女汀ちゃんは、寒くなんかありませんよ。

キティと千雨ちゃんと茶々丸ちゃんが側にいてくれるから、心がいつもあったかいんです。

ぎゅーしたら胸がぽかぽかしちゃいます。

ふふーふ、らぶー。

「ははっ、いや絡繰、おもしれえけど私達まで恥ずかしいから、下ろしてやろうぜ。市街地に入るくらいでな」

「私まで歩きにくいが…まあ市街地に入るくらいまでは我慢するか」

「お任せを。では行きましょうか」

「コレがチャチャゼロの気持ちっ!？」

空気が透き通っているみたい、そんな朝の街を歩きます。

このあたりはまだ中心部から遠いせいか、お店も閉まっ
ていても静か。

キティとおてて繋いで、千雨ちゃん茶々丸ちゃんが横にいてく
れ、すごく素敵な登校です。

ふふーふ、らぶーだよ。

今日もいいコトありそうだね！

「やっぱり寒いだろう？素直に魔法保護したらいいじゃないか」

「だねー、寒がるのにも飽きてきたし。ほいっと」

軽く魔力を巡らせて保護魔法を纏います。

隠匿は当然。

さらに範囲を自らの皮膚と完全に一致させるコトで、仮に触れら
れても気付かれたりしません。

ん、すっかり寒くなくなりました。

「……………」

「……………」

「えっ？なに、千雨ちゃん茶々丸ちゃん？」

なんで急にガン見？

急に嫉妬？

千雨ちゃん茶々丸ちゃんのハグからは離れたのに、キティとはお
てて繋いだままだから？

えとえと…ぎゅーする？

「…絡繰？」

「恥ずかしながら欠片も。千雨さんはいかがですか？」

「同じくだ。さっぱり感じねえ」

「お互い進歩がありませんね…」

「つかそもその魔力自体を感知出来ねえんだよな…」

「……ああ。お前達、まだやっていたのか」

ん？どゆこと？

会話からワタシの魔力行使を感知したかったのかな？

なんでまたいきなり。

今の千雨ちゃん茶々丸ちゃんじゃ、到底無理でしょうに。

ふふーふ。

いくら背伸びして空を見上げたって、宇宙の膨張には気付けやしないのとおなじコトだよ？

「こらー、ほっとくなー、せつめーをよーきゅーするー」

「うおっ、なんだ汀、急に暴れるんじゃない」

キティと繋いだおてをぶんぶんして抗議です！
ぶー、ちゃんと説明してくださいよ。

てかほっとくなよー、さびしいぞー。

「ああいや、悪い汀。あのな、修行の話なんだよ、エヴァに言われてさ。なあ？」

「はい。マイロードの魔力行使に注意し、感知するのが目標です。一度も成功していませんが」

「……キティ？」

「あ、いや……」

繰り返しますが、千雨ちゃんと茶々丸ちゃんがワタシの魔力行使を感じするコトなんてぶっちぎり不可能ナンバーワンです。

キティだってそんなの知ってるのにもかかわらず、わざとこんなコトさせたんだ？

キティ、コレっていじめだよね？

あ、：わかりやすく目を逸らすキティがかわいい。

怒られた小動物みたい：らぶ！。

ふふーふ、おててぎゅー。

逃がしはしないぞー。

：じゃなくて！

「うん、キティはざんげタイムが待ってるから。ねえ千雨ちゃん、茶々丸ちゃん。でもなんで続けてるの？わかってるハズだよね？」

千雨ちゃん茶々丸ちゃんは、ワタシが愛して共にある相手。

ワタシの特殊性を、魔女の特殊性異常性を知らない訳がないんです。

魂が繋がっているんです、知れない訳がないんです。

「ああ当然な。汀と私との差が、それこそ次元レベルだったのは自覚してる。けどやっぱもしかしたらって気持ち半分、まあ駄目なら単純に修行ってのが半分だ。あとエヴァへの反骨心」

「わたしはマスターのご指示でしたので。もちろん本気で臨んでいましたし、差も自覚していました」

「「そしてなにより、汀に近づきたかったからな（のお側にいる為に）」」

…ふふーふ、千雨ちゃんも茶々丸ちゃんもワタシをしあわせにすぎ。

「…うん、千雨ちゃん茶々丸ちゃん、ありがとう。その気持ち、行動、すごくうれしい。ワタシも一緒にいたいよ！」

泣きそうなくらいに、とってもとっても愛しいよう。

まだ眠ったままの街をしばらく歩くと、そろそろ人影が増えてきました。

ワタシ達はいくまで学園へと一直線だけど、ほとんどの人達は最寄り駅へと向かうみたい。

うん、そろそろ秘匿とか意識しようかな。

「ふふーふ、やっぱり朝からいいコトあったなあ。…で、キティはなんでそんなコト言ったの？」

「いや、本気にするとは思わなくてな…」

でもキティと繋いだおてては離しません。

千雨ちゃんと茶々丸ちゃんの言葉にきゅんきゅんしているあいだも、ずっと握ったまんまです。

ぶんぶん振ったり、ぎゅーしてぽかぽか叩いたりしちゃいました。

もう少し、ワタシ達の学校最寄り駅くらいまでは繋いだまんま。

ふふーふ、それ以上はキティが照れちゃうからね。

照れ屋キティもらぶなんだけど、ちゃんと毎朝がまんがまん。

ホントに嫌がるコトはしたくないもんね。

ワタシがおねがいしちやえば、キティは何だかんだ言いつつ結局応えちゃう。

だからこそキッチンと自分を律するのです。

ふふーふ、いつまでも愛してもらえるように心がけてるんですよ。
ちなみに、そっから先は千雨ちゃんに手を引かれて歩きます。
ふふーふ、ワタシの従者ですから、当然なんです、ええそうです。
そのトキの満足気な千雨ちゃんが、とってもかわいいんだなコレが。

「何気なく言っただってコト？」

「ああ。隠匿、急速発動は私達にとっての基礎だからな。手本にはならんが、汀を観察してみるか？…とな」

「つか、もう少し辛辣にな。けど確かに間違っちゃいないからな」

「マスターからの指導中でのコトです。いただいたアドバイスを真摯に受け止めたまでです」

なんだ、怒るトコないじゃない。

千雨ちゃん茶々丸ちゃんが、その想いでがんばってくれた。
そんな素敵な話しじゃん。

で、キティはなんでばつが悪そうなの？

「うん、てかなんでキティはそんなにばつが悪そうなの？そんなにきつく言ったの？」

「いやまあ…な」

「確かにキツイ言い方ではあったな」

「ばっ…千雨貴様…」

「あん？なんで怒る…ああ隠してたのか？」

「む、キティに隠し事？」

聞き捨てなりません！

ちょっとー、どうゆうコトー！？

キティにぺちぺちしてやるー。

「いや違う…汀、違うから落ち着け」

「マスター？」

「…ああくそっ、わかった白状する。だから落ち着けお前ら」

「キティ、白状って？」

やっぱり隠し事じゃん！

こんな束縛よくないのはわかってるのに、うー！

心が勝手にざわざわしちゃうよ。

愛される努力よどこへ行ったの…

「…嘘をついた。私も千雨達と同じだ。汀の魔力行使を感知出来たコトなどない」

「はあ？嘘って、おい…」

「マスター…」

「……ああなんだ、なるほど。でもキティはワタシが隠匿しなかったらわかるじゃない。嘘って言うほどのコトじゃないよ」

あ、胸のざわざわ一挙に霧散しました。

ふふーふ、単純だなあワタシ。

うん、てかそんなの当然じゃない。

いくらキティが吸血鬼として突き抜けてても、魔女を相手にするなんて無謀ですよ。

こと魔法ならワタシの独壇場です。

わざと出した魔力ですら世界でキティくらいしか感知出来ない訳ですし、むしろ胸張れますよ？

ふふーふ、さすがワタシのキティ。

愛しい吸血鬼。

「だが汀にとっては隠匿が平常じゃないか。戦闘中でも完全に隠匿したままだろう？それでは実際問題、感知など出来んさ」

「ふふーふ、だからずっと努力し続けてくれてるんだよね？千雨ちゃん茶々丸ちゃんと同じで、ワタシのためにだよね？」

もちろん知っています。

今日に至るまで、最強種と持てはやされる真祖の吸血鬼キティは絶えず努力を続けているんです。

少しでもワタシに近づくために。

「……当たり前だ。汀、お前の隣は私だけの居場所だ。その為ならいくらでも泥にまみれるさ。お前を、愛しているんだからな」

「…うん、キティ、絶対だよ。ワタシは立ち止まらないから。隣にいるのは大変だと思うけど、離さないから。キティを愛しているんだよ」

ワタシ達のあいだには残酷なまでの差があるけれど、決して離したりしませんから。

ワタシは立ち止まらない。

キティも立ち止まらないって信じています。

ずっと一緒にいこうね、ワタシの愛しいキティ。

……んっ……

「その角まがれば、学園に1番近い駅だよな？」

「はい、ざわめきも聞こえますね」

「だってのに、付近には人気なしか」

「普段ならマスターがちょうど手を離す地点なんですけどね」

「結果もなし」

「例によって感知出来ていないだけかもしれませんが」

「ま、まあ置いといて、…てか嘘ついたエヴァはやたら盛り上がってんのに、嘘つかれた私らは放置か？」

「怒ってらっしゃるのですか？」

「いやまあ…特には」

「わたしもです。ですが放置はいささか…」

「……」

「……」

「マイローおたし汀、私も!!」
「」

第35話 寒い朝もあつあつ その1＊（後書き）

第35話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

日常登校風景回、のつもりが？

なんかとても書きづらい回でした。

なんでしょう？

作品中でも12月入り。

そろそろ学園側と衝突するかなあ？

……汀相手に衝突なんてできますでしょうか？

今回も感想、ご指摘をいただきました。

ありがとうございます！！

これから楽しんでいただけるように、がんばりますね。

ご指摘いただいた誤字は直しました。

ありがとうございます。

grand病原も12月に入って色々忙しくなってきました。
この後書きも、お行儀悪く晩御飯中に書いています。

だってこの後まだ仕事で：

ですが携帯投稿の利点を活かして、細々執筆続けますので、ぜひ今後も読んでやってください。

ではgrand病原でした

おやすめないけど、おやすみなさい

第36話 寒い朝もあつあつ その2＊

「じゃあ汀、改めてお手をどうぞ、だな」

「ふふーふ、なにそれー」

「普段から思っていたんだがな、学園内で移動するたびに手を繋ぐのはどうなんだ？」

「マスター、学園内だけではありませんよ。マイロードはどこに行くにも常にわたし達を従え、手や腕を絡めてくださいます」

「…誇らしげに言うんじゃない。学園内ではクラスメイトなんかが煩いだろうと言っているんだ。家や外なら私とて望むところだ」

「けどまだ通学路だろ？時間も早いし、いいじゃねえか」

「その言い様なら、校舎内では離すかのように聞こえるな」

「珍しいですね千雨さん。ではわたしが代わりに…」

「あゝ、ないない、離さねえから。汀が嫌がってねえ以上は離さねえから」

「のんのん、嫌がるとかあり得ないね。ふふーふ、千雨ちゃんぎゅー」

「ふん、まあいいさ。ほらいつもの店に行くぞ。汀は私の隣に座る

んだからな」

「マスター、拗ねてらっしゃるのですね」

「はっ、人目とか気にするエヴァが悪いんだろ？」

「あ、責めちゃダメだよー。だって、照れ屋さんキティってすごく可愛いんだから。ねー、キティねー？」

「本人に聞くなっ!!」

今朝も元気にイチャコラ登校中。

家から1時間近く歩くと、やっとワタシ達の通う学園最寄り駅へと到着。

あとはこの上り坂を行けばすぐです。

まだ授業開始時刻まで50分くらいありますけどね。

「今日は…開いてるな」

「ですね。このあいだはオープン前に着いてしまって、待たされるコトになりましたからね」

ワタシ達の通学方法は決まって徒歩です。

1時間以上もみんなでのんびり登校してる訳だから、到着時刻な

んてまちまち。

しかも登校直前まで別荘で生活してるせいで、出発時刻すらまちまち。

こんなので決った時間に間に合う訳がないですよね。

そんな訳でワタシ達は、始業時刻から2時間以上の猶予をもって登校しているのです。

登校にはいつも1時間強くらいかかっているから、だいたい50分近く早めに到着します。

ワタシもキティも結構おねぼうさんだから、別荘さままだね！

チート美少女ワタシちゃんが今朝もゆったり登校できるのは、キティ謹製別荘のおかげおかげ。

ワタシだって女の子、準備には時間かかるんだから……って、まあほとんど千雨ちゃんが仕度してくれてるんですけどね。

そうして登校したワタシ達は、余した時間をのんびりお茶して過ごすのです。

学園前の坂道をちよっぱり外れたトコにある、一軒の喫茶店。

I c a f e S e c r e t G a r d e n

7時半開店のモーニングから常連客がちらほら集まる、おだやかな雰囲気な個人経営店です。

こだわり夫妻それぞれが提供するコーヒーと紅茶がウリのお店で、キティも頂くクオリティー。

ここがワタシ達行きつけのお店です。

週5で朝から来てるのに、モーニング注文したことないですけどね。

だって千雨ちゃん茶々丸ちゃんの気持ちちがこもった朝御飯、しっかり食べてから登校してるもん。

なんてったって隠してない愛で仕上げられた朝御飯ですからね！
きゃー、千雨ちゃん茶々丸ちゃんらぶー。

マスター夫妻に挨拶をして、いつもの席へと落ち着きます。
注文は紅茶2つにコーヒー2つ、ドライフルーツです。

向い合わせの2人掛けソファアが窓際に隣接した奥の席、ワタシの隣には宣言どおりのキティ。
もー、キティかわいんだ、らぶー。

「つーか、汀さまさまだよな」

ワタシとキティはカモミール。

ほっこり温かい紅茶で一息です。

って千雨ちゃん、なんのおはなし？

「ん？今更なんの話だ？」

「いやさ、朝飯食べた後にまたこうして摘まんだり、放課後にも毎回買い食いしたりさ。晩飯後のデザートも恒例で、別荘でだって好きにケーキ焼いたりなんたりだろ？」

「当然だよー。もう甘いのない暮らしなんて想像できなーい」

一昔前はおかしなんて軒並み贅沢品扱いでしたからねー。

最近はどこのお店でもチョコにプリンにアイスにケーキにおまんじゅう。

いい時代になったよ、ホントに！

「食事にしたってまあアレだ確実に一般女子より食ってるし、呑めばツマミだって食うだろ？」

「ああ、だからどうした？」

「いやさ、だつてのに全然太らねえし肌も荒れねえだろ。マジで汀の従者になってよかったぜ。ついでに鍛えても脚とか太くなんねえしな」

「なるほど、確かに体型維持は女性にとって命題とも言えますね。わたしは生まれつきこうですが、やはりマイロードのためにもキレイでいたいですし」

「だよな。女として汀の従者としてケアも美容も欠かしてないけど、実はなんにもしなくなっちゃって変わらなくらいを保てる身体なんだろう？ ホントに汀さままだよな」

ふふーふ、みんなが美人さんだとワタシもうれいですからね！

千雨ちゃん茶々丸ちゃんはワタシ謹製。
もちろん美人さんで確定です。

体型は永久維持ですし、肌荒れなんかも急速再生の対象です。
素体に魂を、核を入れて融合させた際、ワタシの設定と、千雨ちゃん茶々丸ちゃん自身の願望やら理想やらがマッチした結果が今の2人です。

「その通りですね。：マイロード、ありがとうございます。わたしはいただいたこの身体と心、その全てでこれからもお仕えます」

「ふふーふ、うん。当然だね、離さないもの」

「うむ、しっかりやれ」

茶々丸ちゃんは殆んどワタシの設定したままの身体ですね。
まあ究極超従者な性能はデフォだから、そんなのより容姿のコト

です。

ばっちりうつとりなモデル体型。

見た目は…16、7歳くらいでしょうか？

キティの従者に相応しい、カッコイイ系美人さんです。

すらっと長い手足にキレイ系小顔、完璧バランスプロポーション。
茶々丸ちゃんはウチで1番のスタイルの持ち主さん。

ぎゅーされると包まれるみたい、ってか実際に包まれちゃうんです。

大事で大好きって伝わってくるぎゅーです。

ふふーふ、茶々丸ちゃんの気持ちが真っ直ぐ伝わってしあわせ、
らぶー。

あと実は想定より頑丈だったりします。
ワタシを守るって気持ちの現れ？

きゃー！茶々丸ちゃんってば！
うれしすぎる！らぶっ！

「なら私も。…汀、ありがとな。私がこうして汀の隣で幸せ感じて
いられんのも、全部汀のおかげだ。感謝してる、私を見つけてくれ
て。嬉しいんだ、私を選んでくれて。何があったって、これからも
毎日お世話するからな」

「千雨ちゃん…うん、おねがいね。てれりこ」

千雨ちゃんのは結構色々複雑でした。

でもやっぱり究極超従者な性能はデフォなのでスルー。

千雨ちゃんは元々人間の女の子。

その魂には女の子としての憧れだったり、遺伝子情報の縛りだったりと様々なモノが当然ありました。

当時11歳だったからあまり大人の自分がイメージ出来てなかったのか、もしくは例の疑似家族問題のせいで大人そのモノを受け入れられなかったのか、千雨ちゃんは想定より幼い容姿でした。

見た目はそれこそ15、6歳のスレンダー系美少女。

元々美少女だった千雨ちゃんを更に超美少女にして成長させた感じの、クール系かわいい系を両立出来ちゃう美少女です。

くりくりつり目のらぶりー小顔、全身スレンダーなのに胸はしっかり女の子を主張しちゃってます。

どうやらコレに関してはワタシの影響らしいです。

いつだってその身体と心、全てをワタシに捧げてくれてる千雨ちゃん。

その一挙手一投足さえもが、ただワタシを想ってくれてるくらい。

ワタシはもうくらくらしちゃうくらいです。

ふふーふ、千雨ちゃんらぶー。

「…千雨さん、なんだか告白みたいですよ。ずるいです」

「ばっ!?!……いや、間違っちゃいねえけど」

「うん、ありがと千雨ちゃん。ふふーふ、ワタシも大好きだよ」

こんな風に、気持ちを全然隠さないトコも好きだよ！

「ふん、貴様ら場所を考えろといつも言ってるだろうが」

「つゝ…。だからってアゴかち上げんなよな…」

「痛いですマスター…いえ、すみませんでした」

「奥まった席、音楽、疎らな客。確かにこの程度の声量では聞こえていないだろうが、万一がある。私達はいつまでも麻帆良にいる訳ではない、コレでは“外”に行けんだろうが。汀のコトとなるとスグに興奮するクセはなんとかしておけよ」

「エヴァに言われたく…いや、はい、了解」

「イエス、マスター。努力します」

「そうだね、すごくうれしいけどマナーは大事だからね。まあ“外”なら今より頻繁に敷くつもりでいるんだけどね」

「…まあ汀ならそう言うだろうな」

「^{マイロード}汀？」
「」

「だって、いつでもどこでも大好きの気持ち隠したくないからね！」

第36話 寒い朝もあつあつ その2＊（後書き）

第36話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

女の子の永久命題、からの容姿説明回。

前にもチラッと後書きにてお伝えしましたが、エヴァ千雨茶々丸は原作より美人さんになっています。

茶々丸は最早パツと見て人間、表情も豊富でよく笑います。機械の身体ではないので、プロポーションも良くなったと考えてください。

千雨は修正せずともネットアイドル1位なんて余裕くらいです。さらに原作より若干成長してます。

あ、胸大きめとはいえ、やたら巨乳になったりしてませんよ。バランスバランス。

エヴァは：どうしよう？

原作で既に美幼女だしね。

お肌とかもきつと赤ちゃん肌なんだろうなあ…。

あ、ちんまいままです、それはかわりません。

でもみんな基本型はもちろん原作で。

上方修正みたいなモノだと思ってください。

今回も感想をいただきました。

ありがとうございます！！

本作品のメインはあくまでイチヤコラ。

grand病原は必死にバリエーションを考えてます。

これからも飽きられないようにがんばりますね。

だ、大丈夫です、昔から恋愛小説とか沢山読みましたから！！

ご指摘もありがとうございます。

しかし嫌なトコ抜けてしまいました…

ではgrand病原でした

おやすみなさい

第37話 寒い朝もあつあつ その3

―女神殿!! 是非とも我が相撲愛好会のマネージャーに!!―

―麻帆良の姫、汀姫!! 貴女の美しさは我等がフェンシング部に相応しい!!―

―緒々嶋千雨さん!! ボクをリングサイドから応援してくれないか!?!―

―緒々嶋さん達には絶対チアが似合ってるって!! 一緒にやろうよ!!―

―緒々嶋汀!! 君を俺の専属マネージャーにしてやる!! まずはマッサージから覚えろよ!!―

―麗しの女神達よ!! 俺たち専属勝利の女神になってくれ!!―

―ハアハア…ス、スク水エヴァンジェリントン、す、水泳部…とか…―

―料理部で女に更なる研ぎをかけようよ!!―

―みんな一緒にアイドル部で世界デビュー目指そう!! 絶対上手いくよ!!―

―あ、あの絡繰さん…美術部です…その、よかったらモデルとか…―

―茶道部でゝす!! いい加減正式入部してくださいよ!!―

―緒々嶋汀さん!! 演劇部に是非!!―

「今朝も校舎に入れなさそうね。茶々丸」

「イエス、マイロード」

早めに家を出てのんびり登校、ちよつと寄り道してゆったりとティータイム。

ワタシ達はただの登校風景さえも、たのしくてしあわせに過ごしました。

で。

その後に待っているのは、真に残念ながら麻帆良クオリティでした。

朝から懲りもせずにまあ…

チート美少女汀ちゃん達は、一般人から見ても魅力的過ぎるんですよ。

や、キティ千雨ちゃん茶々丸ちゃん以外にいくらモテたとしても、全くうれしくない。

ワタシ達は登下校する際に、度々部活勧誘されています。

今朝は坂道を登りきった先、学園手前の広場には沢山の人だからが。

様々な格好で、様々な文句で勧誘しているみたいです。

いやさ、それぞれが好き勝手に口を開くから最早ただの騒音ですよ。

しかもにじり寄って来てるし。

全く相手する気にならないー。

「おはようございます皆さん。さっそくですが、ご用向きが部活動への勧誘でしたら以前と同じくお断りいたします。我々はどこにも所属いたしません。始業まであと19分です、ソコを通してください」

もちろん彼等と話す気なんかないぞー。

うん、茶々丸ちゃんに任せたからね。

テキトーに相手してやってよ。

ちゃんとあとでごほうびあげるからね、ふふーふ。

「お断りします。我々は明確に拒絶をしています。勝負する理由がありません。あと17分です。ソコを通してください」

て言ってもまあ、すぐに広域指導員が来るから。

あ、ほら。

―はっはっはっはっ―

「緒々嶋さん、皆さん、おはようございますです」

教室に入るなり、綾瀬夕映に声かけられました。
てか、なにげに進路塞いでるって。

とりあえずマフラーとコートを千雨ちゃんに、はい。

ふふーふ、お願いね千雨ちゃん。

コートを脱がしてくれる所作とか、もうお手のものですね、素敵
！。

こんな当たり前になったコトにも、千雨ちゃんの想いを感じるよ
う。

ふふーふ、らぶー。

「ええ、おはよう綾瀬夕映さん」

「ああ」

「おはよう、綾瀬」

「おはようございます」

最近よく彼女に声かけられます。

まあ特別な誘導や介入はない様なので放置してます。
一部のクラスメイトみたいに、やたらしつこく絡む訳でもないです
すしね。

授業まであと10分程。

校舎前広場での騒ぎは、駆け付けた高畑・T・タカミチによって
あっさり鎮圧されました。

てかアレ出待ちしてたって絶対。
タイミングよすぎですよ。

ワタシ達は全部彼に押し付けて、さっさと校舎に入りました。
広域指導員たる彼の登場で校舎までの道が開きましたからね。

あとは知りません。

「あゝ…おは、おはようございます…」

お、珍しい。

今日は宮崎のどこもくつついて来て、挨拶されました。

相変わらず前髪で顔を隠してます。

…前見えてんのかな？

てか、とうせんぼしてんのコノ子ら？

「あら、おはよう宮崎のどかさん」

「ああ」

「珍しいな宮崎。おはよう」

「おはようございます」

「緒々嶋さん、今朝も凄い騒ぎだったですね。ちなみに図書館島探検部も、入部を歓迎するですよ」

っと、挨拶済ませたし席に向かおうとしたら話しかけられちゃいましたよ。

マジでとうせんぼだったのか…

てか、なんだかんだで勧誘されてるし。

仕方ない少し対応しますか。

まあキティもめんどうそうに立ち止まってくれていますし、千雨ちゃん茶々丸ちゃんも待機してくれていますからね。

ふふーふ、ソレが当然、といつでもワタシの側にいてくれるみんなが大好きだよ。

ありがとうございます、手早く済みますからね。

「ふふ、ご冗談。でも指導員ももつと早く対処してくれないかしらね。わざわざワタシ達が登校して来るまで待つ必要ないわ」

「そうですね。最初の頃はともかく今では珍しくもないです、何故先生方は対応されないんでしょうか？緒々嶋さんたちも迷惑している様子ですし、私達も少し通りづらかったのです」

でもまあこの麻帆良で、ちょっとした注意なんかないも同然でしょうからね。

実際幾度となく蹴散らされても、ちっとも懲りずに続けるくらいですから。

なにより彼等にとっては、この程度の騒ぎ珍しくもないって認識なんでしょう。

蹴散らされたり注意されたりするコトも含めて、至極真つ当当たり前の範疇って訳なんでしょうね。

麻帆良大結界に認識阻害、もうコレ言い訳の代名詞に使えるそうだね…

そんな彼等が相手じゃ、先生方はどうにも出来やしませんよ。

結局、魔法使い連中が力で押さえつけるコトになります。

教育ってなにかしら…って感じです。

ま、ワタシ達には関係ないコトです。

数分の足止め程度気にもならないから、自分達で対処しなよ。

わざわざ魔法使い連中の不始末を拭ってやる訳がないのです。

「汀」

「ええ。じゃあ失礼するわね」

ふふーふ、すぐキティに催促されちゃいましたよ。

もしかしたら嫉妬？

なーんてさすがにないですよね。

でも、もしそうだったらそれだけでうれしくなっちゃうワタシがいたりして。

てれり、ぞっこんらぶー。

「はいです。高畑先生には言うべきですよ」

「よかったら貴女も訴えておいてね」

や、ワタシから言う気もないし期待もぜんぜんしてないけど、とりあえず言い放ったとききました。
サービスで微笑み。

あ、いまいくつてばー、まってよー。

授業開始10分前にはほとんどのクラスメイトが登校し終えてました。

学年一の問題クラスなのに、サボリとか遅刻とかとても少ないんですよ。

ワタシ達の席は、最後部の窓際。

1番後ろにワタシとキティが隣り合わせ、その1つ前に千雨ちゃんと茶々丸ちゃんが隣り合わせです。

うんうん、ワタシ達が常に近くにいるのは当然ですよ。

あ、さすがに授業中にイチャコラは：してないよ？

「最近よく綾瀬夕映さんに話しかけられますねマイロード」

「だよな、なんかしたっけ？」

「ふむ、汀？」

「“心当たりはない”わね、なにかしら？」

暗示や操作を感知してないよー、と言外につたえます。

ふふーふ、以心伝心！

まあ相変わらずクラスメイト全体に“ワタシ達が気になる”程度の暗示がかけられてはいるけど、ソレは今に始まったコトではないですからね。

てかコレ、ワタシ達に気付かれてないつもりなのがむしろすごいよ…

しかもコレが逆効果みたいで“なんだか近寄りがたい”ってイメージを強固にしてるんですね。

なんて言うか麻帆良連中ってこう、微妙すぎて脱力感が…ね？

「先日、図書館島でお会いした後くらいからでは？」

「とするとあんときか。つっても挨拶くらいしかなかったよな？」

「まあ特に“面倒はない”だろうさ、気にするだけ無駄だ。茶々丸」

キティも放置でオツケーだそうです。

まあクラスメイトを邪険にしてないってアピールにも丁度いいですよ。

ほら一応ワタシ達って更正のための学生生活ですからね。

「はいマスター。国語の教科書と学習予定範囲の単行本です」

「千雨、お願いね」

「ああ、コレな。あと暇潰し用」

ふふーふ、教室だと常に誰かしらクラスメイトが聞き耳立ててますからね。

外交モードで千雨ちゃんに命令しちゃうのさ。

実は千雨ちゃんが、そんなワタシに胸きゅんしてるの知ってるんです。

千雨ちゃんの根底には今や“魔女の従者”が確立していますから。

ふふーふ、もっともつとワタシを好きになれー。

窓からは無数の生徒達が走る姿が見下ろせます。

どうやら部活動誘員達はすっかり退散したようです。

さあ1時間目は国語。

あーあ、教科書の題材って代わり映えしなくてたいくつー。

「くそ寒い屋上にワザワザ結界敷いて快適異界こさえて昼飯なのはいいよ」

「なんだ千雨、よくわからんが早くよそえ。食わせん気か？」

「食わすし、食うけどよ。いや、なんで私がエヴァの世話なんだっつー話しだよ」

「朝のご褒美にと、茶々丸が汀を膝に抱いたままだからだろう」

「わかってるっつの…」

「なら早くしろ。そもそも汀とて最初の頃はお前に任せたじゃないか。お前が失敗続きだったからこうなったんだだろうが」

「……いやでもよ、アレは殴るだろ？加減はキチンとしてたし」

「まあ麻帆良嫌いのお前だから、こちらの話なんぞ聞かん相手にはソレが妥当なのかもな。だが教師どもが来る前にソレをしたら、後で突っつかれて当然だろう」

「俺のモノになれば、みたいなコト言ってるやつも少くないしよ」

「汀に、と付け忘れてるぞ。だから私やお前は交渉の場で喋れんだ。茶々丸はその点、溜め込むタイプだからな」

「汀に惚れてから自分の直情さが加速したっつーか…前は私も溜め込んでただけだな。でも仕方ないな、うん」

「うん、まあ私もソレには何も言えん。数百年レベルで変わらんかな。汀を標的にされるとすぐキレル」

「自分で言うのな」

「お前もだろうが」

「それだけ汀が好きなんだ、仕方ないな、うん」

第37話 寒い朝もあつあつ その3（後書き）

第37話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

寒い朝もあつあつ編、最終回でした。

でもあんまりあつあつしてない：

茶々丸とイチヤコラしてる昼ご飯シーンを、エヴァと千雨に語らせちゃいましたからね。

仮に入れても朝じゃないし。

クラスの席順フォローをちよつとしておきますね。

原作一卷だっけ？の最後に席順載ってますのでソレを参照してください。

汀を窓際一番後ろに新たに配置、エヴァをその隣へ平行移動。

その一列前の子達を、千雨茶々丸を抜かして廊下側へギュッと。

開いた二席を窓際から千雨茶々丸の順で埋めてください。

あとは原作のまんま。

そんな感じです。

今回も感想いただきました。

ありがとうございます。

更新するたびに感想いただけていて、grand病原はすごくうれ

しく思ってます。

楽しんでもらえてるって実感嘸み締めてます。
これからがんばりますから、ぜひ読んでくださいね。

ご指摘いただいたトコも修正しました。

言い回しを簡単な言葉に変えました。

読んでださる方のコト考えないとだめですね。
ありがとうございます。

土日寝て過ごして風邪も完治。

さあ年末年始に向けてがんばりますよ！

ではgrand病原でした
おやすみなさい

第38話 年越し前の落とし穴

「じゃあ、やんちゃ系イケメンいくよ。——なんだよ、おまえら勉強したくねえの?…ん、よし!じゃ、今日は俺と一緒に遊びに行こう!んで補習も一緒なっ!ははっ!」

「やっぱり違いますね。そもそも勉強してください」

「うーん、でもやんちゃ系って勉強とかしなさそうじゃない?」

「俺様系先輩イケメンね。——勉強?なんで俺がお前達みたいなの?ちっ、さっさと仕度しろよ。この俺が教えるんだ、半端な点じや許さないぜ」

「何様だ」

「ええ!?ソコ突っ込む!?俺様系だってば…」

「次は小動物系後輩イケメン。——え？ぼくが一緒に勉強するんですか？でもだって、ぼく学年違うし。あう、や、やります！待ってください先輩………あれ？本当にコレがわかんないんですか？」

「つか、オチつけんなよ」

「後輩ってムチャ振りだよー」

「じゃあ、アブナイ教師系イケメン。——はいはいどちらさんって、なんだよお前らか。あ？おいおい休日だぜ？ああ、わかった仕方ねえな、上がれよ。………そうだな二度と忘れない教え方、お前から試してやるよ。クセになるぜ？」

「コレは明らかに違いますね」

「いらん」

「淫行教師かつつの」

「ひどっ!?!」

学生生活と言えば青春。

青春と言えばイベント。

学生生活は多種多様なイベントで彩られるモノです。

ましてやココは麻帆良学園都市。

行事イベント、メガ盛りです。

でもワタシ達は学校行事とか、基本的にスルーしちゃいますけど。
例えば体育祭みたいな競技だのなんだのって、スペックが違い過ぎて成立しませんもんね。

そしてなにより、チート美少女汀ちゃんはわがまま魔女ですもの。
準備？協力？チームワーク？ふふーふ、ないない。

あ、でもでもお客さんとして楽しむから放つといいですよ。
麻帆良行事ってどれも異様な盛り上がりを見せるから、お客さんくらいが丁度いいんです。

あと、麻帆良から外出する系の行事も建前上不参加ですね。
てか外とか行きたくなったら、勝手に行き来しちゃってますもの。

ふふーふ、ワタシを縛れるのはキティと千雨ちゃんと茶々丸ちゃんだけのさ！

そんなワタシ達だけど、決して欠かさずに挑むイベントが1つあります。

学生のプライドと睡眠時間がしのぎを削る、あの大イベントです。

コレこそが学生生活の花形？

それとも学生生活のドツボ？

そう、定期考査です！！

つまり、只今ど真ん中テスト期間なんです。

実時間であと1週間後、今年最後の定期考査が行われます。

とはいえワタシ達は普段から別荘で生活してるから、体感ではまだまだ先のコトです。

てかワタシとキティは中等部3回目だし、千雨ちゃんて普段から努力の子だし、茶々丸ちゃんにいたっては知識を植え込んでますからね。

そもそもワタシ達、別に勉強キライじゃないですし。

まあつまり、テスト期間中だから必死に勉強、とかぶっちゃけ必

要ないのです。

そんなこんなでとりあえず遊んでみちやった。

軽く試験範囲をお復習するって言うから、とりあえず遊んでみちやった！

「あの、マイロード？普通に皆で勉強しては駄目なのですか？」

「そもそもなんなんだ、イケメンイケメンと」

「そうだな、イケメンとかいらねえから。汀が教師コスとかすんのが全然気合い入る」

「びっくり大不評だね…」

おふざけだったのに、フルボッコですよ。

今日の下校中、千雨ちゃんがケーキ屋さんで受け取ったチラシが切っ掛けでした。

『イケメン大学生家庭教師と試験対策しよう！』と書かれていたそうで、それを読んだ千雨ちゃんがコーヒーパー手に鼻で笑ってました。

千雨ちゃん、カッコよかった…てれり。

いわく女子中学生はイケメン家庭教師に憧れちゃうそうです。

千雨ちゃんが言うには、クラスでもそこそこの話題になっているんだって。

だからワタシがやってみた！

だのに、この評価ですよ…

イケメンなんかにつられなくて、うれしいと言えばうれしいけどさあ。

“イケメン家庭教師”でまほネット検索したセリフだったのに！。変わったゲームがいっぱい引っ掛かって、選ぶの大変だったのに！。

てか、実は演技はずかしかったのに…。

「いいもん、いいもん。千雨ちゃん、着替え手伝って！スパルタ美少女教師だよ！覚えの悪い子にはおしおきだからねー！」

フルボッコの仕返ししちゃうもん！

とても中等部なんかではでない、大学級の記述問題やらしちゃうぞ！

ふふーふ、1番に正解したらごほうびよ？とか言って煽っちゃうもん！

「「「……………」にやり」」

…ん？

あれ、寒気？

逃げ込む様にドレスルームへ走ったワタシは、千雨ちゃんのコーデで美少女教師に変身しました。

ワタシは背が小さいから、あえてパンツスーツをチョイスだって！

そうして着替えようとしてたら、千雨ちゃんが後ろから抱き締めて来て首筋にちゅー。

いろんなトコ触りながら、何度も何度もちゅー。

ふふーふ、お着替えのトキの定番です。

あまえんぼ千雨ちゃんらぶー。

：とか思いながらワタシもちゅーしたくって振り返ると、いじわる千雨ちゃんは反対側の首筋にちゅーの雨を降らすんですよ！？

ちゅーしたいし、いろんなトコ触られちゃうしで、ワタシってばいつしかへにゃへにゃ。

でもうん、大好きな千雨ちゃん相手だから、へにゃへにゃな身体全部委ねちゃうんです。

たっぷり焦らされて、ゆっくり脱がされます。

ふふーふ、あまえんぼじゃなくて、いじめっこ千雨ちゃんだったね。

うん、全部受け止めるから。

いっぱいいいじめて、いっぱい愛して千雨ちゃん。

千雨ちゃんを愛しています。

ワタシを好きにしているんだよ。

だって何をされてたって、愛されてるのが伝わってくるもの。

——で、お着替えが終わってました。

いや違って、脱がされてすぐ着せられたんですよ。
アレ以上なんにもなしで、着替えさせられただけ。

え？なに？なんで？

…しないの千雨ちゃん？

うわぁ、すごい欲求不満。

ワタシ、盛り上がってたんだけど…。

てか千雨ちゃんへの気持ちで、胸がいっぱいだったんだけど！？

「あのー…。なんで教師役のハズのワタシがテスト受けてんの？」

「ふむ、私達の試験結果は毎回ほぼ団子だからな。はたして汀は教師役に相応しいのか、と疑問がな」

「だな。つか前回のテスト、私より総合で3点低かったじゃねえか。キチツと教師役としての実力を証明してもらわねえとな」

「申し訳ありませんが、わたしは毎回満点ですので。今日はマイロード専用拘束椅子です」

そして戻れば何故か茶々丸ちゃんに抱っこされるワタシ。
しかも微妙、すごく微妙にさわさわされてます…。

茶々丸ちゃん？

あの、ちゅー…あ、うんテストね。

レディーススーツの胸元開け気味、シルバーチョーカー。
髪を結い上げナチュラルメイク、眼鏡をかければ…

あれ、これ教師？

とにかくいつの間にやら完了した千雨ちゃんコーデで教師？になったワタシは、何故か茶々丸ちゃんのおひざでおあずけ状態です。

てかキティも千雨ちゃんも茶々丸ちゃんも、いつしか学園の制服に着替えています。

「てかなにこの問題…歴史と国語の人名問題ばっか」

「マイロードは人名暗記が苦手でいらっしやいますので、特別にご用意いたしました」

特別につて、なんかマジモノのテストみたいなプリント出てきてんですけど。

あれ？この流れって計画されてたの？

茶々丸ちゃん、ワタシの腿をわきわきしてるのも計画通りですか？

あっ…つて、くすぐったいし。

あの茶々丸ちゃん、ワザと外してますよね？

「や、てかなにコレ？妙にちゃんとし過ぎてるよね？」

「まあそれはそうとしてだ。その問題は、汀が今までのテストで間違ったやつを集めて作ってある。復習にもってこいだろ？」

今までの復習つて、今回の試験範囲じゃないじゃん！

てか人名暗記の復習なんてしてないから、当然解けないですよ。

間違いない、コレ計画された罠だ…

「待って、ちょっと待って。実は第一問から早速わかんないけど、それとは別にちょっと待ってよ。……なに企んでるの？」

「ふっ、気付いたか。ここ最近のテストでは、汀の総合点が1番低

い。なんとか挽回させるため、今回の計画を企てたんだ」

「わたしがマイロードの失点問題の統計と、次の予想問題を予め作成していました」

「私はアレだカテキョーのチラシ。汀が自分で読んでも、気に留めもしないだろ？だからわざわざ私が話題にしたんだよ」

「なんとか家庭教師の話題から勉強へ繋げるつもりだったが、丁度よく汀がふざけ出してくれたからな。皆でワザと付き合わずいければ、汀は勝負を持ち出すと思ったのさ」

や、勝負ってなに!?

てか千雨ちゃんと茶々丸ちゃんが、ワタシを焦らして焦らす理由が説明されてないし!

千雨ちゃんも茶々丸ちゃんも自分だけが楽しむばかりで、せつないんです。

んっ…って、ほらあ、もー!

触るならちゃんと触ってよ茶々丸ちゃん!

「してないしてない!勝負なんて言ってないよ!？」

「“1番覚えの悪い子がおしおき”なんだろう?私達はそのテストで、ほぼ満点が取れるぞ?」

「…おーのー」

終わった…

おしおきって、何をさせる気でしょうか。
普通に勉強…だといいなあ。

「つか、時たま絡繰が調子にノって触りすぎて聞こえる汀の嬌声が、むしろ私の理性をガリガリ削るんだが？」

「…ああ、本当にな」

「コレ私達へのおしおきか？」

「茶々丸め…楽しそうにしおって」

「いや聞けよ。どうせおしおきは汀だからな。ほらエヴァ、私達2人だけがイイ思ひ出来るおしおき考えようぜ」

「…そうだな、茶々丸は部屋のすみで正座でもさせておけばいい」

「おい、コメカミがぴくぴくしてんぞ。とりあえず見ないでおけよ、汀の声に集中しながら考えようぜ」

「女教師監禁プレイだ。汀には教師役を徹底させて…」

「…A Vかよ。エヴァさ、その知識どこで仕入れてんだ？」

「ネットだ」

「ネットか」

「お前もだろう？ 私達は魔法も能力をも用いて、男女のそれと変わらない交わりをしている。だが女同士なのは変わらないからな。男にしかない性的な発想は、調べるしかない」

「……真顔でよく言えるよな」

「当然だ、私の愛は汀のためにある。汀をよろこばせるためなら、なんでもするさ」

「エロの話題じゃなきゃカッコよかったんだけどな…」

「なんだ、お前は違ったか？」

「…いや、違わねえ」

「だろ？」

第38話 年越し前の落とし穴（後書き）

第38話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

テスト勉強日常回でした。

汀一家は成績凄いいいです。

茶々丸は毎回全教科満点。

千雨とエヴァは平均98とか99とか、ケアレスミスくらい。

実は汀が1番下で、でも平均90〜95くらいです。

汀は勉強でも人名すぐ忘れちゃうんです。

でもそれ以外はケアレスミスすらしません。

麻帆良連中へのイイ子アピールではなく、暇があるから勉強してるだけです。

魔法使って頭良くないといけないんですよね？

原作葱さんとかの魔法って、頭良い分が含まれてるんじゃないか。

そんな訳で汀一家は頭良くなりました。

今回も感想いただきました。

ありがとうございます！

時間を見つけてがんばってます。

やっぱり年末年始はコレくらいのペースかもです。

でも地味に更新していきます、これからも読んでくださいね。

ではgrand病原でした

おやすみなさい

第39話 調子にノリすぎです その1*

「緒々嶋汀、緒々嶋千雨、絡繰茶々丸、エバンジェリン・マクダウエル、全員揃っているな。まずは座りなさい」

冬の日没はまさにつるべ落としです。

今年最後の定期考査を終えた次の日、休日にもかかわらずワタシ達は学園にいます。

中等部の生徒指導室は既に夕陽が射し込み、空調機が唸りをあげています。

夕焼けがとっても綺麗だなー。

「君たちの保護責任者である近衛学園長に連絡はまだしていない、その前に君たちに話を聞く。今回の、いや今までを含めたテストについてだ」

今日ワタシ達を呼び出したのは、学年主任の新田先生です。

彼は魔法とは関係ない一般人で、学園きつての熱血堅物教師。生徒からは鬼の新田と呼ばれ、疎ましがられています。

ワタシ達は成績よくて接点も少ないので、特になんとも。

「今回君たちのテストを採点した一部の先生から、カンニングの指摘があった。現在もそれら以外の答案について、確認が行われている。私は学年主任として、君たちに話を聞く必要がある」

チート美少女汀ちゃんは、美少女の宿命にしたがって陰湿な悪意をぶつけられちゃいました。

美少女って美少女って妬みを受けて当然だし、それがワタシ程なら世界中から追われるのも納得です！

あ、違う？

でもホントにワタシの美貌に狂って、国家規模で追い回した王族もいたんですよ。

ふふーふ、当然すっかり無視、目立った戦闘すらありませんでした。

全然興味無かったし、彼等程度では何も出来なかったですから。

って、すぐ昔を懐かしんじゃうのは、長生きの弊害ですね。

もちろんワタシ達はカンニングなんかしてないですよ。

おそらく麻帆良の魔法使い連中が工作したんでしょう。

しかし、なんとも短絡的な行動に出ちゃいましたね。

ワタシ達を退学にでもして、正式な討伐の理由にしたいの？

ふふーふ、旅支度しなきゃ、かな？

「新田先生、カンニングとはいったいなにをもって判断されたのでしょうか？わたし達にはカンニングなど必要ありません」

「…今はまだ検証中だそうだ。じきに各教科の先生方が、こちらにいらっしやる。私はそれまでに、君たちの話も聞くべきだと思ったんだ」

これはさっさと近衛学園長に話をつけるのが吉ですね。

学年主任ともあろう方が、自ら確認した訳でもないカンニング容疑で休日にもかかわらず生徒を呼びつけるとはね。

や、まあコノ隠す気配が伺えない暗示の痕跡が原因でしょうけど。

「なら潔白を主張するわ。緒々嶋汀にはカンニングなど必要ないと」

「ふん、私も同じだ。エヴァンジェリン・マクダウェルにはカンニングなど必要はない」

「私もだ。緒々嶋千雨はカンニングなんてしてねえよ」

「わたしも申し上げた通りです。カンニングなどしていません」

ふふーふ、キティも千雨ちゃんも茶々丸ちゃんも凛々しい顔が素敵です、らぶー。

ワタシもあんな魅力的な表情、出来てるといいな。

それを見て、ワタシと同じようにドキッとしてくれてたらうれしすぎますね。

「…君たちの主張はわかった。だが、各教科で確認が取れるまで、私と共に暫く待機してもらう」

暗示の上書きでもしてあげようか…

や、まずは近衛学園長ですね。

この件はワタシ達の麻帆良離脱に役立ちそうですもん。

ふふーふ、むしろ渡りに船かな。

例の二代目英雄が登場すれば、こんな策謀や実力行使も増えるでしょう。

実力行使はともかく、策謀系なんかはバカ正直に相對しないで、近衛学園長へ丸投げしてやればいいですよね。

ワタシ達は樂できるし、彼には貸しにもできるし一石二鳥でしょう。

その近衛学園長自身が、策謀大好きさんなのが問題ですけどね。

てか下手に丸投げしたら、したっぱ連中を隠れ蓑に嬉々として企み事しそう。

うーん、なんか彼も彼で“ぼく まほらで いちばんだもん”みたいなトコありますからね。

麻帆良に来てからワタシ達がおとなしいからって、なんだか調子にノってきてる様ですし。

…あれ？

てかワタシなんで卒業まで留まるつもりになってるんでしたっけ？
千雨ちゃん茶々丸ちゃんに学生やらせてあげたかったからだっけ？

んゝ…。

やっぱもう殺っちゃえばいいかな？

とりあえず認識阻害の結界を敷きましょう。
てやー。

や、かけ声とかいらないけども。

「ああ、やつとか。つか汀、麻帆良連中はホントにアホなのか？」

「ふえ？なんじゃいまさら。わかったと思うけど、認識阻害で敷いたから好きに話してね。ふふーふ、千雨ちゃんぎゅー。こんなのもへいきー、らぶー」

「確かに千雨さんの言う通りです。こんな明らかな暗示の痕跡を残して、彼等は隠すつもりがあるのでしょうか？…マイロードマイロード、わたしともしましょう、ぎゅー」

「おい、絡繰押すなって。汀もほら、くつつくならちゃんとしとけよ」

「ふふーふ、はい。んー、千雨ちゃんすりすり、茶々丸ちゃんすりすり」

「あ、マイロード…。あの、なでなでしていいですか？」

「なでてなでてー。…ふあ、茶々丸ちゃんすきー」

「わたしもです、マイロード。とてもとても大好きですよ」

千雨ちゃんにぎゅーしたら、茶々丸ちゃんてばわざわざ席を立てぎゅーしに来てくれました。
すりすりしたらなでてくれたー。

ふふーふ、ワタシが大好きって。
茶々丸ちゃんらぶー。

「ちっ…。汀、手のひら揉むぞ？」

「ふぁゝ…。千雨ちゃん、うん。よくわかんないけどおねがい」

「みてろよ…」

「お？おーおー。なにコレ、きもちいいー」

「どうだ。汀は手繋ぐの好きだしな、折角だからネットで調べてみたんだ」

「千雨ちゃんの指がすりすりしてくれるのも、きもちよさを引き立てるね。千雨ちゃんありがとう、すきー」

「ああ、いくらでもやってやるよ。わ、私も好きだからな」

ふふーふ、千雨ちゃんてれてるねー。

2人つきりじゃないからだ。

千雨ちゃんの嫉妬ってかわいいんです。

嫉妬すると自分が1番だって証明するみたいに、他の誰よりワタシのためになろうと色んなコトしてくれます。

ふふーふ、ワタシの従者だもんね。

大好きだよ千雨ちゃん、らぶー。

「お前らな…。まあいい、話を続けるぞ。私と汀は封印下だと思っ

ているんだろうが、連中とて茶々丸や千雨が魔法を修得していると知っているハズなのだな。おおかた“我々の魔法を感知出来る訳もない”だのと考えているのではないか？…やっぱり退け、茶々丸。くらえ汀、くくく」

「うあー。つーむーじー、おーすーなーよー、ふふーふ。さてねー、連中なんも考えてないだけだったりして」

ん、確かめてみますか。

「で、なぜ別れて行動するんだ？連中を釣るのか？」

「近衛学園長に連絡してから指導室でした話、多分だけど新田先生経由で伝わってると思うんだよね。連中のコトだし頭の中覗くくらい余裕でするでしょ、だからわざと結界外したのさ。コレで今回の暴挙がどこまでいくのか確かめよう」

「わたし達が本来の主従と入れ違って行動するくらいで、連中を誘い出せますか？」

「あと行き先だな。私とエヴァは布買いに出て、汀と絡繰は飯の買い物な」

「だね、でも多分食いつくよ。一応注意してね、今までよりハデに来るかもだし」

「ふむ、確か近衛学園長が言っていたな。二代目英雄を迎える前に、魔法使いを増員したんだろう？そいつらの仕業か」

「かな。昔みたくなってくるかもね」

「昔？何かあったのか？」

「気を抜くな、命令はそれだけだ。行くぞ千雨」

「つと、歩きながら聞かせろよ。絡繰、任せたぜ」

「はい、千雨さん。マイロードはわたしがお守りします」

「ふふーふ、いつも通りで平気だよ。でもありがとうね。キティも千雨ちゃんも、ウチでね」

「……汀、今回はいいのか？」

「もちろん、連中は魔女の恐さがわかってないみたいだからね。後悔も出来なくしてやろう」

第39話 調子にノリすぎです その1＊（後書き）

第39話でした。

こんばんわ、grand病原です。

対立回前編です。

詳しくは後編にて。

クリスマスがあるし、急いで更新します。

てか、汀が15年も一方的な弾圧に堪えられる訳もないんですよね。
実はちよくちよく反撃してる、その一幕になると思います。

次回は、ちよろいばとる。

今回も感想いただきました。

ありがとうございます！

そろそろお待ちかねの原作が近づいています。

やつとですよ、ご期待くださいね。

がんばって書きます！

ではgrand病原でした
おやすみなさい

第40話 調子にノリすぎです その2*

カンニング疑惑はあっさり解決しました。

や、単純に近衛学園長へ連絡して警告をただけですよ。

茶々丸ちゃんに電話してもらって「したっぱの暴走？宣戦布告？どちら？」とね。

すぐさま解放されました。

で、今は学園長に電話してから解放されるまでの僅かな時間で、あえて流した情報通りに行動中です

や、ぶっちゃけ茶々丸ちゃんと仲睦まじく、お買い物袋下げながら歩いてるだけなんですけどね。

このままお使いデート済ませるだけでも、ワタシとしてはむしろ満足です！

茶々丸と一緒に野菜選んだり、お肉の良し悪しできゅきゅしたり、茶葉買うための高級店で一息いれたり。

些細な日常の雑事も愛しの茶々丸ちゃんと一緒なら、しあわせを満喫するデートに早変わりです。

ホントに全然このままで満足だったんですけどね。

：かなり後方からコチラへ向け魔法、いや魔法具を起動してるヤツがいます。

間違いなく攻性のソレ、照準も合わされてますね。

殺る気かな？しかし、この程度の魔力とはナメられたモンです本当に。

てか、ワタシ達がいるこの場所は街中ではないとはいえ、まばらに一般人もいるんですけど。

連中はいったい何を考えてるんでしょう。

や、捕捉したまま人のいなくなる場所まで待ち、のつもりでしょうか？

うんうん、連中にも一抹の秘匿意識が残ってるコトを期待しましょう。

：ワタシ達を狙っている相手も、どうやらコンビの様ですね。つまりこの魔法具は、アーティファクトでしょうか？

いや、魔力のラインが：やっぱり違いますね。

とするとこの距離で対象を捕捉出来る攻撃魔法具ってコトになりますね。

いやいや、いくらココが実質的に魔法使いの街だからって、旧世界で持ち出していい類いのエモノではないでしょ。

今すぐにぶっ放したりはホント勘弁してくださいよ。

ワタシ達は常時纏っている“反応障壁”でかすり傷もつかないけど、一般通行人はイタタじゃすまないって。

チート美少女汀ちゃんは、どうやら釣りのエサとしてもやっぱり最高みたいです。

コノ美貌であらゆる相手を魅了してしまうなんて、ワタシってば罪な魔女：ふふーふ、なーんてね。

ワタシ達に来てるってコトは、キティ達にも行くでしょう。ま、全然ほっというて平気ですけどね、断言。

あ、撃ったし：

「茶々丸ちゃん、始末して学園長室に転移。ココはワタシが」

「イエス、マイロード」

仕方ない、周辺への被害はワタシが防ぎましょうか。一般人いるし結界結界っと。

ん、無害な魔力に戻るくらいまで拡散させちゃえばいいかな、ほいつ。

「：お待たせしました。マスターも同様に始末された様です」

うん、じゃあ行きましょうか。

コレの出来で今後を決めますよ。

うん、そう、いわゆる試験です。

ふふーふ、がんばって、ね？

「確かに先日本国から新たにこの麻帆良へと加わった魔法先生たちじゃ」

顔を残して後頭部ごと脳を抉られた死体が2つ。

首を綺麗に刈り取られ、胸の心臓部がぽっかりなくなった死体が2つ。

すっかり日の落ちた学園長室は、今も拡がる血液の薫りが噎せかえるほどです。

「では、先程の攻撃は魔女への宣戦布告でよろしいでしょうか？」

「つか開戦の狼煙だろ？ 奇襲先制攻撃、トラトラトラってやつだ」

ご立派なデスクに座したまま、表面上は心痛してそうな関東魔法協会長、近衛近右衛門。

ソレと対峙するは魔女の従者千雨ちゃん、吸血鬼の従者茶々丸ちゃんです。

2人はソファ―に腰を下ろすコトもなく、彼を侮蔑するような視線を向けています。

や、アレはむしろ首を捻切りたいのを我慢してるんじゃない？

ま、まあ、ともかく試験開始ですね。

ちなみにワタシとキティは、ソファ―に隣り合って座っています。おててにぎにぎ、ぎゅーしてすりすり。

ふふーふ、特等席に結界敷いて千雨ちゃん茶々丸ちゃんにすら感知出来ない、そんな高見の見物です。

千雨ちゃん茶々丸ちゃんには伝えてありますよ、“口出さないからがんばって”との指令と共に。

千雨ちゃんすっごい嫌そうで、茶々丸ちゃんすっごいヤル気満々でした。

ふふーふ、格差すごくてうけたうけた。

さて、魔女の名代、ちゃんとこなせるかな？

「いや、戦争なんぞとんでもないぞい。待っとくれんか、ワシらにそのような意思などありません」

「…さっきの今でコレだぜ？通用すると思ってるのかよ」

「じゃが本当じゃ。高畑くんが麻帆良にいない今、仮定としても開戦なんぞ馬鹿らしいわい」

「では、今回の襲撃に荷担したモノを差し出してください。1人残らず」

「…こやつらの独断ではないのか？」

「はっ！とぼけてんじゃねえなら痴呆だな。私達にカンニング押し付けようとした連中のドタマ、覗いてんだろ？しら切ってんじゃねえよ」

「…確かにいくらか証拠とも取れる情報があったわい。じゃが個人の特定は難しくてのう」

「なにが、でしょうか？私達との戦争を避けたいのなら、最悪魔法先生全員の記憶を探ればよいでしょう。先日赴任された方から優先すればよいかと」

「皆を疑い暴けと言うのか…」

「はあ？その御身内とやらに襲撃者が残ってるってわかってんのに、犯人探しが嫌ですってか？なら何でもってケジメつけんだよ？」

「待つとくれ。言い分はもつともじゃが、お主たちなら彼等を殺す必要はなかったじゃろう？そうすれば他の者として見つけ易かった筈じゃ。…だがこうなってしまった。これでは皆の協力が得られんじ

やろう」

「では命令ですればいいでしょう。そもそも勘違いをしているのは？ 魔女に敵対したのなら、命など残る方が例外なのですから」

「だな。アンタの首にも魔女の手がかかる瀬戸際だってコト、理解しろよ。正面切って殺り合えるだなんて思ってたねえんだろ」

「……魔女殿はどうしておられるのかの？ 彼女は何と言っとるんじや？」

「わたし達が魔女トバリ様の名代だと申し上げたハズです」

「エヴァは汀に一任だしな。言い訳は私等にしろよ。聞いてやるかは別だけどな」

「じゃがこの場はどうあれ、お主たちは魔女殿の決定に従うんじやろう？ 言うように事態は戦争を引き起こしかねん。魔女殿と直接、お互いの落とし所を話し合わせてもらえんか」

「……」

「話にならねえなコレは」

「ワシの頭ならいくらでも下げよう。この通りじゃ。緒々嶋千雨殿、絡繰茶々丸殿、関東魔法協会長の名において開戦阻止の協力をお頼み申し上げる。魔女殿に会わせてくれ」

「…なるほど。今、名を呼ばれて気付きました。わたしは逃げてすらいいたのですね」

「はあ？おいおいコレにほだされたとか言うなら「いいえ、千雨さん。あり得ません」

「…ならなんだってんだ？」

「絡繰殿？どうしたんじゃ？」

「……今この場合は、わたしと千雨さんに任されたのです。わたし達の交渉の結果は、マイロード交渉の結果です」

「ああ、わかってるっつの。私は緒々嶋千雨だぜ。で？」

「さすがです千雨さん。…マイロード、愚鈍なわたしをお許しください。わたしは今、マイロードの名を背負っているのですね」

「かr…茶々丸」

「はい、千雨さん。大丈夫です。この交渉を任されたトキの歡喜が、興奮が、コレがわたしの本心なんですね。なぜアレほど嬉しかったのか、今やっとわかりました」

「……………」

「臆病で逃げ腰なわたしは、切っ掛けが欲しかったただけだったんです。請われたかった、今一度求めて欲しかった、わたしはその臆病さから逃げて逃げて今日まで来ていたんですね」

「千雨殿これは…？」

「黙ってろ。ついでに名前で呼ぶんじゃねえ」

「…誓います、誓いますマイロード。わたしは茶々丸、総てを捧げ誰よりお側でお仕えする、汀様のモノです。永遠の忠誠を魂に」

【茶々丸の忠誠、魔女トバリが確かに受け取りました。名乗ってください。ワタシが好きな、その声で聞かせて】

「今このトキより、わたしは緒々嶋茶々丸を名乗ります」

「10日以内に襲撃犯の割り出し。魔法具の譲渡。賠償金。二代目英雄に私達の存在を伏せると確約。まずまずだな」

「うん。千雨ちゃんは心配してなかったけどね。ふふーふ、茶々丸ちゃんらぶー」

「コレならあいつらにも、一先ず麻帆良相手なら交渉を任せられるな」

「割り出した襲撃犯が、彼らを始末するトキに吸い出したのより少なかったりしたら、早速の出番だね」

「それに残りの連中の処遇もな」

「コレで楽ができるー」

「うむ。麻帆良も滅ばないですんだな」

「連中は千雨ちゃん茶々丸ちゃんに足を向けて寝れないよね」

「二代目英雄絡みでこの先増えるであろう襲撃、交渉。面倒なその対処をいくらかでも千雨、茶々丸に任せられない様なら、麻帆良を潰して旅を再開すると決めた。だがあいつらは、自らが魔女の名を背負えると証明した」

「うん。かわいいだけのお人形さんなんかじゃないね。ふふーふ、さすがワタシの従者」

「ああ、いい従者だ」

「「試験は合格だ（ね）」」

第40話 調子にノリすぎです その2＊（後書き）

第40話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

この前後編は実は茶々丸ちゃんの為でした回。

やっぱり汀は麻帆良なんか眼中にないですね。

あわや開戦か？なんて交渉を、千雨茶々丸の試金石にしちゃうくらいですから。

茶々丸はコレで緒々嶋です。

その後の交渉は終始、完全なパワハラ交渉でした。

今回、シリアスグロがありました、平気でしたか？
一応控えめのつもりですが。

あ、作中の“反応障壁”フォローしますね。

言葉の通り、反応して展開する障壁、です。

もちろん魔女特製術式、エヴァ千雨茶々丸も叩き込まれて常時使用してます。

家族以外の魔法全てに対して反応、予め設定した障壁を自動で展開するモノと考えてください。

家族のでも攻性魔法には反応します。

あと一定以上の物理的攻撃にも発動します。

銃弾とか剣撃とか、そのレベルのパンチとか。

しかも身体表面、服とかの上ギリギリに発動ってコトで。

それらがヒットする直前に発動するため、原作葱さんみたいなコトはない訳です。

びばちーと。

ただ、設定した障壁自体は術者の能力しだいなので、堅さの個人差はあります。

今回も感想、ご指摘いただきました。

ありがとうございます！

誤字直しました、恥ずかしい。

年末まで1週間、今年のラストスパートです。忙しいですが、がんばって書きますね。

ではgrand病原でした

おやすみなさい

第41話 クリスマスは愛する家族で

「「「メリークリスマス！」」」

《キキキンツ》

「オー、メリクリダゼ。トリアエズ肉寄越セヨ」

テスト返却、襲撃犯の後処理を終え、冬休みを目前に控えた今日。子供はサンタクロースに胸を膨らませ、恋人達は愛に燃え上がる日。

12月24日はクリスマス・イブです。

ワタシ達は別荘でクリスマスパーティー真っ最中。

魔法を使って飾り付けられたお部屋でパーティーディナーに舌鼓、ケーキは食後のお楽しみです。

ウチの別荘には、本来の日時通りに時を刻み表す“実日時時計”があります。

だから別荘内での今夜が、丁度イブからクリスマスに変わる時間帯だってコトは把握出来てますよ。

「あ、このテリーヌとチーズのやつおいしー。ほらほら、チャチャゼロも食べてみてよ」

「アーグッ：オ、美味エジャネエカ、シャンパンニ合ウナ」

「ありがとうございますマイロード、姉さん。こちらも試してみてください」

「茶々丸ちゃん製だったんだね、手間掛かってるでしょコレ？さすがっ！で、それはなーに？」

「ローストビーフの冷やしたやつな。一緒に玉葱漬け込んでるから、肉はかなり柔らかくなってる。玉葱と一緒に食ってみてくれ」

「お、千雨ちゃん製だね、じゃあ、あーん…」

「はいマイロード、あーん…」

「待て待て茶々丸、私が作ったんだから私があーんする。ほら汀、あーん…」

「イタダキッ！…オー、コレモ美味エ。歯ガナクテモ食エソウダゼ。酒ニモイイナ」

「チャチャゼロ、てめえ…」

「ゴ主人ノ命令ニハ従ワネエトナ」

「違うだろうがアホ人形め。私はローストビーフを持ってこいと言ったんだ」

「うまうま、千雨ちゃんおいしーよ」

「あっ！汀、いつの間にか食ってるし！茶々丸か！？」

「すみません。マイロードがとても可愛らしくお口を開けたままでして、つい」

「ふふーふ、変顔してたでしょ？」

「とんでもありません。大変愛らしくて、目眩がしそうでした」

「おい、汀。シャンパンを注いでくれ」

「あ、はい。っと、あとキティはローストビーフご所望だった？はい、あーん…」

チート美少女汀ちゃんも、クリスマスパーティー目一杯楽しんできます。

大好きな家族と特別な夜だもの、プレゼントだってがんばったんですよ？

「茶々丸ちゃん茶々丸ちゃん、ワタシ足のトコロ食べたい」

「イエス、マイロード。すぐに切り分けますからお待ちください」

「七面鳥って前のクリスマス以来か。別荘使ってるせいで、体感10年ぶりくらいじゃねえか。切り分け方覚えてねえ訳だ」

「そもそも前のクリスマスも茶々丸が切り分けたからな。お前はシ

ヤンパンを取りに席を立てていたハズだ」

「ああ、そうだそうだと確かに。じゃ、今日はよく見て覚えるコトにするか。汀、次はワタシが切り分けてやるからな」

「ふふーふ、ありがと。なんだったらクリスマス以外にも丸焼きチキンとか出してくれてもいいよ?」

「マイロード、どうぞ」

「千雨、酒が切レタゾ」

「む、ならソレに合うワインでも開けるか。千雨」

「おう待ってろよ。って、切り分け方見てんだっつーの!」

キティも千雨ちゃんも茶々丸ちゃんもチャチャゼロも、とってもたのしそう。

素敵な笑顔がいっぱいです。

ふふーふ、しあわせー。

程よくお酒を楽しみながら千雨ちゃん茶々丸ちゃんお手製ディナ

ーを堪能したら、早速ケーキ！
は、少し辛いので、みんなでゲームでもするコトにします。

片付けはドールにお任せです。

千雨ちゃん茶々丸ちゃんのお仕事は基本ワタシとキティの身の回り関係ですから、掃除洗濯後片づけはドールにお任せする場合があります。

お部屋の飾り付けも変更しちゃいます。

何本ものツリー型照明が頭上で輝き、降り注ぐ光の粒が雪を表します。

デフォルメされたサンタクロースやトナカイがツリーの間を抜くように空中を舞い、袋からキラキラ光るデフォルメスターをばら蒔く演出つきです。

今夜はボードゲームで遊ぶことにしました。

ルーレットで出た目の分だけ駒を進め、止まった場所の指示に従い擬似的に一生を送る、あの有名ゲームです。

その名も“珍生ゲーム”！

擬似的に一生を送るハズなのに、各出来事があまりに珍妙なこのゲーム。

さすが麻帆良の流行、突き抜けてます。

「マジかよ！？旦那に白い犬を迎えたぞ！？」

「あ、それ上手くすると、CM出演で国家規模の人気者になれるよ」

「……なら当たりマスなのか？」

「マイロード、すみません大怪獣出現マスです。物件を破棄してください」

「茶々丸、貴様！？私が太陽の灯台を購入した直後だぞ！？」

「ありゃー、しかたないよね。ワタシも千葉ネズミランド破棄だー」

「誰カ、巨大ヒーロー出撃カード持ッテネエノカヨ？」

「私あるぜ。次んトキに怪獣倒すからな」

「待て千雨。もう1ターン待てばチャチャゼロと茶々丸が持つ、国家戦力を削れるぞ」

「ゴ主人テメエ！？」

「お、秘密結社の暗躍で世界経済を活性化させただって。資金10000と資源げっと」

めったにやらないせいとか、こんな日のボードゲームってすごくエキサイトしますよね。

小さな資源カード一枚ゲットしただけで、魔女が、吸血鬼が、その従者が、魔法人形が、本気でガッツポーズしたりするなんてね。

ふふーふ、キティと千雨ちゃんと茶々丸ちゃんとチャチャゼロが、ワタシの家族でよかった。

しあわせだよ、らぶー。

「宝くじに当たった、豪遊して使い尽くす。他のプレイヤーに資金5000ずつ配る。なんだコノふざけたマスは!？」

「ラッキーゾーンだからな。出来事はラッキーの範疇だけど、資金や資源をばら蒔くコトになる場所だ。エヴァ、分岐の説明書き読まなかったろ」

「本質的ニ私ハヒーローダッタ。次ノ大怪獣ヲ裸一貫デ倒ス。ソノ際資産ハ失ワナイガ一回休ミ。マアオレナラ休ミハイラネエナ」

「休んでくださいね、姉さん。確かに姉さんなら大怪獣も余裕でしょうが、とりあえずルールですから」

てかワタシ達の一生こそが珍生ですよね。
ふふーふ、あったかくてしあわせな珍生です。

クリスマスにはやっぱりプレゼントが欠かせないです。
そんな訳で待ちかねのプレゼントタイム！

ワタシとキティが用意したのは、手作りのクリスマスケーキです。
ショートケーキとチョコレートケーキ、かわいくクリスマスデコ

レーション。

ワタシとキティは普段一切料理をしません。
もちろんお菓子の類いも一切作りません。
特別な日、クリスマスや記念日にだけ振る舞うんです。

それがワタシとキティの、いっぱい嬉しい想いを込めたプレゼント。

もちろんとっても好評でしたよ。

ワタシもキティも伊達に長生きしてませんもん。

千雨ちゃん茶々丸ちゃんチャチャゼロがプレゼントしてくれたのは、新種の魔法果物です。

甘くて瑞々しくて、常に果実をつけたデザートの樹。

ソレは完全な新種だそうです。

魔法世界、旧世界、どこをさがしても存在しない、ワタシとキティをよろこばせる為だけの魔法果物。

別荘内の農場、片隅を使って大分前から研究してくれたみたい。
千雨ちゃんが交配研究、茶々丸ちゃんが観察研究、チャチャゼロは欠かさず管理をしてたみたいです。

長い時間を掛けて今日のためにがんばってくれたんだね。
とってもとってもありがとう！

ワタシもキティもニコニコなのは、すごく美味しいからだけじゃないって伝わってるよね。

ふふーふ、しあわせ。

「さて、デザートも食ったし風呂入るか」

「あ、すぐ入る？いまワタシってば、お腹ぽんぽんだよー…触る？」

「ふむ、ああ確かに張っているな……。うむ張っている……」

「ふふーふ、くすぐりたいよキティ。なですぎー、んっ」

「……マスター。お風呂から上がるまでは我慢してください」

「まったくだ。目え、あやしーくなってんぞ」

「うるさいぞ。……汀、風呂へ入れるか？」

「うん。ごめんね焦らして」

「焦れてなど…いや、そうだな。ならお詫びを貰おうか」

「ふふーふ……んっ……ゆるしてくれた？」

「…ああ。チャチャゼロ、後は頼む」

「アイヨ。好キナダケ交尾シテティイゼ」

「つーか、その言い方やめろって言ってるだろ」

「ナンド？千雨ハシネエノカ？今夜ハ特別ダカラ皆デ、ッテ鼻歌シテタゼ、妹ガ」

「聞いていたんですか!？」

「茶々丸そんなに楽しみだったんだな……いや私も勿論するけどな」

「ふふーふ、ほらほら早くお風呂入っちゃおうよ。今夜はたっぷりがんばっちゃうんだから」

「ふ、返り討ちにしてやる」

「茶々丸、パジャマ頼むな。私、新しいタオルとか出すから」

「はい千雨さん。マイロード、マスター行きましょう」

「うん。ふふーふ、みんな、メリークリスマス。まだまだお楽しみはコレからだよ？」

「」「メリークリスマス!」「」

第41話 クリスマスは愛する家族で（後書き）

第41話でした。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます！

クリスマスパーティー回でした。

遅ればせながら、メリークリスマス！

や、まあ汀達にはこの後がむしろ本番？

ははは、書けませんね。

捏造として、本作品のエヴァが料理上手になりました。

まあ愛する汀と旅とか隠れ住んだりとかしてる訳ですから、エヴァだって料理を振る舞いたいと思いますよね。

プレゼントについては軽くスルーしてください。

ただ、汀は千雨茶々丸に対して普段から家族とか愛しいとか言っています、勿論主従であるコトにも拘りがあります。

千雨茶々丸がいる限り料理等は一切しないでしようし、雑事も任せきりでしよう。

買い物荷物を半分持ったりはしますが、それは千雨茶々丸と手を繋ぎたいから、とかそんな感じです。

だから汀キティの手作りお菓子は特別なプレゼントに当たる訳です。

珍生ゲーム？

ふざけすぎたかもしれません、笑って許してください。

今回のお話が予定より遅れて更新されたのは、単純に二日酔いだっ
たからなんだぜ。

g r a n d病原の苦手なモノは正にお酒。

飲めるんですが、翌日とかが酷いんですよ…。

今回はやむなく接種…もうお酒嫌です。

今回も感想いただきました。

ありがとうございます！

今日のはちょこっと息抜きですが、もう目の前に原作が！

これからもがんばります！

誤字のご指摘も感謝感謝。

なかなかなくなりません…反省です。

ではg r a n d病原でした
おやすみなさい

第42話 雪だるさんとワタシ

日本の四季ってすばらしいですね。

この国の自然が丸々全部で、盛衰を繰り返しているみたい。

芽吹く春、生い茂る夏、実る秋、眠る冬。

たった90日刻みで移り変わる季節たちは、まったく異なる情景を造り上げますもんね。

チート美少女汀ちゃんは、永い永い時間をコレからも過ごしていきます。

だからこそ、僅かな時間で移り変わるモノが、一瞬を精一杯生き抜くモノが、尊く美しく感じられるんですね……

うん、たまにそんなコト言ってみたりして。

ふふーふ、カッコつけてみました！

や、ぶっちゃけ、ホントは短い命とか一瞬の輝きとか知ったこっちゃないし、尊く、とか特に思っていないもん。

あ、でもでも綺麗な景色とかはちゃんと好きですよ。

四季が素敵だっと思ってるのがも本当。

世界中を何周も旅したワタシが、麻帆良なのがネックだけど拠点を構えてもなお、また旅立つ日に胸を膨らませているのがいい証拠ですよ。

うん本当に観光とか旅行とか好きだし、ご当地デザートとか季節限定デザートとか見逃せないですよ！

や、てかほらワタシってワガママ魔女ですもん。

ワタシとキティと千雨ちゃんと茶々丸ちゃんとチャチャゼロとで、楽しく幸せに暮らすって決めましたからね。

イチャコラして、笑い合って、もしかしたらケンカとかもして、でもすぐ仲直りして、やっぱりイチャコラして暮らすって決めただもの。

ふふーふ、ワタシはワタシの好きな相手だけが大事なんです。これからも何度だって主張していつちやいますよー。

あら？

なんでこんな話しに……ああ、そうです四季の移ろいね、うん。

なんで急にそんなコト、考え出したかと言いますと…

「何度見てもすつげな…」

「はい。流石の“美味しいトコ取り別荘”ですね」

「海面二叩キ落トサレタラ、派手ニ死ネルジャネエカ。ヨカッタナ
千雨、妹。ケケケ」

「ふふーふ、もう海面とは言えないよねー。氷面？」

「ふむ。凍った海に咲くは千雨の朱か、茶々丸の朱か…試してみる
か」

透き通る海！寄せる白波！真っ白な砂浜！
澄み渡る空！眩しい太陽！爽やかな暑さ！

ココは常夏、楽園に近い場所！

家族だけの、秘密の箱庭！

魔女と吸血鬼、渾身自慢の魔法球別荘です！

「冗談じゃねえ！？なんでこんな幻想的な銀世界に、テメエの血飛
沫撒き散らさなきゃなんねえんだよ！」

ただし現在は180度趣旨を入れ換えて、一面に幻想的な粉雪が
舞い続ける銀世界になっているのでーす！

ええもちろん完全に、ワタシの趣味ですとも。

海さえ凍りつき、景観は雪に埋もれて。

照らす魔法光を反射し降り続く粉雪は、外の世界には存在し得ない光景で。

淡いの煌めいて、鋭利なのに舞うように。

いつまでも眺めていたくなります。

隣に立つキティと手を繋ぎ、千雨ちゃんが茶々丸ちゃんが脇に控えてくれて。

こんなにも美しく、だのに絶対的なまでに強固な光景に、愛しい相手を想い描いたりして。

ワタシの手によって、もはや破壊も介入も出来なくなったコノ別荘。

ワタシのワガママに応え、包んでくれるコノ別荘。

ほらね？

キティと千雨ちゃんと茶々丸ちゃんを連想しちゃうのも当然です。

…や、ごめんなさい、カッコつけました。

だってさあ連想もなにもさあ、ワタシの頭の中って普段からイチヤコラでいっぱいなんですもん！

ふふーふ、らぶー！

「無茶苦茶言ウゼ。凍死モ焼死モ窒息死モネエ身体ダロウガ。オレニ強烈ナ魔法ハ無理ダシ、出血避ケテ殺スノハ至難ダゼ？」

あと、血飛沫も致死武器も極普通に存在してるのもワタシ達っばいでしょ？

精霊ってヤツについて、考えてみたコトがあります。

魔法使いは自分自身や周囲から集めた魔力を精霊に差し出して、結果として魔法を成し放ちます。
もしくは魔力を魔力のまま、例えば身体強化なんかに使ったり、簡単な引寄せを行ったりですね。

ではその精霊さんはドコにいて、ドコから魔法を発動させてるんでしょう？

アツチコッチで好き勝手に魔法を発動してたら、精霊さん大忙しでしょ？

呪いとか封印とかしたら、精霊さんも対象にくつつきっぱなしなの？

ワタシはコレ、逆かなって思うんです。

魔力を喰っているのは、例えば物理法則のようなもの“魔法システム”で、詠唱なり魔方陣なりに相応しい精霊をそのつど発動させ

てるんじゃないか。

精霊は元より有って無く、世界自体の一部である“魔法システム”、その末端たる受信機なんじゃないか。

精霊は、必要や偶発に合わせて“魔法システム”が力を振るうための端末機なんじゃないか。

精霊さんに魔力を差し出したから、結果魔法が発動するんじゃない。

魔力を差し出すと“魔法システム”が精霊さんを発動、その結果魔法が振るわれる。

そうなんじゃないかって思うんです。

なら魔力を用いた身体強化は？

仮契約が良い例です。

主の魔力に従者に流す“だけ”で身体が強化されるんですよ？

仮契約でパスを作って予め同調しやすくしておいて、魔力、つまりエネルギーを加えただけなんですよ？。

それにコレ、精霊さんも詠唱も感知されないし、仮契約の術式には身体強化なんて存在しないんです。

咸掛法も同じです。

身体が生み出すエネルギーの“気”。

精神が生み出すエネルギーの“魔力”。

2つを同調させ、非常に強力なエネルギーを生み出す“だけ”。

もちろん精霊さんも詠唱も魔方阵も存在しません。

なにせ魔力詠唱が不可能な、つまり精霊に干渉出来ないはずの高畑・T・タカミチが平然と使用している技法ですもの。

これらの現象は明らかに生物的な、身体構造的な限界を、過剰なエネルギー供給のみで突破する行為です。

扇風機を発電所に直列したら台風作れましたって言うてるみたいなもんですよ？

んな、アホな話はありませんよ。

ではなぜこんなコトが可能なのか。

一般人が素手で岩を砕き、銃弾や刃物でかすり傷しかつかない程の強化など、十分に魔法ではないのか。

精霊さんなくして魔法は発動出来ないハズのではないのか。

魔力のみで出来るコト、魔法として出来るコト、その境界が明確に定義されていないのはなぜのか。

それらを考えてワタシ、思い至ったんです。

“なぜこんなコトが出来る”のかではなく、“辿り着くコトの出来る”のでは？って。

魔力のみで行う身体強化の延長線上に、魔法が存在しているのは

ではないか。

ただ未熟だから、単純に力量が至っていないから誰にも出来ないだけではないのかって。

もしそうなら、ワタシが辿り着けないハズはありません。

ワタシなら精霊さんも世界も周囲の魔力も関係なく、自分自身の魔力のみで魔法を発動できるようにされる。

ワタシはワタシだけの力で世界を侵せるようになる。

うん、だってワタシは不朽不滅のチート美少女なんですからね。
じゃあ試してみようかって思ったんですよ。

その日から、ワタシは魔女になりました。

世界の一部たる“魔法システム”を凌駕した唯一の存在、単一種族、魔女になりました。

コト魔法において、まさしく無敵になりました。

まあ生まれつき不朽不滅でチートではあるので、若干今更感ありましたけどね。

あと“魔法システム”は超えたけど、結局魔法はどこまで行っても魔法だから、出来ないコトもいっぱいありますしね。

「舞え！雪だるさん達！！アナタもワタシも雪だるさんアタック！」

純粋なワタシだけの魔力が世界を侵し、周囲の雪をかき集めます。空中を舞い踊るようにふわふわと、ワタシの周囲には大量の手のひらサイズ雪だるま達。

微塵も精霊の世界の介入を許さず、ワタシだけの魔力は魔法に昇華します。

命令に従い、次から次へ出来ては突撃出来ては突撃。

果ては相手を押し潰し、固まり、雪だるまにしてしまう恐ろしい魔法なのさ！！

これぞ、アナタ（対象）もワタシ（魔法）も雪だるさんアタック！！

ふふーふ、ちょっとおもしろいでしょ？

「つまらんな、試合終了だ。魔法への介入なし、既存の魔法なし、そもそも殺傷目的の魔法なし。こんなアホみたいなハンデなうえ、3対1で圧勝か……。うむ、私の汀なら当然だな、気が晴れた」

「てれり。ふふーふ、誉められちゃったー。キティ、ぎゅー」

少し離れたバルコニーから、キティがワタシを誉めながらこつち来るモンだから、思わずぎゅーしました。

ちゅーもしました、ふふーふ、ごほうび。

キティ大好きー、もっと誉めて誉めて！

「…んっ。しかし無様だな。よく似合っているぞ」

「チクシヨウ！！千雨、妹、魔法デ溶カセネエノカ！！」

「…あー、無理、コノ雪だるま汀の魔力が込もってるから。上手いコト魔法放てても魔力にまでバラされて喰われて消滅すんだよ」

「…！！…っ！！…ぐうっ！！…すみません姉さん、やはり力づくも無理なようです」

あ、いけない解除忘れてました。

ふふーふ、でも雪だるま千雨ちゃん雪だるま茶々丸ちゃんかわいいなあ。

あんなでもらぶー。

うん、チャチャゼロはウケるね。

「魔女！！笑ッテンナヨ！！早く出シヤガレ！！」

「五月蠅いぞ、そのままにいるチャチャゼロ。千雨も茶々丸も暫くオブジェだ。一時間以上も逃げるだけの汀に、何一つカスリすら出

来ずに挙げ句それだ。呆れるな」

「いや無理だろ、魔法ありの汀が相手だぞ？なに言ってるんだ？エヴァだって似たような結果になんだろ」

「すみません、マイロードのお相手はわたし達では…」

「イツカ斬ッテヤル！！」

ふふーふ、まあ魔法ありならワタシの相手になる存在なんていませんから。

魔法なし気なしの純粹体術勝負なら、実はキティよか弱かったりしますけど。

や、限界突破吸血鬼さんと殴り合いは無理ですよ…

でもでも言いましたよね、魔法なら独壇場なんです。

世界“魔法システム”すら凌駕したワタシですもの当然。

なんてったって、他者が発動した魔法に介入、逆転換させて魔力にもどしてしまうコトすら容易なんです。

たとえば相手がキティでもです。

魔法の枠組みなら無敵、ワタシしか辿り着けない孤高の領域なのです！！

だからもっと誉めてよー。

キティが言うからこんなんやっただよ？

あっ…

ふふーふ、ごほうびくれるんだ？

「なあ茶々丸。つーかなんでこんなコトになったんだっけ？」

「雪合戦で遊んでいる最中に、千雨さんと姉さんがマスターへ集中攻撃したからです」

「全く当たらなかったけどな…」

「我が主ナガラ呆レル身体能力ダ」

「そして怒ったマスターを諫める形で、マイロードが戦闘訓練を提案してくださいました。氷漬けは回避できましたね」

「結果が雪だるまなら、似たようなモンだろ」

「屈辱ダゼ」

「やりすぎたと気づいた千雨さんが相手役をマイロードにお願いしました…勝てる訳ありませんからね」

「で、そんな私達を放置して汀達はしけこんだと…」

「…オイ、イツマデコノママナンダ？」

「…短くて3時間くらい？」

「冗談じゃネエ…」

第42話 雪だるさんとワタシ（後書き）

第42話でした、ちょっとおひさしぶりです。

こんばんわ、grand病原です。

今回も読んでいただいて、ありがとうございます。

お気に入り200件突破しました！！

ありがとうございますー！！

もう、アレです、どうしよう！？

これからがんばるコトで、報いたいと思います！！

魔法魔力精霊について捏造回でした。

“魔法システム”とか完全な捏造ですね。

汀以外の魔法使いは“魔法システム”に魔力を喰わせ、精霊を発動させてもらい魔法を形作っている設定です。

汀はその“魔法システム”を掌握さえ出来てしまうので、魔法において無敵なのです。

今回のコレは原作設定と解離し過ぎてないですかね？

なんか明らかな間違い等あったらご指摘お願いします。

汀の魔法チートは、詳しく決めちゃうと今後苦しくなるので“魔法で出来るコトは好き放題、魔法で出来ないコトは出来ない”と曖昧に理解してください。

まだ隠し種があるのですが、それが弱く感じちゃって困ってたり。

ちなみに汀だけのチートです。

エヴァ千雨茶々丸もがんばっていますが、せいぜい不可視の魔力塊で攻撃するくらいでしょうか？

精霊を介さず魔法を成せるのは汀だけです。

今回も感想をいただきました。

ありがとうございます！！

魔法描写誉められて、魔法チート回になりました。
おまたせしました、お楽しみいただけましたかね？

てかgrand病原、仕事納め昨日だったんだ…

今日は実家まで300キロ運転でした。

正月は更新どうかなあ…

では、grand病原でした
みなさんよいおとしを！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3685y/>

汀とあの娘のイチャコラ物語

2011年12月31日20時34分発行